

和歌山市内遺跡発掘調査概報

— 平成24年度 —

2014

和歌山市教育委員会

序 文

和歌山市には、旧石器時代から江戸時代に至るおよそ400ヶ所以上にものぼる遺跡が確認されています。それらの遺跡は、私達の祖先の残した貴重な文化遺産であります。近年、遺跡内での開発行為が盛んになり、遺跡が危機にさらされることも少なくありません。

当市におきましては、遺跡内の開発行為に対する事前の確認調査や個人による開発に対処するために、国庫補助金・県費補助金を得て発掘調査を実施しております。

本書には、平成24年度に実施した秋月遺跡、太田・黒田遺跡、和歌山城跡などの発掘調査の成果を収めています。

ここに報告する調査概要は、地域の歴史を語る上で重要な成果が含まれています。本書が、地域の歴史を広く理解するための一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査にあたりご指導・ご協力いただきました地権者の皆様及び関係者各位に深く感謝いたします。

平成26年 3月31日

和歌山市教育委員会

教育長 原 一 起

例 言

- 1 本書は、平成24年度国庫補助事業として和歌山市教育委員会が計画・実施するとともに公益財団法人和歌山市文化スポーツ振興財団に事業の委託を行った埋蔵文化財発掘調査の概要報告書である。
- 2 調査対象経費の総額は19,241,501円である。
- 3 本年度の田端建設株式会社への機械掘削及び埋戻・人力掘削等委託事業は以下のとおりである。

事業名	調査地	調査期間	調査面積	調査担当
山吹丁遺跡第1次確認調査	本町4丁目28	20120410	5.74㎡	大木
松原Ⅱ遺跡第1次確認調査	馬場50	20120416	10.27㎡	大木・富永
平井遺跡第1次確認調査	平井201-1	20120417	10.00㎡	清水
太田・黒田遺跡第70次発掘調査	太田3丁目4-6	20120418～0507	32.29㎡	大木
和歌山城跡第13次確認調査	三番丁54	20120427	23.44㎡	大木
秋月遺跡第12次発掘調査	有家87-6	20120501～0525	49.00㎡	菊井
岩橋高柳遺跡第3次確認調査	岩橋309-1・2他	20120507	31.05㎡	前田・大木
岩橋遺跡第6次確認調査	岩橋1012他	20120514・0515	64.66㎡	大木・富永
松原Ⅱ遺跡第2次発掘調査	馬場50	20120517～0525	55.68㎡	大木・富永
井ノ口遺跡第2次確認調査	和佐関戸118-1他	20120604	26.86㎡	大木・富永
井辺遺跡第21次確認調査	井辺203-2	20120611・0612	30.60㎡	大木・富永
有功遺跡第8次確認調査	六十谷1100	20120626	10.00㎡	清水
井辺遺跡第24次確認調査	井辺208-2	20120704	7.60㎡	大木・富永
津秦Ⅱ遺跡第5次確認調査	津秦地内	20120709	57.28㎡	大木・富永
和歌山城跡第14次確認調査	八番丁31	20120710	6.60㎡	大木・富永
池田遺跡第1次確認調査	六十谷1189-5	20120718	20.00㎡	清水
太田・黒田遺跡第73次発掘調査	太田1丁目1-12・13	20120802・0803	16.87㎡	大木・富永
音浦遺跡第1次確認調査	音浦328他	20120805～0807	17.75㎡	大木・富永
西庄遺跡第7次確認調査	本脇13・14	20120810・0811・0331	65.24㎡	清水
三田古墳群第1次確認調査	田尻494-1	20120810	19.53㎡	大木・富永
岩橋高柳遺跡第4次確認調査	岩橋912-1	20120822	13.14㎡	大木・富永
太田・黒田遺跡第74次確認調査	太田2丁目13-14	20120904	16.87㎡	大木・富永
田屋遺跡第11次確認調査	田屋488-1	20120914	15.20㎡	清水
田屋遺跡第12次確認調査	田屋168～173他	20120919・0921	66.04㎡	清水
津秦Ⅱ遺跡第6次確認調査	秋月507-3	20120920	29.56㎡	大木・富永
松原Ⅱ遺跡第3次確認調査	馬場35	20120924	8.96㎡	大木・富永
田屋遺跡第13次発掘調査	田屋488-1	20120924	116.40㎡	清水
和歌山城跡第15次確認調査	岡山丁36	20120925	10.57㎡	大木・富永
秋月遺跡第13次発掘調査	秋月566-2	20120926	9.60㎡	大木・富永
神前遺跡第7次確認調査	神前37-72	20121003	11.97㎡	大木・富永
関戸遺跡第3次確認調査	関戸3丁目775-5	20121009・1010	17.62㎡	大木・富永
秋月遺跡第14次発掘調査	秋月566-2	20121012～1102	65.00㎡	大木・富永
有功遺跡第9次確認調査	六十谷1045-6	20121011	4.75㎡	富永
鳴神Ⅱ遺跡第3次確認調査	鳴神99-1・3	20121114・1115	34.32㎡	大木・富永
田屋遺跡第14次確認調査	田屋223-4	20121015	19.84㎡	清水

事業名	調査地	調査期間	調査面積	調査担当
友田町遺跡第5次確認調査	友田町3丁目34他	20121016	27.08㎡	大木・富永
木ノ本Ⅰ遺跡第1次確認調査	西庄92-2他	20121017	36.80㎡	清水
田屋遺跡第15次確認調査	田屋163	20121022~1106	119.44㎡	清水・大木 ・富永
西庄遺跡第8次発掘調査	本脇13・14	20121029~1102	106.00㎡	清水
寺内古墳群第3次確認調査	寺内地内	20121029~20130331	275.99㎡	大木
神前遺跡第8次発掘調査	神前37-72	20121101~1109	39.60㎡	大木
川辺遺跡第19次確認調査	里84-6	20121107・08	35.80㎡	清水
和歌山城跡第17次確認調査	九番丁14・15・16-1	20121116	16.12㎡	大木・富永
鷺ノ森遺跡第9次確認調査	東鍛冶屋町11	20121119	14.40㎡	大木
鳴神Ⅱ遺跡第4次確認調査	鳴神103-4	20121120	9.00㎡	富永
城ヶ森遺跡第2次確認調査	吉礼地内	20121128	5.26㎡	大木
鷺ノ森遺跡第10次発掘調査	東鍛冶屋町11	20121203~1225	48.18㎡	大木
木ノ本Ⅱ遺跡第3次確認調査	木ノ本224-8・14	20121210	3.50㎡	清水
鳴神Ⅴ遺跡第12次確認調査	鳴神1012-2他	20121212	23.20㎡	富永
山吹丁遺跡第3次確認調査	本町5丁目11	20121226・1227	7.40㎡	大木
鳴神Ⅳ遺跡第13次確認調査	鳴神987-11	20130117	13.13㎡	富永
坂田遺跡第1次確認調査	坂田365-1他	20130124・0125	45.38㎡	富永
鳴神Ⅳ遺跡第14次発掘調査	鳴神987-11	20130125	20.00㎡	吉田
木ノ本Ⅱ遺跡第4次確認調査	木ノ本1065	20130128	13.87㎡	大木
井辺前山古墳群第2次確認調査	井辺地内	20130129~0311	50.00㎡	大木
井辺遺跡第28次確認調査	井辺50-1	20130208	23.80㎡	富永
鳴神貝塚第3次確認調査	鳴神地内	20130213~0225	14.12㎡	大木
西庄遺跡第10次確認調査	西庄554	20130227・0228	69.30㎡	清水
木ノ本Ⅱ遺跡第5次確認調査	木ノ本1221	20130306	33.00㎡	清水
井辺遺跡第29次確認調査	津秦地内	20130325・0326	24.46㎡	富永
神前遺跡第9次確認調査	神前391-1	20130328	7.00㎡	富永
榎原遺跡第1次確認調査	榎原4-2	20130328	21.00㎡	清水
岩橋Ⅱ遺跡第3次確認調査	岩橋1352-4	20130329	19.93㎡	富永

4 本年度の公益財団法人和歌山市文化スポーツ振興財団への発掘調査委託事業は以下のとおりである。

事業名	調査地	調査期間	調査面積	調査担当
秋月遺跡第12次発掘調査	有家87-6	20120501~0525	49.00㎡	菊井
太田・黒田遺跡第71次発掘調査	太田1丁目10番13	20120702~0810	147.17㎡	内田
太田・黒田遺跡第72次発掘調査	太田1丁目10番15	20120718~0807	94.00㎡	井馬
和歌山城跡第16次発掘調査	岡山町36	20121115~1214	32.52㎡	菊井
出土遺物整理		20130521~20140113		菊井

5 発掘調査に係る事務局は下記のとおりである。

埋蔵文化財発掘調査（平成24年度）

【和歌山市教育委員会 文化振興課】

文化財班長 前田敬彦
学芸員 大木 要
学芸員 清水梨代
学芸員 富永里菜

【公益法人和歌山市文化スポーツ振興財団】

埋蔵文化財班長 北野隆亮
学芸員 井馬好英
学芸員 奥村 薫
学芸員 藤藪勝則
学芸員 内田和典
学芸員 菊井佳弥
学芸員 吉田悠歩
学芸員 曹 暁勻

報告書作成（平成25年度）

【和歌山市教育委員会 文化振興課】

文化財班長 前田敬彦
学芸員 大木 要
学芸員 清水梨代
学芸員 富永里菜

【公益財団法人和歌山市文化スポーツ振興財団】

埋蔵文化財センター長 北野隆亮
学芸員 井馬好英
学芸員 奥村 薫
学芸員 藤藪勝則
学芸員 内田和典
学芸員 菊井佳弥
学芸員 曹 暁勻

6 本書の執筆については文末に執筆担当者名を記載している。本書の編集は大木が行った。

7 写真図版の遺物に付した数字番号は実測図番号に対応する。

8 公益財団法人和歌山市文化スポーツ振興財団に委託した遺物整理事業については、秋月遺跡第12次発掘調査、和歌山城跡第16次発掘調査を対象として実施した。

9 秋月遺跡第12次発掘調査に関して、今年度、株式会社地域文化財研究所に土器の実測・トレースを委託し実施した。また、和歌山市教育委員会実施の市内遺跡発掘調査等で出土した遺物の整理についても株式会社地域文化財研究所に委託し実施した。

10 本書作成にあたり、関係諸機関の方々に様々なご協力を賜ったことに感謝の意を表します。

本文目次

1 位置と環境	1
2 埋蔵文化財発掘調査事業	
(1) 平成24年度の概要	5
(2) 平成24年度和歌山市調査一覧	5
(3) 平成25年度の埋蔵文化財包蔵地の認定・範囲変更等	12
(4) 市教育委員会実施確認・立会調査等概要	
①山吹丁遺跡第1次確認調査.....	14
②松原Ⅱ遺跡第1次確認調査・ 第2次発掘調査・第3次確認調査.....	15
③平井遺跡第1次確認調査.....	17
④太田・黒田遺跡第70次発掘調査.....	19
⑤和歌山城跡第13次確認調査.....	23
⑥岩橋高柳遺跡第3次確認調査.....	25
⑦岩橋遺跡第6次確認調査.....	27
⑧太田・黒田遺跡立会調査.....	29
⑨井ノ口遺跡第2次確認調査.....	31
⑩井辺遺跡第21次確認調査.....	32
⑪津秦Ⅱ遺跡第5・7・8次試掘調査.....	34
⑫井辺遺跡第26次確認調査・ 第29次試掘調査.....	38
⑬有功遺跡第8次確認調査.....	40
⑭井辺遺跡第24次確認調査.....	43
⑮和歌山城跡第14次確認調査.....	44
⑯池田遺跡第1次確認調査.....	45
⑰太田・黒田遺跡第73次確認調査.....	47
⑱音浦遺跡第1次確認調査.....	50
⑲西庄遺跡第7次確認調査・ 第8次発掘調査.....	51
⑳三田古墳群第1次確認調査.....	56
㉑岩橋高柳遺跡第4次確認調査.....	58
㉒木本小学校Ⅱ遺跡第1次確認調査.....	59
㉓太田・黒田遺跡第74次確認調査.....	60
㉔山吹丁遺跡第2次確認調査.....	62
㉕田屋遺跡第11次確認調査・ 第13次発掘調査.....	64
㉖田屋遺跡第12次確認調査.....	68
㉗津秦Ⅱ遺跡第6次確認調査.....	72
㉘和歌山城跡第15次確認調査.....	74
㉙秋月遺跡第13次確認調査・ 第14次発掘調査.....	76
㉚神前遺跡第7次確認調査・ 第8次発掘調査.....	82
㉛関戸遺跡第3次確認調査.....	85
㉜有功遺跡第9次確認調査.....	86
㉝鳴神Ⅱ遺跡第3次確認調査.....	87
㉞田屋遺跡第14次確認調査.....	89
㉟友田町遺跡第5次試掘調査.....	93
㊱木ノ本Ⅰ遺跡第1次確認調査.....	95
㊲田屋遺跡第15次確認調査.....	97
㊳府中遺跡立会調査.....	103
㊴鳴神Ⅲ遺跡第4次確認調査.....	104
㊵川辺遺跡第19次確認調査.....	105
㊶西庄遺跡第9次確認調査.....	108
㊷和歌山城跡第17次確認調査.....	110
㊸神前Ⅱ遺跡第5次確認調査.....	112
㊹鷺ノ森遺跡第9次確認調査・ 第10次発掘調査.....	113
㊺鳴神Ⅱ遺跡第4次確認調査.....	124
㊻木ノ本Ⅱ遺跡第3次確認調査.....	125
㊼鳴神Ⅴ遺跡第12次確認調査.....	127
㊽山吹丁遺跡第3次確認調査.....	129
㊾鳴神Ⅳ遺跡第13次確認調査・ 第14次発掘調査.....	130
㊿坂田遺跡第1次確認調査.....	131

⑤①木ノ本Ⅱ遺跡第4次確認調査……………	133	⑤⑥木ノ本Ⅱ遺跡第5次確認調査……………	143
⑤②太田・黒田遺跡立会調査……………	134	⑤⑦神前遺跡第9次確認調査……………	145
⑤③井辺遺跡第28次確認調査……………	137	⑤⑧榎原遺跡第1次確認調査……………	146
⑤④六十谷遺跡立会調査……………	138	⑤⑨岩橋Ⅱ遺跡第3次確認調査……………	148
⑤⑤西庄遺跡第10次確認調査……………	139		

(5) 公益財団法人和歌山市文化スポーツ振興財団実施発掘調査概要

①秋月遺跡第12次発掘調査……………	149
②太田・黒田遺跡第71次発掘調査……………	159
③太田・黒田遺跡第72次発掘調査……………	169
④和歌山城跡第16次発掘調査……………	176

図版目次

- 図版 1 秋月遺跡第14次調査 出土遺物
- 図版 2 東壁土層断面 北半（西から）、東壁土層断面 南半（西から）
- 図版 3 秋月遺跡第12次調査 東区第1遺構面（北から）、西区第1遺構面（北から）
- 図版 4 秋月遺跡第12次調査 第6-2層土器出土状況（北東から）、第6-2層掘削作業風景（東から）、SK-1土器出土状況（北から）、SK-1土層断面（東から）、SX-1上層遺物出土状況（北東から）
- 図版 5 秋月遺跡第12次調査 東区第2遺構面（北から）、西区第2遺構面（北から）
- 図版 6 秋月遺跡第12次調査 SX-1上層鍬出土状況、SX-1上層板出土状況（北から）、SX-1上層出土ヒョウタン、SX-1上層出土桃核、下層確認トレンチ土層断面（西から）
- 図版 7 秋月遺跡第12次調査 第6-1層・第6-2層・SK-1出土鞆羽口・鉄滓・炉壁片？、11、15、第6-1層出土馬歯、52、61
- 図版 8 太田・黒田遺跡第71次調査 調査前の状況（東から）、第1・2区全景（西から）、第3区全景（西から）、第4区全景（東から）、第6区全景（西から）、第7区全景（東から）、第8区全景（南から）、SD-2セクションベルト土層断面図（西から）
- 図版 9 太田・黒田遺跡第72次調査 調査前の状況（北東から）、第1遺構面 SD-1・2（北から）
- 図版 10 太田・黒田遺跡第72次調査 第2遺構面全景（東から）、第2遺構面全景（西から）
- 図版 11 太田・黒田遺跡第72次調査 SX-1土器棺出土状況（西から）、SD-6（西から）
- 図版 12 太田・黒田遺跡第72次調査 西端部北壁土層堆積状況（南から）、中央部北壁土層堆積状況（南から）
- 図版 13 太田・黒田遺跡第72次調査 SX-1出土遺物 弥生土器（1壺）、SX-1出土遺物 弥生土器（2壺）、SD-6出土遺物 弥生土器（3壺）、SD-6出土遺物 弥生土器（4壺）
- 図版 14 和歌山城跡第16次調査 第1区第1遺構面検出状況（南から）、第1区第1遺構面全景（北から）
- 図版 15 和歌山城跡第16次調査 第1区SW-1全景（南から）、第1区SW-1埋土土層断面（北から）、第1区SW-1掘方土層断面（北から）
- 図版 16 和歌山城跡第16次調査 第1区第2遺構面1全景（北から）、第1区第2遺構面2全景（北から）
- 図版 17 和歌山城跡第16次調査 第2区第1遺構面検出状況（北から）、第2区第2遺構面全景（北から）
- 図版 18 和歌山城跡第16次調査 第2区西壁面土層断面（東から）、第2区SE-1検出状況（東から）
- 図版 19 和歌山城跡第16次調査 第3区全景（北から）、1、2、3、6、9、10、5

1 位置と環境

和歌山市は和歌山県の北西端に位置し、北は和泉山脈を境に大阪府泉南郡岬町及び阪南市、東は和歌山県岩出市及び紀の川市、南は海南市に接し、西は紀伊水道に面している。奈良県と三重県との県境にある大台ヶ原を源流とする紀ノ川は、中央構造線の南側をほぼ真直ぐ西流し、紀伊水道に注いでいる。和歌山市の地形は、紀ノ川の北岸と南岸でその様相が異なる。北岸では、和泉山脈と紀ノ川の間約3kmの幅で段丘及び扇状地が形成される。南岸では紀ノ川の堆積作用によって形成された沖積平野が広がり、平野の南端を竜門山系から派生した丘陵が断続的に取り囲んでいる。

旧石器時代の遺跡としてはナイフ形石器の出土地がある。紀ノ川北岸の西庄Ⅱ遺跡や園部遺跡、鳴滝遺跡など、和泉山脈の山間部や山麓部で点々と出土するほか、市城南東部の山東地区の大池遺跡では50点に近いナイフ形石器に加え、各種の石器が多数採集されている。

縄文時代の遺跡には、鳴神貝塚、禰宜貝塚、吉礼貝塚、川辺遺跡、岡崎縄文遺跡などがある。鳴神貝塚は明治28年（1895）にはじめて報告され、昭和6年（1931）に近畿地方で最初に発見された縄文時代の貝塚として国史跡に指定された。その後の発掘調査により、猿の撓骨製の耳飾をつけ、上顎の犬歯2本を抜歯した女性人骨（推定18歳）が発見された。近年実施した発掘調査でも晩期の縄文人骨が多数埋葬された状況が確認されている。晩期を中心とする川辺遺跡では、竪穴建物とともに多数の土器棺が発掘され、東北地方に起源をもつ亀ヶ岡系土器や遮光器土偶の腕の先端部分が出土している。また、土器棺に副葬された小形定角式磨製石斧は、北陸地方から搬入された可能性が指摘されている。禰宜貝塚・吉礼貝塚では、遺構は不明確だが前期以降の土器・石器が多数出土している。

弥生時代の遺跡は、紀ノ川北岸では六十谷遺跡、府中Ⅳ遺跡、西田井遺跡、宇田森遺跡、川辺遺跡、橘谷Ⅰ～Ⅲ遺跡、山口遺跡、吉田遺跡、南岸では太田・黒田遺跡や神前遺跡、井辺遺跡、滝ヶ峰遺跡、奥山田遺跡などがある。和歌山県を代表する弥生遺跡である太田・黒田遺跡では前期末に環濠の可能性も指摘される大溝を伴う集落が出現し、中期には多数の竪穴建物や独立棟持柱建物からなる居住域、土器棺を中心とする墓域、水田域が形成され、集落規模が拡大する。また、出土遺物でも石舌が内蔵された袈裟襷文銅鐸に加え、多量の土器・石器類が出土している。市内の銅鐸出土地には太田・黒田遺跡のほか、橘谷Ⅰ～Ⅲ遺跡、宇田森遺跡、有本銅鐸出土地、砂山銅鐸（紀ノ川銅鐸）出土地、吉里銅鐸出土地などがあり、外縁付紐式・扁平紐式・突線紐式銅鐸が出土している。

古墳時代の遺跡は、紀ノ川北岸西部において国内唯一の金製勾玉が出土した前方後円墳の車駕之古址古墳、それに先行する帆立貝式と考えられる茶白山古墳、現状で約40mの大形円墳である釜山古墳、馬冑や馬甲が出土した大谷古墳など渡来系遺物を有する中期の有力古墳や県内では数少ない巨石を用いた横穴式石室をもつ園部円山古墳などの後期古墳も形成される。南岸では和歌山平野南東部の岩橋丘陵に700基を超える岩橋千塚古墳群が形成され、前期末から後期にかけて多数の古墳が築造される。特に後期には玄門部を狭く造る岩橋型横穴式石室を構築し、周辺地域にも影響を与えている。これらは紀ノ川河口の平野部を支配した紀氏集団の奥津城と考えられている。近年調査された大日山35号墳の造り出しからは、翼を広げた鳥形埴輪、両面人物埴輪、胡籐形埴輪など全国的にも類をみない特徴的な形象埴輪が出土している。集落遺跡には西庄遺跡、田屋遺跡、西田井遺跡、鳴神Ⅳ・Ⅴ遺跡、音浦遺跡、大日山Ⅰ遺跡、秋月遺跡などがある。西庄遺跡は竪穴建物とともに多数の石敷製塩炉が検出され、中期から後期の大規模製塩遺跡として著名である。田屋遺跡では

5世紀中頃の初期カマドをもつ竪穴建物や陶質土器が出土し、集落内に渡来系の人々が存在したと考えられる。鳴神Ⅳ・Ⅴ遺跡、音浦遺跡では竪穴建物や掘立柱建物が検出され、岩橋千塚古墳群が存在する岩橋丘陵の西部に位置することから、紀氏集団の居住域の可能性が指摘されている。紀ノ川北岸の和泉山脈南麓の低位段丘上には、高井遺跡、鳥井遺跡、府中遺跡、上黒谷遺跡など広い面積をもつ遺物散布地が多数存在する。高井遺跡からは竪穴建物が2棟検出されているものの、その他の遺跡からは須恵器・土師器などが出土するのみで、実態は不明である。

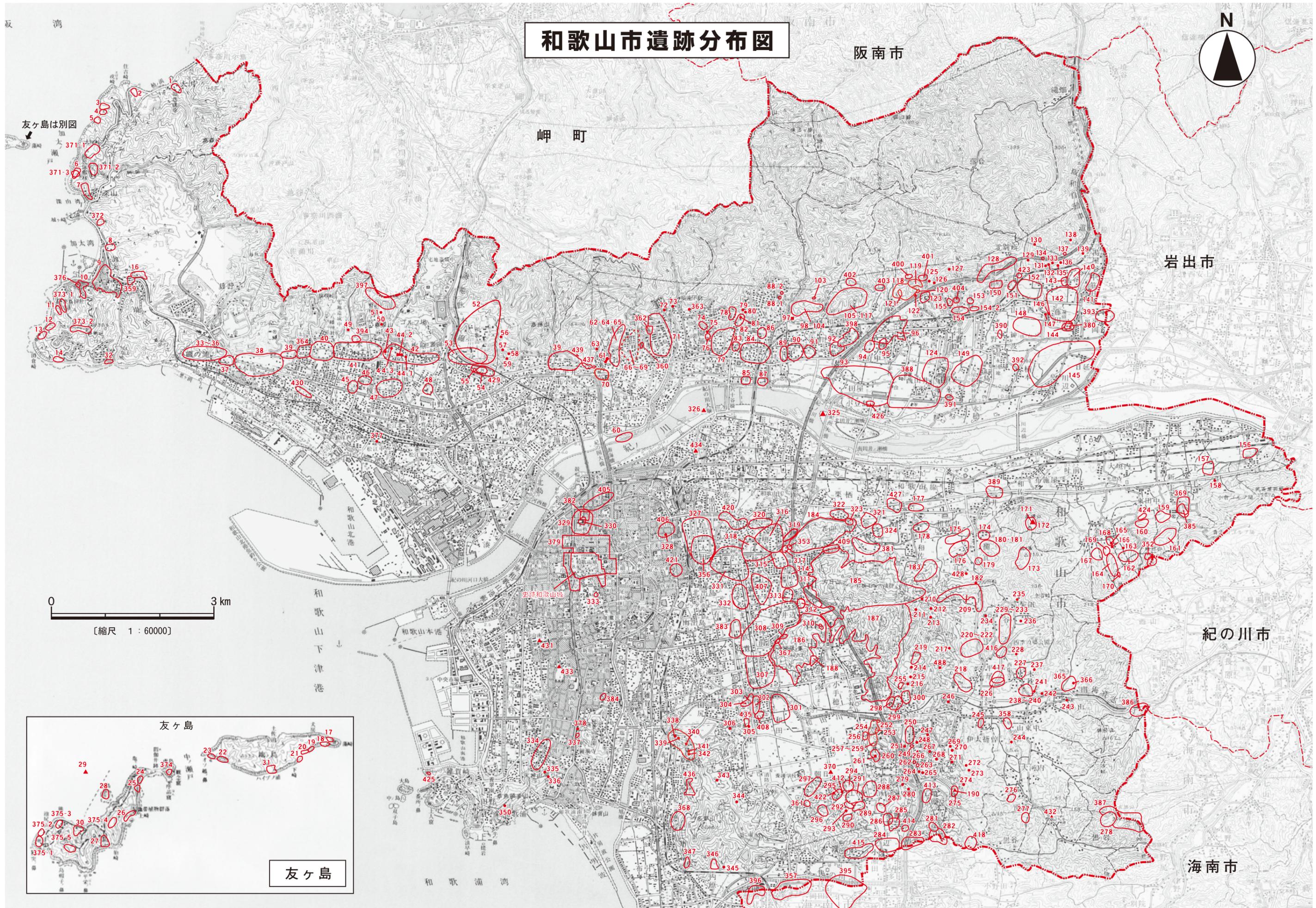
飛鳥から奈良時代の古代寺院跡には山口廃寺跡、上野廃寺跡、薬勝寺廃寺跡がある。その他、古代瓦出土地に秋月遺跡、太田・黒田遺跡、関戸遺跡がある。上野廃寺跡は発掘調査が行われ、薬師寺式の伽藍配置をもつことが確認されている。上野廃寺跡出土の隅木蓋瓦はパルメット文様を施した類例の少ない優品である。山口廃寺跡は、緑色片岩製塔心礎が残されているが、伽藍配置などは不明である。律令期の遺構が確認された遺跡には、高井遺跡、川辺遺跡、山口遺跡、秋月遺跡、岩橋高柳遺跡、奥山田遺跡などがある。太田・黒田遺跡や鳴神遺跡群からは和同開珎・万年通宝などの古代銭貨や陶硯・土馬といった官衙や古代寺院を想定できる遺物が多く出土している。また、紀ノ川北岸の府中遺跡は、調査例は少ないが、8～9世紀の多量の須恵器とともに平・軒丸瓦、須恵器硯などが採集されており、文献史学の成果もあわせて紀伊国府の可能性が指摘されている。

中世の遺跡としては、紀ノ川北岸に鎌倉時代の館跡が検出された西庄Ⅱ遺跡、多数の石積み井戸が発見された木ノ本Ⅲ遺跡、平安時代から室町時代の集落が確認された西田井遺跡、南岸では鎌倉時代から室町時代の多数の遺構・遺物が確認された太田・黒田遺跡や秋月遺跡、鎌倉時代の建物遺構が検出された奥山田遺跡、多数の漁網用の土錘類に加え、国産陶器・中国産陶磁器などが出土し、紀ノ川河口付近の外港的性格を併せもつ集落であった可能性も指摘される関戸遺跡などが挙げられる。当地域は中世末に織田信長・羽柴秀吉の侵攻を受ける。天正5年（1577）の信長の紀州攻めに関係する遺跡と考えられているのが城山遺跡・中野遺跡で、城山遺跡は陣城跡、中野遺跡は『信長公記』に記載のある中野城跡と推定されている。天正13年（1585）秀吉は根来を焼き討ちにし、雑賀を攻め、紀州を平定する。秀吉が水攻めした太田城は、太田・黒田遺跡内の南半部に存在した中世の環濠集落と推定され、出水に太田城水攻めに関係する堤の残存部分が存在する。

紀州を平定した秀吉は、岡山に和歌山城の築城を命じ、弟秀長を藩主としたとされる。慶長5年（1600）には関ヶ原の戦いで功のあった浅野幸長が藩主となり、近世の城下町として出発する。元和5年（1619）には徳川家康の十男頼宣が転封、55万5千石の御三家紀州藩が成立し、城・城下町の整備・拡張が行われた。国史跡である和歌山城跡では、修復工事や整備工事など様々な要因で発掘調査が実施され、徳川時代の二の丸、三の丸に相当する部分では建物、排水施設、坪庭にあった漆喰池、石垣構造などが確認されるなど当時の状況が解明されつつある。近年では、堀内で御橋廊下の基礎構造を解明し、文献資料、絵図資料と発掘調査成果の検討により、かつて二の丸と西の丸を繋いでいた御橋廊下の復元工事が実施された。また、鷲ノ森遺跡で城下町の発掘調査が行われ、武家屋敷地、町屋の様相が一部判明している。

幕末には紀淡海峡周辺に海防のための施設（台場）が多数築かれた。近年調査で石垣や土塁、V字状の石積遺構が確認された雑賀崎台場跡もその一つである。昭和20年（1945）7月9日には和歌山大空襲を受け、旧国宝の和歌山城天守閣を失い、市街地をはじめ中心部は焼野原となった。和歌山城跡や市街地中心部を発掘すると、戦災時の焦土層が厚さ数10cmも遺存しているのが確認され、その被害の大きさを物語っている。

和歌山市遺跡分布図



遺 跡 名 一 覧

番号	遺 跡 名	番号	遺 跡 名	番号	遺 跡 名	番号	遺 跡 名	番号	遺 跡 名	番号	遺 跡 名
1	報恩講寺遺跡	70	楠見遺跡	154	北野遺跡	245	伊太祈曾神社古墳群	314	鳴神Ⅱ遺跡	379	和歌山城跡
2	大川西方遺跡	71	鳴滝古墳群	154-2	北野Ⅱ遺跡	246	チショ古墳	315	鳴神Ⅲ遺跡	380	山口御殿跡
3	藻江遺跡	72	奥出古墳	155	若宮池遺跡	247~249	城ヶ森古墳群	316	鳴神Ⅳ遺跡	381	岩橋Ⅱ遺跡
4	しょうぶ谷遺跡	73	有功経塚	156	上三毛遺跡	250	城ヶ森遺跡	317	鳴神貝塚	382	本願寺跡
5	水谷遺跡	74	園部Ⅰ遺跡	157	下三毛遺跡	251	相坂古墳	318	鳴神Ⅴ遺跡	383	神前Ⅱ遺跡
6	男良の谷遺跡	75	園部古墳	158	小山古墳	252・253	千石山古墳群	319	音浦遺跡	384	高松焼窯跡
7	深山遺跡	76	園部Ⅱ遺跡	159	寺山古墳群	254	菖蒲谷遺跡	320	鳴神Ⅵ遺跡	385	奥山田古墳群
8	大谷川遺跡	77	有功遺跡	160	東国山古墳群	255	吉礼Ⅲ遺跡	321	岩橋遺跡	386	大池遺跡
9	加太遺跡	78	池田遺跡	161	宮山古墳群	256	千石山遺跡	322	栗栖Ⅰ遺跡	387	大旗山城跡
10	加太南遺跡	79	有功古墳	162	小倉古墳群	257~259	井戸古墳群	323	栗栖Ⅱ遺跡	388	西田井遺跡
11	平の谷遺跡	80	大同寺墳墓	163	小倉9号墳	260	馬場古墳	324	高橋神社遺跡	389	井ノ口遺跡
12	田倉崎Ⅰ遺跡	81	大同寺古墳	164	明楽古墳群	261	馬場遺跡	325	紀の川銅鐸出土地	390	神波遺跡
13	田倉崎Ⅱ遺跡	82	大同寺遺跡	165	小倉神社1号墳	262~265	東池古墳群	326	有本銅鐸出土地	391	永穂遺跡
14	船出遺跡	83	法然寺遺跡	166	小倉神社2号墳	266	吉里銅鐸出土地	327	太田・黒田遺跡	392	楠本遺跡
16	加太駅北方遺跡	84	六十谷遺跡	167	モント古墳群	267	小山古墳	328	吉田窯跡	393	吉田遺跡
17	藻崎北浜遺跡	85	和田遺跡	168	小倉神社境内遺跡	268	奥須佐窯跡	329	鷺ノ森遺跡	394	城山遺跡
18	藻崎南浜遺跡	86	西辻遺跡	169	金谷遺跡	269	円満寺古墳	330	鷺ノ森窯跡	395	岡村遺跡
19	藻崎西浜遺跡	87	川口遺跡	170	奥池遺跡	270	峯古墳	331	秋月遺跡	396	室山古墳群
20	神前東浜遺跡	88	六十谷古墳群	171	高積山遺跡	271	西光寺窯跡	332	津秦遺跡	397	木ノ本Ⅳ遺跡
21	神前西浜遺跡	89	直川遺跡	172	葉徳寺跡	272	吉里1号窯跡	333	岡の里古墳	398	府中Ⅳ遺跡
22	屋敷浜遺跡	90	直川廃寺跡(明光寺跡)	173	城ヶ峯城跡	273	吉里2号窯跡	334	関戸遺跡	399	平井遺跡
23	おそ越の鼻遺跡	91	高井遺跡	174	禰宜Ⅰ遺跡	274	頭陀寺古墳	335	関戸古墳	400	深谷池北遺跡
24	一谷色遺跡	92	鳥井遺跡	175	禰宜Ⅱ遺跡	275	頭陀寺遺跡	336	天神山古墳	401	名草池北遺跡
25	柏の浜遺跡	93	田屋遺跡	176	禰宜貝塚	276	大將軍窯跡	337	秋葉山貝塚	402	湯谷池西遺跡
26	深蛇池遺跡	94	府中Ⅱ遺跡	177	河南中学校北方遺跡	277	有ノ木窯跡	338	アンドの鼻古墳	403	平野池南遺跡
27	垂水遺跡	95	府中Ⅲ遺跡	178	和佐中遺跡	278	宝光寺跡	339~342	三田古墳群	404	北野池北遺跡
28	神島遺跡	96	府中遺跡	179	和佐寺跡	279~280	松原古墳群	343	吉原古墳	405	山吹丁遺跡
29	沖の島北方海底遺跡	97	北山Ⅰ遺跡	180・181	禰宜古墳群	281	滝ヶ峯古墳群	344	広原古墳	406	友田町遺跡
30	野奈浦遺跡	98	北山1号墳	182	和坂古墳	282	滝ヶ峯遺跡	345	内原古墳	407	津秦Ⅱ遺跡
31	ハイブの浦遺跡	99	北山2号墳	183	和佐古墳群	283	薬勝寺南山古墳群	346	内原遺跡	408	和田Ⅱ遺跡
32	浜遺跡	100	北山3号墳	184	花山古墳群	284	仁井辺遺跡	347	名草貝塚	409	岩橋Ⅲ遺跡
33~35	磯の浦古墳群	101	北山4号墳	185	岩橋千塚古墳群	285	薬勝寺跡	350	高津子山古墳	410	前山B226号墳
37	磯脇遺跡	102	北山5号墳	186	井辺前山古墳群	286	薬勝寺遺跡	352	金谷廃寺跡	411	前山B227号墳
38	西庄遺跡	103	北山Ⅱ遺跡	187	寺内古墳群	287	松原Ⅰ遺跡	353	興徳寺跡	412	城ノ前1号墳
39	平の下遺跡	104	北山6号墳	188	森小手穂遺跡	288	松原Ⅱ遺跡	356	太田城跡	413	境原遺跡
40	木ノ本Ⅰ遺跡	105~117	直川八幡山古墳群	189	寺内ナイフ形石器出土地	289	薬師谷遺跡	357	山崎山古墳群	414	薬勝寺Ⅱ遺跡
41	木ノ本Ⅱ遺跡	118	八王寺山古墳群	190	頭陀寺ナイフ形石器出土地	290	江南遺跡	358	山東中遺跡	415	本渡遺跡
42	木ノ本Ⅲ遺跡	119	橘谷Ⅰ遺跡	209	山東古墳群	291	曾垣田遺跡	359	加太Ⅱ遺跡	416	明王寺遺跡
43	木ノ本経塚	120	橘谷Ⅱ遺跡	210	山東16号墳	292	曾垣田Ⅱ遺跡	360	雨が谷遺跡	417	平尾遺跡
44-1	釜山古墳	121	橘谷Ⅲ遺跡	211	山東17号墳	293	曾垣田古墳	361	冬野遺跡	418	滝ヶ峯Ⅱ遺跡
44 2	車駕之古址古墳	122	橘谷銅鐸出土地	212	山東18号墳	294	城の前Ⅱ遺跡	362	鳴滝遺跡	420	太田城水攻め提跡
44-3	茶臼山古墳	123	弘西遺跡	213	山東19号墳	295	城の前Ⅰ遺跡	363	園部円山古墳	421	木広町遺跡
45	木本小学校Ⅰ遺跡	124	北田井遺跡	214	山東20号墳	296	大池遺跡	364	西庄Ⅱ遺跡	422	朝日蔵骨器出土地
46	木本小学校Ⅱ遺跡	125~127	別所古墳群	215	山東21号墳	297	赤津古墳群	365	永山遺跡	423	上黒谷Ⅱ遺跡
47	榎原遺跡	128	上野古墳群	218	若林古墳群	298	吉礼貝塚	366	永山古墳	424	東田中遺跡
48	中野遺跡	129~139	山口古墳群	219	吉礼砂羅谷窯跡	299	西吉礼遺跡	367	井辺Ⅲ遺跡	425	雑賀崎台場跡
49	城山古墳	140	山口廃寺跡	220~222	平尾古墳群	300	東吉礼遺跡	368	紀三井寺遺跡	426	小豆島西遺跡
50	権現山1号墳	141	中筋日延遺跡	226	楠古墳群	301	和田遺跡	369	奥山田遺跡	427	岩橋高柳遺跡
51	権現山2号墳	142	山口遺跡	227	足守神社古墳群	302	和田岩坪遺跡	370	朝日石槍出土地	428	和坂南垣内古墳群
52	高芝遺跡	143	谷遺跡	228	赤山古墳	303	和田古墳群	371	深山要塞跡	429	栄谷遺跡
53	高芝古墳群	144	里遺跡	229~233	塩谷古墳群	304	和田4号墳	371-1	深山第1砲台跡	430	西庄Ⅲ遺跡
54	栄谷貝塚	145	川辺遺跡	234	新出古墳	305	竈山神社古墳	371-2	深山第2砲台跡	431	砂山南土師器出土地
55	貴志古墳	146	藤田古墳	235	明王寺経塚	306	坂田地蔵山古墳	371-3	男良砲台跡	432	旧聖社境内和鏡出土地
56	川原崎遺跡	147	碓古墳	236	矢田古墳	307	神前遺跡	372	加太砲台跡	433	今福尖頭器出土地
57~59	川原崎古墳群	148	藤田遺跡	237	北池古墳	308	井辺遺跡	373-1・2	田倉崎砲台跡	434	有本土器出土地
60	国有本遺跡	149	宇田森遺跡	238~240	殿山古墳群	309	岡崎縄文遺跡	374	虎島砲台跡	435	坂田遺跡
61	大谷古墳	150	上野廃寺跡	241	土井山古墳	310	森小手穂埴輪窯跡	375	友ヶ島要塞跡	436	三葛遺跡
62・64・65	晒山古墳群	151	上野遺跡	242	丸山古墳	311	大日山Ⅰ遺跡	376	行者堂東遺跡	437	平井Ⅱ遺跡
63	慶円寺裏山古墳	152	上黒谷遺跡	243	高岡古墳	312	井辺Ⅰ遺跡	377	松江経塚	438	山東24号墳
66~69	雨が谷古墳群	153	北野窯跡	244	桜山古墳	313	井辺Ⅱ遺跡	378	狢口石岩陰遺跡	439	平井1号墳

2 埋蔵文化財発掘調査事業

(1) 平成24年度の概要

平成24年度の文化財保護法第93・94条に基づく発掘の届出件数は217件、通知件数は16件である。届出・通知が多いのは、紀ノ川北岸では木ノ本Ⅱ遺跡（8件）、鳥井遺跡（9件）、木本小学校Ⅱ遺跡（8件）、府中Ⅳ遺跡（6件）、南岸では井辺遺跡（13件）、太田・黒田遺跡（12件）、和歌山城跡（17件）、山吹丁遺跡（9件）などである。開発は市街地縁辺部での宅地造成が依然多く、それに伴い個人住宅建設が増加傾向にある。市街地では、店舗や個人住宅の届出などがある。また、今年度の特徴として、近年の都市計画道路の整備に伴い、その周辺での開発が増加している傾向がある。公共事業としては、公共下水道敷設事業が今年度はやや減少傾向にあるが、市道建設のための発掘調査が多く、次年度以降もこの傾向が続くと考えられる。

平成24年度に和歌山市教育委員会に関連して実施した確認調査・立会調査・発掘調査は、以下の(2)の項の一覧に示した通り97件である。これらのなかには、平成23年度に届出・通知のあった案件の対応も含まれている。なかでも調査が多かったのは、紀ノ川北岸では田屋遺跡（8件）、西庄遺跡（5件）、南岸では井辺遺跡（10件）、太田・黒田遺跡（13件）、和歌山城跡（9件）などである。

これらのうち和歌山市教育委員会が実施した6件の発掘調査（太田・黒田遺跡第70次発掘調査、松原Ⅱ遺跡第2次発掘調査、秋月遺跡第14次発掘調査、神前遺跡第8次発掘調査、鷺ノ森遺跡第10次発掘調査、鳴神Ⅳ遺跡第14次発掘調査）と確認調査を中心に、立会調査で遺構・遺物を確認した調査等についての概要を(4)の項で記述する。また、公益財団法人和歌山市文化スポーツ振興財団に委託して実施した4件の発掘調査事業（秋月遺跡第12次発掘調査、太田・黒田遺跡第71次発掘調査、太田・黒田遺跡第72次発掘調査、和歌山城跡第16次発掘調査）の概要については(5)の項に記載する。

なお、岩橋遺跡、津秦Ⅱ遺跡、神前Ⅱ遺跡、岩橋高柳遺跡、鳥井・府中Ⅳ遺跡、井辺遺跡、田屋遺跡、鷺ノ森遺跡、鳴神Ⅱ遺跡、和歌山城跡、川辺遺跡、鳴神Ⅴ遺跡については、事業者負担による本発掘調査（岩橋遺跡第5・7次発掘調査、津秦Ⅱ遺跡第4次発掘調査、神前Ⅱ遺跡第3次発掘調査、岩橋高柳遺跡第2次発掘調査、鳥井遺跡第3次・府中Ⅳ遺跡第7次発掘調査、井辺遺跡第22・23・25・27次発掘調査、田屋遺跡第16・17・18次発掘調査、鷺ノ森遺跡第8次発掘調査、鳴神Ⅱ遺跡第5次発掘調査、和歌山城跡第18次発掘調査、川辺遺跡第20次発掘調査、鳴神Ⅴ遺跡第13次発掘調査）を実施した（別途報告）。

(2) 平成24年度和歌山市調査一覧

実施機関の欄の（公財）和文スは公益財団法人和歌山市文化スポーツ振興財団、和市教委は和歌山市教育委員会を指す。また、和歌山市教育委員会関係の確認調査・立会調査記録は1件ごとに「発掘調査・立会調査カード」を作成し、和歌山市教育委員会生涯学習部文化振興課に備え、一覧表とともに和歌山県教育委員会にも同じものを提出している。

No.	遺跡名	所在地	調査経緯	県指示文書番号	調査期間	実施機関	調査内容	備考
				内容	調査面積(㎡)			
1	岩橋遺跡	岩橋1037	宅地造成	文第43号の(94)	2012~20120418	(公財) 和文ス	遺構：溝(古墳)、溝(平安)、畝状遺構 遺物：土師器・須恵器・黒色土器・瓦器	
				本発掘調査	540.00			
2	津秦Ⅱ遺跡	秋月483-1他	診療所	文第43号の(143)	20120306~0622	(公財) 和文ス	遺構：土坑・溝(中世) 遺物：土師器・須恵器・瓦器	
				本発掘調査	1136.00			
3	神前Ⅱ遺跡	神前164-1他	店舗建設	文第43号の(229)	20120321~0411	(公財) 和文ス	遺構：溝(古墳) 遺物：土師器・須恵器	
				本発掘調査	137.58			
4	史跡和歌山城	一番丁3	看板設置	文第148号の(41)	20120405	和市教委	遺構：なし 遺物：なし	
				立会調査	20.00			
5	山吹丁遺跡	本町4丁目28	個人住宅	文第51号の(4)	20120410	和市教委	遺構：土坑・落ち込み(近世) 遺物：国産陶磁器	本書(4)① に掲載
				立会調査	5.74			
6	西庄Ⅲ遺跡	西庄743	個人住宅	文第43号の(251)	20120413	和市教委	遺構：なし 遺物：土師器・製塩土器	
				立会調査	8.40			
7	松原Ⅱ遺跡	馬場50	個人住宅	文第43号の(320)	20120416	和市教委	遺構： 遺物：	本書(4)② に掲載
				確認調査	10.27			
8	平井遺跡	平井201-1	集合住宅	文第51号の(5)	20120417	和市教委	遺構：なし 遺物：土師器・須恵器・瓦器	本書(4)③ に掲載
				確認調査	10.00			
9	木ノ本Ⅲ遺跡	梅原93-3	店舗建設	文第51号の(3)	20120418	和市教委	遺構：なし 遺物：なし	
				立会調査	10.00			
10	太田・黒田遺跡 ・太田城跡	太田3丁目4-6	個人住宅	文第51号の(3)	20120418~0507	和市教委	遺構：土坑・ピット(弥生)、土坑(江戸) 遺物：弥生土器・土師器・須恵器・国産陶磁器	本書(4)④ に掲載
				本発掘調査	32.29			
11	岩橋高柳遺跡	岩橋904-1	電話通信棟	文第68号の(7)	20120426~0429	和市教委	遺構：溝(中世)、土坑 遺物：土師器・須恵器・瓦器	
				本発掘調査	31.05			
12	和歌山城跡	三番丁54	事務所	-	20120427	和市教委	遺構：盛土遺構(江戸) 遺物：国産陶磁器	本書(4)③ に掲載
				-	23.44			
13	秋月遺跡	有家87-6	個人住宅	文第181号の(5)	20120501~0525	(公財) 和文ス	遺構：落ち込み 遺物：土師器・須恵器・黒色土器	本書(5)① に掲載
				本発掘調査	49.00			
14	岩橋高柳遺跡	岩橋309-1他	店舗建設	-	20120507	和市教委	遺構：井戸・溝・土坑・ピット(江戸) 遺物：国産陶磁器	本書(4)⑥ に掲載
				-	31.05			
15	磯脇遺跡	本脇318-1他	宅地造成	文第43号の(234)	20120508~0531	(公財) 和文ス	遺構：井戸・溝・土坑・ピット(中世) 遺物：土師器・須恵器・瓦器	
				本発掘調査	138.00			
16	岩橋遺跡	岩橋1012他	宅地造成	文第51号の(7)	20120514・0515	和市教委	遺構：溝・ピット(中世) 遺物：土師器・瓦器	本書(4)⑦ に掲載
				確認調査	64.66			
17	太田・黒田遺跡	黒田26-1、 165-1	事務所	文第43号の(324)	20120514	和市教委	遺構：落ち込み・溝(不明) 遺物：土師器・陶器	本書(4)⑧ に掲載
				立会調査	28.10			
18	津秦Ⅱ遺跡	津秦5-35	個人住宅	文第43号の(273)	20120517	和市教委	遺構：なし 遺物：土師器	
				立会調査	5.13			
19	松原Ⅱ遺跡	馬場50	個人住宅	文第68号の(11)	20120517~0525	和市教委	遺構：溝・井戸・土坑(近世) 遺物：土師器・須恵器・瓦器	本書(4)② に掲載
				本発掘調査	55.68			
20	宇田森遺跡	永穂339	宅地造成	文第104号の(5)	20120517~0531	和市教委	遺構：溝・土坑・落ち込み(古墳~中世) 遺物：弥生土器・土師器・須恵器・瓦器	
				本発掘調査	55.68			
21	鳥井遺跡、 府中Ⅳ遺跡	府中344-3他	宅地造成	文第43号の(206)	20120523~0607	(公財) 和文ス	遺構：ピット 遺物：弥生土器・土師器・須恵器・瓦	
				本発掘調査	96.00			
22	井ノ口遺跡	和佐関戸118 -5他	血液 センター	-	20120604	和市教委	遺構：なし 遺物：なし	本書(4)⑨ に掲載
				-	26.86			
23	井辺遺跡	井辺203-2	宅地造成	文第51号の(49)	20120605・0606	和市教委	遺構：溝・ピット(弥生~古墳) 遺物：弥生土器・土師器	本書(4)⑩ に掲載
				確認調査	30.60			
24	府中Ⅳ遺跡	府中318-6	個人住宅	文第43号の(109)	20120608	和市教委	遺構：なし 遺物：なし	
				立会調査	3.14			
25	府中遺跡	府中1089の一部	社務所	文第51号の(36)	20120611	和市教委	遺構：なし 遺物：土師器	
				立会調査	23.58			
26	津秦Ⅱ遺跡、 井辺遺跡	津秦・神前地 内	市道建設	-	20120613・0709	和市教委	遺構：溝・ピット(古墳~中世) 遺物：土師器	本書(4)⑪ ⑫に掲載
				-	57.28			

No.	遺跡名	所在地	調査経緯	県指示文書番号	調査期間	実施機関	調査内容	備考
				内容	調査面積(㎡)			
27	鳥井遺跡	府中344-3他	個人住宅	文第51号の(44)	20120615	和市委	遺構：なし 遺物：土師器	
				立会調査	2.99			
28	井辺遺跡	神前269-3	車庫建設	文第51号の(59)	20120620	和市委	遺構：なし 遺物：なし	
				立会調査	14.00			
29	園部Ⅱ遺跡	園部1581-30	個人住宅	文第51号の(19)	20120625	和市委	遺構：なし 遺物：土師器	
				立会調査	3.68			
30	有功遺跡	六十谷1100	集合住宅	文第68号の(18)	20120626	和市委	遺構：なし 遺物：なし	本書(4)⑬ に掲載
				確認調査	10.00			
31	太田・黒田遺跡	太田1丁目10-13	兼用住宅	文第51号の(57)	20120626	(公財)	遺構：溝・土坑・ピット(弥生) 遺物：弥生土器・土師器	本書(5)② に掲載
				本発掘調査	147.17	和文ス		
32	井辺遺跡	井辺208-2他	店舗建設	文第51号の(105)	20120704	和市委	遺構：溝(弥生～古墳) 遺物：弥生土器・土師器	本書(4)⑭ に掲載
				確認調査	7.60			
33	園部Ⅱ遺跡	園部1518-3	個人住宅	文第43号の(299)	20120709	和市委	遺構：なし 遺物：なし	
				立会調査	5.76			
34	和歌山城跡	八番丁31	店舗建設	-	20120710	和市委	遺構：なし 遺物：なし	本書(4)⑮ に掲載
				-	6.60			
35	池田遺跡	六十谷1189-5	宅地造成	文第68号の(20)	20120718	和市委	遺構：なし 遺物：なし	本書(4)⑯ に掲載
				確認	20.00			
36	太田・黒田遺跡	太田1丁目10-15	兼用住宅	文第51号の(87)	20120718～0807	(公財)	遺構：土器棺墓・溝・ピット(弥生) 遺物：弥生土器・土師器	本書(5)③ に掲載
				本発掘調査	75.40	和文ス		
37	井辺遺跡	井辺203-2	宅地造成	文第51号の(49)	20120719～1026	(公財)	遺構：墳丘墓(弥生～古墳)、竪穴建 物、水田、土坑、ピット、溝(古 墳) 遺物：弥生土器・土師器	
				本発掘調査	760.00	和文ス		
38	府中遺跡	府中1089の一部	個人住宅	文第51号の(36)	20120731	和市委	遺構：なし 遺物：なし	
				立会調査	2.86			
39	岩橋高柳遺跡	岩橋269-1	集会所建設	文第51号の(43)	20120801	和市委	遺構：土坑・溝(中世～江戸) 遺物：土師器	
				立会調査	2.40			
40	井辺遺跡	井辺208-2他	店舗建設	文第51号の(43)	20120802～0813	(公財)	遺構：竪穴建物(古墳) 遺物：土師器	
				本発掘調査	19.08	和文ス		
41	太田・黒田遺跡 ・太田城跡	太田1丁目1-12・13	店舗建設	-	20120802・0803	和市委	遺構：土坑・溝(中世以前) 遺物：弥生土器・土師器	本書(4)⑰ に掲載
				-	16.87			
42	三田古墳群	田尻824-5	個人住宅	文第51号の(114)	20120806	和市委	遺構：なし 遺物：なし	
				立会調査	3.52			
43	音浦遺跡	音浦328他	店舗建設	文第51号の(314)	20120805～0807	和市委	遺構：なし 遺物：なし	本書(4)⑱ に掲載
				確認調査	17.75			
44	西庄遺跡	本脇13・14	資材置き場	文第51号の(84)	20120810・0811・0831	和市委	遺構：土坑・溝(古墳～中世) 遺物：土師器・須恵器・瓦器	本書(4)⑲ に掲載
				確認調査	65.24			
45	太田・黒田遺跡	太田2丁目8-26	ガス管理設	文第51号の(116)	20120810	和市委	遺構：なし 遺物：土師器	
				立会調査	1.44			
46	井辺遺跡	井辺540	個人住宅	文第51号の(153)	20120810	和市委	遺構：溝or土坑(弥生～古墳) 遺物：弥生土器・土師器	
				立会調査	10.37			
47	三田古墳群	田尻地内	保健 センター	文第62号の(4)	20120810	和市委	遺構：なし 遺物：なし	本書(4)⑳ に掲載
				確認調査	10.37			
48	岩橋高柳遺跡	岩橋912-1	内容確認	-	20120822	和市委	遺構：鋤溝 遺物：なし	本書(4)㉑ に掲載
				-	13.14			
49	井辺遺跡	津秦地内	市道建設	-	20120823～20130118	(公財)	遺構：土坑・ピット・溝・流路(古墳) 遺物：土師器・須恵器	
				-	696.00	和文ス		
50	木本小学校Ⅱ遺跡	木ノ本316-1 他	宅地造成	文第51号の(2)	20120824	和市委	遺構：なし 遺物：土師器・瓦器	本書(4)㉒ に掲載
				確認調査	54.35			
51	太田・黒田遺跡 ・太田城跡	太田2丁目13-9	集合住宅	-	20120904	和市委	遺構：土坑・溝(弥生) 遺物：弥生土器・土師器	本書(4)㉓ に掲載
				-	16.87			
52	山吹丁遺跡	本町4丁目90-1	店舗建設	-	20120906	和市委	遺構：土坑・ピット(江戸) 遺物：土師器・瓦器・須恵器・弥生土器	本書(4)㉔ に掲載
				-	13.05			

No.	遺跡名	所在地	調査経緯	県指示文書番号	調査期間	実施機関	調査内容	備考
				内容	調査面積(㎡)			
53	和歌山城跡	十二番丁60	ガス管理設	文第51号の(67)	20120911	和市政教委	遺構：なし 遺物：瓦	
				立会調査	4.74			
54	田屋遺跡	田屋488-1	個人住宅	文第51号の(89)	20120914	和市政教委	遺構：土坑・溝(古墳～中世) 遺物：土師器・須恵器・瓦器	本書(4)㉔ に掲載
				確認調査	15.20			
55	有功遺跡	六十谷1045-7・8	個人住宅	文第51号の(81)	20120919	和市政教委	遺構：なし 遺物：なし	
				立会調査	2.76			
56	田屋遺跡	田屋100他	個人住宅	文第51号の(81)	20120919・0921	和市政教委	遺構：土坑・溝(古墳～中世) 遺物：土師器・須恵器・瓦器	本書(4)㉔ に掲載
				確認調査	66.04			
57	岩橋遺跡	岩橋1295-8	宅地造成	文第51号の(81)	20120919～1121	和市政教委	遺構：堅穴建物(古墳)、井戸(飛鳥) 遺物：土師器・須恵器・瓦器	
				本発掘調査	696.00			
58	津秦Ⅱ遺跡	秋月507-3	宅地造成	文第68号の(32)	20120920	和市政教委	遺構：なし 遺物：土師器	本書(4)㉗ に掲載
				確認調査	29.56			
59	松原Ⅱ遺跡	馬場35	個人住宅	文第68号の(35)	20120924	和市政教委	遺構：土坑(江戸) 遺物：国産陶磁器	本書(4)㉚ に掲載
				確認調査	8.96			
60	田屋遺跡	田屋488-1	個人住宅	文第51号の(89)	20120924	和市政教委	遺構：土坑・溝(中世) 遺物：土師器・須恵器・瓦器瓦器	本書(4)㉔ に掲載
				本発掘調査	116.40			
61	和歌山城跡	岡山丁36	事務所	文第68号の(35)	20120925	和市政教委	遺構：土坑(江戸) 遺物：土師器・瓦	本書(4)㉘ に掲載
				確認調査	10.57			
62	秋月遺跡	秋月566-2	個人住宅	文第68号の(27)	20120926	和市政教委	遺構：溝・土坑(古墳～中世) 遺物：土師器・須恵器	本書(4)㉙ に掲載
				確認調査	9.60			
63	太田城水攻め堤跡	秋月38-10	宅地造成	文第51号の(180)	20120927	和市政教委	遺構：なし 遺物：国産陶磁器	
				立会調査	2.50			
64	三田古墳群	田尻818-28	ガス管理設	文第51号の(179)	20120929	和市政教委	遺構：なし 遺物：なし	
				立会調査	0.80			
65	神前遺跡	神前37-72	個人住宅	文第68号の(28)	20121003	和市政教委	遺構：溝(中世以前) 遺物：土師器	本書(4)㉞ に掲載
				確認調査	11.97			
66	関戸遺跡	関戸3丁目775-5	宅地造成	文第51号の(189)	20121009・10	和市政教委	遺構：なし 遺物：土師器・須恵器	本書(4)㉟ に掲載
				確認調査	17.62			
67	有功遺跡	六十谷1045-6	個人住宅	文第51号の(201)	20121011	和市政教委	遺構：なし 遺物：瓦器	本書(4)㉡ に掲載
				確認調査	4.75			
68	秋月遺跡	秋月566-2	個人住宅	文第68号の(27)	20121012～1102	和市政教委	遺構：溝・土坑(古墳～中世) 遺物：土師器・須恵器	本書(4)㉙ に掲載
				本発掘調査	65.00			
69	鳴神Ⅱ遺跡	鳴神99-1他	宅地造成	文第51号の(242)	20121114・15	和市政教委	遺構：溝・ピット(中世以前) 遺物：土師器・瓦器	本書(4)㉛ に掲載
				確認調査	34.32			
70	田屋遺跡	田屋223-4	集合住宅	文第51号の(185)	20121015	和市政教委	遺構：溝・土坑(古墳～中世) 遺物：土師器・須恵器・瓦器	本書(4)㉜ に掲載
				確認調査	19.84			
71	秋葉山貝塚	秋葉町4	ガス管理設	文第51号の(137)	20121015	和市政教委	遺構：なし 遺物：なし	
				立会調査	3.15			
72	友田町遺跡	友田町3丁目34・37・38	範囲確認	-	20121016	和市政教委	遺構 土坑(弥生) 遺物 弥生土器	本書(4)㉕ に掲載
				-	27.08			
73	山口遺跡	藤田116-19	個人住宅	文第51号の(62)	20121016	和市政教委	遺構：なし 遺物：なし	
				立会調査	3.70			
74	木ノ本Ⅰ遺跡	西庄92他	宅地造成	文第51号の(193)	20121017	和市政教委	遺構：なし 遺物：土師器・須恵器・瓦器・国産陶磁器	本書(4)㉞ に掲載
				確認調査	36.80			
75	田屋遺跡	田屋163	宅地造成	文第51号の(190)	20121022～1026	和市政教委	遺構：堅穴建物(古墳) 遺物：土師器・須恵器・瓦器	本書(4)㉟ に掲載
				確認調査	119.44			
76	府中遺跡	府中1174-2	個人住宅	文第51号の(155)	20121024	和市政教委	遺構：土坑(平安?) 遺物：土師器・黒色土器・瓦器	本書(4)㉡ に掲載
				立会調査	53.00			
77	鷺ノ森遺跡	鷺ノ森南ノ丁1	学校建設	文第62号の(47)	20121025～20130327	(公財) 和文ス	遺構：土坑・井戸・礎石(江戸) 遺物：国産陶磁器・土師器	
				本発掘調査	800.00			
78	西庄遺跡	本脇13・14	資材置き場	文第51号の(84)	20121029～1102	和市政教委	遺構：土坑・溝(古墳～中世) 遺物：土師器・須恵器・瓦器	本書(4)㉙ に掲載
				本発掘調査	106.00			

No.	遺跡名	所在地	調査経緯	県指示文書番号	調査期間	実施機関	調査内容	備考
				内容	調査面積(㎡)			
79	寺内古墳群	寺内地内他	内容確認	-	20121029~20130331	和市委	遺構：古墳 遺物：須恵器	
				-	275.99			
80	岩橋高柳遺跡	岩橋279-13	個人住宅	文第51号の(164)	20121101	和市委	遺構：なし 遺物：土師器	
				立会調査	2.40			
81	神前遺跡	神前37-72	個人住宅	文第68号の(28)	20121101~1109	和市委	遺構：溝(中世) 遺物：土師器・瓦器	本書(4)㉑
				本発掘調査	39.60			
82	和歌山城跡	二番丁3	ガス管理設	文第51号の(122)	20121102	和市委	遺構：なし 遺物：なし	
				立会調査	2.00			
83	史跡和歌山城跡	一番丁3	史跡整備	文第159号の(9)	20121105~20130201	(公財) 和文ス	遺構：土塀基礎石組、石列、景石、 ピット、埋甕(江戸) 遺物：土師器、土師質土器、瓦質土器、 近世陶磁器	
				確認調査	2.00			
84	鳴神Ⅲ遺跡	鳴神1075-6 他	個人住宅	文第68号の(37)	20121107	和市委	遺構：なし 遺物：縄文土器	本書(4)㉒
				確認調査	7.80			
85	川辺遺跡	里84-6	事務所	文第51号の(207)	20121107・1108	和市委	遺構：土坑・落ち込み(古墳) 遺物：土師器	本書(4)㉓
				確認調査	35.80			
86	鷺ノ森遺跡	西大工町11	ガス管理設	文第51号の(229)	20121108	和市委	遺構：なし 遺物：なし	
				立会調査	1.00			
87	西庄遺跡	本脇65-3	個人住宅	文第51号の(248)	20121108	和市委	遺構：なし 遺物：なし	本書(4)㉔
				確認調査	4.00			
88	平井遺跡	平井359	個人住宅	文第51号の(113)	20121114	和市委	遺構：なし 遺物：なし	
				立会調査	4.38			
89	和歌山城跡	岡山丁36	事務所	文第51号の(220)	20121115~1214	(公財) 和文ス	遺構：土坑(中世)、石組み排水溝(江 戸) 遺物：土師器・瓦器・国産陶磁器	本書(5)④
				本発掘調査	52.50			
90	六十谷遺跡	六十谷332- 18	個人住宅	文第51号の(191)	20121116	和市委	遺構：なし 遺物：なし	
				立会調査	3.08			
91	和歌山城跡	九番丁14他	事務所	文第51号の(239)	20121116	和市委	遺構：根石、土坑(江戸) 遺物：土師器、国産陶磁器	本書(4)㉕
				確認調査	16.12			
92	和田遺跡	和田563-5	個人住宅	文第51号の(251)	20121119	和市委	遺構：なし 遺物：須恵器・土師器	
				立会調査	30.00			
93	神前Ⅱ遺跡	神前166-3他	店舗建設	文第68号の(42)	20121119	和市委	遺構：なし 遺物：なし	本書(4)㉖
				確認調査	30.00			
94	鷺ノ森遺跡	東鍛冶屋町11	個人住宅	文第51号の(235)	20121119	和市委	遺構：土坑(江戸)、溝(中世) 遺物：瓦器・国産陶磁器	本書(4)㉗
				確認調査	14.40			
95	鳴神Ⅱ遺跡	鳴神103-4	個人住宅	文第51号の(254)	20121120	和市委	遺構：なし 遺物：土師器・瓦器	本書(4)㉘
				確認調査	9.00			
96	太田・黒田遺跡、 太田城跡	太田1丁目10	ガス管理設	文第51号の(245)	20121124	和市委	遺構：なし 遺物：なし	
				立会調査	3.22			
97	城ヶ森遺跡	吉礼地内	河川改修	文第114号の(3)	20121128	和市委	遺構：なし 遺物：なし	
				確認調査	5.26			
98	鳴神Ⅱ遺跡	鳴神99-199- 3	宅地造成	文第51号の(242)	20121203~20130125	(公財) 和文ス	遺構：ピット(弥生)、溝(古墳) 遺物：弥生土器・土師器・須恵器	
				本発掘調査	325.00			
99	鷺ノ森遺跡	東鍛冶屋町11	個人住宅	文第51号の(235)	20121205~1225	和市委	遺構：土坑・ピット(江戸) 遺物：土師器・瓦器・国産陶磁器・土 製品・鉄滓	本書(4)㉙
				本発掘調査	48.18			
100	和歌山城跡	雑賀屋町東ノ 丁68-1	バス停建替 え	文第51号の(275)	20121210	和市委	遺構：なし 遺物：なし	
				立会調査	8.20			
101	木ノ本Ⅱ遺跡	木ノ本224-8 他	個人住宅	文第51号の(284)	20121210	和市委	遺構：なし 遺物：なし	本書(4)㉚
				確認調査	3.50			
102	鳴神Ⅴ遺跡	鳴神1012-1	宅地造成	文第51号の(283)	20121212	和市委	遺構：土坑・溝(古墳~中世) 遺物：須恵器・土師器・瓦器	本書(4)㉛
				確認調査	23.20			
103	田屋遺跡	田屋100-1他	住宅展示場	文第68号の(44)	201217~1221	和市委	遺構：竪穴建物(古墳) 遺物：土師器・須恵器	
				本発掘調査	72.00			

No.	遺跡名	所在地	調査経緯	県指示文書番号	調査期間	実施機関	調査内容	備考
				内容	調査面積(㎡)			
104	神前遺跡	神前588-2	個人住宅	文第51号の(236)	20121226	和市委	遺構：なし 遺物：土師器・瓦器	
				立会調査	17.00			
105	山吹丁遺跡	本町5丁目11	個人住宅	文第51号の(300)	20121226・1227	和市委	遺構 土坑(江戸)、ピット(中世) 遺物 土師器・瓦器・国産陶磁器	本書(4)⑧ に掲載
				確認	7.40			
106	和田遺跡	和田563-5	個人住宅	文第51号の(251)	20130107	和市委	遺構：なし 遺物：土師器・須恵器	
				立会調査	50.00			
107	鳴神Ⅲ遺跡	鳴神1075-6	個人住宅	文第68号の(37)	20130108	和市委	遺構：なし 遺物：縄文土器	
				立会調査	2.60			
108	和歌山城跡	九番丁16他	事務所	文第51号の(239)	20130110～	(公財) 和文ス	遺構：水田・溝(古墳)、土坑・石列、 礎石(江戸) 遺物：土師器・国産陶磁器・瓦	
				本発掘調査	918.84			
109	直川廃寺、 直川遺跡	直川1791	個人住宅	文第51号の(188)	20130117	和市委	遺構：溝or土坑(不明) 遺物：土師器	
				立会調査	5.60			
110	鳴神Ⅳ遺跡	鳴神987-11	個人住宅	文第51号の(302)	20130117	和市委	遺構：溝(中世以前) 遺物：土師器	本書(4)⑨ に掲載
				確認調査	13.13			
111	田屋遺跡	田屋223-4	集合住宅	文第51号の(185)	20130117・0121	和市委	遺構：土坑・溝・落ち込み(中世) 遺物：土師器・須恵器・瓦器・輸入陶 磁器	
				本発掘調査	17.10			
112	太田・黒田遺 跡、太田城跡	太田1丁目2- 1	店舗建設	文第51号の(301)	20130118	和市委	遺構：なし 遺物：弥生土器・輸入陶磁器	
				立会調査	192.00			
113	井辺遺跡	神前地内	市道建設	文第57号の(7)	20130121～0314	(公財) 和文ス	遺構：溝・水田(古墳)、水田(平安) 遺物：土師器・須恵器・黒色土器・瓦 器	
				本発掘調査	816.27			
114	岩橋遺跡	岩橋1037-5	個人住宅	文第51号の(230)	20130121	和市委	遺構：なし 遺物：土師器	
				立会調査	4.00			
115	伊太祁曾神社古墳	伊太祁曾452	個人住宅	文第51号の(135)	20130123	和市委	遺構：なし 遺物：なし	
				立会調査	1.96			
116	坂田遺跡	坂田365-1他	宅地造成	文第51号の(304)	20130124・0125	和市委	遺構：溝(中世) 遺物：土師器・須恵器・瓦器	本書(4)⑩ に掲載
				確認調査	45.38			
117	鳴神Ⅳ遺跡	鳴神987-11	個人住宅	文第51号の(271)	20130125	和市委	遺構：溝(中世) 遺物：土師器・瓦器	本書(4)⑨ に掲載
				本発掘調査	20.00			
118	木ノ本Ⅱ遺跡	木ノ本1065	個人住宅	-	20130128	和市委	遺構：ピット(不明) 遺物：土師器・瓦器	本書(4)⑪ に掲載
				-	13.87			
119	高井遺跡	直川1219-16 他	個人住宅	文第51号の(211)	20130128	和市委	遺構：なし 遺物：なし	
				立会調査	3.29			
120	井辺前山古墳群	井辺地内	内容確認	-	20130129～0311	和市委	遺構：古墳 遺物：なし	
				-	50.00			
121	太田・黒田遺跡、 太田城跡	太田2丁目13 -9	集合住宅	文第51号の(303)	20120129～0315	(公財) 和文ス	遺構：土坑・溝 遺物：弥生土器・須恵器・土師器	
				本発掘調査	120.58			
122	池田遺跡	六十谷1189- 18	個人住宅	文第51号の(266)	20130129	和市委	遺構：なし 遺物：なし	
				立会調査	63.00			
123	山口遺跡	里146-12・ 22	個人住宅	文第51号の(280)	20130130	和市委	遺構：落ち込み(江戸) 遺物：国産陶磁器	
				立会調査	14.00			
124	太田・黒田遺跡	太田1丁目 12・13	個人住宅	文第51号の(280)	20120131・0201	和市委	遺構：土坑・溝 遺物：弥生土器・須恵器・土師器	本書(4)⑫ に掲載
				慎重工事	42.90			
125	川辺遺跡	里84-6	事務所	文第51号の(207)	20130204～0208	和市委	遺構：土坑・落ち込み(中世) 遺物：土師器・瓦器・輸入陶磁器	
				本発掘調査	14.00			
126	井辺遺跡	井辺50-1	集合住宅	文第51号の(337)	20120212	和市委	遺構：なし 遺物：なし	本書(4)⑬ に掲載
				確認調査	23.80			
127	鳴神貝塚	鳴神地内	範囲確認	-	20130213～0225	和市委	遺構：土坑(古墳) 遺物：土師器	
				-	14.12			
128	六十谷遺跡	六十谷428-4	個人住宅	文第51号の(315)	20130213	和市委	遺構：土坑(弥生) 遺物：弥生土器	本書(4)⑭ に掲載
				立会調査	18.80			

No.	遺跡名	所在地	調査経緯	県指示文書番号	調査期間	実施機関	調査内容	備考
				内 容	調査面積(㎡)			
129	太田・黒田遺跡	太田2丁目2-7	ガス管理設	文第51号の(329) 立会調査	20130215 1.50	和市委	遺構：なし 遺物：なし	
130	鳴神V遺跡	鳴神1021-1	宅地造成	文第51号の(283) 本発掘調査	20130220~0315 81.31	(公財) 和文ス	遺構：古墳周溝(古墳)、溝(中世) 遺物：土師器・須恵器・瓦器	
131	山口遺跡	里146-12・22	個人住宅	文第51号の(280) 立会調査	20130221 14.00	和市委	遺構：落ち込み(江戸) 遺物：国産陶磁器	
132	西庄遺跡	本脇554	内容確認	- -	20130227・0228 69.30	和市委	遺構：土坑・溝(古墳~中世) 遺物：土師器・須恵器・瓦器	本書(4)⑤ に掲載
133	関戸遺跡	関戸4丁目1-8	ガス管理設	文第51号の(100) 立会調査	20130302 3.60	和市委	遺構：なし 遺物：なし	
134	木ノ本II遺跡	木ノ本963-1・6	ガス管理設	文第51号の(353) 立会調査	20130304 5.00	和市委	遺構：なし 遺物：なし	
135	秋月遺跡	秋月556-2	個人住宅	文第68号の(27) 立会調査	20130304 5.00	和市委	遺構：溝・土坑(古墳~中世) 遺物：土師器	
136	木ノ本II遺跡	木ノ本1221	宅地造成	文第51号の(359) 確認調査	20130306・0307 33.00	和市委	遺構：なし 遺物：なし	本書(4)⑤ に掲載
137	榎原遺跡	木ノ本461-3	集合住宅	文第51号の(381) 確認調査	20130306 21.00	和市委	遺構：なし 遺物：なし	
138	府中IV遺跡	府中89-3・4	個人住宅	文第51号の(306) 立会調査	20130308 3.68	和市委	遺構：なし 遺物：なし	
139	園部II遺跡	園部1581-3	個人住宅	文第51号の(306) 立会調査	20130312 3.68	和市委	遺構：なし 遺物：なし	
140	田屋遺跡	田屋163	宅地造成	文第51号の(190) 本発掘調査	20130312~ 3705.15	(公財) 和文ス	遺構：竪穴建物(弥生~古墳)、井戸、 ピット(中世)他	
141	木広町遺跡	田中町4丁目123~130-8	ガス管理設	文第51号の(357) 立会調査	20130315 2.00	和市委	遺構：なし 遺物：なし	
142	神前遺跡	神前588-2	個人住宅	文第51号の(236) 立会調査	20130315 8.75	和市委	遺構：溝(江戸) 遺物：国産陶磁器・瓦	
143	川辺遺跡	里84-6	事務所	文第68号の(43) 本発掘調査	20130321~0326 8.75	和市委	遺構：ピット(中世) 遺物：弥生土器・土師器・瓦器	
144	井辺遺跡	津秦・神前地内	範囲確認	- -	20130325・0326 24.46	和市委	遺構：ピット 遺物：土師器・須恵器	本書(4)⑩ に掲載
145	太田・黒田遺跡、太田城跡	太田4丁目3-5	ガス管理設	文第51号の(125) 立会調査	20130326 2.20	和市委	遺構：なし 遺物：なし	
146	神前遺跡	神前391-1	集合住宅	文第51号の(370) 確認調査	20130328 7.00	和市委	遺構：なし 遺物：土師器	本書(4)⑦ に掲載
147	榎原遺跡	木ノ本461-3	集合住宅	確認調査	20130328 21.00	和市委	遺構：なし 遺物：なし	本書(4)⑧ に掲載
148	岩橋II遺跡	岩橋1352-4	宅地造成	文第51号の(393) 確認調査	20130329 19.93	和市委	遺構：なし 遺物：土師器	本書(4)⑨ に掲載

(3) 平成25年度の埋蔵文化財包蔵地の認定・範囲変更等

平成25年4月1日から平成26年3月31日までに包蔵地の新規認定・範囲変更・範囲修正・番号表記修正をおこなった遺跡は、以下の25遺跡である。



深山遺跡 (7)、加太遺跡 (9)、加太南遺跡 (10)、加太駅北方遺跡 (16)、加太Ⅱ遺跡 (359)



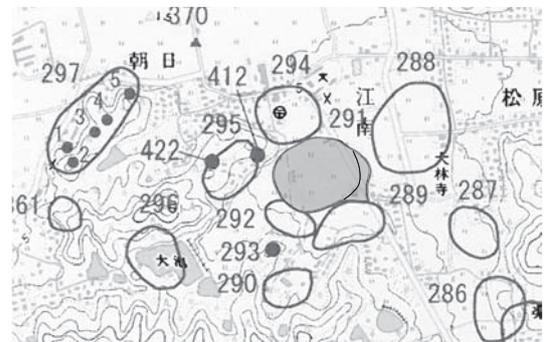
別所古墳群 (125～127)



上野古墳群 (128)



山東 20号墳 (214)、山東 21号墳 (215)、山東 22号墳 (216)、山東 23号墳 (217)、山東 24号墳 (438)



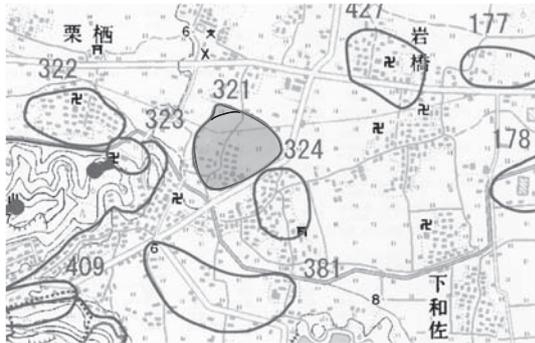
曾垣田遺跡 (291)



西吉礼遺跡 (299)



音浦遺跡 (318)



岩橋遺跡 (321)



神前II遺跡 (383)



平井遺跡 (399)、平井II遺跡 (437)



井辺遺跡 (308)、津秦II遺跡 (407)



上黒谷遺跡 (423)



平井1号墳 (439)

遺跡番号	遺跡名	いせきめい	所在地	種別	時代	立地	認定・変更日	備考
7	深山遺跡	みやまいせき	深山	散布地	弥生～奈良	丘陵端	H25. 7. 23	範囲変更等
9	加太遺跡	かだいせき	加太	散布地	縄文～中世	砂嘴	H25. 7. 23	範囲変更等
10	加太南遺跡	かだみなみいせき	加太	散布地	縄文～古墳	平地	H25. 7. 23	範囲変更等
16	加太駅北方遺跡	かだえきほっぽういせき	加太	散布地	弥生～平安	山麓	H25. 7. 23	範囲変更等
125～127	別所古墳群	べっしょこふんぐん	弘西	古墳群	古墳	山腹	H25. 8. 19	新規認定・範囲変更等
128	上野古墳群	うえのこふんぐん	上野	古墳群	古墳	山腹	H25. 8. 19	範囲変更等
214	山東20号墳	さんどうにじゅうごうふん	禰宜・明王寺	古墳	古墳	丘陵	H25. 5. 7	番号表記修正
215	山東21号墳	さんどうにじゅういちごうふん	禰宜・明王寺	古墳	古墳	丘陵	H25. 5. 7	番号表記修正
216	山東22号墳	さんどうにじゅうにごうふん	禰宜・明王寺	古墳	古墳	丘陵	H25. 5. 7	番号表記修正
217	山東23号墳	さんどうにじゅうさんごうふん	禰宜・明王寺	古墳	古墳	丘陵	H25. 5. 7	番号表記修正
291	曾垣田遺跡	すがまだいせき	江南	散布地	古墳～古代	丘陵端	H25. 10. 4	範囲変更等
299	西吉礼遺跡	にしきれいせき	吉礼	散布地	弥生～古墳	丘陵端	H25. 5. 17	範囲変更等
308	井辺遺跡	いんべいせき	井辺	散布地	弥生	沖積地	H25. 8. 5	範囲変更等
319	音浦遺跡	おとうらいせき	鳴神	集落跡	古墳	平地	H25. 6. 6	範囲変更等
321	岩橋遺跡	いわせいせき	岩橋	集落跡	古墳～中世	丘陵端	H25. 7. 16	範囲変更等
359	加太II遺跡	かだにいせき	加太	散布地	弥生～古墳	丘陵端	H25. 7. 23	範囲変更等
383	神前II遺跡	こうざきにいせき	神前	散布地	古墳～室町	沖積地	H25. 5. 7	範囲変更等
399	平井遺跡	ひらいいせき	平井	散布地	弥生～中世	丘陵	H25. 10. 29	範囲変更等
407	津秦II遺跡	つばだにいせき	秋月・津秦	散布地	古墳～室町	沖積地	H25. 7. 1	範囲変更等
423	上黒谷遺跡	かみくろだいにいせき	上黒谷	散布地	弥生、古墳	丘陵端	H25. 5. 7	範囲修正
437	平井II遺跡	ひらいにいせき	平井	散布地	弥生～中世	山麓	H25. 10. 29	範囲変更等
438	山東24号墳	さんどうにじゅうよんごうふん	禰宜・明王寺	古墳	古墳	丘陵	H25. 5. 7	番号表記修正
439	平井1号墳	ひらいいちごうふん	平井	古墳	古墳	丘陵	H25. 1. 7	新規認定

(4) 市教育委員会実施確認・立会調査等概要

①山吹丁遺跡第1次確認調査（調査一覧5）

〔経緯〕 個人住宅建設に伴う事前確認調査

〔場所〕 和歌山市本町4丁目28番地

〔面積〕 5.73㎡

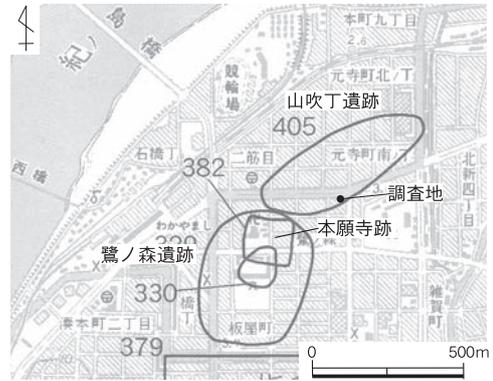
〔概要〕 山吹丁遺跡（遺跡番号405）は、紀ノ川南岸の沖積低地に立地する。遺跡は南北約650m、東西約1000mの規模をもち、弥生時代から古墳時代の遺物散布地として周知されている（第1・2図）。

今回の調査地は、遺跡の南端部分において、個人住宅建設が計画されたことから、工事に先立ち、遺跡の内容確認のための調査を実施した。

現地表面下、85～100cmが造成土で、その下に10～40cmのしまりのない灰オリーブ色細～中砂混シルト（第1層）、それ以下は、酸化マンガンを含む灰オリーブ色細砂混シルト（第2層）、灰オリーブ色細砂混シルト（第3層）が堆積する。第1層は近世土師器小片を含む。第2層以下は遺物を含まず、自然堆積層であると考えられる。

遺構は第2層上面で江戸時代前期の遺構を検出した。検出した遺構は、SX-1は不整形な落ち込み、SX-2は溝状の落ち込みで深さ0.3mを測る。遺構からは江戸時代前期の陶磁器が出土している。

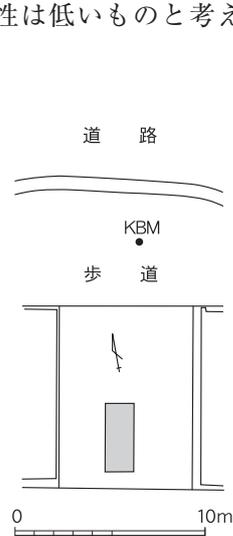
確認調査の結果、第2層上面で江戸時代前期の遺構を検出した。江戸時代の遺構・遺物をのぞくと中世以前のものはなく、対象地周辺に中世以前の遺構が展開する可能性は低いものと考えられる。（大木）



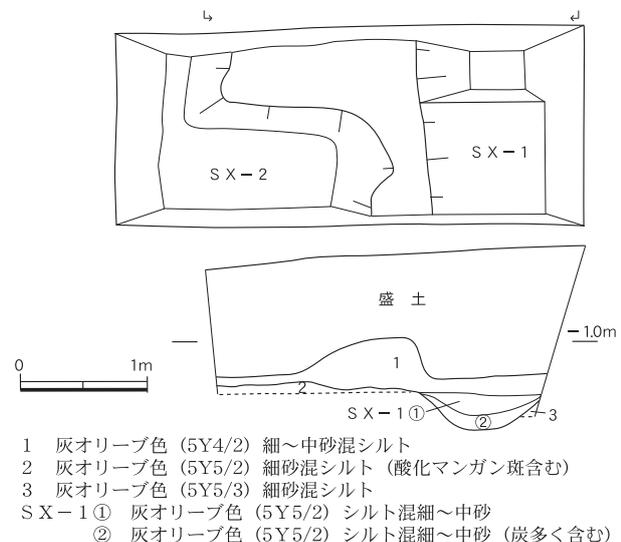
第1図 位置図



第2図 調査対象地



第3図 調査区位置図



- 1 灰オリーブ色 (5Y4/2) 細～中砂混シルト
- 2 灰オリーブ色 (5Y5/2) 細砂混シルト (酸化マンガンを含む)
- 3 灰オリーブ色 (5Y5/3) 細砂混シルト
- SX-1 ① 灰オリーブ色 (5Y5/2) シルト混細～中砂
- ② 灰オリーブ色 (5Y5/2) シルト混細～中砂 (炭多く含む)

第4図 調査区平面図・土層断面図 (S=1/60)

②松原Ⅱ遺跡第1次確認調査・第2次発掘調査

・第3次確認調査（調査一覧7・19・59）

〔経緯〕 個人住宅建設に伴う事前確認調査
及び本発掘調査

〔場所〕 和歌山市馬場50番・35番

〔面積〕 第1次：10.27㎡、第2次：55.68㎡、
第3次：8.96㎡

〔概要〕 松原Ⅱ遺跡（遺跡番号288）は、和田川中流域の左岸に位置する、東西約250m、南北約250mの遺物散布地である。遺跡の北東端で個人住宅新築が計画されたことから、内容確認調査を行い（第1次）、地盤改良部分について記録保存の発掘調査を行った（第2次）。また南隣地で個人住宅新築が計画されたため、内容確認調査を行った（第3次）。第1次・第3次調査の水準は任意の点からの比高差で示した。第2次調査は、水準はT.P.+値、座標は世界測地系の国土座標を用いた。

第1次・第2次調査区では、約0.2m厚の造成土以下、第1層 耕作土、第2層 褐灰色シルト、第3層 マンガン斑を少量含む褐灰色シルト、第4層 黄褐色細～粗砂混シルト（自然堆積）が堆積する。

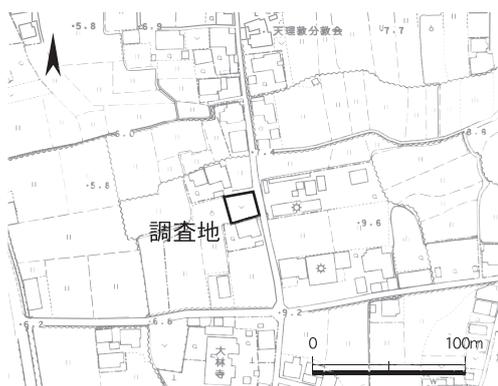
遺構は、第4層上面において、溝3条、井戸1基、土坑4基、ピットを検出した。SD-8は、東西方向の比較的規模の大きい溝で、幅2.2m以上、深さ約0.5mである。近世陶磁器や瓦が出土し、近世の屋敷地の区画溝の可能性はある。SE-10は、結晶片岩の石積み井戸で、内径約0.5mである。出土遺物からSD-8と同時期の可能性はある。SK-2からは、土師器・瓦器が出土し、中世の遺構である可能性はある。

第1次・第2次調査の結果、第4層上面において中世から近世にかけての遺構を検出した。調査地は中世から近世にかけての居住域と考えられる。

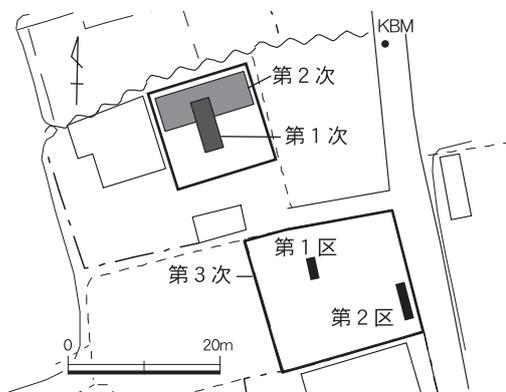
第3次調査では、現地表下に盛土、耕作土、黄褐色細～粗砂混シルトを確認し、近世の土坑を検出した。周辺地形は南に向かって高くなり、第1・2次調査で確認した遺物包含層が、第3次調査地では残存しなかったため、近世以降に削平され、中世以前の遺構は残存しない可能性が高い。（富永）



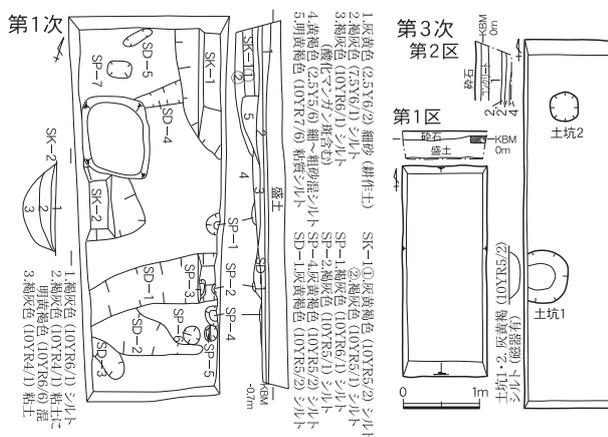
第1図 位置図



第2図 調査対象地



第3図 調査区位置図



第4図 第1・3次調査区平面図・土層図（S=1/100）

③平井遺跡第1次確認調査（調査一覧8）

〔経緯〕 集合住宅建設に伴う事前調査

〔場所〕 和歌山市平井201番1

〔面積〕 10.00㎡

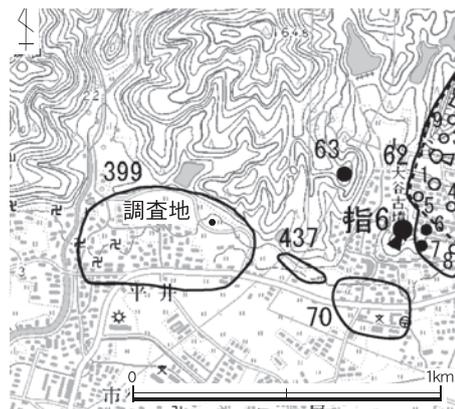
〔概要〕 平井遺跡（遺跡番号399）は、紀ノ川の北岸地域で和泉山脈の丘陵裾部に展開する、東西約0.25km、南北約0.15kmの遺跡である。今回の調査は、遺跡の北東端部において集合住宅の建設が計画されたことに起因する。事業者から建設計画の打診を受け、埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行った結果、建設予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地である平井遺跡に含まれることから、和歌山市教育委員会で遺構の有無や遺構検出面の深度等を確認するための確認調査を実施した（第1・2図）。平井遺跡は過去に調査がほとんど行われていなかったが、平井遺跡に隣接する平井Ⅱ遺跡の調査（和歌山県教育庁生涯学習局文化遺産課 2012）において、溝や土坑等の遺構および弥生時代から鎌倉時代にいたる遺物の存在を確認している。平井遺跡周辺では、前述した平井Ⅱ遺跡以外に半径約1kmの範囲内には馬冑が出土したことで有名な大谷古墳をはじめ東側に楠見遺跡や鳴滝遺跡、晒山古墳群、西側に高芝遺跡、栄谷遺跡、木ノ本Ⅲ遺跡など古墳時代を中心とした時期の遺跡が存在する。

調査地は和泉山脈の丘陵裾部に広がる住宅地内の集合住宅建設予定地である。対象地は約744.88㎡の北東-南西を長軸とする長方形であり、対象地中央の浄化槽設置予定地に隣接する形で調査区を設定した（第3図）。

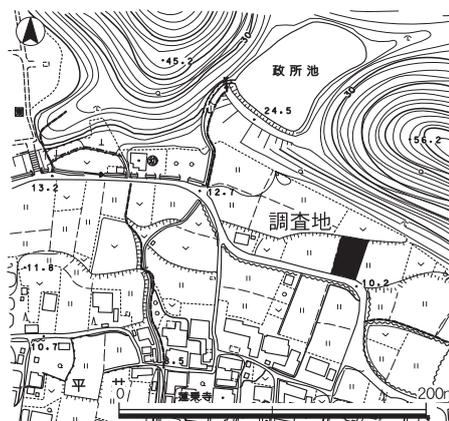
調査地の現況は耕作地であり、近現代～近世の耕作土までを機械掘削とし、以下は機械掘削後人力による精査を行い遺構や遺物の有無を確認した。土層堆積状況や遺構の検出状況については写真撮影、実測図を作成した。図面による記録は、平面図に関しては調査地と隣地とを区画する隣地境界線を、断面図に関しては調査地に南面する道路に直行する道路内にある止水栓をKBM0.0mとして実測を行った（第3図）。壁面土層断面図と遺構平面図については1/20の縮尺を用いて、手測りによる実測を行った。また、土層の色調観察は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖2006年版』を用いた。

本調査地の基本層序は以下の通りである（第4図）。

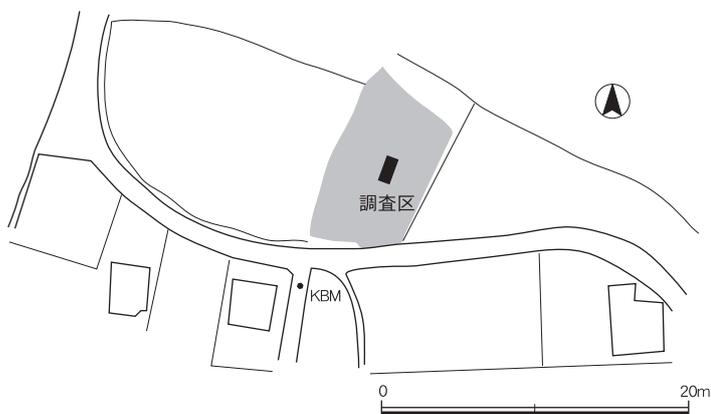
第0層：現代の耕作土である。



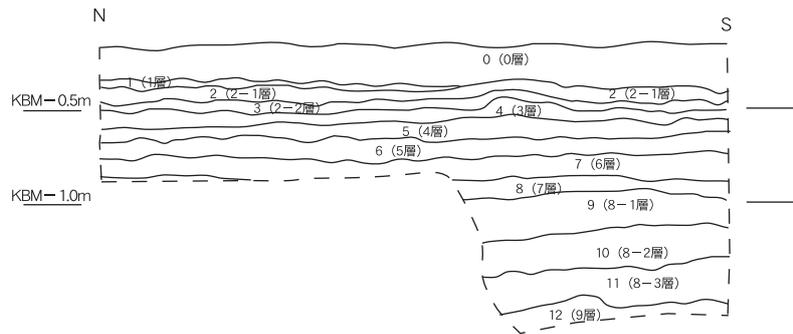
第1図 位置図



第2図 調査対象地



第3図 調査区配置図



- | | |
|--|--|
| <p>0 ; 現代耕作土。(0層)</p> <p>1 ; 黄褐 (10YR5/8) 極細粒砂混じりシルト
酸化鉄の錆着がみられる。現代耕作土。(1層)</p> <p>2 ; 黄灰 (2.5Y5/1) 極細粒砂混じりシルト
酸化鉄が弱く錆着。
近世～近代の耕作土か? (2-1層)</p> <p>3 ; 黄褐 (10YR5/6) 極細粒砂混じりシルト
酸化鉄の錆着が著しい。
近世～近代の耕作土か? (2-2層)</p> <p>4 ; 黄灰 (2.5Y6/1) 極細粒砂混じりシルト
やや暗色化している。
やや粘性が強く、やや砂質も強い。
土器を含む。(3層)</p> <p>5 ; 黄灰 (2.5Y5/1) シルト 暗色化している。
粘性が強い。土器を含む。(4層)</p> <p>6 ; 黄灰 (2.5Y4/1) シルト暗色化している。
粘性が強い。土器を多く含む。(5層)</p> | <p>7 ; 黄灰 (2.5Y5/1) シルト 暗色化している。
酸化鉄斑がみられる。土器を極わずかに含む。(6層)</p> <p>8 ; にぶい黄 (2.5Y6/3) シルト やや粘性が強い。
酸化鉄の錆着が著しい。植物の根による攪乱がみられる。(7層)</p> <p>9 ; 黄灰 (2.5Y4/1) シルト 暗色化が著しい。粘性が強い。
滞留堆積か? (8-1層)</p> <p>10 ; 黒褐 (2.5Y3/1) シルト 暗色化が極めて著しい。
粘性が強い。滞留堆積か? (8-2層)</p> <p>11 ; 黄灰 (2.5Y4/1) 粘土質シルト 暗色化が著しい。
下位層 (9層) が極わずかに偽礫状に混じる。
滞留堆積か? (8-3層)</p> <p>12 ; にぶい黄 (2.5Y6/3) 粘土質シルト
偽礫状に下位層が混じる。(9層)</p> |
|--|--|

第4図 調査区土層図 (S=1/40)

- 第1層；層厚約5cmで黄褐色土からなり、酸化鉄の錆着がみられる。現代の耕作土と考えられる。
- 第2層；層厚約10cmの黄灰色土からなる酸化鉄の錆着がごく弱い2-1層と、層厚約5cmの黄褐土からなる酸化鉄の錆着が著しい2-2層の2層に細分される。近世～近代の耕作土と考えられる。
- 第3層；層厚約10cmの砂質がやや強く、粘性も強い、ごく弱く暗色化した黄灰色土からなる。須恵器、土師器が出土していることから古代～中世の遺物包含層と考えられる。
- 第4層；層厚5～15cmの粘性が強く、暗色化した黄灰色土からなる。須恵器や土師器等が出土しており、古代の遺物包含層と考えられる。
- 第5層；層厚約10cmの黄灰色土からなり、粘性が強く、暗色化している。須恵器や土師器等が比較的多く出土する遺物包含層である。
- 第6層；層厚約10cmの黄灰色土からなり、暗色化しており、酸化鉄斑がみとめられる。土師器がごく少量出土していることから希薄な遺物包含層であると考えられる。
- 第7層；層厚10cmの酸化鉄の錆着が著しく、粘性が強い、にぶい黄色土からなる。植物の根による攪乱がみられる。遺物の存在を確認できなかったことから自然堆積層であると考えられる。
- 第8層；層厚約20cmで黄灰色土からなる、暗色化が著しく粘性の強い8-1層、層厚約20cmで黒褐色土からなる、暗色化が極めて著しく、粘性の強い8-2層、層約20cmで暗色化が著しい8-3層の3層に細分される。
- 第9層；層厚5cm以上の黄色粘性土からなり、偽礫状に下位層が混じる。

本調査の結果、第3層～第6層が土器を含む遺物包含層であることを確認した。しかしながら、比較的遺物が多く含まれていた第4層（現地表面から約0.4m）および第5層（現地表面から約0.5m）を含め、各層において遺構の存在を確認することはできなかった。今回の調査および、平井Ⅱ遺跡の試掘調査（和歌山県教育庁生涯学習局文化遺産課）から、本調査地は和泉山脈の山麓部に展開する平井Ⅱ遺跡の縁辺部に相当するものと考えられる。（清水）

【参考文献】

『第2 阪和道工事立会及び平井Ⅱ遺跡（仮称）試掘調査成果』2012 和歌山県教育庁生涯学習局文化遺産課

④太田・黒田遺跡第70次発掘調査（調査一覧10）

〔経緯〕 個人住宅建設に伴う発掘調査

〔場所〕 和歌山市太田3丁目4-6

〔面積〕 32.29㎡

〔概要〕 太田・黒田遺跡は和歌山県和歌山市太田及び黒田周辺に所在し、紀ノ川南岸の標高4m前後の沖積低地に立地する遺跡である。この遺跡は、東西約500m、南北約900mの規模をもつ弥生時代から江戸時代の集落遺跡として周知されている（第1図）。

今回の調査は、太田・黒田遺跡（遺跡番号327）、太田城跡（356）の南西隅に位置する和歌山県和歌山市太田二丁目3番4・6地内において個人住宅建設が計画されたことに起因する（第2図）。事業者と和歌山市教育委員会及び和歌山県教育委員会が協議を重ねた結果、対象地周辺では調査成果により対象地内に埋蔵文化財が展開している可能性が高く、個人住宅建設工事において設計変更などによる現地保存は困難であり、記録保存のための本発掘調査が必要であるとの行政判断に達し、発掘調査を実施することとなった。

調査区は、個人住宅の建物基礎部分を対象に設定した（第3図）。土置き場の関係で西半分を第1区、東半分を第2区として分割して調査を実施した。

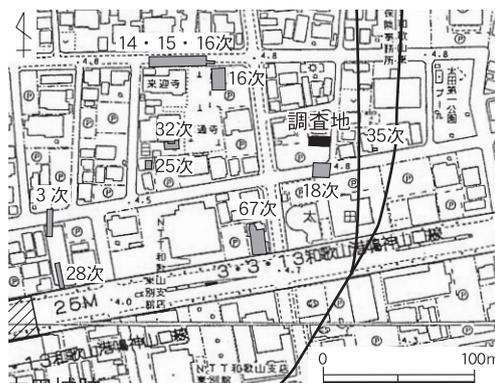
調査地の現況は宅地であり、機械掘削は宅地造成時の盛土、近現代の堆積層までとし、第2層以下を人力により掘削した。遺構の掘削に関しては、土層観察用のセクションベルトを遺構に直交するライン上に設定し、遺物の出土状況や土層堆積状況について写真撮影、実測図を作成した。

図面による記録は、平面図に関しては国土座標を基準とした値を使用し、このラインを基準として実測を行った。水準値はT.P.値を基準とした。

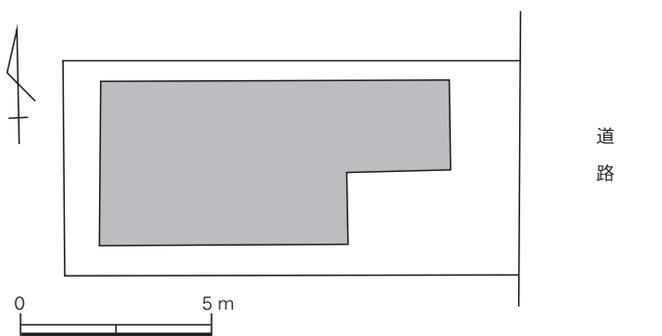
現地表土である造成土は、調査区全面に認められ、調査区西側で約74cm、東側で約68cmを測る。第1層は10～20cmを測る近現代の旧耕作土で厚い部分では2層に細分できる、第2層は約15cmを測るオリブ褐色シルト混細砂で遺構により大部分が失われていたが、周辺の調査成果から弥生時代の遺物包含層であると考えられる。この上面は落ち込み、ピット等を検出した第1遺構面である。第3層は約20cmを測る弥生時代中期前葉～中葉の遺物包含層で、2層に細分できる。この上面が弥生時



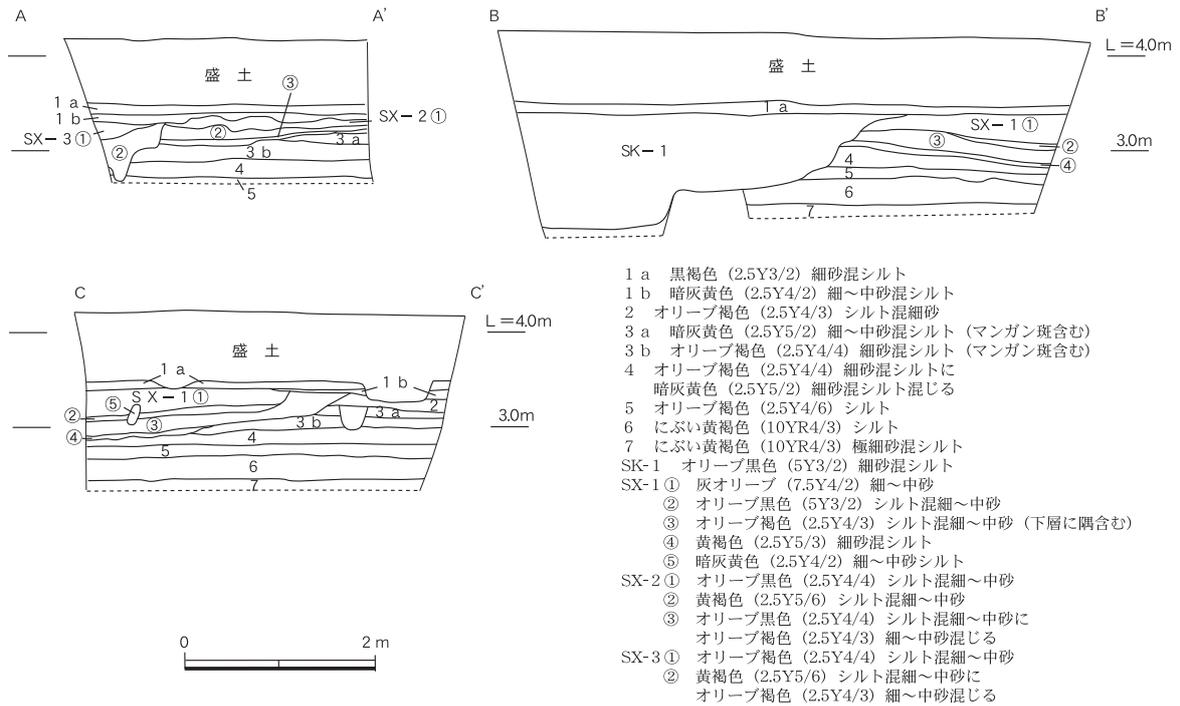
第1図 位置図



第2図 調査対象地



第3図 調査区配置図



第4図 調査区土層断面図 (S=1/80)

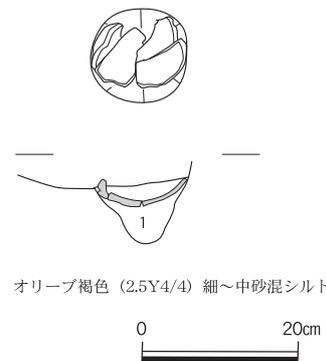
代中期のピットなどを検出した第2遺構面である。第4層は約15cmを測る弥生時代前期の遺物包含層で、この上面は第3遺構面である。第5層は無遺物層で、この上面が第4遺構面である。第6層は約25cmを測るにぶい黄褐色シルト、第7層はにぶい黄褐色極細砂混シルトである。

第5層以下については、下層確認トレンチにおいて土を細かく碎きながら遺物の採取を試みたが、遺物は出土しなかった。そのため、第7層以下は自然堆積層であると考えられる。

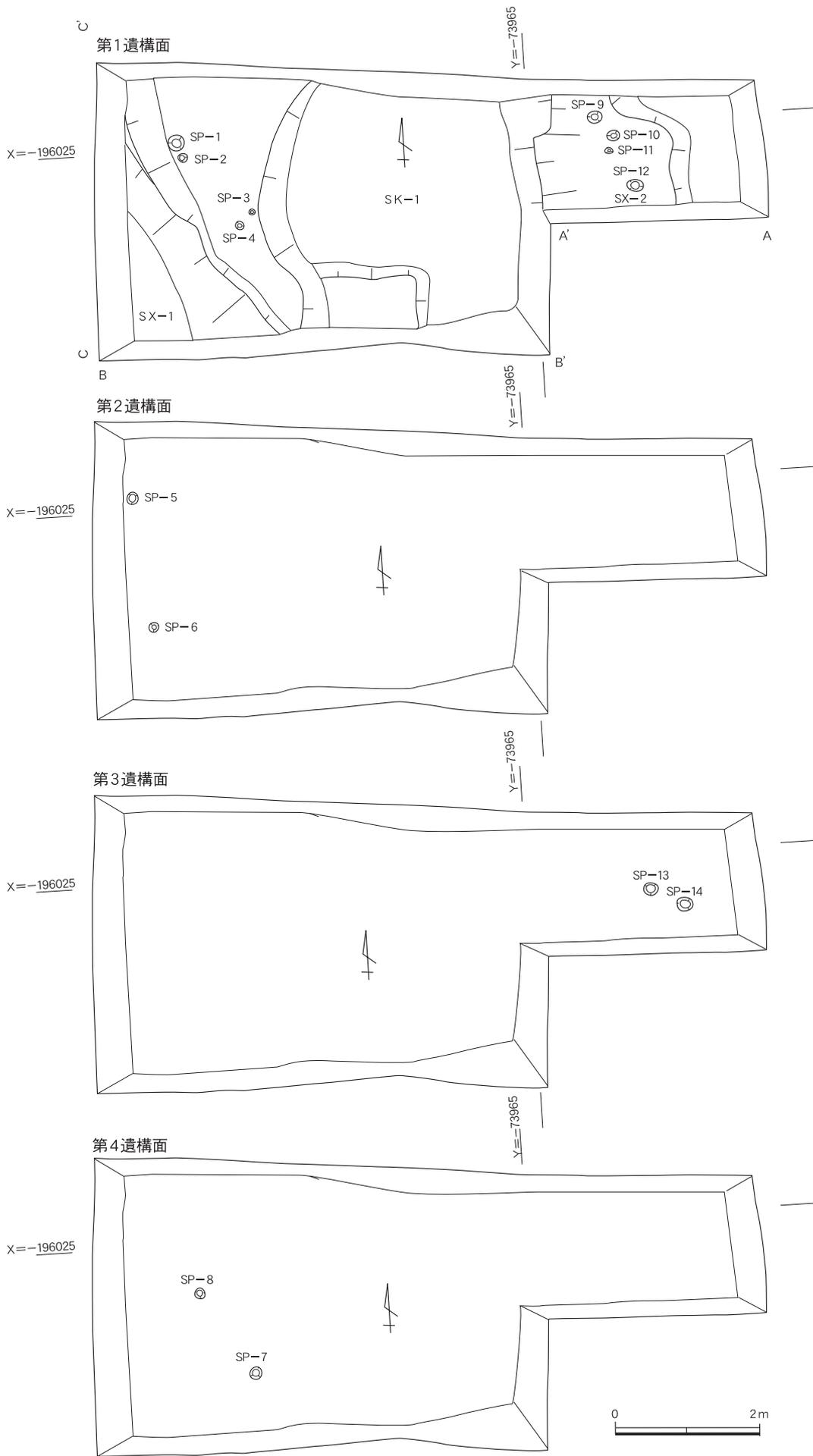
遺構は4面の遺構面を確認した。遺構面の時期は、周辺の調査成果や包含層出土の遺物から第1遺構面が弥生時代中期後半～中世、第2遺構面が弥生時代中期、第3遺構面が弥生時代中期前葉、第4遺構面が弥生時代前期～中期初頭以前になると考えられる。

〔第1遺構面〕落ち込み3基 (SX-1～3)、弥生時代のピット8基 (SP-1～4、9～12)、明治時代以降の大型土坑1基 (SK-1) を検出した。SX-1は深さ0.5mを測る。埋土からは弥生土器のほか中世土師器が出土した。SX-2は深さ0.3mを測り、埋土からは弥生時代前期の太細併用沈線を施す広口壺やヘラ描き沈線を多条施した壺、紀伊形甕など弥生土器のほか須恵器小片が出土している (第7図)。SX-3は深さ0.6mを測る。いずれの落ち込みも出土遺物のほとんどは弥生土器であるが、中世土師器や須恵器等が極少量混じる状況があり、周辺の調査で埋土や規模が類似する近世の土坑が存在することを考慮すると、近世の遺構の可能性もある。ピットに関しては、いずれも落ち込みを掘削したのちに検出しており、第2遺構面の遺構の可能性もある。

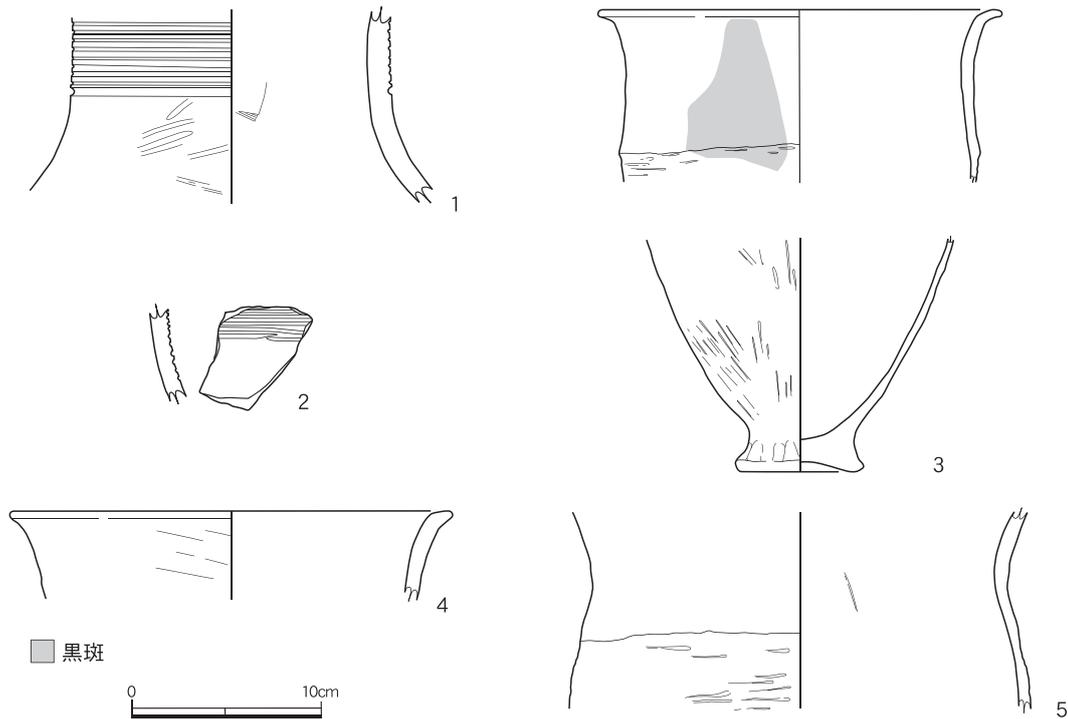
〔第2遺構面〕ピットを2基 (SP-5・6) 検出した。これらのピットは本来第3a層上面で検出すべきであったが、第3b層上面で検出している。SP-5は検出面で直径約14



第6図 SP-5平・断面図 (S=1/10)



第5図 調査区平・断面図 (S=1/80)



1～3：SX-2、4：第3層、5：SP-5

第7図 遺物実測図 (S=1/4)

cm、深さ約10cmを測り、ちょうど穴と同じサイズの紀伊形甕が横倒しの状態で置かれていた（第6図）。出土した土器（第7図5）は口縁部、底部が欠損しているが、形態から弥生時代中期前葉のものと考えられる。SP-6からも中期前葉の紀伊形甕が出土している。

〔第3遺構面〕ピットを2基（SP-13・14）検出した。SP-14は直径約24cm、深さ約20cmを測る。断面観察の結果、直径約12cmの柱痕跡が確認できた。

〔第4遺構面〕ピットを2基（SP-7・8）検出した。半裁し断面観察を行ったが、人為的に掘削された遺構とは判断できず、第67次調査第5遺構面で検出したピットと同様に、微低地に分布する小径木の痕跡などの可能性があると考ええる。

発掘調査の結果、4面の遺構面を確認した。第1遺構面では落ち込みや新しい土坑によりほぼ遺構面が残っていなかったため様相は不明であるが、落ち込みや土坑の埋土から弥生時代中期後半の遺物等が出土しており、同時期の遺構が存在していた可能性が想定できる。

第2遺構面では土器埋納遺構（SP-5）を1基検出した。同様の遺構は太田・黒田遺跡第28次調査や秋月遺跡第10次調査でも検出されており、遺跡南西隅部を中心に墓域が展開していた可能性が想定されている。そのため、SP-5に関しても同様の性格をもつ遺構の可能性も想定できる。

第3遺構面では、建物の可能性のある柱穴を1基検出しており、小規模な居住域が展開していた可能性も想定される。

第4遺構面では明確な遺構は確認できず、かなり遺構密度は希薄であったものと考えられる。

（大木）

⑤和歌山城跡第13次確認調査（調査一覧12）

〔経緯〕 事務所建設に伴う事前確認調査

〔場所〕 和歌山市三番丁54

〔面積〕 23.44㎡

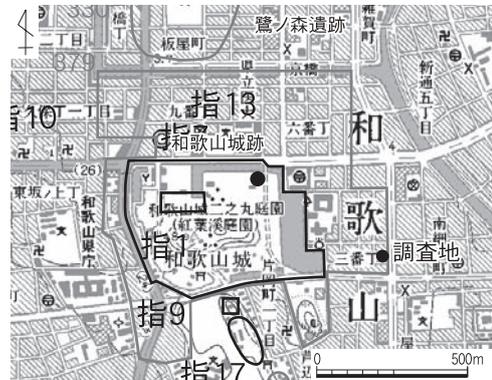
〔概要〕 和歌山城跡（遺跡番号379）は、紀ノ川南岸の平野部に存在する独立丘陵上に築かれた和歌山城を中心とする遺跡である（第1図）。

今回の調査地は、和歌山城三の丸の東外堀に面した場所において、事務所建設が計画されたことから、工事に先立ち、遺跡の内容確認のために調査を実施することになった

現地表面下約140～230cmが造成土で、その下に約14cmの黄茶褐色極細～細砂混シルト（第1層）、約30cmの茶褐色極細～細砂混シルト（第2層）、それ以下は黄褐色シルト（第3層）が堆積する。いずれの堆積層にも遺物を含まず第1層以下が自然堆積層で、近現代の堆積層はすでに削平されているものと考えられる。

遺構は第2区において盛土を除去した面で盛土状の遺構、大規模な落ち込みを検出した。盛土状遺構は残存する部分で高さ約0.35mを測る。一部断ち割りを実施したところ3層に分層でき、地山に灰色のシルトブロックが混じっている状況が観察できた。落ち込みは検出面から約0.6m掘削したが底は確認できなかった。埋土からは江戸時代以前の遺物は出土しなかったことから新しい時期の遺構であると考え。盛土状遺構に関しては、検出された位置関係から、和歌山城三の丸に位置する東外堀の土塁の可能性も考えられる。盛土状遺構が土塁であるとする、大規模な落ち込みに関しては、遺物の時期なども踏まえると東外堀の可能性も想定できる。第1区に関しては、土塁が存在していたとしてもすでに削平を受け、残存していないものと考え。

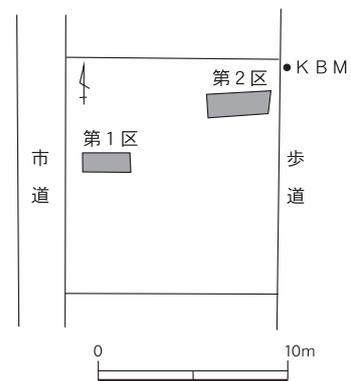
確認調査の結果、現地表面から140～230cmほど削平を受けているものの、推定される外堀に近い部分ではわずかに土塁の可能性のある盛土が残存していた状況が確認できた。「安政二年和歌山城下町絵図」においても石垣の表現が認められないことから、土塁が構築されていた可能性が想定できる。今後、外堀の推定ライン上の開発時には土塁の存在に関して注意をする必要がある。（大木）



第1図 位置図

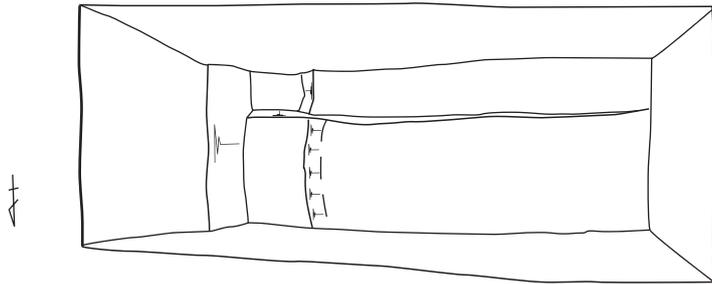
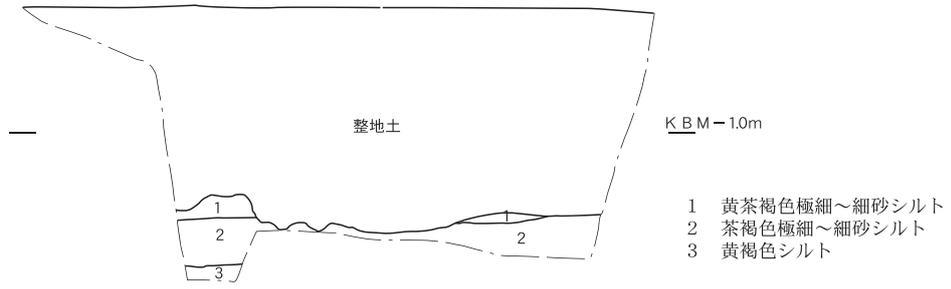


第2図 調査対象地

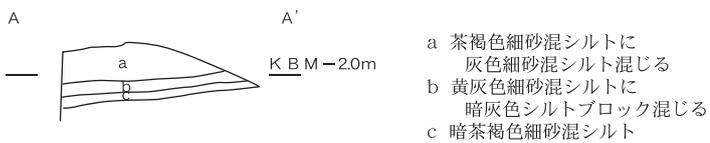
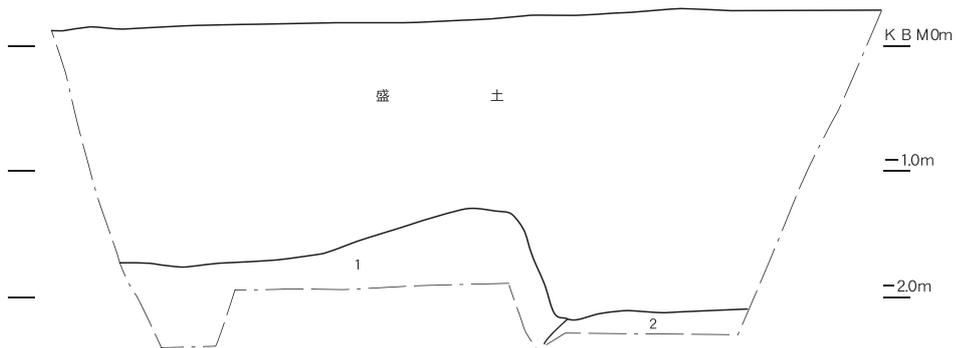
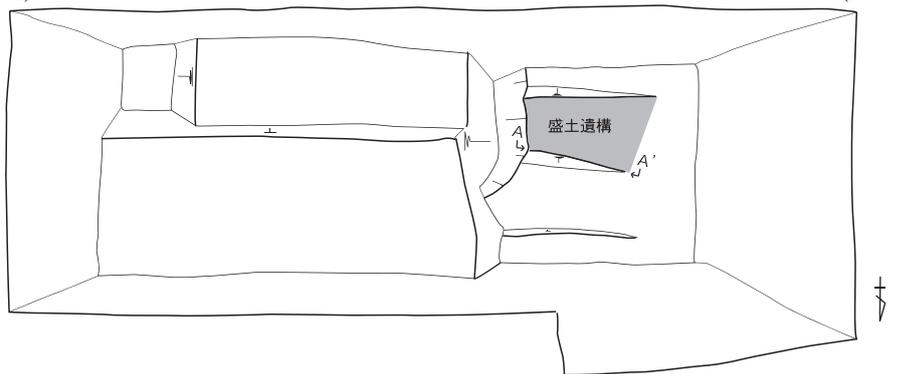


第3図 調査区位置図

第1区



第2区



第4図 調査区平・断面図 (S=1/60)

⑥岩橋高柳遺跡第3次確認調査（調査一覧14）

〔経緯〕事務所建設に伴う事前の確認調査

〔場所〕和歌山市岩橋309-1、309-2、312-1、312-3

〔面積〕31.05㎡

〔概要〕岩橋高柳遺跡（遺跡番号427）は、紀ノ川南岸の沖積低地に立地する。遺跡は南北約250m、東西約250mの規模をもつ（第1・2図）。岩橋高柳遺跡では県道井ノ口秋月線道路改良工事に伴い和歌山県文化財センターにより発掘調査が実施されている。調査では、弥生時代・飛鳥時代～江戸時代の各時期の遺構が確認されており、特に室町時代には伝・岩橋城跡のものと考えられる堀状遺構が検出されている。

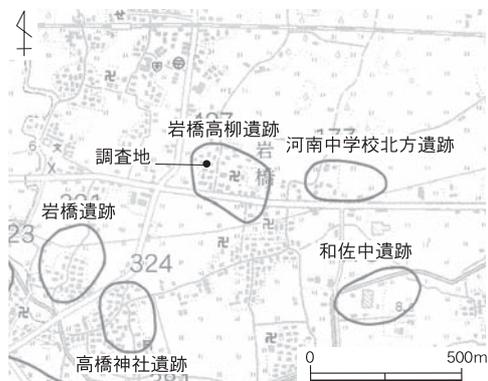
今回の調査地は、和歌山県文化財センターが実施した発掘調査1-2区の北側に位置する場所において、事務所建設が計画されたことから、工事に先立ち、遺跡の内容確認のために調査を実施することになった。

現地表面下約20cmが畑耕作土（第1層）で、その下にその床土と考えられる約10cmの黄褐色シルト混細砂（第2層）、それ以下はオリーブ褐色細砂混シルト（第3層）が堆積する。

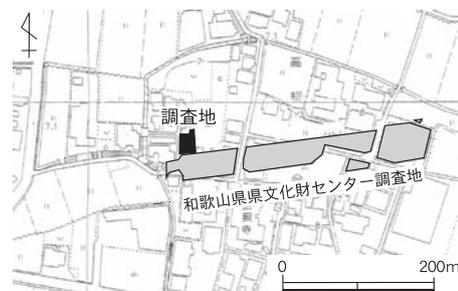
第3層以下は遺物を含まず、和歌山県文化財センターの調査で確認された遺構検出面に対応するものと考えられる。

すべての調査区の第3層上面において、井戸、溝、土坑、ピット等の遺構を検出した。埋土から出土した土器は、江戸時代後期のものがほとんどで、中世以前にさかのぼる遺物は確認できなかった。和歌山県文化財センターの調査成果でも、大半が18世紀のもので17世紀と判断できる遺構はないと報告されており、今回の調査成果とも一致する。

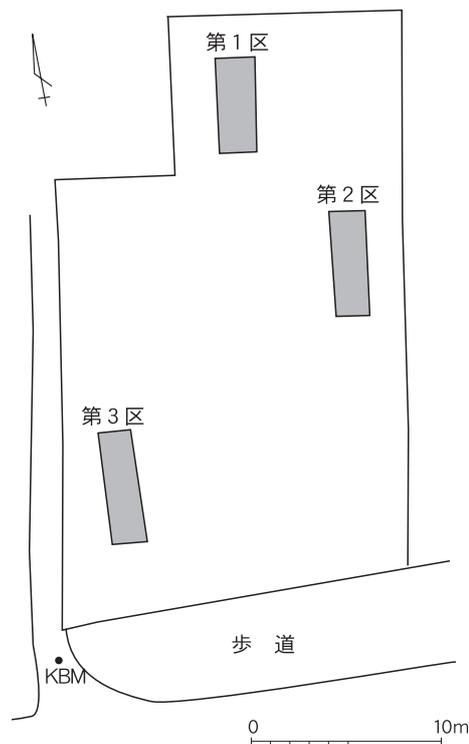
確認調査の結果、第3層上面において江戸時代の後期の遺構を検出した。中世以前の遺構・遺物はなく、対象地周辺に中世以前の遺構が展開している可能性は低いものとする。（大木）



第1図 位置図

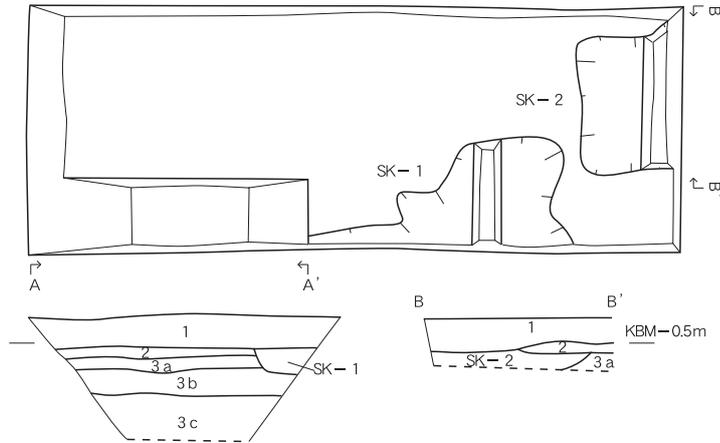


第2図 調査対象地

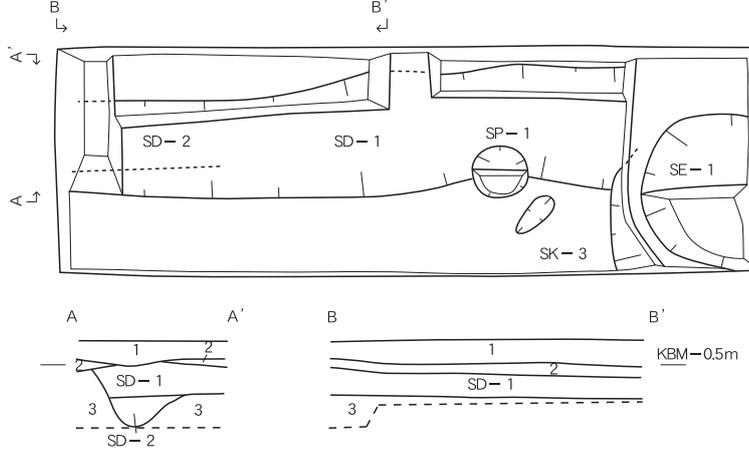


第3図 調査区位置図

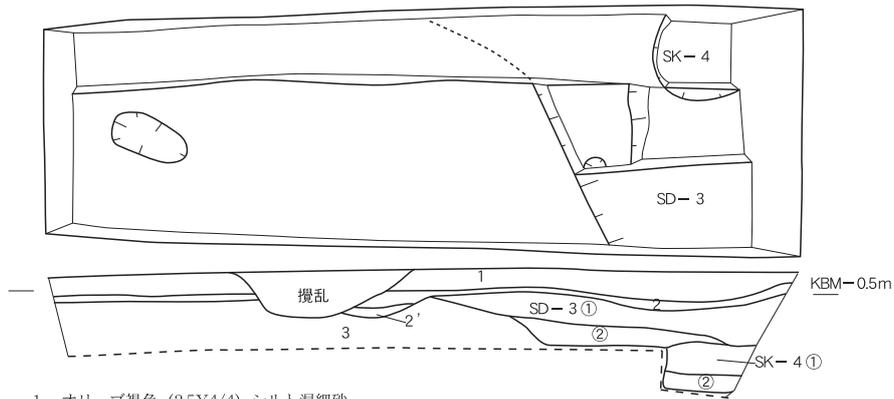
第1区



第2区



第3区



- 1 オリーブ褐色 (2.5Y4/4) シルト混細砂
- 2 黄褐色 (2.5Y5/4) シルト混細砂
- 3 a オリーブ褐色 (2.5Y4/6) 細砂混シルト
- 3 b オリーブ褐色 (2.5Y4/6) 砂質シルト
(マンガン痕少量含む)
- 3 c オリーブ褐色 (2.5Y4/6) 砂質シルト
- SK-1 黄褐色 (2.5Y5/3) 細～中砂 (わずかにシルト混じる)
- SK-2 黄褐色 (2.5Y5/3) 細～中砂 (わずかにシルト混じる)
- SD-1 黄褐色 (2.5Y5/3) 細～中砂 (わずかにシルト混じる)
- SD-2 黄褐色 (2.5Y5/3) 細～中砂 (わずかにシルト混じる)
- SD-3 ① オリーブ褐色 (2.5Y4/6) シルト混細砂～中砂
- ② オリーブ褐色 (2.5Y4/6) 細砂混シルト
- SK-4 ① オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 細砂混シルト
- ② 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 細砂混シルト



第4図 調査区平・断面図 (S=1/60)

⑦岩橋遺跡第6次確認調査（調査一覧16）

〔経緯〕 宅地造成に伴う事前確認調査

〔場所〕 和歌山市岩橋1012番の一部、

1015番、1016番、1017番、1021番

〔面積〕 64.66㎡

〔概要〕 岩橋遺跡（遺跡番号321）は、紀ノ川南岸の下流域に立地し、花山古墳群が存在する花山丘陵の東に位置する。南北約250m、東西約200mで遺物散布地として知られる。遺跡の北端で宅地造成が計画されたことから、遺跡の内容確認のために調査を実施した。その結果、西側を除く道路部分が記録保存の調査対象となった（第7次）。

調査地の現況は水田であった。水準は、対象地北東の道路鉤を基準として、基準との比高差で示した。調査地周辺の標高は6m前後である。調査区の基本層序は、第1層 黒褐色細砂混シルト（耕作土）、第2層 黄褐色シルト混細砂（床土）、第3層 オリーブ褐～暗灰黄シルト混細砂、第4層 灰黄褐色シルト混細砂、

第5・6層 褐灰色シルト混細砂（中世以前の遺物包含層）、第7層 オリーブ褐～黄褐色細砂、第8層 黄褐～灰黄褐色細砂（地山）、第9層 浅黄～黄褐色微砂、第10層 暗青灰色粘土である。

第1層から第4層は、全ての調査区で共通する。第3・4層は、中世以降の遺物包含層であり、第4層下面が遺構面となる。中央の第3区と、東側の第7区では、第4層直下で比較的安定した地盤である第9層を検出した。第5層は、中央以外で、第4層直下に存在し、上面には酸化マンガンが沈着する。南側では、第5層直下に少量の遺物を含む第6層が存在し、南に向かって緩やかに落ち込む。また南西の第5区では、第6層の下にグライ化した青灰色粘土層である第10層が存在する。このため、中央から南西に向かって微低地となる旧地形が復元できる。第7・8層は対象地の北側で、第5層下に存在する砂質の堆積層で、遺物を含まない。旧流路の堆積の影響が考えられる。

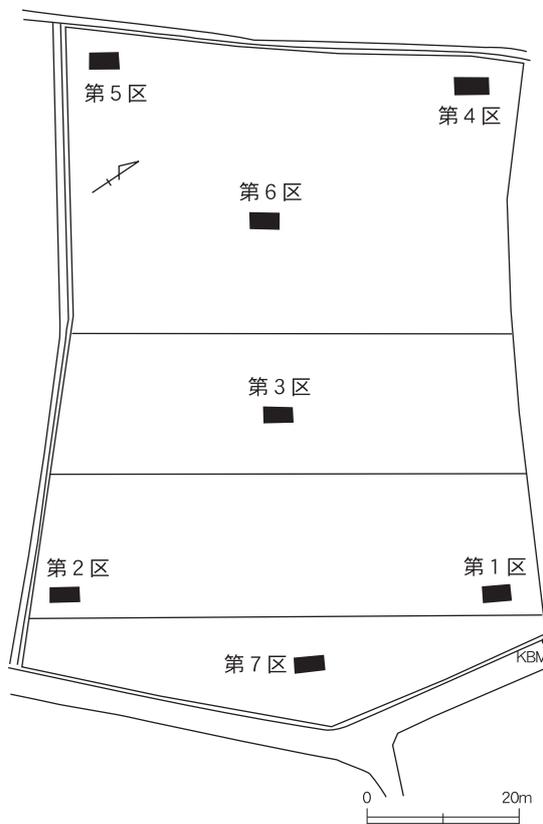
検出した遺構は、溝5条と土坑1基であり、いずれも中世以前の可能性がある。



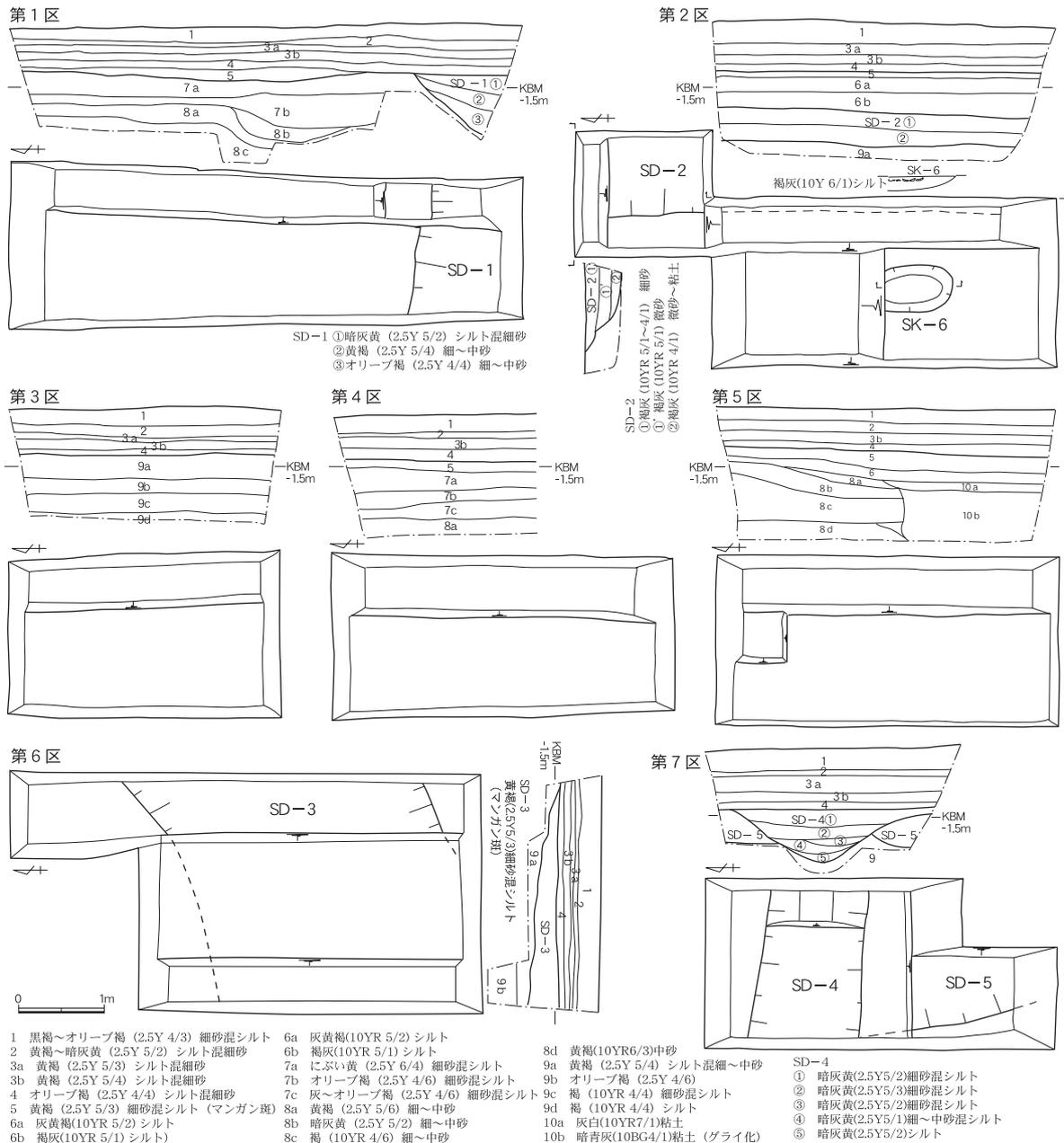
第1図 位置図



第2図 調査対象地



第3図 調査区位置図



第4図 調査区平面図・土層図 (S=1/80)

第1区南端で東西方向の溝SD-1の北肩を検出した。検出面での幅1m以上、深さ0.6mである。第2区東端で、南北方向の溝SD-2と、土坑SK-1を検出した。SD-2は幅1m以上、深さ0.4m以上である。SK-1は長さ0.8m、幅0.5m、深さ0.16mの浅い土坑で、土師質鍋の破片がまとまって出土した。第6区では、北東から南西方向の浅く幅広い溝SD-3を検出した。幅3m、深さ0.3m以上である。第7区では、南北方向の溝SD-5とそれに重複する東西方向の溝SD-4を検出した。SD-4は幅約2m、深さ0.6mであり、SD-5は幅2m以上、深さ0.4m以上である。

出土遺物は、第1~3・6・7区の遺物包含層と遺構から、土師器小片多数と瓦器小片が出土した。南東の第2区では特に遺物量が多く、西側の第4・5区ではほとんど遺物が出土しなかった。

調査の結果、第4層直下で中世の可能性がある溝5条を検出した。対象地の西側では遺構・遺物とも減少することから、遺構の分布は南東方向の現集落が立地する微高地に向けて広がると考えられる。(富永)

⑧太田・黒田遺跡立会調査（調査一覧8）

〔経緯〕事務所建設に伴う事前確認調査

〔場所〕和歌山市黒田26番1、165番1他

〔面積〕28.10㎡

〔概要〕太田・黒田遺跡（遺跡番号327）は、紀ノ川南岸の沖積平野に広がる、東西約0.4km、南北約0.9kmの弥生時代～江戸時代にかけての複合遺跡である。今回の調査は、遺跡の東部において事務所建設が計画されたことから、基礎掘削工事に伴い遺跡の内容を記録するための立会調査を実施した（第1・2図）。

過去の調査においては、本調査地の西側で行われた太田・黒田遺跡第48次・第51次調査（財団法人和歌山市文化体育振興事業団）では、弥生時代前期の環壕や中期の竪穴建物、古墳時代の竪穴建物や大溝をはじめとする弥生時代～中世にかけての遺構群を検出している。太田・黒田遺跡周辺では、半径約1kmの範囲内には井辺遺跡、神前遺跡、神前Ⅱ遺跡、秋月遺跡、太田城跡、鳴神遺跡群、津秦遺跡など弥生時代から古墳時代を中心とした時期の遺跡が集中している。また、東から南側にかけての丘陵上には花山古墳群や岩橋千塚古墳群、井辺前山古墳群などが位置しており、太田・黒田遺跡の周辺は県内でも最も遺跡が密集している地域である。

対象地は約731.35㎡の北側に張り出しを持つ台形であり、建物基礎設置部分に第1～8区の調査区を設定した（第3図）。

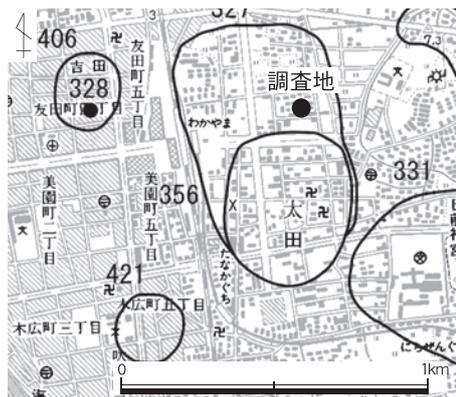
調査地の現状は宅地であり、盛土および近現代の耕作土までを機械掘削し、以下は機械掘削後人力による精査を行い、遺構や遺物の有無を確認した。土層堆積状況や遺構の検出状況については写真撮影、実測図を作成した。図面による記録は、平面図に関しては調査地と隣地とを区画する隣地境界線を、断面図に関しては調査地に南面する道路にあるマンホールをKBM0.0mとして実測を行った（第3図）。壁面土層断面図と遺構平面図につ

いては1/20の縮尺を用いて、手測りによる実測を行った。また、土層の色調観察は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖2006年版』を用いた。

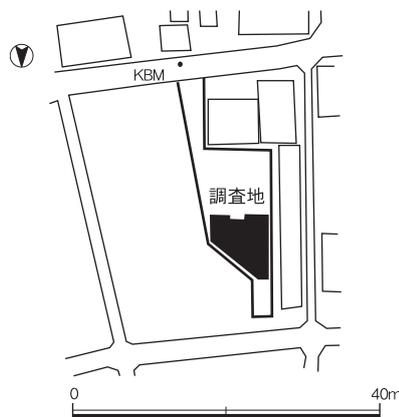
本調査地の基本層序は以下の通りである（第4図）。

第0層；近現代の耕作土である。なお、第3区および第5区では0層とグライ化した0-2層とに細分される。

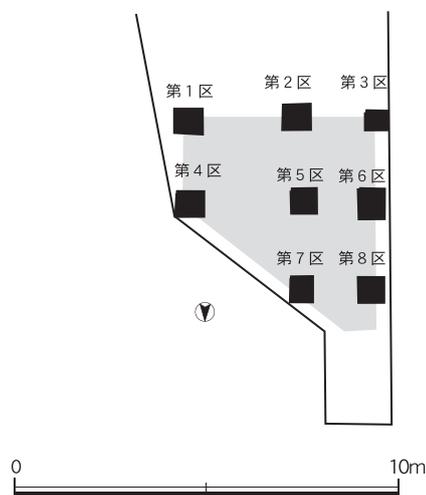
第1層；層厚10cm以上の暗灰黄色砂質土からなる。ごく僅かに土器を含んでいることから希薄な遺



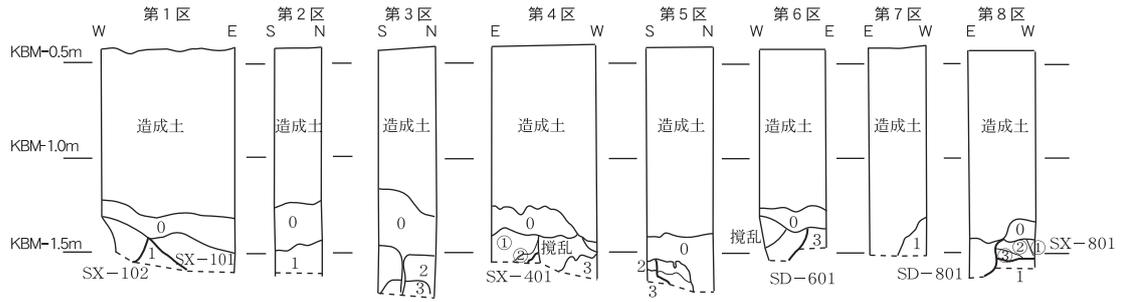
第1図 位置図



第2図 調査対象地



第3図 調査区配置図



- 0: 近現代耕作土。(0-1層)
 1: 暗灰黄 (2.5Y4/2) 極細粒砂質シルト ややシルトが強く、ごく弱く暗色化している。炭化物を含む。(1層)
 2: 暗緑灰 (7.5GY4/1) 極細粒砂混じりシルト グライ化している。(0-2層)
 3: 暗灰黄 (2.5Y5/2) 細～極細粒砂質シルト ややシルトが強い。(1'層)

SX-101: 暗オリーブ褐 (2.5Y3/3) 極細粒砂混じりシルト やや暗色化している。土器・炭化物を含む。

SX-102: 暗灰黄 (2.5Y5/2) 極細粒砂混じりシルト

SX-401

① 暗灰黄 (2.5Y5/2) 極細粒砂混じり粘土質シルト

② 暗灰黄 (2.5Y4/2) 極細粒砂混じり粘土質シルト やや砂質が強い。

③ 暗オリーブ褐 (2.5Y3/3) 極細粒砂混じりシルト

SX-501

① 黄灰 (2.5Y4/1) 極細粒砂混じりシルト

② 暗褐 (10YR3/3) 極細粒砂混じりシルト 弱く暗色化している。

SD-601: オリーブ褐 (2.5Y4/3) 極細粒砂混じりシルト やや砂質が強く、ごく弱く暗色化している。

小偽礫を含む。土器を含む。

SD-801: 灰黄褐 (10YR4/2) 極細粒砂混じりシルト

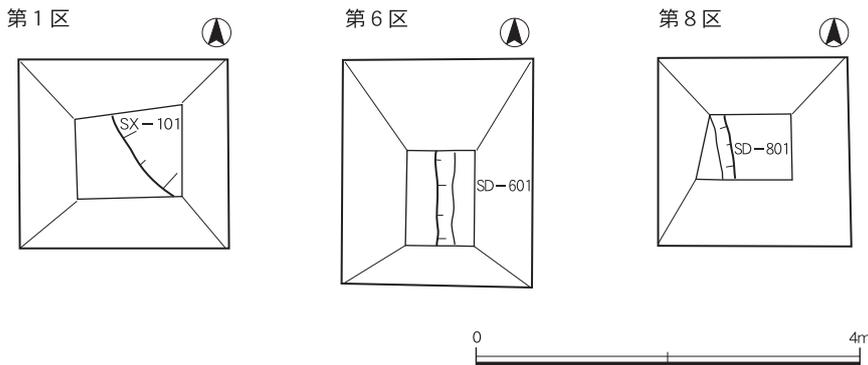
SX-801

①にぶい黄褐 (10YR4/3) 極細粒砂混じり粘土質シルト

②にぶい黄褐 (10YR5/3) シルト 大中偽礫を多く含む。

③オリーブ褐 (2.5Y4/4) 極細粒砂混じり粘土質シルト 砂質が強く、小偽礫を含む。

第4図 調査区土層図 (縦S=1/40 横S=1/80)



第5図 調査区平面図 (S=1/80)

物包含層と考えられる。

遺物の出土はごく少量であったが、第1層上面において古墳時代～中世の落ち込みや溝を確認した(第5図)。

このうち、第1区のSX-102および第4区のSX-401、第5区のSX-501、第8区のSX-801は壁断面でのみの確認であったが、第1区のSX-101および第6区のSD-601、第8区のSD-801は平面でも検出することができた。SX-101およびSD-601を除き、遺構からの遺物の出土はなく、包含層からの遺物の出土もほとんどなかったため、各遺構の時期は不明である。なお、第5区で出土した複合口縁壺の小片は第5区西壁の手前で出土しており、遺物包含層からの出土もしくはSX-501からの出土と考えられる。(清水)

【参考文献】

『太田・黒田遺跡第48次発掘調査概報』2002 財団法人和歌山市文化体育振興事業団

『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報8 16太田・黒田遺跡第51次発掘調査』2004 和歌山市教育委員会 財団法人和歌山市文化体育振興事業団

⑨井ノ口遺跡第2次確認調査（調査一覧22）

〔経緯〕 事務所建設に伴う事前確認調査

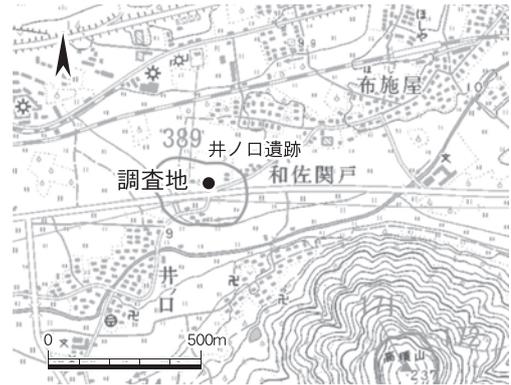
〔場所〕 和歌山市和佐関戸118番5ほか

〔面積〕 26.86㎡

〔概要〕 井ノ口遺跡（遺跡番号389）は、紀ノ川南岸の下流域に立地し、高積山の北西に位置する。これまでに立会調査、確認調査を行っているが、遺構は確認できていない。今回は、遺跡の中央で赤十字血液センター建設が計画されたことから、工事に先立ち、遺跡の内容確認のために調査を実施した。

盛土下の第1層から第3層は、すべての調査区で共通する。第3層は比較的安定したシルト層であるが、第4層あるいは第5層以下は砂礫層となる。地点により砂礫の粒径・様相が異なるが、いずれも旧河道の堆積と考えられる。第3層上面が比較的安定しており、遺構面となる可能性があるが遺構は確認できなかった。遺物は出土しなかった。

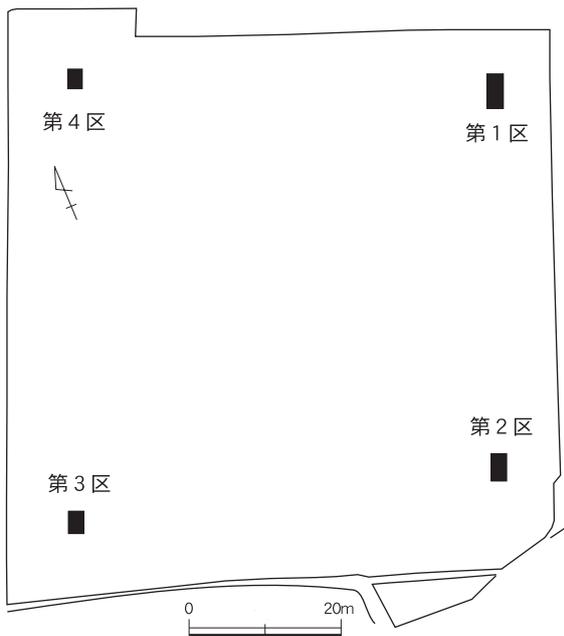
調査の結果、対象地周辺で遺構が展開する可能性は低い。対象地の南の第1次調査時には、土器細片が出土し、旧河道の堆積が確認された。周辺の地形から、北東から南に斜行し、湾曲して南から北西に向かう旧河道が想定された。しかし今回対象地でも旧河道の堆積が確認されたことから、遺跡の中心はさらに北側となる可能性がある。（富永）



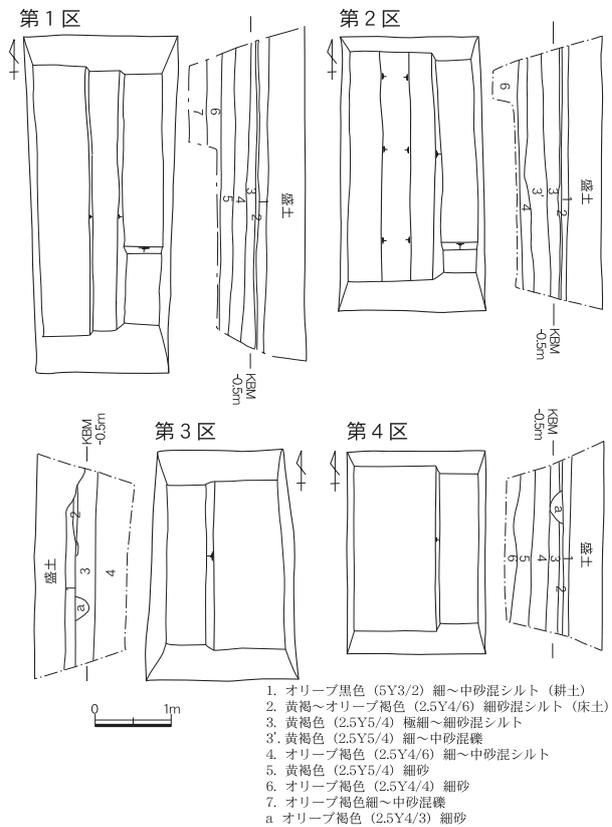
第1図 位置図



第2図 調査対象地



第3図 調査区位置図



第4図 調査区平面図・土層図 (S=1/100)

1. オリーブ黒色 (5Y3/2) 細～中砂混シルト (耕土)
2. 黄褐～オリーブ褐色 (2.5Y4/6) 細砂混シルト (床土)
3. 黄褐色 (2.5Y5/4) 極細～細砂混シルト
- 3'. 黄褐色 (2.5Y5/4) 細～中砂混礫
4. オリーブ褐色 (2.5Y4/6) 細～中砂混シルト
5. 黄褐色 (2.5Y5/4) 細砂
6. オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 細砂
7. オリーブ褐色細～中砂混礫
- a. オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 細砂

⑩井辺遺跡第21次確認調査（調査一覧23）

〔経緯〕 宅地造成に伴う事前確認調査

〔場所〕 和歌山市井辺203番地2の一部

〔面積〕 30.60㎡

〔概要〕 井辺遺跡（遺跡番号308）は、紀ノ川南岸の下流域に立地し、井辺前山古墳群が存在する福飯ヶ峯の北西に位置する。遺跡の範囲は、北東から南西に約1300m、北西から南東に約550mである。これまで、県関係で県道建設に伴う発掘調査が行われたほか、市関係で20次の発掘調査が行われ、特に古墳時代前期を中心とした遺構が発見された。今回は、遺跡の北東部で宅地造成が計画されたことから、遺跡の内容確認のために調査を実施した。その結果、道路及び擁壁部分が記録保存の調査対象となった（第22次）。

調査地の現況は水田であった。水準は、対象地北の道路縁を基準とし、基準との比高差で示した。調査区の基本層序は、第1層 暗灰黄色細砂混シルト（耕作土）、第2層 黄褐色細砂混シルト（床土）、第3層 暗灰黄色細砂混シルト

、第4層 暗灰黄色細砂混シルト（弥生～古墳時代の遺物包含層）、第5層 黄褐色シルト（地山）である。遺構は、現地表面から0.4～0.5m

下の第5層上面で検出した。検出した遺構は溝5条とピット4基であり、弥生～古墳時代前期の可能性

がある。

南東の第1区では溝1条（SD-1）を検出した。SD-1は南北方向、幅2m以上、深さ0.35mで、上層から土師器甕・壺・高杯の破片多数が出土した。第2区では、浅い小溝1条（SD-2）とピット1基を検出した。第3区では、ピット3基を検出した。調査地北東端の第4区では、南北方向の溝1条（SD-3）を検出した。SD-3は南北方向、幅1m以上、深さ0.5mで、上層から土師器細片が多数出土した。SD-3はその南に位置する第1区SD-1と、様相が似るため、同種の溝の可能性

がある。第5区では、重複する浅い溝2条（SD-4・SD-5）を検出した。SD-4は北西から南東方向に斜行し幅1.3m以上、深さ0.15mである。SD-5は南北方向で、南側にSD-4が重複する。

すべての調査区の遺物包含層から土師器小片が出土しており、出土量は南端の第1区が最も多く、その他の調査区では減少する。

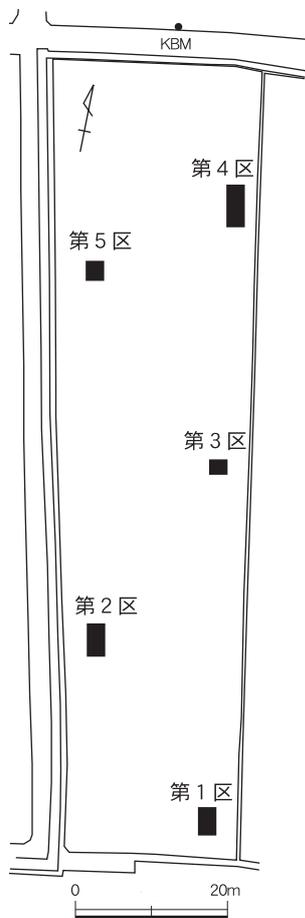
調査の結果、調査地のほぼ全域にわたって、弥生～古墳時代前期の可能性のある遺構を検出した。遺物包含層からも全域にわたって遺物が出土した。また調査地南東端のSD-1からは、多量の土器片が出



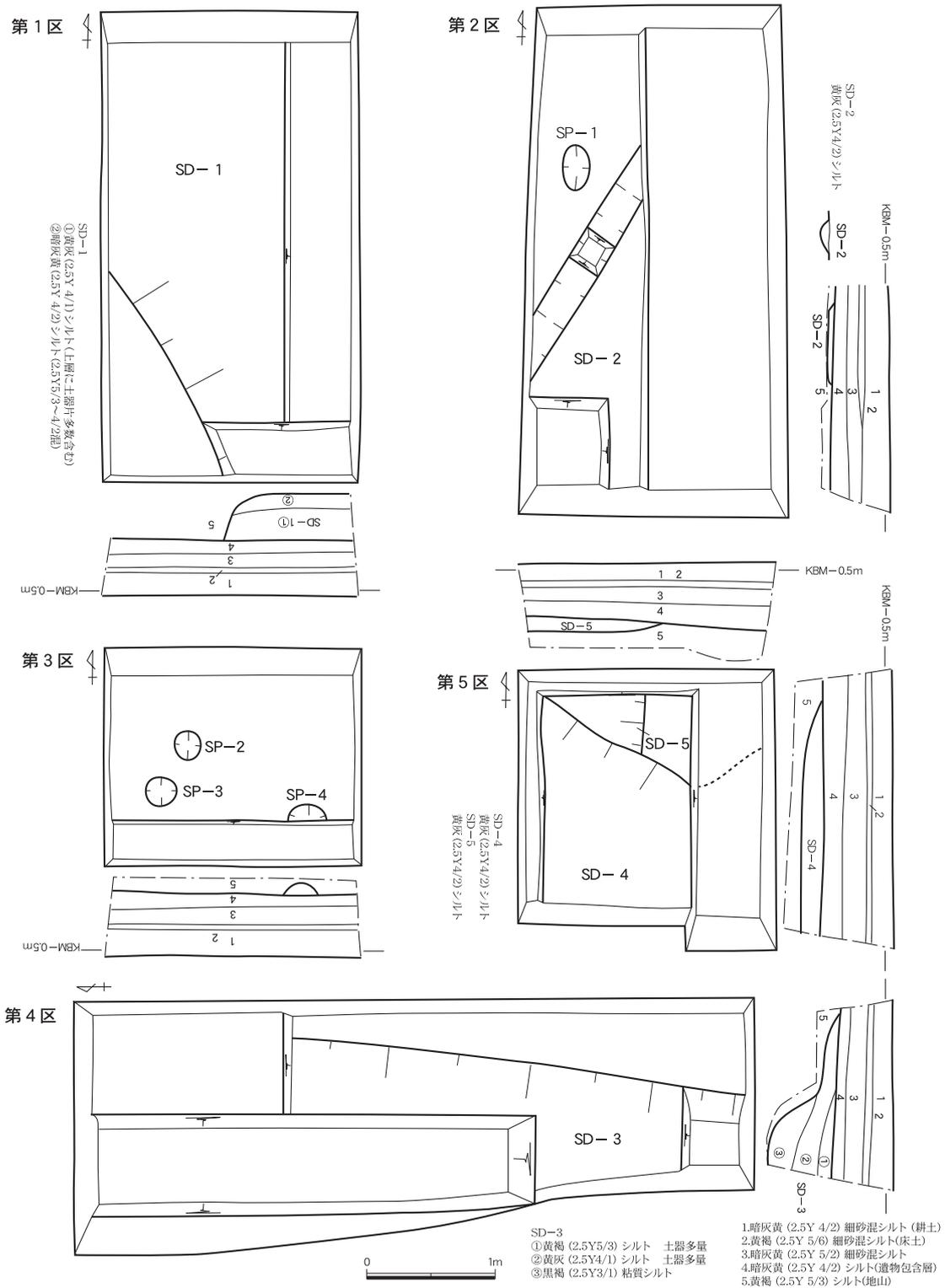
第1図 位置図



第2図 調査対象地



第3図 調査区位置図



第4図 調査区平面図・土層図 (S=1/50)

土した。今回調査地の南西の井辺遺跡第6次・第7次調査では、弥生時代後期の竪穴建物、井戸、弥生時代末～古墳時代初頭の南北方向の溝2条、竪穴建物6棟などが検出された。このことから、同時期の集落の中心は、今回調査地の南側から調査区外の南西にかけての範囲に存在すると想定できる。今回調査地は、居住域の縁辺にあると想定できる。(富永)

①津秦Ⅱ遺跡第5・7・8次試掘調査（調査一覧26・144）

〔経緯〕市道建設に伴う範囲確認調査

〔場所〕和歌山市津秦地内

〔面積〕118.3㎡

〔概要〕津秦Ⅱ遺跡（遺跡番号407）は、井辺遺跡の北西に位置し、遺跡の範囲は東西約300m、南北約350mで遺物散布地として知られている（第1図）。

今回の調査は市道松島本渡線建設に伴う津秦Ⅱ遺跡、井辺遺跡の確認調査の結果、遺跡外まで遺跡が展開している可能性が想定されたため、遺跡の範囲を確認するために実施した（第2図）。

対象地の基本層序は第5次調査第1～6区（対象地北側）と第7・8次調査区（対象地南側）で異なるため分けて記載する。

〔対象地北側〕

第1層が近現代の耕作土である黒褐色～暗灰黄色細砂混シルト、第2層が近世の暗灰黄色～浅黄色細砂混シルト、第3層が中世の暗灰黄色、灰黄色、灰白色細砂混シルトでそれ以下が黄褐色～浅黄色シルトで試掘調査の範囲では遺物は確認できなかった。

〔対象地南側〕

現地表面下約16cmが近現代の耕作土で、その下に約10cmの褐色細砂混シルト（第2層）、約10cmの黄灰色細砂混シルト（第3層）、約10cmの黄褐色細砂混シルト（第4層）、約22cmの暗灰黄色シルト（第5層）、約20cmの灰黄色シルト（第6層）、約14cmの暗灰色シルト（第7層）で、それ以下は黄灰色シルト混細砂が堆積する。第5・6層は周辺の調査成果から古代から中世の耕作土、第7層は古墳時代の遺物包含層、第8層以下が無遺物層になると考えられる。

遺構は対象地北側の調査区では第4層上面、対象地南側の調査区では第7層上面で遺構を確認している。以下では、対象地北側と南側に分けて記載する。

〔対象地北側〕

第1・5・6区で中世以前の溝、ピットを検出した。第5区のSD-1は、幅1.3m、検出面からの深さ0.2mで東西方向の溝である。この溝を境に、北側が一段高くなるため、地割を区画する溝の可能性がある。そのほかの溝は、東西方向または南北方向に直交する浅い溝で、幅0.2～0.4m、深さ0.15～0.2mである。いずれも溝からの出土遺物はないため、時期は確定できないが、中世の可能性が高い。また第5区では第4層上面で須恵器片が出土しており、同一面あるいは少し下面で古墳時代から古代の遺構が展開する可能性もある。第11区ではピット4基を検出したほか、噴砂を確認した。

〔対象地南側〕

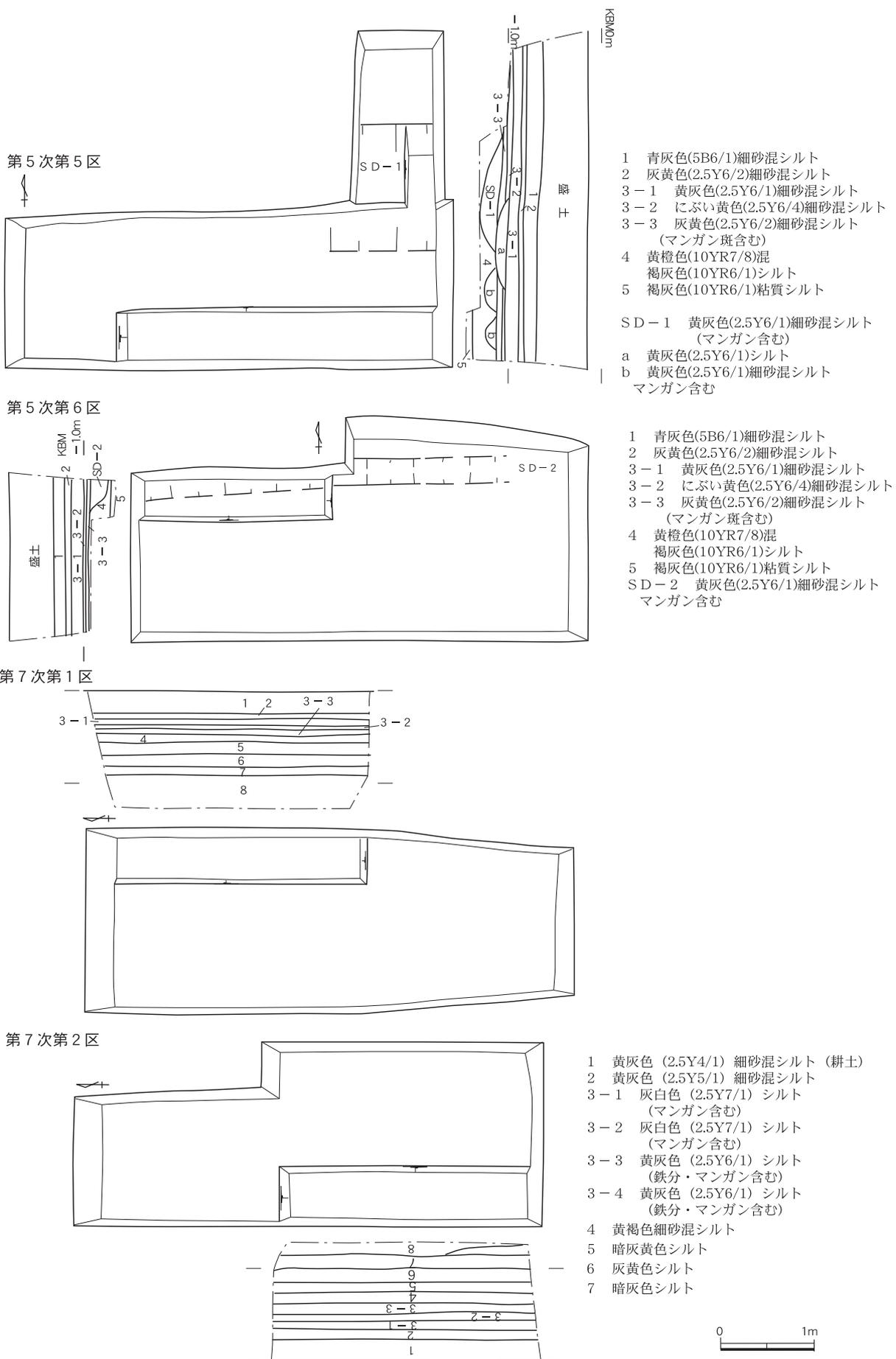
遺構は第8次調査第1区第7層上面で溝1条（SD-1）、第8層上面で自然流路1条、第8次調



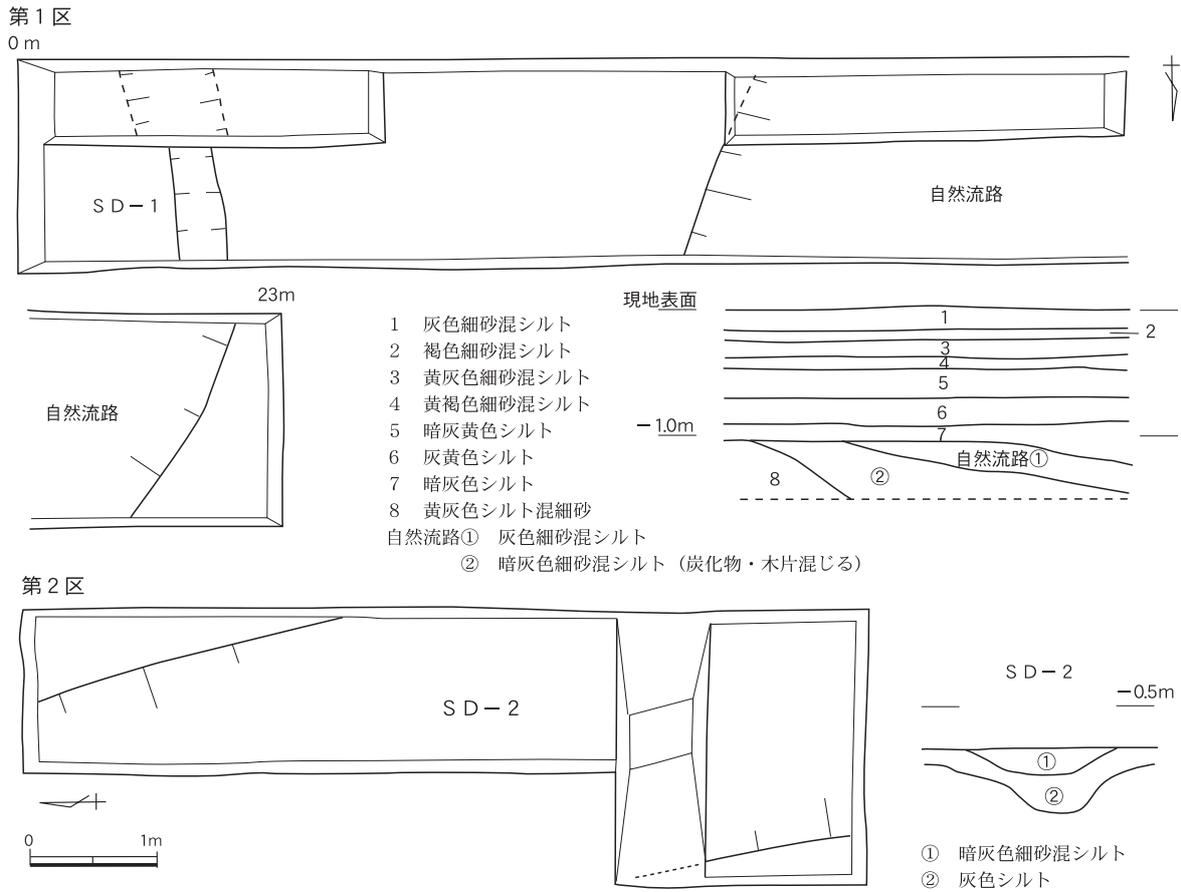
第1図 位置図



第2図 調査対象地



第4図 第5次調査第5～6区、第7次調査第1・2区調査区平・断面図 (S=1/60)



第5図 第8次調査区平・断面図 (S=1/60)

査第2区第8層上面で溝1条 (SD-2) を確認した (第4図)。SD-2 は第8層上面で検出したが、溝の方向や位置関係がSD-1 とほぼ同一であった。湧水が激しく、精査が十分できなかったこともあり、検出面を誤認している可能性もある。そのため、SD-1 とSD-2 は本来同一の溝であった可能性もある。自然流路は幅約16mで埋土からはタタキ甕の破片が出土した。

確認調査の結果、対象地北側の調査区で微高地を中心に中世の遺構を検出した。対象地北側の状況は津秦Ⅱ遺跡の調査成果とも類似している。対象地南側に関しては、微低地が展開しており、第9次調査区で古墳時代前期とみられる水路 (SD-1・2) を検出した。そのため、対象地南側の微低地の周辺に当該期の生産域が展開している可能性が想定される。(大木)

⑫井辺遺跡第26次確認調査・第29次試掘調査（調査一覧26・144）

〔経緯〕市道建設に伴う事前確認調査・範囲確認調査

〔場所〕和歌山市津秦地内

〔面積〕19.6㎡

〔概要〕井辺遺跡（遺跡番号308）は、紀ノ川南岸の標高3.0m前後の沖積低地に位置する。東西約1.2km、南北500mの規模をもつ弥生時代から古墳時代を中心とする遺物散布地として周知されている。今回は松島本渡線建設に伴う遺跡内容の確認調査（第26次調査）と平成24年度に実施した第23次調査の結果、井辺遺跡の範囲外まで遺跡が展開している可能性が高まったため、遺跡範囲を確認するための調査（第29次調査）を実施した（第1～3図）。

調査地の基本層序は第26次調査地と第29次調査で異なるため分けて記載する

〔第26次調査〕

第1層が近現代耕作土、第2層がその床土、第3層が灰白色シルト、第4層が鉄分・マンガンを含む黄灰色シルト、第5層が黄灰色シルト、第6層が黄灰色シルト～微砂で無遺物層となる。

〔第29次調査〕

第1層が近現代の耕作土、第2層が灰オリーブ色細砂混シルト、第3層が灰オリーブ色シルト、第4層が鉄分が混じる灰オリーブ色細砂混シルト、第5層が灰オリーブ色シルト（第5層）、第6層がやや暗色化した暗オリーブ色シルト、それ以下は灰オリーブ色細砂混シルト（第7層）が堆積する。

第6層は土師器小片を含む遺物包含層で、それ以下は無遺物層となる。

遺構は第26次調査区の第5層上面と第29次調査区の第6層上面と第7層上面で確認した。

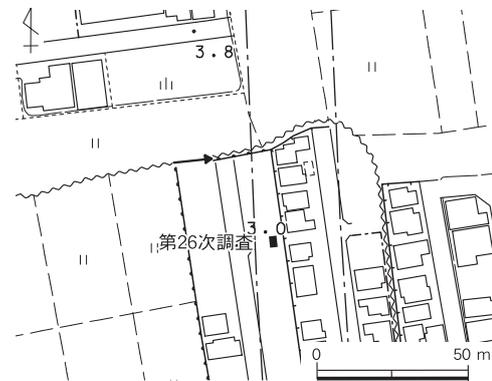
第26次調査区では中世以前の溝1条を検出した。SD-1は幅1.2m、深さ0.25mである。溝からの出土遺物がないため、時期は確定できないが、既往の調査では周辺で古墳時代の遺構が展開しており、古墳時代の遺構の可能性も考えられる。

第29次調査では第6層上面でピット1基、第7層上面で幅約0.5m、深さ0.2mの溝1条を検出した。取り上げなかったため詳細は不明であるが、溝には庄内式併行期と考えられる完形に近い土器が含まれている。

第26次調査の結果、第19次確認調査で確認した遺構がさらに南側にも展開している状況を確認し、第29次調査の結果では、井辺遺跡の範囲外にも遺構が展開している状況を確認した。（大木）



第1図 位置図

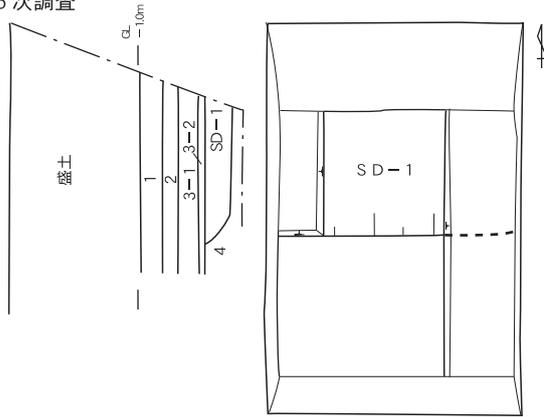


第2図 第26次調査対象地



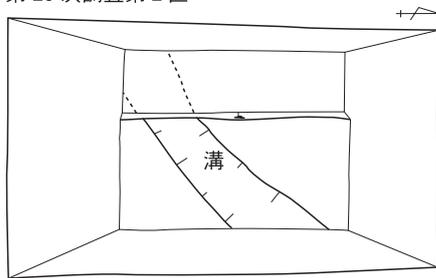
第3図 第29次調査対象地

第26次調査

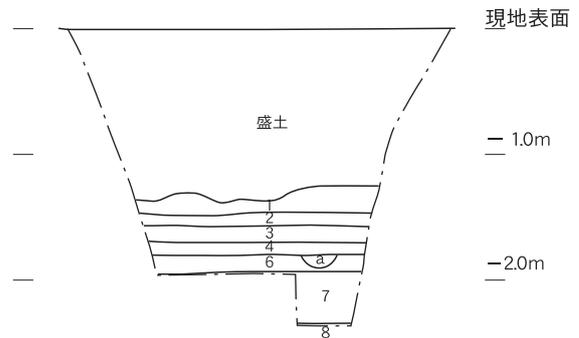
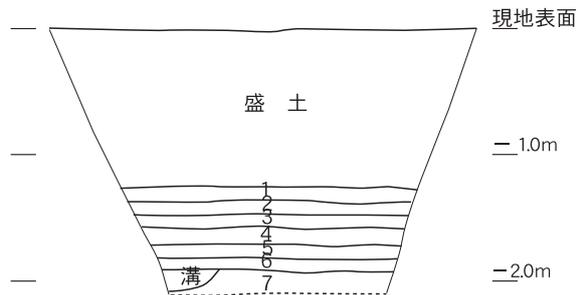
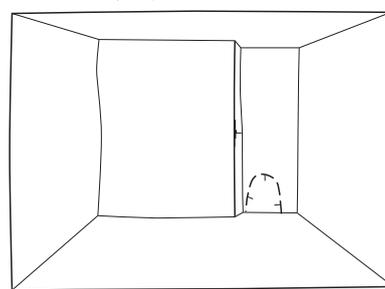


- 1 暗青色 (10BG4/1) シルト～中砂
- 2 浅黄色 (2.5Y7/3) 粘質シルト 黄色混
- 3-1 灰白色 (2.5Y7/1) 粘質シルト 明黄褐色混
- 3-2 黄灰色 (2.5Y6/1) 微砂
- 4 黄橙色 (10YR7/8) シルト～細砂
- a 黄灰色 (2.5Y6/1) 微砂 明黄褐色泥 (溝)

第29次調査第2区



第29次調査第1区



- 1 オリーブ黒色 (5Y3/1) 細砂混シルト
- 2 灰オリーブ色 (5Y4/2) 細砂混シルト
- 3 灰オリーブ色 (5Y5/2) シルト
- 4 灰オリーブ色 (5Y5/2) 細砂混シルト (鉄分混じる)
- 5 灰オリーブ色 (5Y5/2) シルト
- 6 暗オリーブ色 (5Y4/3) シルト
- 7 灰オリーブ色 (5Y4/2) 細砂混シルト
- 8 青灰色 (5B6/1) 微砂
- a 黄灰色 (5Y6/1) シルト
- 溝 灰色 (5Y5/1) シルト混細～中砂

第4図 第26次調査・第29次調査第1・2区平・断面図 (S=1/60)

⑬有功遺跡第8次確認調査（調査一覧30）

〔経緯〕 集合住宅建築に伴う事前確認調査

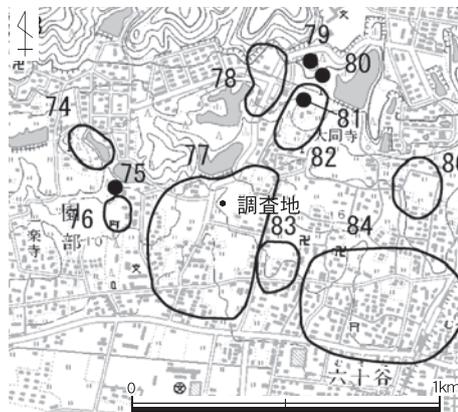
〔場所〕 和歌山市六十谷字天神前1100番

〔面積〕 10.00㎡

〔概要〕 有功遺跡（遺跡番号77）は、紀ノ川の北岸の台地上に展開する、東西約0.35km、南北約0.45kmの遺跡である。今回の調査は、遺跡の北東端部において集合住宅の建設が計画されたことから、工事に先立ち遺跡の内容を確認するための調査を実施した（第1・2図）。

過去の調査においては、本調査地の南東側で行われた調査（和歌山市教育委員会（第5次調査、第7次調査）、（財）和歌山市都市整備公社（第6次調査））や遺跡の南端で行われた調査（和歌山市教育委員会（第4次調査））では、掘立柱建物や土坑、溝をはじめとする平安時代から鎌倉時代にいたる遺構群を検出している。有功遺跡周辺では、半径約2kmの範囲内には古墳時代の倉庫群が確認されたことで著名な鳴滝遺跡をはじめ鳴滝古墳群や園部円山古墳、晒山古墳群、雨が谷古墳群などの古墳時代の遺跡群が、東側には弥生時代および鎌倉時代の遺構群が確認されている六十谷遺跡などがある。

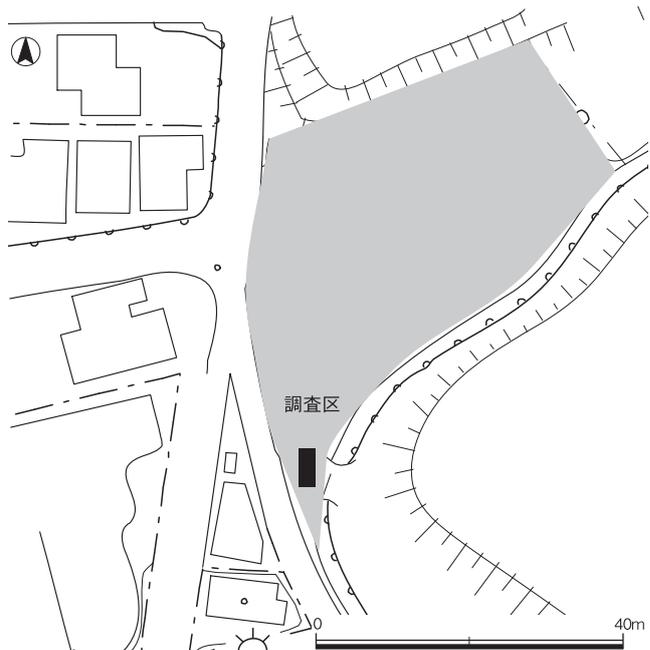
調査地の現況は雑種地であり、近現代～近世の耕作



第1図 位置図



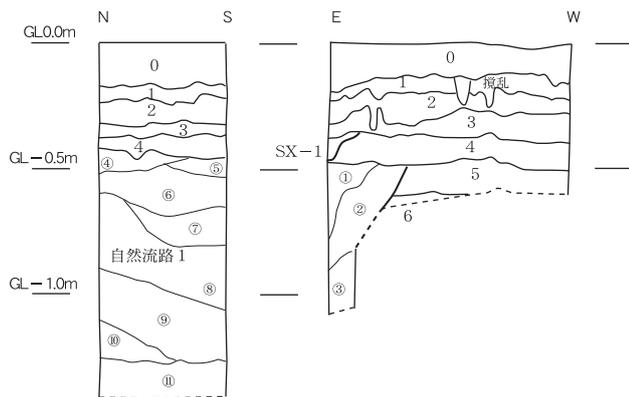
第2図 調査対象地



第3図 調査区配置図

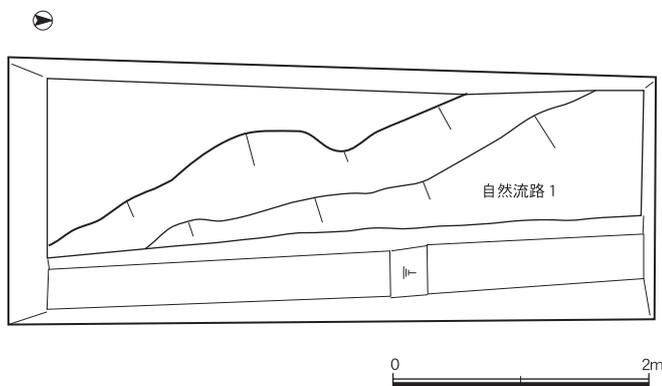
土まをを機械掘削とし、以下は機械掘削後人力による精査を行い遺構や遺物の有無を確認した。土層堆積状況や遺構の検出状況については写真撮影、実測図を作成した。

図面による記録は、平面図に関しては調査地と隣地とを区画する隣地境界線を、断面図に関しては調査地現地表面をGL0.0m（調査地に西面する市道＝GL-0.03m）として実測を行った。壁面土層断面図と遺構平面図については1/20の縮尺を用いて、手測りによる実測を行った。また、土層の色調観察は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖2006年



- 0: 暗灰黄 (2.5Y4/2) 細～極細粒砂混じりシルト
やや粘性が強い。近現代の耕作土。(0層)
- 1: 黄褐 (10YR5/6) 細～極細粒砂混じり粘土質シルト
鉄分が錆着。近現代耕作土(床土)。(1層)
- 2: 灰黄 (2.5Y6/2) 細粒砂混じりシルト
鉄分の錆着が著しい。やや淘汰が悪い。(2層)
- 3: 浅黄 (2.5Y7/4) 細～極細粒砂混じりシルト
ややシルトが強い。酸化鉄が錆着。(3層)
- 4: 灰黄 (2.5Y7/2) 中～細粒砂混じりシルト
酸化マンガン斑の沈着がみとめられる。(4層)
- 5: 灰黄 (2.5Y6/2) 細粒砂混じりシルト
中小偽礫を含む。(7層)
- 6: 黄灰 (2.5Y6/1) シルト
やや粘性が強い。(8層)
- 自然流路1
①灰白 (2.5Y7/1) 粘土混じり大礫～細粒砂
淘汰が悪い。
②灰黄 (2.5Y6/2) 細～極細粒砂質シルト
③灰黄 (2.5Y6/2) 細～極細粒砂混じり粘土
大小偽礫を含む。
④灰黄 (2.5Y7/2) 細～極細粒砂質シルト
⑤灰黄 (2.5Y6/2) 細～極細粒砂混じりシルト
⑥灰黄 (2.5Y7/2) 極細粒砂混じりシルト
やや淘汰が悪い。
⑦黄灰 (2.5Y6/1) 中～細粒砂混じりシルト
やや砂質が強く、淘汰が悪い。
⑧灰白 (2.5Y7/1) 細～極細粒砂混じり粘土
⑨にぶい黄 (2.5Y6/3) 細～極細粒砂質シルト
⑩黄灰 (2.5Y6/2) 極細粒砂混じりシルト
⑪灰 (10Y5/1) 極細粒砂混じりシルト
やや粘性が強く、砂質も強い。
- SX-1
: 灰白 (2.5Y8/2) 細粒砂混じりシルト
砂質が強い。極弱く、酸化鉄が錆着。
酸化マンガン斑がみとめられる。

第4図 調査区土層図 (縦 S=1/30 横 S=1/60)



第5図 調査区平面図 (S=1/60)

版』を用いた。

本調査地の基本層序は以下の通りである（第4図）。

第0層；近現代の耕作土である。

第1層；層厚約10cmで黄褐色土からなり、鉄分の錆着がみられる。近現代の耕作土の床土と考えられる。

第2層；層厚10～15cmの灰黄色土からなる。淘汰がやや悪く、鉄分の錆着が著しい。

第3層；層厚5～15cmの浅黄色土からなる。シルトがやや強く、鉄分の錆着がみとめられる。

第4層；層厚約10cmの灰黄色土からなり、酸化マンガン斑の沈着がみとめられる。

第5層；層厚約10cmの灰黄色土からなり、中小偽礫を含む。

第6層；層厚5cm以上の黄灰色土からなり、やや粘性が強い。

遺構に関しては、第4層上面で落ち込み（SX1）を、第5層上面で自然流路を確認した（第5図）。しかしながら遺物の出土が無く、明確な時期が確定できないだけでなく、いずれも明確な人為的な遺構であるとは考えにくいものであった。今回の調査および既存の有功遺跡の調査から、本調査地周辺までは埋蔵文化財は展開しないものと考えられる。（清水）

【参考文献】

『和歌山市内遺跡発掘調査概報（15）（27）有功遺跡』2012 和歌山市教育委員会

『有功遺跡第6次調査実績報告書』2011 財団法人和歌山市都市整備公社

⑭井辺遺跡第24次確認調査（調査一覧32）

〔経緯〕 店舗建設に伴う事前確認調査

〔場所〕 和歌山市井辺208-2、208-3、208-4（調査位置は（4）⑩第21次調査参照）

〔面積〕 7.60㎡

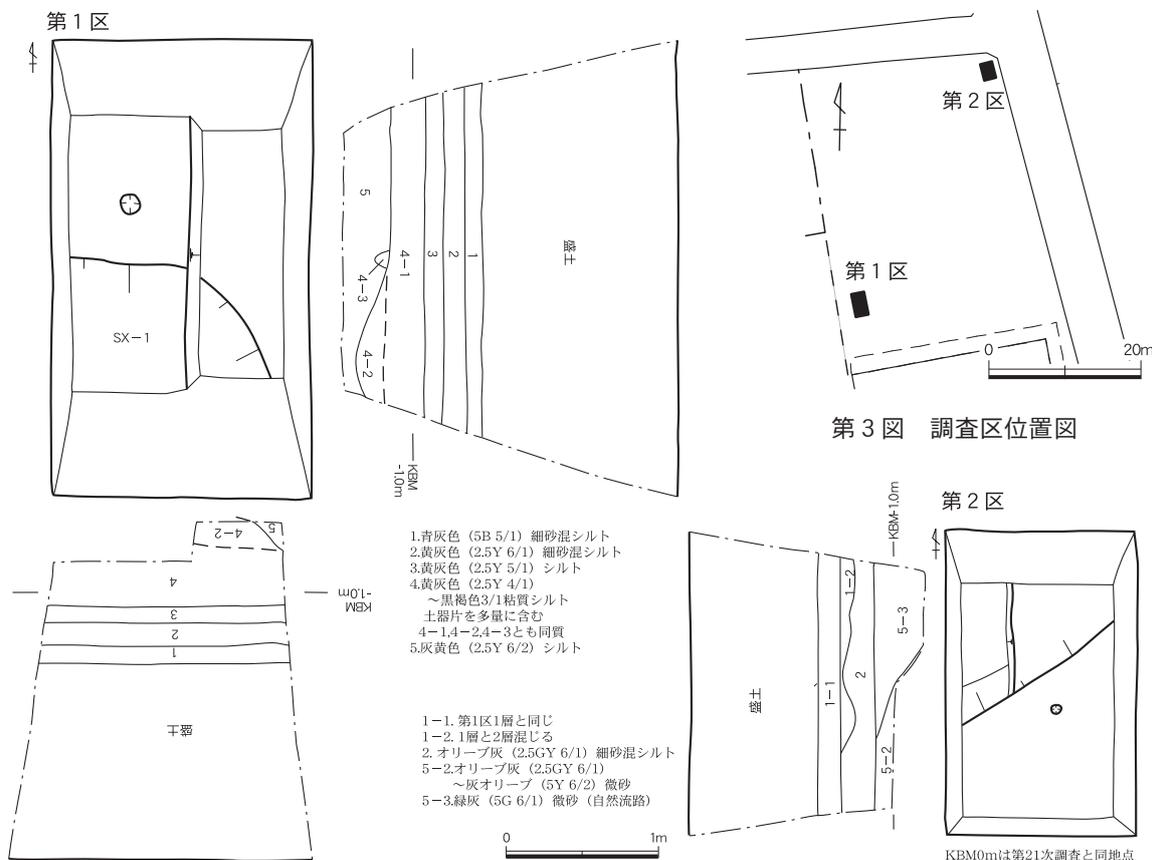
〔概要〕 今回の発掘調査は、遺跡の北東部で店舗建設が計画されたことから、遺跡の内容確認のために調査を実施した。その結果、浄化槽設置部分が記録保存の調査対象となった（第25次）。

調査地の現況は店舗と駐車場の跡地であった。盛土以下の調査区の基本層序は、第1層 青灰色細砂混シルト（耕作土）、第2層 黄灰色細砂混シルト（床土）、第3層 黄灰色シルト（古墳時代以降）、第4層 黄灰色～黒褐色粘質シルト（弥生～古墳時代の遺物包含層、あるいは遺構埋土）、第5層 灰黄色シルト、またはオリーブ灰色微砂（地山）である。遺構は、第1区で現地表面から1.9m下の第5層上面で検出した。

南西の第1区で大規模な土坑（SX-1）を検出した。SX-1は西から南に屈曲する落ち込みで、別の東西方向の遺構が重複する。埋土からは多数の土器片が出土した。また、第1区の遺物包含層（第4層）から土器小片が多数出土した。弥生～古墳時代前期の可能性がある。第4層は、21次調査時の遺物包含層より厚く、遺構埋土に土質が似るため、遺構埋土の可能性もある。

第2区では、自然流路を検出し、周辺に人為的な遺構が展開する可能性は低い。

今回調査地の西の第21次調査や、南西の第6次・第7次調査では、弥生～古墳時代前期の可能性がある遺構が検出された。同時期の集落の中心は、今回調査地の南側から調査区外の南西にかけての範囲に存在すると想定できる。調査地の北側は、谷状地形となると考えられる。（富永）



⑮和歌山城跡第14次確認調査（調査一覧34）

〔経緯〕 店舗建設に伴う発掘調査

〔場所〕 和歌山市八番丁31

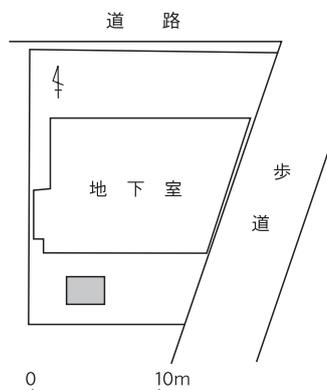
〔面積〕 6.60㎡

〔概要〕 和歌山城跡（遺跡番号379）は、紀ノ川南岸の平野部に存在する独立丘陵上に築かれた和歌山城を中心とする遺跡である（第1図）。

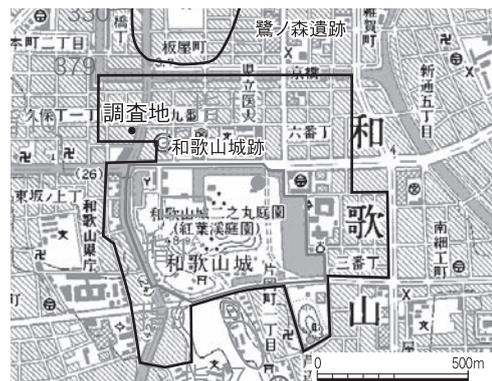
今回の調査地は、和歌山城三の丸の西外堀に面した場所において、ビルの解体工事が計画され、上屋及び基礎の一部が解体された。その後、地下室を解体するにあたり基礎以外の部分も破壊する必要が生じたため、地下室解体前に既存基礎の影響が少ない部分について、遺跡の内容確認のために調査を実施することになった。

現地表面下約250cmが基礎解体時の造成土で、その下に約20cmの暗灰黄色微砂（第1層）、約30cm以上の暗灰色細砂（第2層）が堆積する。いずれの堆積層にも遺物を含まず第1層以下が自然堆積層であると考えられる。

確認調査の結果、既存の建物基礎により現地表面から2.5mまで破壊されている状況が判明した。それ以下は、水平に細砂～微砂層が堆積する自然堆積層である状況を確認した。対象地は、和歌山城三の丸の西外堀に面して築かれた土塁か外堀内に位置するが、盛土状の遺構や外堀の埋め戻し土の可能性のある堆積などは確認できなかった。堆積状況から外堀内に位置する可能性は低く、土塁もしくは三の丸敷地内にあたるものと想定される。しかし、ビルの基礎により2.5mまで掘削されているため、遺構面はすでに破壊され残存していないものと考えられる。（大木）



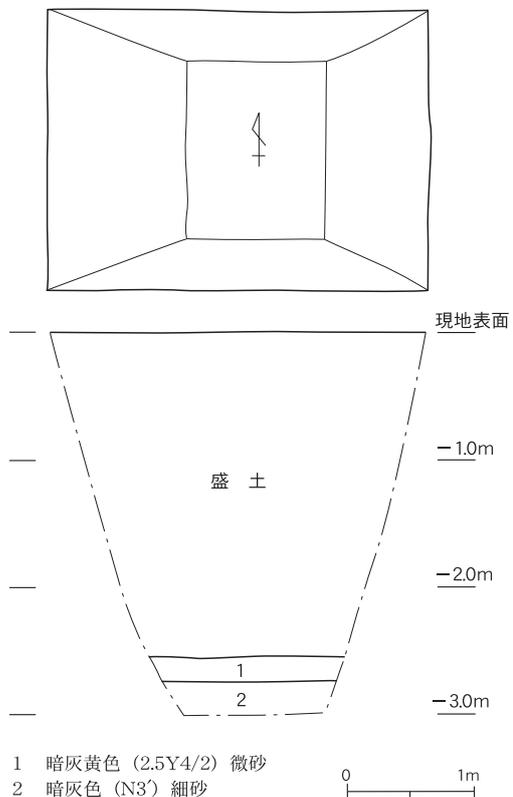
第3図 調査区位置図



第1図 調査位置図



第2図 調査対象地



第4図 調査区平・断面図 (S=1/60)

⑯池田遺跡第1次確認調査（調査一覧35）

〔経緯〕 宅地造成に伴う事前確認調査

〔場所〕 和歌山市六十谷1189番5

〔面積〕 20.00㎡

〔概要〕 池田遺跡（遺跡番号78）は、紀ノ川の北岸の台地上に展開する、東西約0.14km、南北約0.2kmの遺跡である。今回の調査は、遺跡の北東部において宅地の再造成が計画されたことから工事に先立ち、遺跡の内容を確認するための調査を実施した（第1図・第2図）。

池田遺跡周辺では、半径約2kmの範囲内には西側に古墳時代の倉庫群が確認されたことで著名な鳴滝遺跡をはじめ、鳴滝古墳群や雨が谷古墳群、園部円山古墳などの古墳時代の遺跡群が、東側には弥生時代および鎌倉時代の遺構群が確認されている六十谷遺跡のほか、銅製骨蔵器が出土した大同寺墳墓群や直川廃寺跡をはじめとする寺院関連の遺構・遺物が出土した遺跡が確認されている。

調査地は和泉山脈の山麓部に広がる住宅地に立地する宅地の再造成予定地である。対象地は約208.36㎡の北東-南西を長軸とする台形であり、対象地の北西部に第1区、南東部に第2区を設定した（第3図）。調査面積は20.00㎡である。

調査地の現況は宅地であり、近現代の造成土までを機械掘削とし、以下は機械掘削後人力による精査を行い遺構や遺物の有無を確認した。土層堆積状況や遺構の検出状況については写真撮影および、実測図の作成をおこなった。図面による記録は、平面図に関しては調査地と隣地とを区画する隣地境界線を、断面図に関しては調査地に西面する道路内にある排水弁（マンホール）をKBM0.0mとして実測を行った（第3・4図）。壁面土層断面図と遺構平面図については1/20の縮尺を用いて、手測りによる実測を行った。また、土層の色調観察は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖2006年版』を用いた。

本調査地の基本層序は以下の通りである（第4図）。

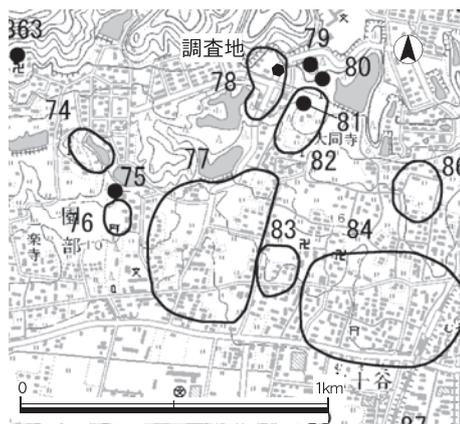
第0層；近現代の造成土である。0-0～0-4層の5層に細分される。

第1層；層厚約20cmでやや粘性の強い明黄褐色砂質土からなる。第2層の風化層と考えられる。

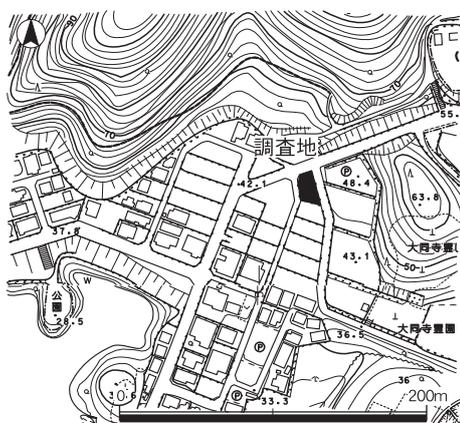
第2層；層厚10cm以上の粘性の強い黄褐色土からなる。自然堆積層と考えられる。

第3層；層厚10cm以上の黄褐色砂質土からなる。自然堆積層と考えられる。

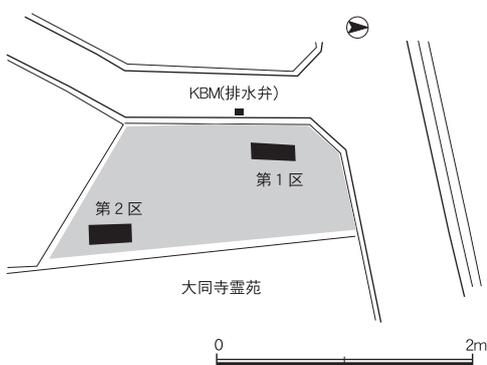
確認調査の結果、第1・2区ともにいずれの層においても遺構・遺物の存在を確認することが出



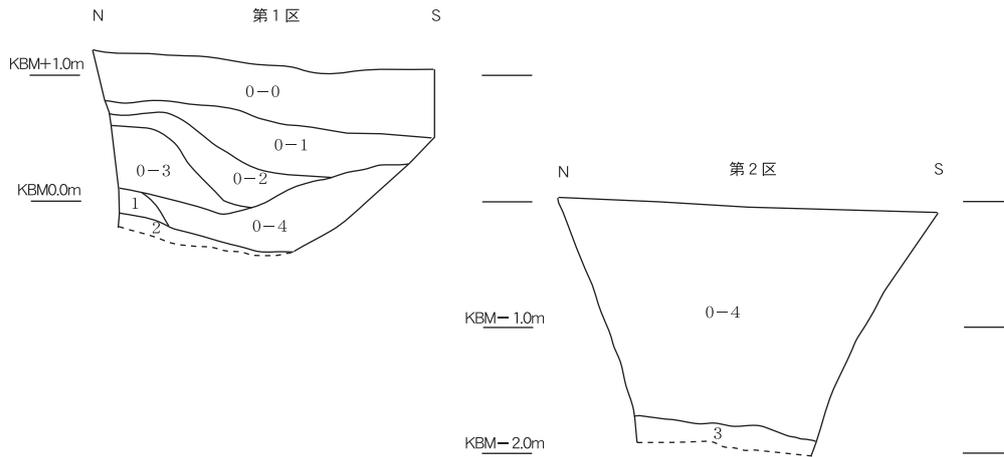
第1図 調査位置図



第2図 調査対象地



第3図 調査区配置図



- | | |
|----------|-----------------------------------|
| 0-0: 造成土 | 1: 明黄褐 (10YR6/6) 大礫~細粒砂 |
| 0-1: 造成土 | やや粘性が強い。 |
| 0-2: 造成土 | 2: 黄褐 (2.5Y5/6) 極粗~中粒砂混じり粘土質シルト |
| 0-3: 造成土 | 3: 黄褐 (2.5Y5/6) 大~小礫混じり細~極細粒砂質シルト |
| 0-4: 造成土 | |

第4図 調査区土層図 (S= 1 /60)

来なかった。今回の調査から、本調査地を含む本調査地周辺は既に宅地造成による大規模な削平を受けており、埋蔵文化財は展開しないものと考えられる。なお、第1区北端で地山の風化層（第4図第1層）が確認できたことから、本調査地より北の山麓部に関しては旧地形および、旧堆積が遺存している可能性が考えられる。(清水)

⑰太田・黒田遺跡第73次確認調査（調査一覧41）

〔経緯〕 店舗建設に伴う事前の確認調査

〔場所〕 和歌山市太田1丁目1-12・13

〔面積〕 16.87㎡

〔概要〕 太田・黒田遺跡は和歌山県和歌山市太田及び黒田周辺に所在し、紀ノ川南岸の標高4m前後の沖積低地に立地する遺跡である。この遺跡は、東西約500m、南北約900mの規模をもつ弥生時代から江戸時代の集落遺跡として周知されている（第1図）。

今回の調査は、太田・黒田遺跡（遺跡番号327）、太田城跡（356）の南西隅に位置する場所において店舗建設が計画されたため、工事に先立ち、遺跡の内容確認のために調査を実施した（第2図）。

現地表土である造成土は、調査区全面に認められ、第1区では厚く約136cmを測る。第2・3区では約80～90cm程度である。第1層は6～14cmを測る近現代の旧耕作土で第1区では削平され残存していない。第2層は4～10cmを測る明黄褐色細砂混シルトで第3区では2層に細分される。床土と考えられる。第3層は約20cmを測る浅黄色細砂混シルト、第4層は約20cmを測る灰黄色シルト、第5層は約30cmを測る灰黄色シルト、第6層は黒褐色粘土である。3～5層に関しては周辺の調査成果から弥生時代の遺物包含層の可能性が想定されるが、今回の調査では遺物は確認できなかった。

遺構は第1層上面、第2層上面、第3層上面、第4層上面、第5層上面において溝、土坑、ピット等の遺構を確認した。中世以前に位置づけられるのは第3・4・5層上面の遺構面である。以下調査区ごとに概要を記述する。

第1区 第3層上面で溝1条(SD-1)、土坑1基(SK-1)を検出した。SD-1は南北方向の溝で、幅0.3m以上、深さ0.2mを測る。埋土から、土師器小片が出土した。SK-1は断面により確認したため規模や平面形は不明である。深さ0.2mを測る。

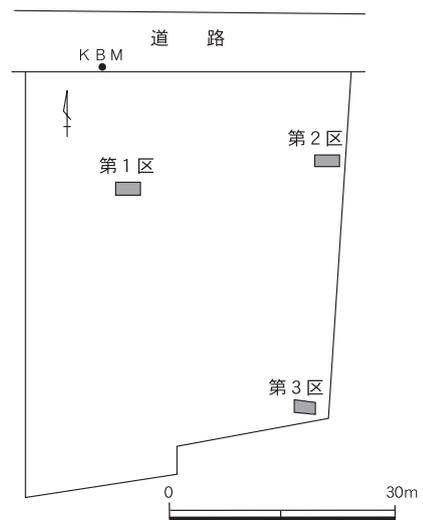
第2区 第1層上面より掘削された土坑(SK-2)により調査区のほとんどが破壊されており、遺構面は残存していない。しかし、一部残存していた部分で断面による確認であるが第4層上面でピットの可能性のある遺構を確認した。



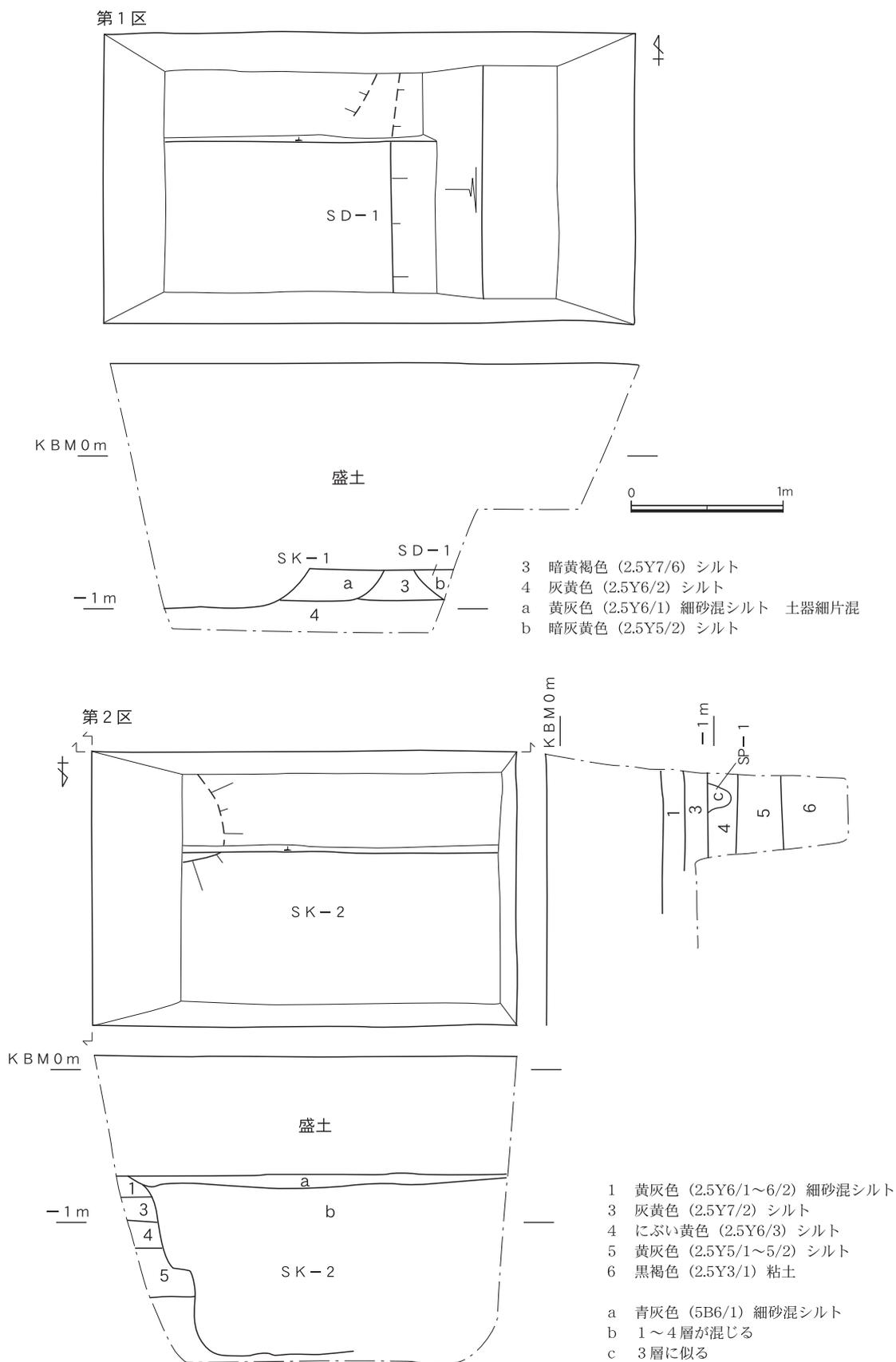
第1図 調査位置図



第2図 調査対象地



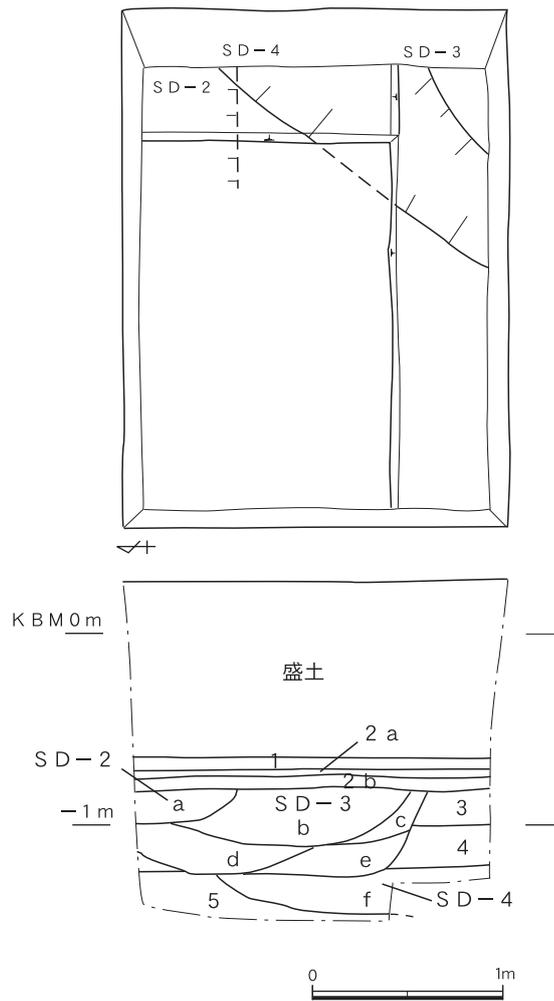
第3図 調査区位置図



第4図 第1・2区調査区平・断面図 (S=1/40)

第3区 第3層上面で東西方向の溝1条 (SD-2)、北東-南西方向の溝 (SD-3)、第5層上面で北東-南西方向の溝 (SD-4) を検出した。SD-2 は幅0.5m以上、深さ0.2m、SD-3 は幅2.0m以上、深さ0.46m、SD-4 は幅0.85m以上、深さ0.2mを測る。

確認調査の結果、中世以前に位置づけられる遺構面を3面確認した。第1遺構面 (第3層上面) では溝3条、土坑1基を検出した。遺構からの出土遺物が少ないため、遺構の時期は不明であるが、一部掘削を行ったSD-1からは近世の遺物は出土せず、土師器のみ出土したことから、中世以前の遺構である可能性が想定される。第2遺構面 (第4層上面)、第3遺構面 (第5層上面) の遺構は、断面やサブトレンチで確認したため、出土遺物もなく遺構の時期は不明であるが、周辺の調査成果から考えると、概ね第2遺構面が弥生時代中期中葉頃、第3遺構面が中期前半頃と考えられる。(大木)



- 1 黄灰色 (2.5Y) 細砂混シルト (耕土)
- 2 明黄褐色 (2.5Y7/6) 細砂混シルト (耕土)
- 2 b 浅黄色 (2.5Y7/4) 細砂混シルト
- 3 浅黄色 (2.5Y7/3) 細砂混シルト (マンガン斑及び鉄分含む)
- 4 灰黄色 (2.5Y6/2) シルト
- 5 黄灰色 (2.5Y6/1 シルト) 明黄褐色混 植物腐蝕物?含む
- a 黄灰色 (2.5Y6/1) 細砂混シルト [SD-2]
- b 灰黄色 (2.5Y6/2) 細砂混シルト (マンガン斑含む) [SD-3]
- c にぶい黄色 (2.5Y6/3) 細砂混シルト (鉄分多 赤味強い) [SD-3]
- d 黄灰色 (2.5Y6/1) シルト [SD-3]
- e 黄灰色 (2.5Y6/1) シルト (鉄分少し含む) [SD-3]
- f 黄灰色 (2.5Y5/1) シルト (やや粘質) [SD-4]

第5図 第3区調査区平・断面図 (S=1/40)

⑱西庄遺跡第7次確認調査・第8次発掘調査（調査一覧44・78）

〔経緯〕 資材置き場造成に伴う発掘調査

〔場所〕 和歌山市本脇字田井田坪13番、14番

〔面積〕 第7次確認調査 65.24㎡

第8次発掘調査 106.00㎡

〔概要〕 西庄遺跡（遺跡番号38）は、標高4.5m前後の砂堆に展開する、東西約0.9km、南北約0.4kmの遺跡である。今回の調査は、遺跡の北西端部において資材置き場の造成が計画されたことに起因する。事業者から資材置き場建設計画の打診を受け、和歌山市教育委員会ですらに確認調査（西庄遺跡第7次確認調査）及び、記録保存のための本発掘調査（西庄遺跡第8次発掘調査）を実施した（第1・2図）。過去の調査においては、本調査地の東側で行われた西庄遺跡第4次調査（財団法人和歌山市都市整備公社）、都市計画道路西脇・山口線道路改良工事に伴う発掘調査（財団法人和歌山県文化財センター（2003））では古墳時代の竪穴建物のほか、掘立柱建物や溝、土坑などが検出されている。西庄遺跡の周辺では和泉山脈南麓裾部にそって東側には金製勾玉の出土した車駕之古墳や中世の遺構や遺物が出土している木ノ本Ⅲ遺跡、弥生時代後期～古墳時代にかけての竪穴建物や中世の掘立柱建物が確認されている西庄Ⅱ遺跡が、西側には磯脇遺跡が連なっている。

調査地は和泉山脈南麓裾部に広がる住宅地に立地する資材置き場造成予定地である。対象地は約2247㎡の北東－南西を長軸とする長方形であり、第7次確認調査では対象地内の擁壁設置予定地に隣接する形で調査区を設定し、第8次発掘調査では遺構が破壊される擁壁設置部分に調査区を設定した（第3図）。

調査地の現況は旧耕作地であり、第7次確認調査では近現代～近世の耕作土までを機械掘削とし、以下は機械掘削後人力による精査を行い遺構や遺物の有無を確認した。また、第8次発掘調査では第7次確認調査の結果に基づいて、第2層までを機械掘削とし、以下は人力掘削後、精査を行い遺構や遺物の有無を確認した。図面による記録は、平面図に関しては調査地と隣地とを区画する隣地境界線を、断面図に関しては調査地に東面する道路内にある金属鋸をL=5.610m（県道西脇・山口線歩道内にある3級基準点より移設）として実測を行った（第3図）。壁面土層断面図と遺構平面図については1/20の縮尺を用いて、手測りによる実測を行った。

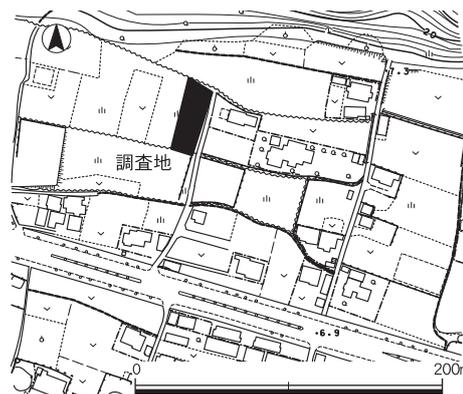
また、土層の色調観察は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖2006年版』を用いた。

本調査地の基本層序は以下の通りである（第4図）。

第0層：現代の耕作土である。



第1図 位置図



第2図 調査対象地

第1層；層厚4～10cmで黄褐色土からなり、鉄分の錆着がみられる。近世～近現代の耕作土と考えられる。

第2層；層厚10～35cmの黄褐～オリーブ褐色砂質土からなる土器を含む2-1層と、層厚10～40cmのオリーブ褐色砂質土からなる瓦器や土師器を含む2-2層、層厚5～60cmの灰黄～黄褐色砂質土からなる瓦器や土師器を含む2-3層の3層に大別される。なお、瓦器や土師器が出土していることから第2層は中世～近世の遺物包含層と考えられる。

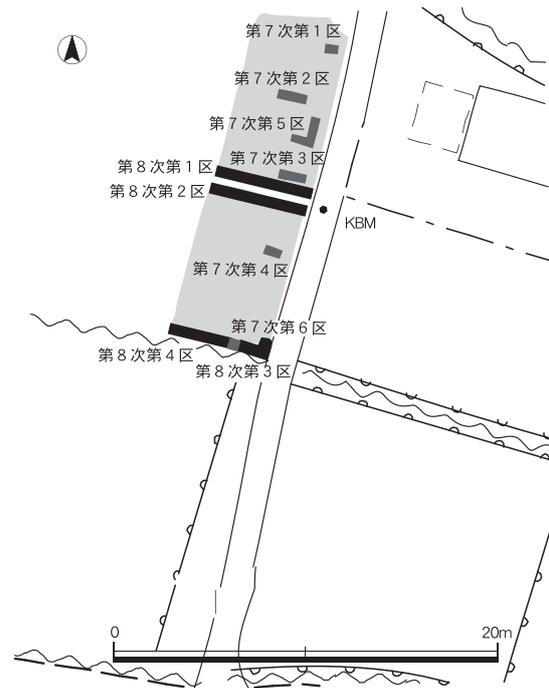
第3層；層厚約10cmの粘性がやや強く、鉄分が錆着したオリーブ褐色土からなる。第3～5区では鉄分の錆着がみられる3-1層と鉄分の錆着がみられ、酸化マンガン斑の沈着がみとめられる3-2層に細分され、第3区SD-301以西で3-2層からさらに3-3層が分離する。須恵器、土師器、瓦器が出土していることから第3層は古墳時代～中世の遺物包含層と考えられる。

第4層；層厚10cm以上のごく弱く暗色化したオリーブ褐色砂質土からなる。なお、第3・4区では土師器や須恵器、炭化物を多く含む暗色化した遺物包含層である4-1層と、砂質が強くごく弱く暗色化した土器をわずかに含む希薄な遺物包含層である4-2層に細分される。

第7次調査第1・2区および第4～6区の第3層上面において古墳時代～中世の鋤溝および古墳時代後期の土坑（SK-601）を、第3区第3-1層上面および第3-2層上面で古墳時代～中世の鋤溝を、第3-2層下面で古墳時代の溝（SD-301）を検出した。また、第8次調査第1・2区および第3・4区の第3層上面において古墳時代～中世の鋤溝および溝（SD-301・302）、土坑（SK-301）を、第1区および第2区の第4層上面で、古墳時代～古代にかけての溝（SD-101・102）および土坑（SK-201）を、第3・4区第4層上面で古墳時代の溝（SD-303・304・SD-401）および土坑（SK-301）、竪穴建物（SI-401）、落ち込み（SX-401）を検出した。

遺物包含層である第2層および第3層からは土師器や須恵器、瓦器等が、第4層からは土師器や須恵器が出土している。なお、第3・4区第4層上面で検出した竪穴建物（SI-401）からは陶質土器の可能性のある平肩の瓶（第6図7）や、MT15～TK209前後の須恵器をはじめとする極めて多量の古墳時代の土器が出土している。

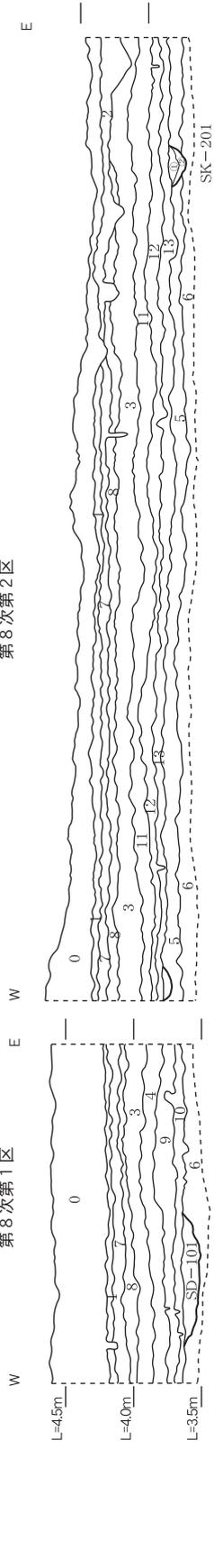
本調査の結果、第3層上面および第4層上面で遺構群を確認した。第7次調査第1～5区および、第8次調査第1・2区では遺構・遺物ともに極めて希薄であるのに対し、第7次調査第6区および第8次調査第3・4区では遺構・遺物ともに密になることが確認された。特に、遺構が密であった第7次調査第6区および第8次調査第3・4区第4層上面の遺構群からはTK10～TK217を中心とする古墳時代後期の土器が出土している。今回の調査および都市計画道路西脇・山口線道路改良工事に伴う発掘調査（財団法人和歌山県文化財センター（2003））、西庄遺跡第4次・6次調査（財団法人和歌山市都市整備公社）から、第1・2区の様相が西庄第6次調査に近いのに対し、古



第3図 調査区配置図

第8次第2区

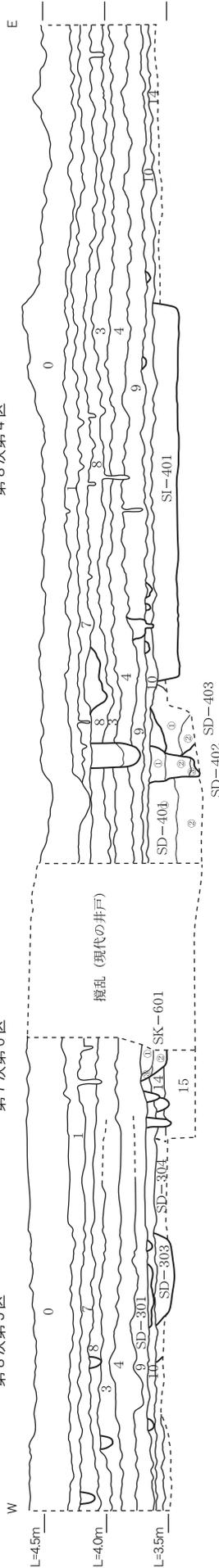
第8次第1区



第8次第3区

第7次第6区

第8次第4区



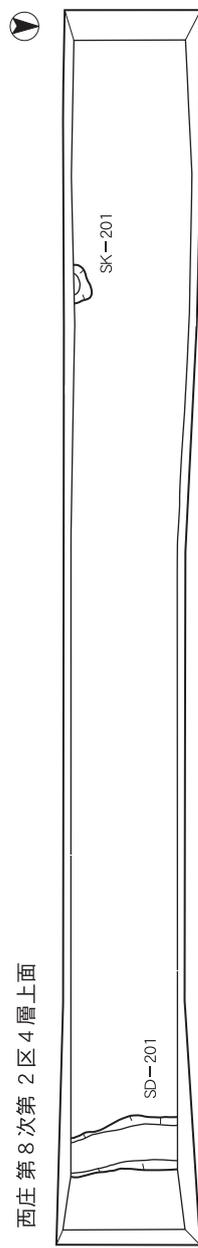
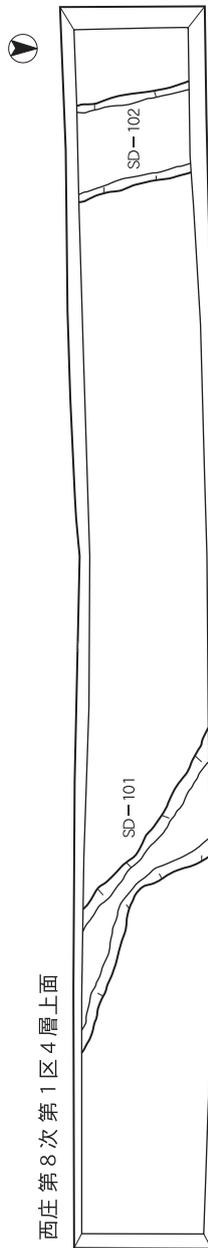
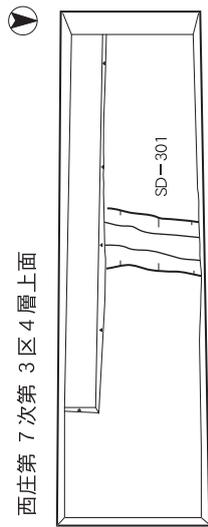
- 0：暗灰黄 (2.5Y4/2) 細～極細粒砂質シルト 近現代耕作土 (0層)
 1：黄褐 (10YR5/6) 細～極細粒砂質シルト やや砂質が強い。
 鉄分の銹着がみられる。近現代耕作土 (未土か?) (1層)
 2：黄褐 (2.5Y5/3) 細粒砂質シルト ややシルトが強い。
 土器をごく少量含む遺物包含層。(2-1層)
 3：オリーブ褐 (2.5Y4/3) 細～極細粒砂質シルト
 ごく少量土器 (瓦器・土師器) を含む遺物包含層。(2-2層)
 4：黄褐 (2.5Y5/3) 細～極細粒砂質シルト
 ごく少量土器 (瓦器・土師器) を含む遺物包含層。(2-3層)
 5：オリーブ褐 (2.5Y4/4) 細～極細粒砂質シルト
 やや粘性が強い。鉄分の銹着がみられる。
 土器を含む遺物包含層。(3層)
 6：オリーブ褐 (2.5Y4/3) シルト混じり細粒砂
 ごく弱く暗色化している。(4層)
 7：オリーブ褐 (2.5Y4/3) 細～極細粒砂質シルト (2-1-1層)
 8：にぶい黄褐 (10YR4/3) 極細粒砂質シルト (2-1-2層)
 9：にぶい黄褐 (10YR5/4) 細～極細粒砂質シルト
 やや砂質が強い。鉄分の銹着がみられる。
 土器を含む遺物包含層。(3-1層)
 10：黄褐 (2.5Y5/4) 細粒砂混じりシルト
 鉄分の銹着がみられる。酸化マンガン斑の沈着が認められる。
 土器を含む遺物包含層。(3-2層)

- 11：灰黄 (2.5Y6/2) 細～極細粒砂混じり粘土質シルト
 粘性が強い。(2-3-1層)
 12：にぶい黄 (2.5Y6/4) 細粒砂混じりシルト
 ごく弱く鉄分の銹着がみられる。土器を含む遺物包含層。(2-3-2層)
 13：黄褐 (10YR5/6) 細～極細粒砂混じりシルト
 鉄分の銹着がみられる。(2-3-3層)
 14：黒褐 (10YR3/2) 細～極細粒砂混じり粘土質シルト
 やや暗色化している。土器や炭化物を多く含む遺物包含層。(4-1層)
 15：にぶい黄褐 (10YR4/3) 細～極細粒砂
 ごく弱く暗色化している。土器を含む遺物包含層。(4-2層)
 御溝：褐 (10YR4/4) 細～極細粒砂質シルト 土器や炭化物を含む
 第7次調査
 SD-301
 ① 黄灰 (2.5Y5/1) シルト やや粘性が強く、小偽礫を含む。
 ② 暗灰黄 (2.5Y5/2) 細粒砂混じりシルト 中小偽礫を含む。
 ③ 灰黄 (2.5Y6/2) 細粒砂混じりシルト 粘性が強く、中小偽礫を多く含む。
 SK-601
 ① 暗灰黄 (2.5Y4/2) 細～極細粒砂質シルト 土器や炭化物を多く含む。
 ② 灰黄褐 (10YR4/2) 細粒砂混じりシルト
 やや粘性が強い。土器や炭化物を含む。
 ③ にぶい黄褐 (10YR4/3) 細～極細粒砂質シルト 土器を含む。
 SK-602：灰黄褐 (10YR4/2) 細粒砂混じりシルト 土器や炭化物を含む。

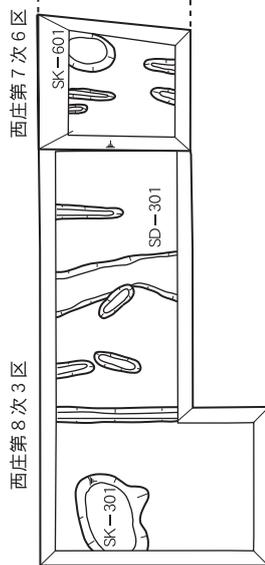
- 第8次調査
 SD-101：灰白 (10YR7/1) シルト 土器・炭化物を含む。
 SD-101：灰白 (2.5Y7/1) シルト 土器・炭化物を含む。
 SD-201：灰白 (2.5Y7/1) シルト 土器・炭化物を含む。
 SK-201
 ① 灰白 (2.5Y7/1) シルト 炭化物を含む。
 ② にぶい黄 (2.5Y6/3) 細～極細粒砂 炭化物を含む。
 SD-301：褐 1 (0YR4/4) 細粒砂質シルト
 ごく弱く暗色化している。土器・炭化物を含む。
 SK-301：黒褐 (10YR3/2) 細～極細粒砂混じりシルト
 土器を多く含む。
 SK-302
 ① 明黄褐 (2.5Y6/6) 細粒砂混じりシルト やや砂質が強い。
 ② 黒褐 (10YR3/2) 細粒砂質シルト 土器・炭化物を含む。
 SD-401
 ① 褐灰 (2.5Y5/1) 細～極細粒砂混じりシルト
 やや粘性が強く、中小偽礫を含む。
 ② にぶい黄褐 (2.5Y5/3) 細粒砂
 SD-402
 ① 灰黄褐 (2.5Y5/2) 細粒砂混じりシルト
 やや粘性が強い。土器を含む。
 ② にぶい黄褐 (2.5Y5/3) 細～極細粒砂混じりシルト
 砂質が強い。土器を多く含む。
 ③ 明黄褐 (2.5Y7/6) 極細粒砂混じり粘土質シルト

- SD-403
 ① にぶい黄褐 (10YR7/2) 細～極細粒砂質シルト
 大小偽礫を含む。土器を多く含む。
 ② にぶい黄褐 (10YR5/4) シルト混じり細粒砂
 土器を多く含む。
 SI-401：黒褐 (10YR3/2) 細～極細粒砂質シルト
 土器を多く含む。

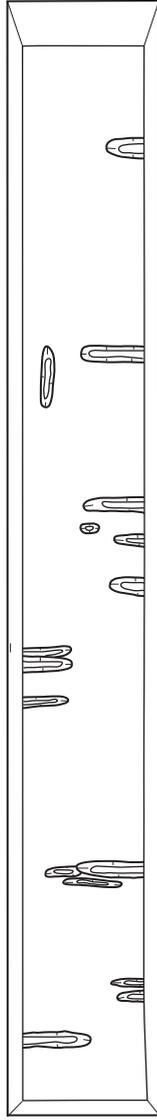
第4図 調査区土層図 (縦S=1/50 横S=1/100)



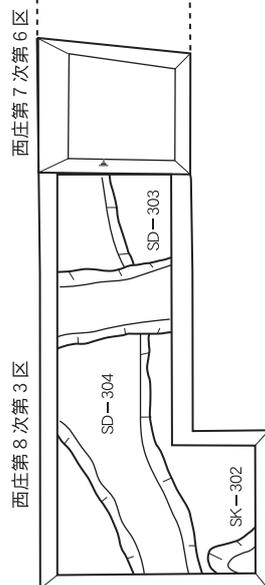
西庄第7次第6区・第8次第3・4区3層上面



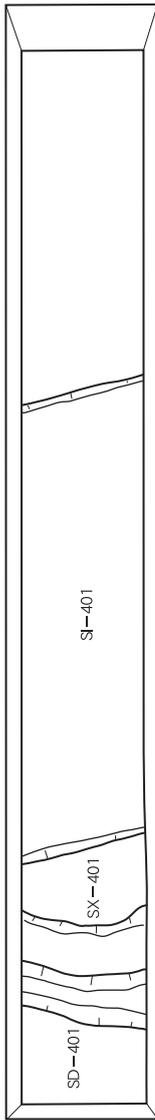
西庄第8次第4区



西庄第7次第6区・第8次第3・4区4層上面



西庄第8次第4区

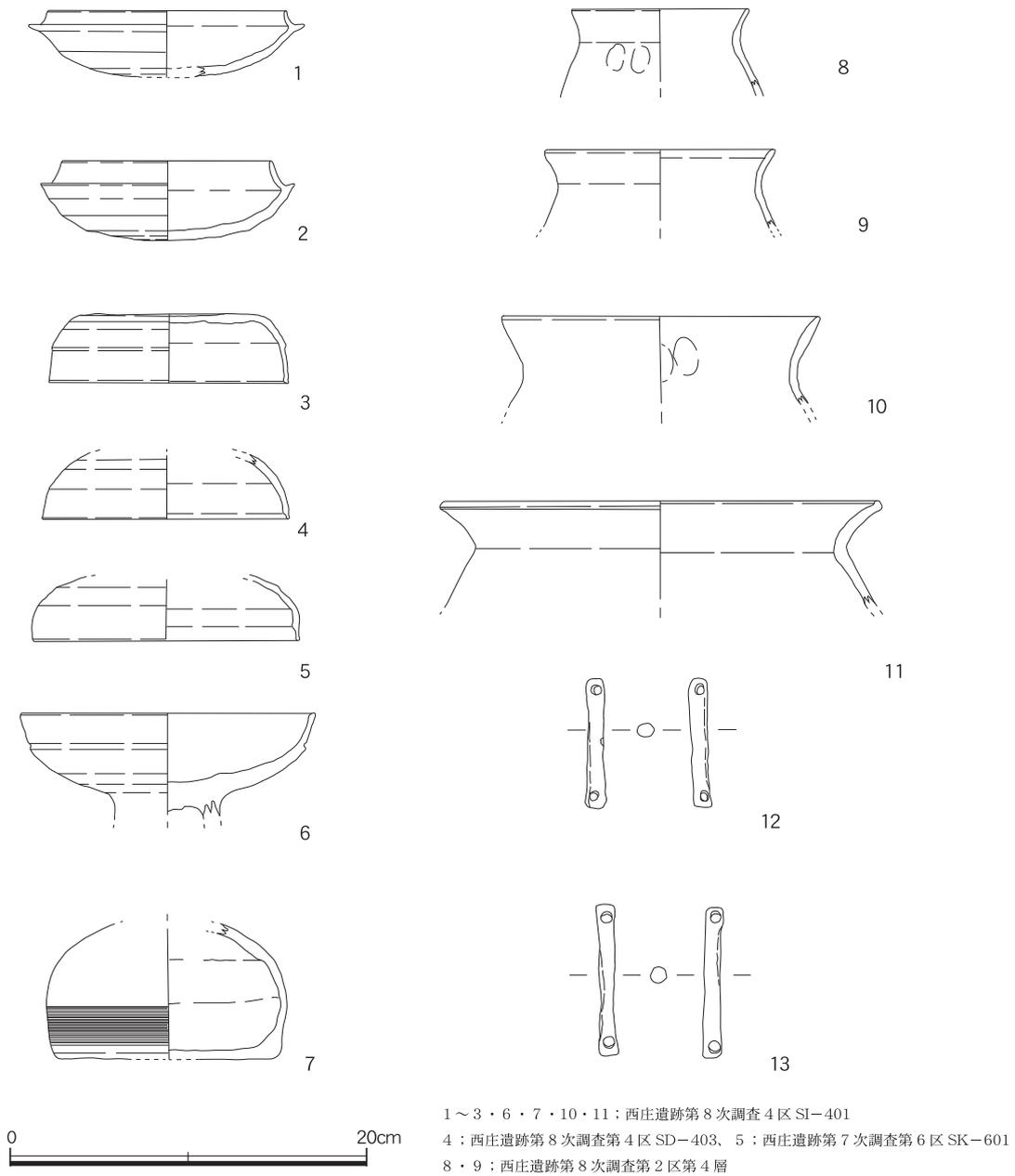


第5図 西庄遺跡第7次調査第3・6区、第8次調査第1～4区平面図 (S=1/100)

墳時代の遺構群を確認した第3・4区の様相は都市計画道路西脇・山口線道路改良工事に伴う発掘調査や西庄遺跡第4次調査と近いと考えられる。(清水)

【参考文献】

- 『西庄遺跡 - 都市計画道路西脇・山口線道路改良工事に伴う発掘調査報告書』 2003 財団法人和歌山県文化財センター
 『和歌山市内遺跡発掘調査概報 - 平成17年度 -』 2007 和歌山市教育委員会
 『西庄遺跡第6次発掘調査事業実績報告書』 2011 財団法人和歌山市都市整備公社



第6図 西庄遺跡第7次調査・第8次調査出土遺物 (S=1/4)

⑳三田古墳群第1次確認調査（調査一覧47）

〔経緯〕 保健センター建設に伴う事前の確認調査

〔場所〕 田尻地内

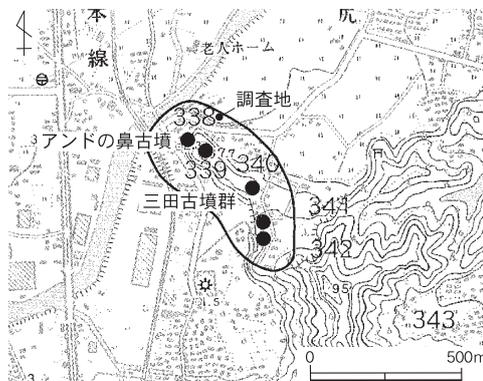
〔面積〕 10.37㎡

〔概要〕 三田古墳群（遺跡番号339～342）は紀ノ川南岸の丘陵上に立地する遺跡であり、丘陵上に4基の古墳が確認されている。

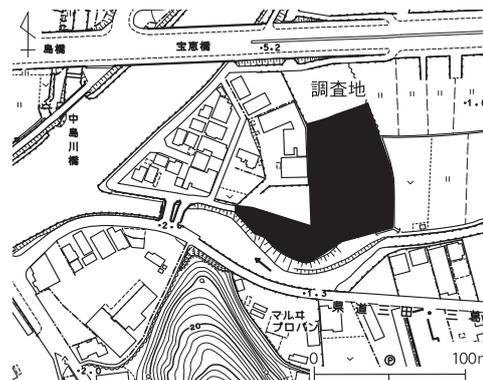
今回の調査は保健センター建設工事が計画されたことから、工事に先立ち、遺跡の内容確認のために調査を実施した。

現地表面下、約130～180cmが造成土で、その下に約30cmの暗青灰色細砂（第1層）、約25cmの暗青灰色細砂（第2層）、約30cmの青灰色細砂（第3層）、それ以下はにぶい黄色シルト混細砂（第4層）が堆積する。いずれの層からも遺物は出土しなかった。

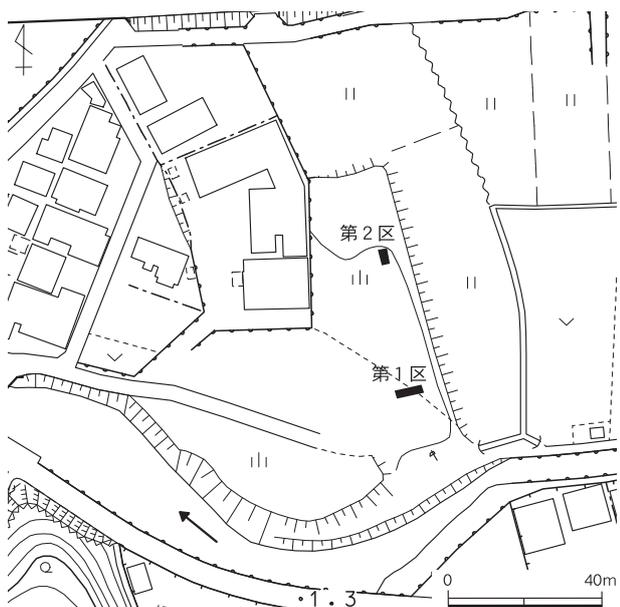
確認調査の結果、遺構・遺物とも確認できなかった。土層観察の結果、いずれの調査区の堆積層も砂層で構成されていることから、和田川の氾濫原にあたるものと考えられる。（大木）



第1図 位置図

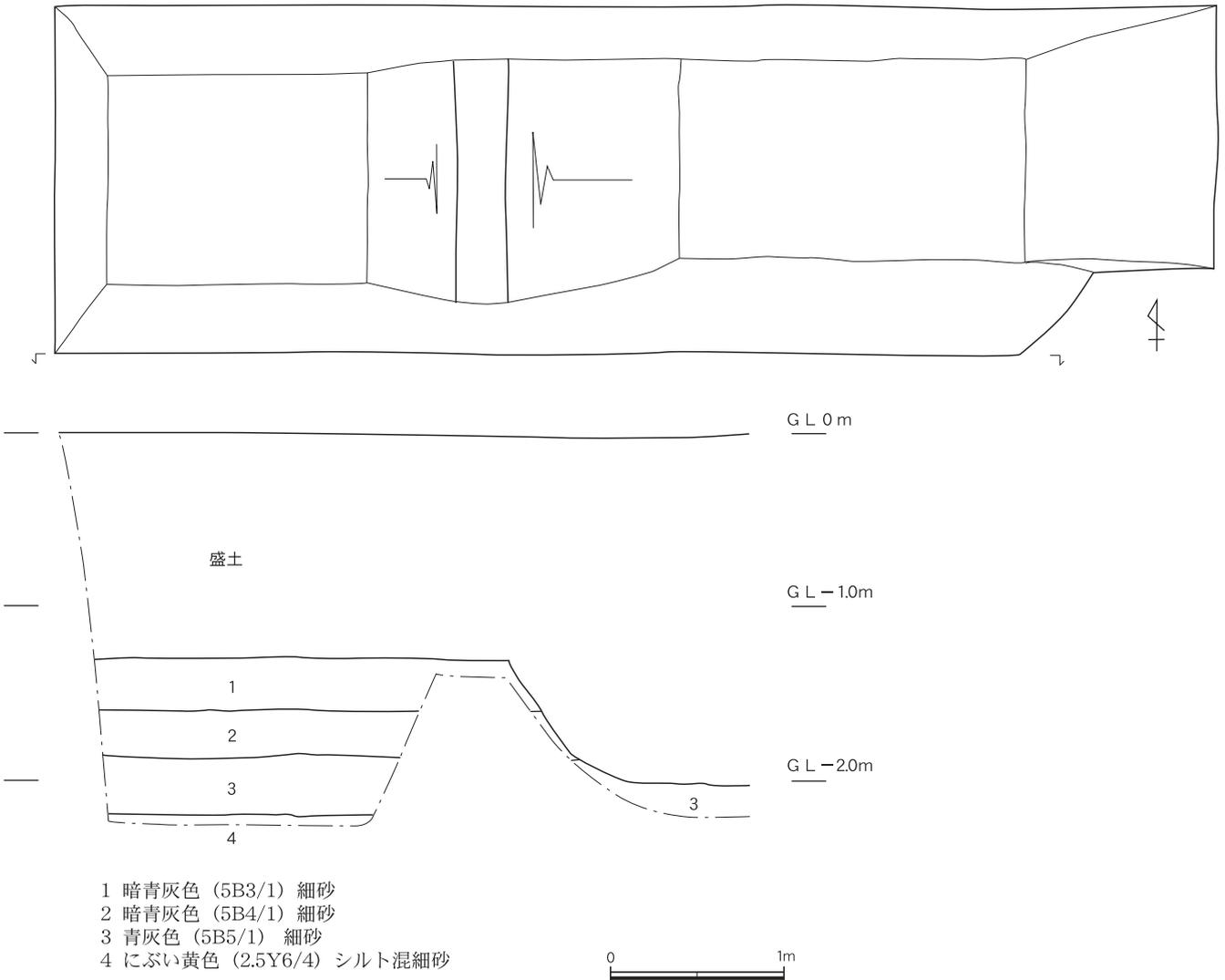


第2図 調査対象地

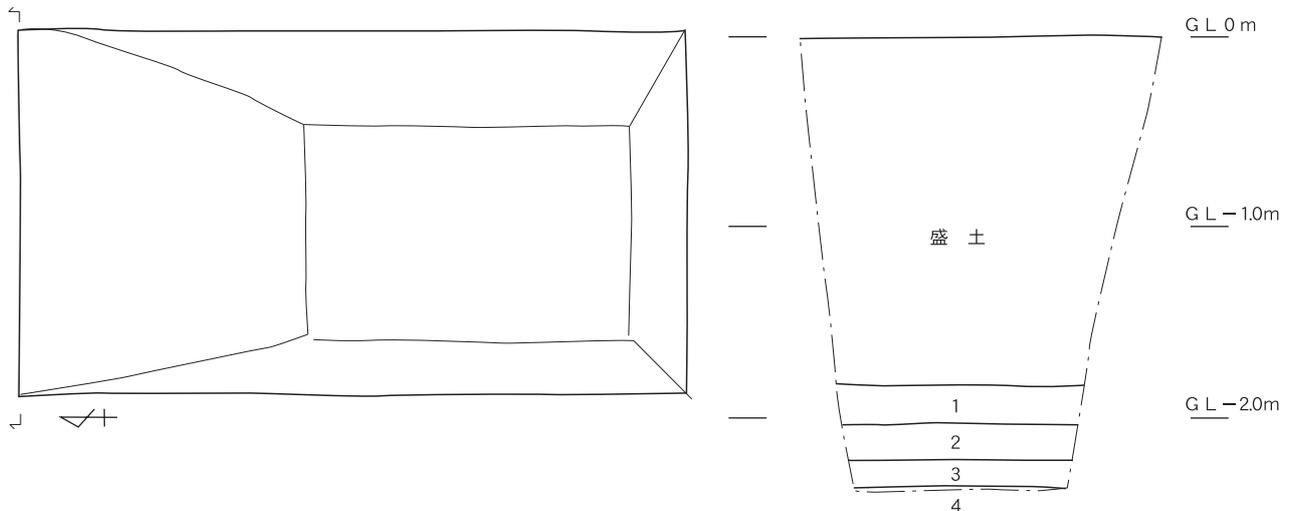


第3図 調査区位置図

第1区



第2区



第4図 第1・2区調査区平・断面図 (S=1/40)

②岩橋高柳遺跡第4次確認調査（調査一覧48）

〔経緯〕 開発計画に伴う事前確認調査

〔場所〕 和歌山市岩橋912-1

〔面積〕 13.14㎡

〔概要〕 岩橋高柳遺跡（遺跡番号427）は、紀ノ川南岸の下流域に立地し、岩橋千塚古墳群の麓にある岩橋遺跡の北東に位置する。遺跡の範囲は、南北約250m、東西約250mで、中世～近世の集落跡として知られる。今回の調査は、遺跡の南西で開発建設が計画されたことから、工事に先立ち、遺跡の内容確認のために調査を実施した。

調査地の現況は造成地であった。現代盛土が約0.9mあり、それ以下の基本層序は、第1層 暗青灰色細砂～中砂混シルト（耕土）、第2層 灰色細砂混シルト（床土）、第3・4層 灰オリーブ色シルト、第5・6層 オリーブ黄色シルト、第7層 明オリーブ黄色粘質シルト（無遺物層）である。層序は第1・2区とも共通するが、第2区は第5～7層がそれぞれ細分できる。第5～7層上面が、中世の各期に相当する可能性がある。第7層はやや均質で安定したシルト層で、第7層以下は無遺物層となる。

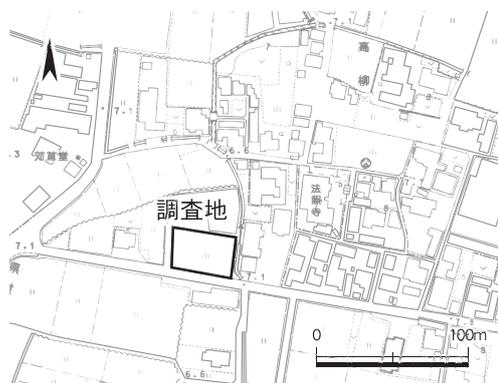
第2区の第7-1層上面で、浅い素掘り小溝1条を検出した。詳細な時期は不明であるが、調査地の北の第1次・第2次調査の結果と照合すると、中世に相当する可能性が高い。また遺物包含層からの出土遺物も少なく、全体的に遺構・遺物ともに分布は希薄である。

確認調査の結果、対象地内で本調査の対象となる埋蔵文化財が展開する可能性は低い。

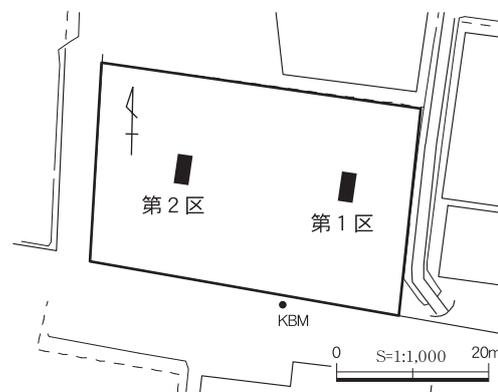
中世以前の遺構に関しては、今回調査地の北東の県文化財センターの調査成果から、遺跡の東側に集中することが判明しており、今回調査地でも当該期の遺構・遺物は発見されていない。また、中世～近世の遺構についても、遺跡の南西方向は希薄となると考えられる。（富永）



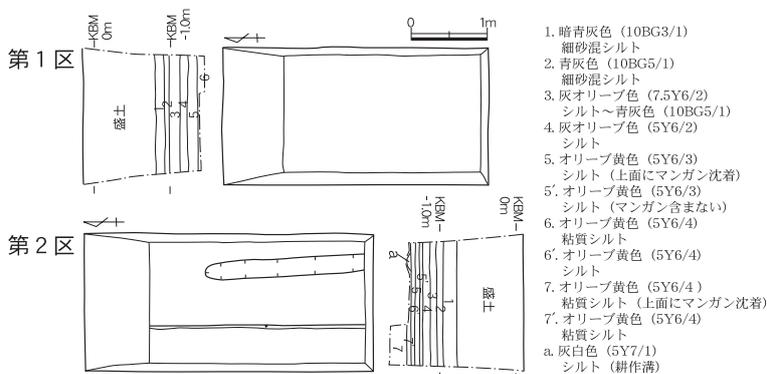
第1図 位置図



第2図 調査対象地



第3図 調査区位置図



第4図 調査区平面図・土層図 (S=1/100)

②木本小学校Ⅱ遺跡第1次確認調査（調査一覧50）

〔経緯〕 宅地造成に伴う確認調査

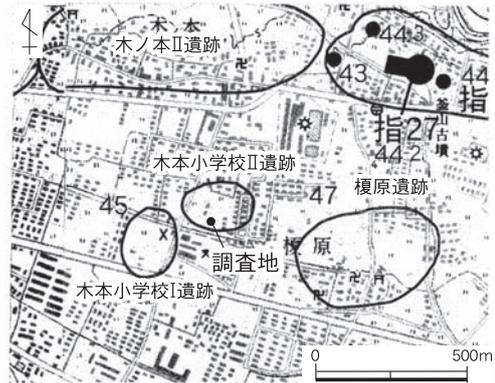
〔場所〕 和歌山市木本316番1ほか

〔面積〕 54.35㎡（敷地面積1117㎡）

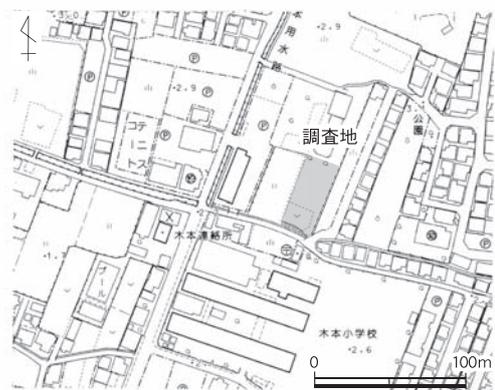
〔概要〕 遺跡は和歌山市北西部の平地に位置する。周辺の旧地形は旧紀ノ川の河口付近の低湿地とみられ、遺跡分布の希薄な地域となっている（第1図）。

対象敷地内の3ヶ所に調査区を設けた。第1区は長さ約5.5m、幅約3m（面積16.5㎡）、第2区は長さ約5.8m、幅2.5～3m（面積15.95㎡）、第3区は長さ約7.3m、幅約3m（面積21.9㎡）である（第2・3図）。基本層序は第3区とも共通であった。旧耕作土の上に厚さ約1.1mの盛土があり、第1層は旧耕作土（厚さ15～30cm）、第2層は旧床土（厚さ2～7cm）、第3・4層は青灰色や灰黄色の粗砂層、第5・6層は灰黄色系の粗砂層である。第5・6層は類似し、漸移層で、下層ほど灰色が強くなる（第4図）。遺物は、第2区第3層より瓦器片1点、土師器片1点、第3区第3層より土師器細片1点が出土したのみであった。

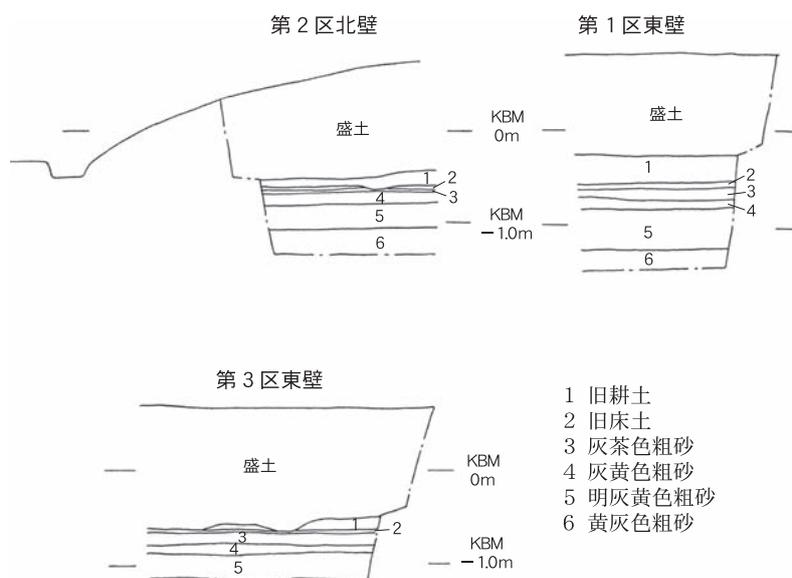
対象地は基本的に砂層堆積であり、第3・4層が希薄な遺物包含層で、第5層以下が無遺物層でベース層と判断された。砂層堆積を基本としており、長らく不安定な環境にあり、中世期以降に畑地などの耕作地として周辺に開発が及んだものと推定された。（前田）



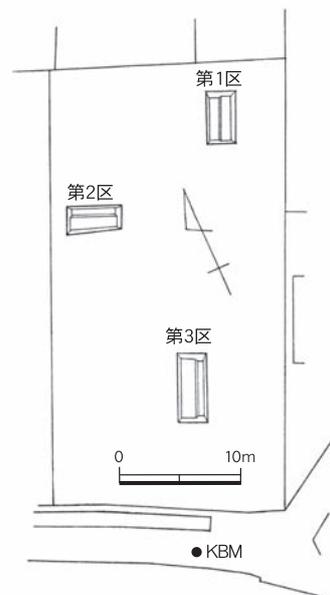
第1図 位置図



第2図 調査対象地



第4図 調査区土層断面図 (S=1/80)



第3図 調査区位置図

②太田・黒田遺跡第74次確認調査（調査一覧51）

〔経緯〕 店舗建設に伴う事前の確認調査

〔場所〕 和歌山市太田2丁目13-9

〔面積〕 16.87㎡

〔概要〕 太田・黒田遺跡は和歌山県和歌山市太田及び黒田周辺に所在し、紀ノ川南岸の標高4m前後の沖積低地に立地する遺跡である。この遺跡は、東西約500m、南北約900mの規模をもつ弥生時代から江戸時代の集落遺跡として周知されている（第1図）。

今回の調査は、太田・黒田遺跡（遺跡番号327）、太田城跡（356）の中央部に位置する場所において集合住宅建設が計画されたため、工事に先立ち、遺跡の内容確認のために調査を実施した（第2図）。

現地表土である造成土は、調査区全面に認められ、第1区では厚く約80cmを測る。第2区では約40cm程度である。第1層は約16cmを測る暗オリーブ褐色細砂混シルトで第2区では2層に細分される。第2層は8cmを測るオリーブ褐色細砂混シルトである。第1層からは中・近世の遺物が出土した。第3層は16～28cmのやや砂質の強いオリーブ褐色細砂混シルト、第4層は約20cmのオリーブ褐色細～中砂混シルト、第5層は約22cmのオリーブ褐色細～極細砂混シルト、それ以下は、黄褐色細砂混シルト～シルトである。

遺構は第2層上面、第3層上面、第5層上面において溝、土坑、ピット等の遺構を確認した。中世以前に位置づけられるのは第3・5層上面の遺構面である。

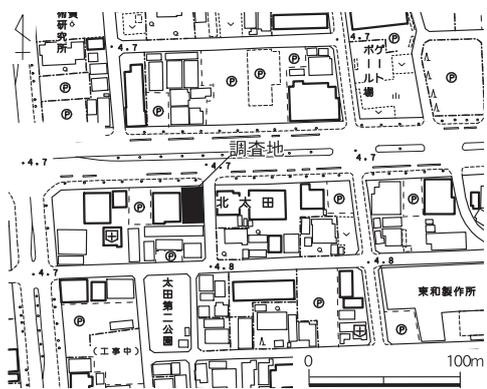
第3層上面で溝、ピット、土坑などを検出した。溝や土坑など一部遺構掘削を行ったが、近世の遺物が出土しなかったため中世以前の遺構と判断した。第2区はSK-2により第4層まで破壊されており、検出したピットは第3層と第4層のどちらに帰属する遺構かは判断できなかった。第1・2区ともに第3層上面で検出した遺構密度が比較的高かったため、下層遺構を確認

できたのは、第1区のサブトレンチのみである。壁面で第5層上面から掘削される遺構を確認した。

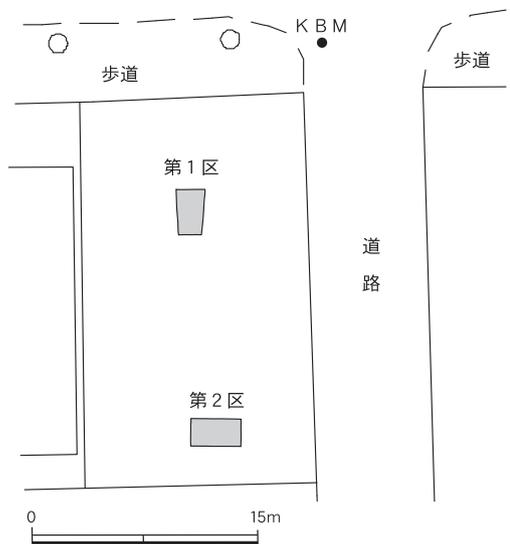
確認調査の結果、中世以前に位置づけられる遺構面を2面確認した。一部掘削を行ったSD-1からは近世の遺物は出土せず、土師器のみ出土したことから、中世以前の遺構である可能性が想定される。第3層以下の状況に関しては、第1区の攪乱部分に設定したサブトレンチで確認したため、全ての層理面で遺構は確認していないものの、周辺の調査成果などから判断すると第3～6層上面で遺構が確認される可能性がある。（大木）



第1図 位置図

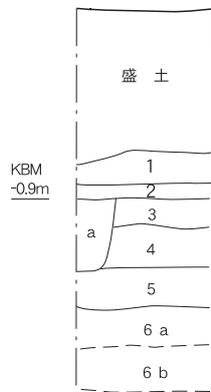
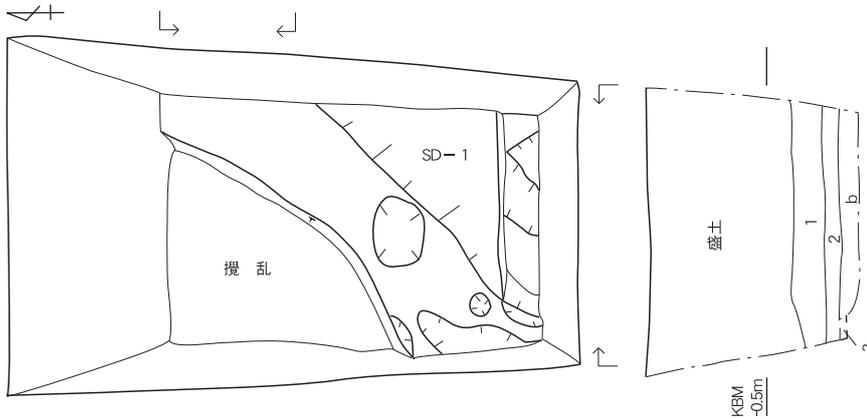


第2図 調査対象地



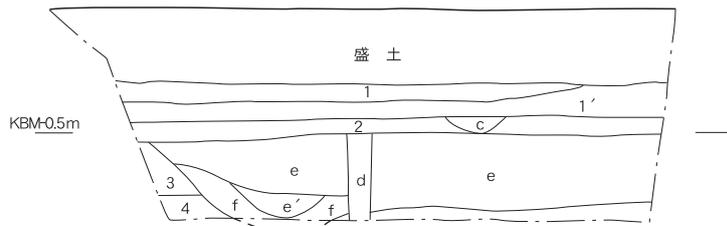
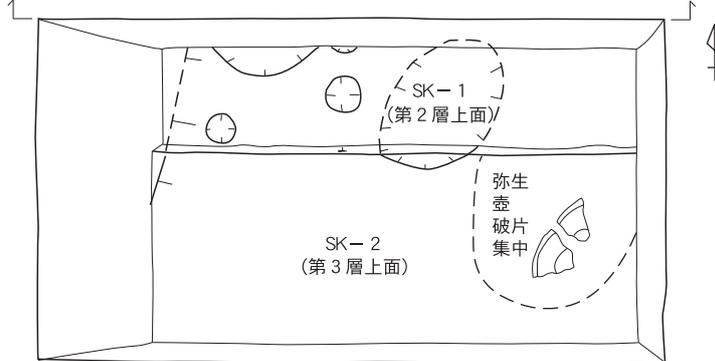
第3図 調査区位置図

第1区



- 1 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)細砂混シルト(マンガン斑少量)
- 1' オリーブ褐色(2.5Y4/3)細砂混シルト~黄灰色(2.5Y4/1)混
- 2 オリーブ褐色(2.5Y4/3)細砂混シルト(マンガン斑含む)
- 3 オリーブ褐色(2.5Y4/3)細砂混シルト(やや砂質強い)
- 4 オリーブ褐色(2.5Y4/6)細~中砂混シルト
- 5 オリーブ褐色(2.5Y4/4)極細~細砂混シルト
- 6 a 黄褐色(2.5Y5/6)細砂混シルト
- 6 b 黄褐色(2.5Y5/6)シルト
- a 暗灰黄色(2.5Y4/2)細砂混シルト(SP?)
- b 暗灰黄色(2.5Y4/2)細砂混シルト
- c オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト (SK-1)
- d 黄灰色(2.5Y4/3)シルト
- e 暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト 明黄褐色、黄灰色混 2に似る (SK-2)
- f 黄灰色(2.5Y4/1)シルト 炭混 (SK-2)

第2区



第4図 調査区平・断面図 (S=1/40)

④山吹丁遺跡第2次確認調査（調査一覧52）

〔経緯〕 店舗建設に伴う事前確認調査

〔場所〕 和歌山市本町4丁目90-1

〔面積〕 13.05㎡

〔概要〕 山吹丁遺跡（遺跡番号405）は、紀ノ川南岸の沖積低地に立地する。遺跡は南北約650m、東西約1000mの規模をもち、弥生時代から古墳時代の遺物散布地として周知されている（第1図）。

今回の調査地は、遺跡の南端部分において、事務所建設が計画されたことから、工事に先立ち、遺跡の内容確認のための調査を実施した（第2図）。

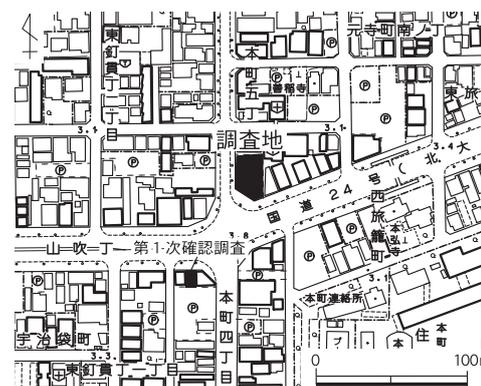
現地表面下、44～100cmが造成土及び過去の建物の解体時の攪乱層で、その下に第1区では近世～近代の製地層と考えられる第1～4層を確認した。第2区では攪乱のため第5層より上の層は確認できなかった。第1層は約20cmの明黄褐色シルト、第2層は約10cmの褐灰が混じる灰黄褐色微砂、第3層は炭が混じる約10cmの灰黄褐色細砂、第4層は約20cmの灰黄褐色細砂である。第5層は40～60cmのにぶい黄褐色細砂混シルト、第6層は22～60cmの灰黄褐色シルト、第7層は46～66cmの灰黄褐色粘質シルトである。第5～7層からは近世の平瓦、中世の土師器、瓦器、土鍋、須恵器、土師器など弥生時代後期末から近世までの遺物が出土した。第8層は明黄褐色粘質シルトで遺物を含まない無遺物層である。

遺構は第5層上面で落ち込み1基、ピット2基を検出した。出土遺物等から近世の遺構である可能性が想定される。弥生時代後期末から近世の遺物を包含する第5～7層に関しては、対象地の南側で実施した第1次確認調査では現在の地表面下、90～115cmで今回の第8層に対応する確認されており、そうした成果から判断すると遺構の埋土の可能性が想定される。

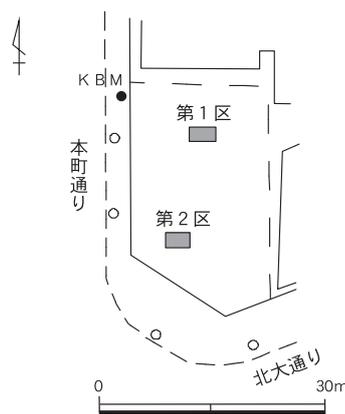
確認調査の結果、第5層上面で近世と考えられる遺構面を確認した。また、その遺構面を形成する第5層及び第6・7層に関しても遺構の埋土である可能性が高く、近世の遺物が出土していることから、対象地は近世にかなり大規模な掘削が行われているものと考えられる。そのため、第5～7層中に含まれる弥生時代後期末から中世の遺物から、対象地内にその時期の遺構が展開していた可能性は高いものの、中世以前の遺構面についてはすでに破壊されているものと考えられる。（大木）



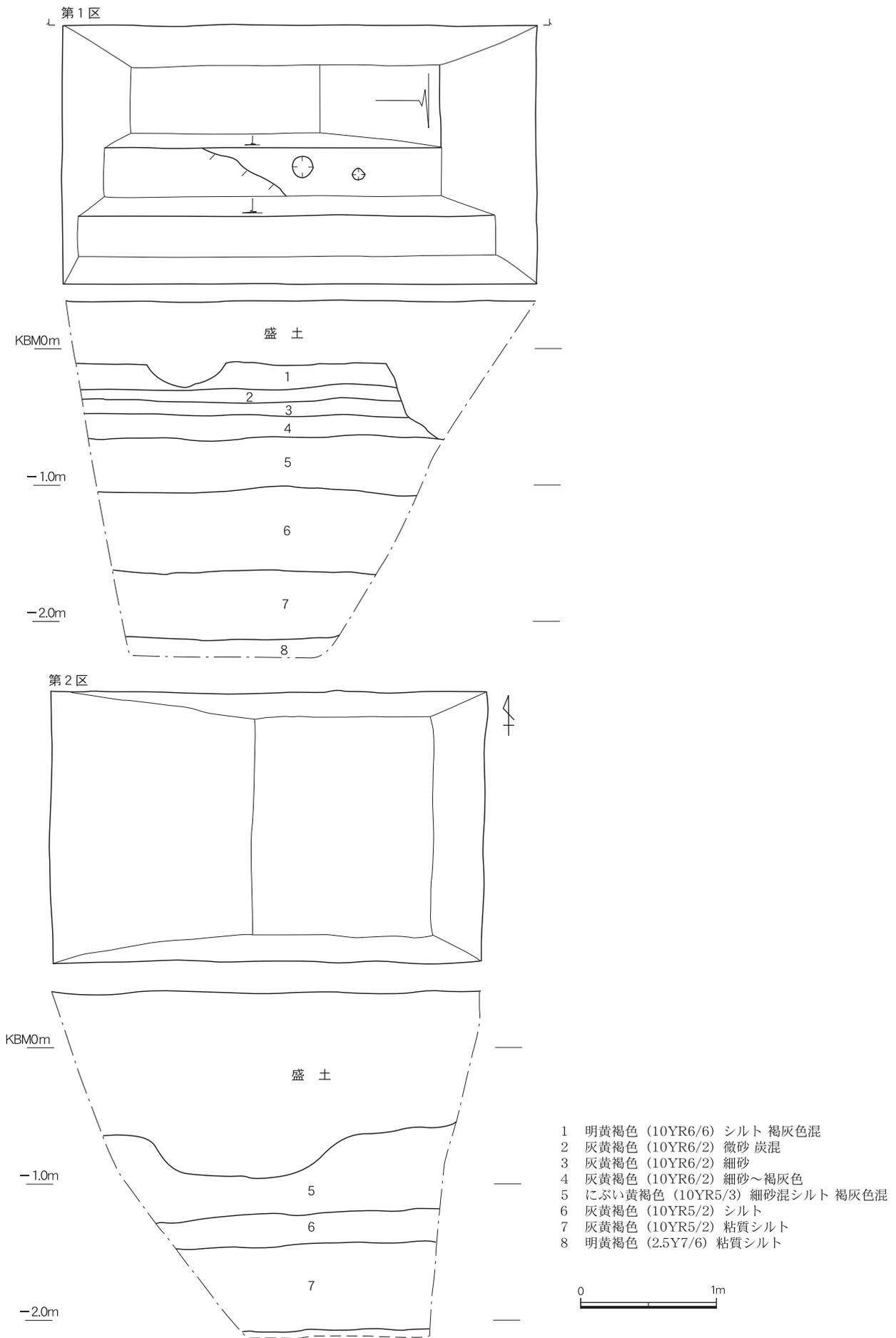
第1図 位置図



第2図 調査対象地



第3図 調査区位置図



第4図 調査区平・断面図 (S=1/40)

⑤田屋遺跡第11次確認調査・第13次発掘調査

(調査一覧54・60)

〔経緯〕 個人住宅建設に伴う発掘調査

〔場所〕 和歌山市田屋488-1

〔面積〕 第11次確認調査 15.2㎡

第13次発掘調査 116.4㎡

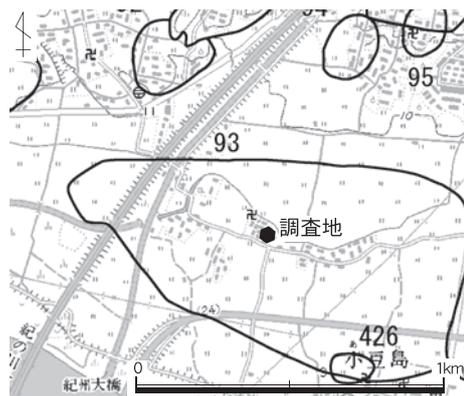
〔概要〕 田屋遺跡(遺跡番号93)は、紀ノ川北岸の沖積平野に立地する弥生時代から古墳時代にかけての集落遺跡である。

今回の調査は、遺跡の北部において個人住宅の建設が計画されたことに起因する。建設予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地である田屋遺跡に含まれることから、事業者から個人住宅建設計画の打診を受け、和歌山市教育委員会で事前に確認調査(田屋遺跡第11次確認)調査および、記録保存のための本発掘調査(田屋遺跡第13次発掘調査)を実施した(第1・2図)。

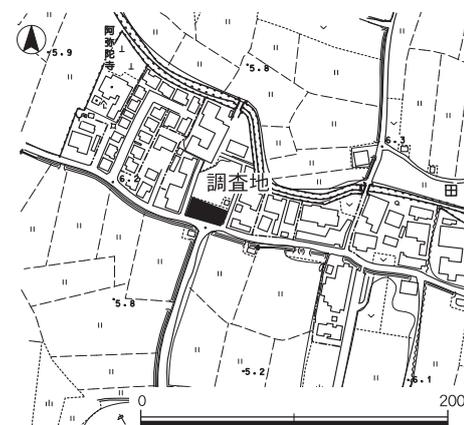
過去の調査においては、本調査地の南側で行われた田屋遺跡第5次～8次(財団法人和歌山市都市整備公社)、一般国道24号バイパス関連の調査(財団法人和歌山県文化財センター)では弥生時代後期から古墳時代後期にかけての竪穴建物約50棟のほか、掘立柱建物や溝、平安時代の掘立柱建物などが検出されている。

田屋遺跡周辺では東に隣接する西田井遺跡で大型建物やベッド状遺構等の弥生時代後期の建物の他、室町時代の掘立柱建物や井戸を検出した。また、北側の丘陵上に所在する府中Ⅳ遺跡や高井遺跡でも古墳時代の建物や平安時代の建物が多数検出されている。調査地は一般国道24号線から旧集落に入る入り口部分の個人住宅建設予定地である。調査区はL型擁壁が設けられる申請地の北端を長辺、東端を短辺とするL型に設定した(第3図)。

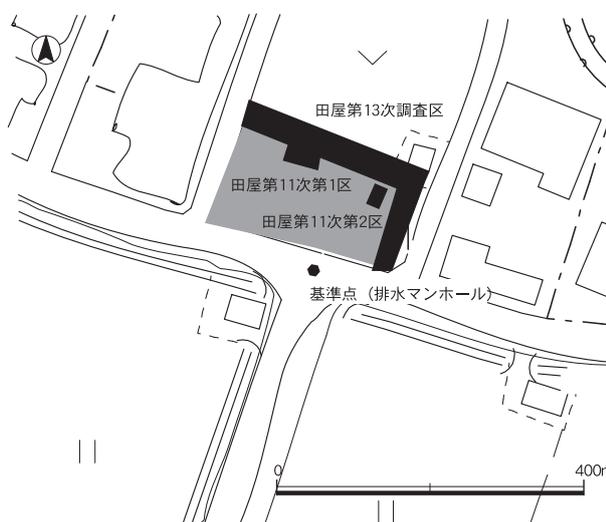
調査地の現況は造成地であり、第11次確認調査では造成土～近世の耕作土までを機械掘削とし、それ以下は機械掘削後人力による精査を行い遺構や遺物の有無を確認した。また、第13次発掘調査では、第11次確認調査の結果に基づき、第2層までを機械掘削とし、第3層を人力で掘削後、遺構検出面である第4層上面の精査をおこない、遺構や遺物の有無を確認した。土層堆積状況や遺構の検出状況については写真撮影、実測図を作成した。図面による記録は、平面図に関しては調査地に南面する市道を基準とし、断面図に関しては



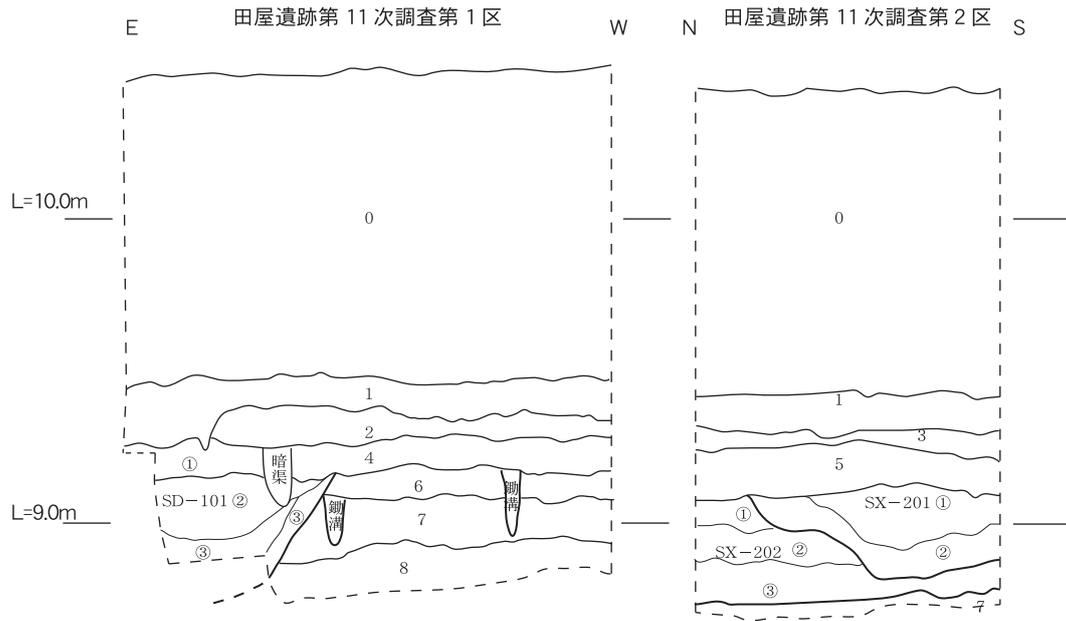
第1図 位置図



第2図 調査対象地



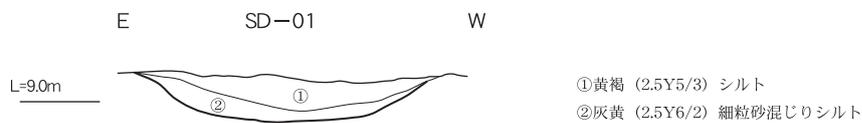
第3図 調査区位置図



- 0：造成土（0層）
- 1：現代耕作土（1層）
- 2：暗灰黄（2.5Y5/2）シルト中小偽礫（2層起源）を含む。
近世～近現代耕作土。（2層）
- 3：褐灰（10Y4/1）粘土質シルト
近世～近現代耕作土。（2層）
- 4：黄褐（2.5Y5/3）細粒砂混じりシルト
土器を少量含む。中世の遺物包含層。（3層）
- 5：灰（7.5Y5/1）細粒砂混じりシルトやや粘性が強い。
グライ化している。中世の遺物包含層。（3層）
- 6：黄褐（2.5Y5/3）シルト やや粘性が強い。
鉄分の錆着、酸化マンガン斑の沈着がみとめられる。
土器を少量含む遺物包含層。（4-1層）
- 7：黄褐（2.5Y5/6）シルト やや粘性が強い。
鉄分の錆着が強く、酸化マンガン斑の沈着が顕著にみられる。（4-2層）
- 8：オリーブ褐（2.5Y4/6）極細粒砂混じりシルト
ごく弱く暗色化している。（4-3層）

- 鋤溝：オリーブ褐（2.5Y4/6）細粒砂混じりシルト
- SD-101
 - ①浅黄（2.5Y7/3）シルト やや粘性が強い。
 - ②黄褐（2.5Y5/6）極細粒砂混じりシルト
 - ③オリーブ褐（2.5Y4/4）極細粒砂混じり粘土質シルト
- SX-201
 - ①灰（5Y5/1）粘土質シルト
 - ②灰（5Y6/1）粘土質シルト 中小偽礫を多く含む。
- SX-202
 - ①灰（5Y5/1）シルト
 - ②灰（5Y5/1）粘土質シルト
 - ③黄褐（2.5Y5/3）極細粒砂混じりシルト
やや粘性が強い。大小偽礫（4-2層起源）を含む。
- SD02：浅黄（2.5Y7/3）極細粒砂混じりシルト
- SD03：灰黄（2.5Y6/2）細粒砂混じりシルト
- SD04：暗灰黄（2.5Y5/2）粘土質シルト
- SK01：暗灰黄（2.5Y5/2）極細粒砂混じりシルト
- SX02：灰（5Y6/1）粘土質シルト 中小偽礫を含む。

第4図 調査区土層図（縦S=1/25 横S=1/50）



第5図 遺構断面図（縦S=1/25 横S=1/50）

南面する市道にある排水マンホールをL=10.08mとして実測を行った。壁面土層断面図と遺構平面図については1/20の縮尺を用いて、手測りによる実測を行った。また、土層の色調観察は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖2006年版』を用いた。

本調査地の基本層序は以下の通りである（第4図）。

第0層：現代の造成土である。

第1層：現代耕作土である。

第2層；層厚10～14cmで、中小偽礫（第3層起源）暗灰黄色シルトからなる近世～近現代の耕作土と考えられる。

第3層；層厚4～10cmで黄褐色細粒砂混じりシルトからなる。瓦器や土師器を少量含む中世主体の遺物包含層と考えられる。

第4層；第4層はやや粘性が強い黄灰～黄褐色シルトからなる4-1層と、鉄分の錆着や、酸化マンガン斑の沈着が顕著にみとめられ明黄褐～黄褐色極細粒砂混じりシルトからなる4-2層、ごく弱く暗色化したオリーブ褐色極細粒砂混じりシルトからなる4-3層に細分される。また、遺物の出土はごく少量であったが、土師器の小片が出土することから、第4層上面から切り込む遺構群は古墳時代～中世に相当すると考えられる。

調査の結果、第11次調査第4層上面で溝（SD-101）と落ち込み（SX-201・202）、鋤溝を、第13次調査第4層上面で溝（SD-01～04）および土坑（SK-01）、落ち込み（SX-01）鋤溝を検出した。北西側で検出した北西-南東に伸びる溝（SD01）は幅1.2～2.0m、深さ約0.3mで、埋土は黄褐色土からなる上層と土器を含む灰黄色土からなる下層に細分される。埋土大層からは土師器及び陶器が出土している。なお、第11次調査で確認したSD-101の続きであると考えられる。北東-南西に伸びるSD-02は幅0.8m以上、深さ0.1mで、浅黄色土の埋土からなる。SK-01は直径0.4m、深さ約0.2mで、暗灰黄色土の埋土からなる。SD-02およびSK-01は、SD-01に切られる。調査区の北東側で検出したSX-02は深さ約0.2mで中小偽礫を含む灰色粘質土の埋土からなる。近世の染付磁器が出土していることから、近世の落ち込みと考えられる。北-南に伸びるSD-03は幅0.6m、深さ0.3mで灰黄色土の埋土からなる。埋土から瓦器、土師器、須恵器が出土することから中世の溝と考えられる。SX-02に切られる東-西に伸びるSD-04は、幅0.7m、深さ0.1mで暗灰黄粘質土の埋土からなる。埋土から土師器や瓦器が出土することからSD-03同様、中世の溝と考えられる。SD-03の西側で東-西に伸びる鋤溝を、SX-02とSD-04の間で北-南に伸びる鋤溝を確認した。北-南に伸びる鋤溝はSX02に切られることから、SD-03、SD-04同様に中世の鋤溝であると考えられる。

発掘調査の結果、第4層上面において近世の落ち込みおよび中世の溝や土坑を検出した。本調査地の東側で行った田屋遺跡第14次確認調査（和歌山市教育委員会（2012））でも、中世の遺構が確認されていることから、本調査地を含む田屋遺跡の北側の高台部分には中世の集落が存在していたものと想定される。（清水）

【参考文献】

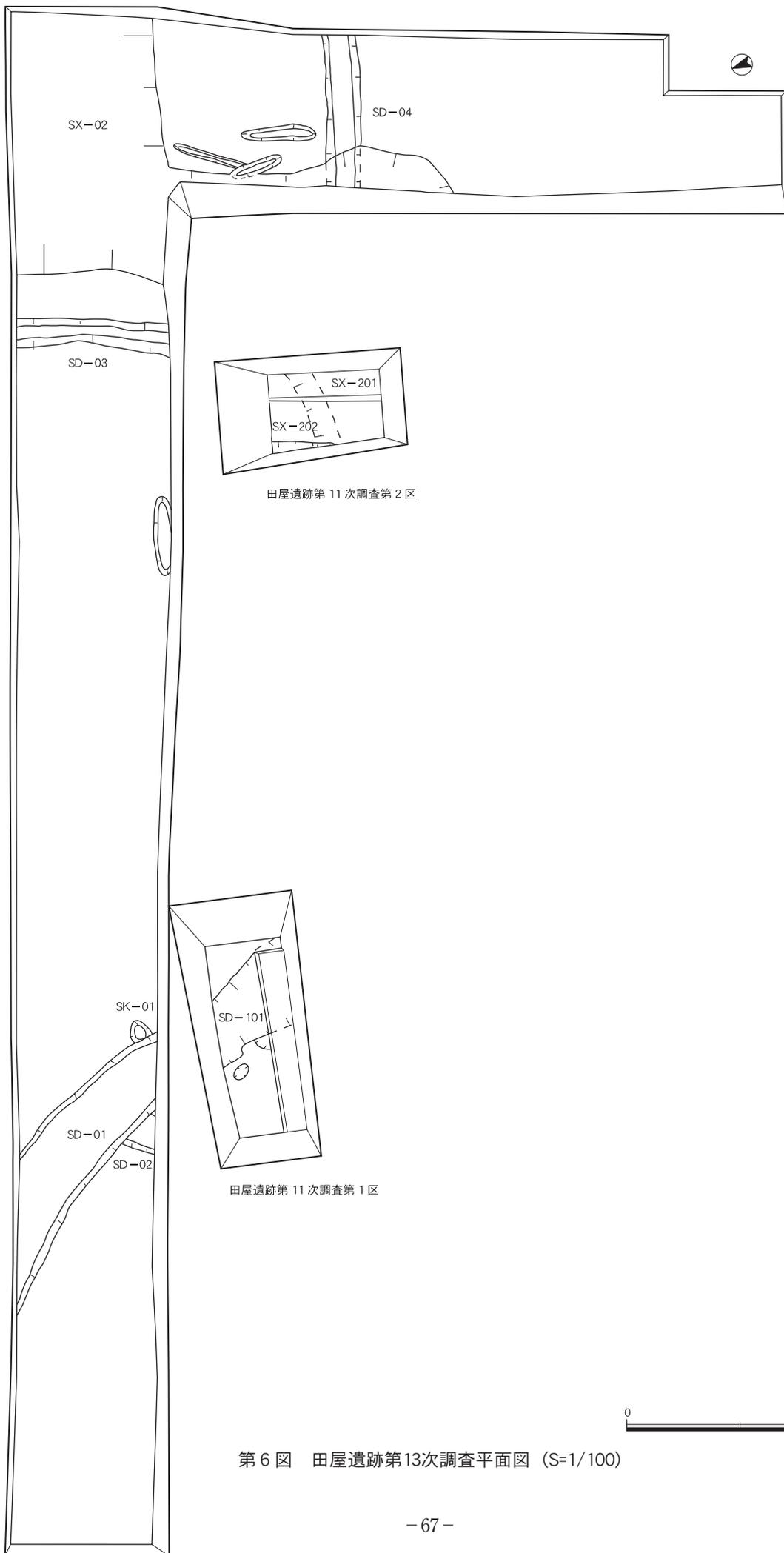
『田屋遺跡発掘調査報告書 -一般国道24号線（和歌山バイパス）建設工事に伴う発掘調査報告書-』1990 財団法人和歌山県文化財センター

『田屋・小豆島遺跡発掘調査報告書 -県紀伊停車場田井ノ瀬線改良工事に伴う発掘調査報告書-』2005 財団法人和歌山県文化財センター

『田屋遺跡調査概報』2005 財団法人和歌山市文化体育振興財団

『和歌山市内遺跡発掘調査概報 -平成21年度-』2011 和歌山市教育委員会

『和歌山市内遺跡発掘調査概報 -平成22年度-』2012 和歌山市教育委員会



第6図 田屋遺跡第13次調査平面図 (S=1/100)

②⑥田屋遺跡第12次確認調査（調査一覧26）

〔経緯〕住宅展示場建設のための確認調査

〔場所〕和歌山市田屋168～173他

〔面積〕66.04㎡

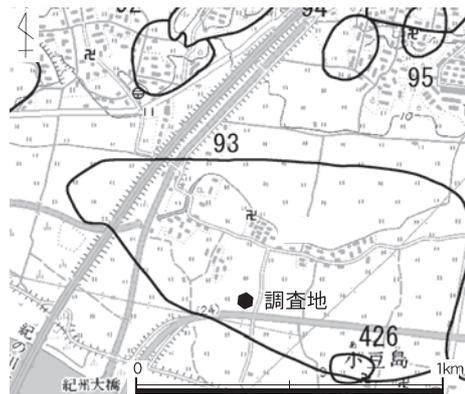
〔概要〕田屋遺跡（遺跡番号93）は、紀ノ川北岸の沖積平野に立地する弥生時代から古墳時代にかけての集落遺跡である。今回の調査は、遺跡の西部において住宅展示場の建設が計画されたことに起因する。

事業者から建設計画の打診を受け、埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行った結果、建設予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地である田屋遺跡に含まれることから、和歌山市教育委員会で遺構の有無や遺構検出面の深度等を確認するための確認調査を実施した（第1・2図）。過去の調査においては、本調査地の東側で行われた田屋遺跡第5次～8次（財団法人和歌山市都市整備公社）、一般国道24号バイパス関連の調査（財団法人和歌山県文化財センター）では弥生時代後期から古墳時代後期にかけての竪穴建物約50棟のほか、掘立柱建物や溝、平安時代の掘立柱建物などが検出されている。田屋遺跡周辺では東に隣接する西田井遺跡で大型竪穴建物やベッド状遺構等の弥生時代後期の竪穴建物の他、室町時代の掘立柱建物や井戸を検出した。また、北側の丘陵上に所在する府中Ⅳ遺跡や高井遺跡でも古墳時代の竪穴建物や平安時代の掘立柱建物が多数検出されている。

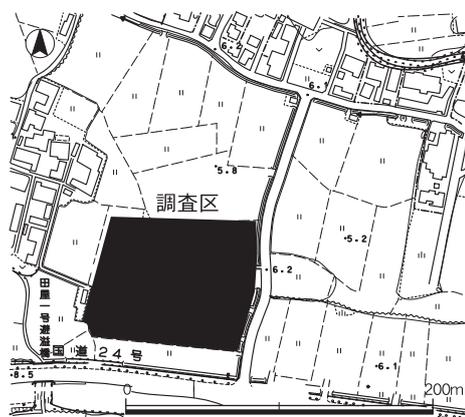
調査地は一般国道24号線に面する住宅展示場建設予定地である。L型擁壁および、浄化水槽、防火水槽、調整池が設けられるのは主に対象地の南の端と東側であることから、南側に第1～3区を、西側に第4区を、東側に第5・6区を設定した（第3図）。

調査地の現況は耕作地であり、現代耕作土、近世～近現代の堆積層までを機械掘削とし、それ以下は機械掘削後人力による精査を行い遺構や遺物の有無を確認した。土層堆積状況や遺構の検出状況については写真撮影、実測図を作成した。

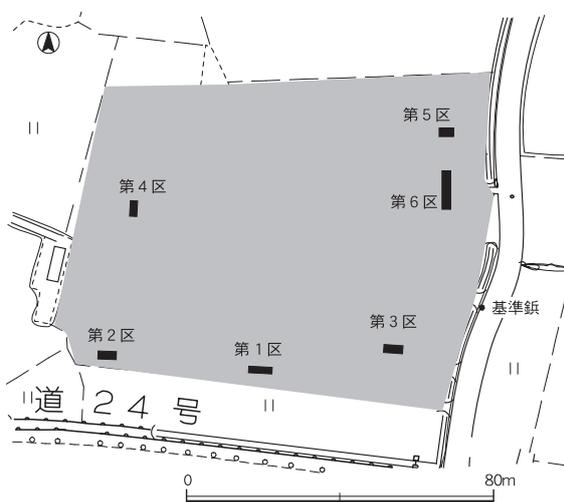
図面による記録は、平面図に関しては調査地に南面する市道を基準とし、断面図に関しては調査地に東面する用水路の肩にある金属鉾をL=6.246m（国道24号線内にある3級基準点（田屋遺跡第8次調査でも使用）から移設）として実測を行った。壁面土層断面図と遺構平面図については1/20の縮尺を用いて、手測りによる実測を行った。また、土層の色調観察は、農業水産省農林水産技術



第1図 位置図



第2図 調査対象地



第3図 調査区配置図

会議事事務局監修『新版標準土色帖2006年版』を用いた。

本調査地の基本層序は以下の通りである（第4図）。

第0層；近現代耕作土である。第1～3区は旧耕作土である0-1層と、床土である0-2層に細分される。

第1層；層厚20～40cmで、第2～6層に細分される（各調査区における第1層内の細分は異なる）。近世の耕作土と考えられる。

第2層；層厚4～14cmのやや粘性が強い浅黄～にぶい黄色シルトからなる2-1層と、層厚10～20cmの灰黄～黄褐色シルトからなる2-2層に細分される。

第3層；層厚20～30cmの鉄分の銹着がみられ、酸化マンガン斑の沈着が顕著なぶい黄色シルトからなる土器を含む3-1層と、層厚10～30cmの鉄分の銹着がみられる浅黄～にぶい黄色極細粒砂混じりシルトからなる3-2層、層厚10cm以上の鉄分の銹着がみられ、酸化マンガン斑の沈着がみとめられる。なお、第3-1層からはごく少量であったが、土師器や須恵器の小片をはじめとする遺物が出土している。

第4層；層厚10cm以上の黄褐色粘土質シルトからなる。

第5層；灰～オリーブ褐色シルトからなり、1～4層に細分される。第5区で確認でき、谷状地形の堆積の可能性が考えられる。なお、第6区で確認したSX-601はこの谷状地形の肩部に相当するものと考えられる。

遺構に関しては、各調査区の第3層上面で遺構を確認した（第5図）。第1区では溝（SD-101）および土坑（SK-101～103、105、106）と落ち込み（SX-101）を、第2区では住居址（SI-201）を、第3区では溝（SD-301）および土坑（SK-301）を、第4区では溝および住居址（SI-401・402）を確認した。また、第6区では第3層上面で落ち込み（SX-601）に切られる住居址（SI-601）を確認した。なお、第6区で確認したSX-601は5区で確認した谷状地形の肩部であると考えられる。遺物は第2層からは土師器や瓦器が、第3層からは土師器や須恵器が少量出土した。なお、SI-401からは、MT15相当の須恵器坏蓋やV様式系甕等（第6図）が、SD-301からは土師器の高杯の脚部が出土している。

確認調査の結果、第3層上面において古墳時代を中心とする遺構群を検出した。第3-1層も希薄な包含層ではあるが、第3-1層下面では明確な遺構面の形成は確認できなかった。今回の調査の結果、第1～4区および第6区で住居址の可能性が高い遺構をはじめとする遺構群を確認できただけでなく、地形が高くなる本調査地の西側にも遺構が密に展開するものと考えられる。本調査地の東側（田屋遺跡第5次～8次（財団法人和歌山市都市整備公社））および、南側（一般国道24号バイパス関連の調査（財団法人和歌山県文化財センター））でも弥生時代～古墳時代の集落が確認されていることから、本調査地一帯は古墳時代の大規模な集落域であるものと想定される。（清水）

【参考文献】

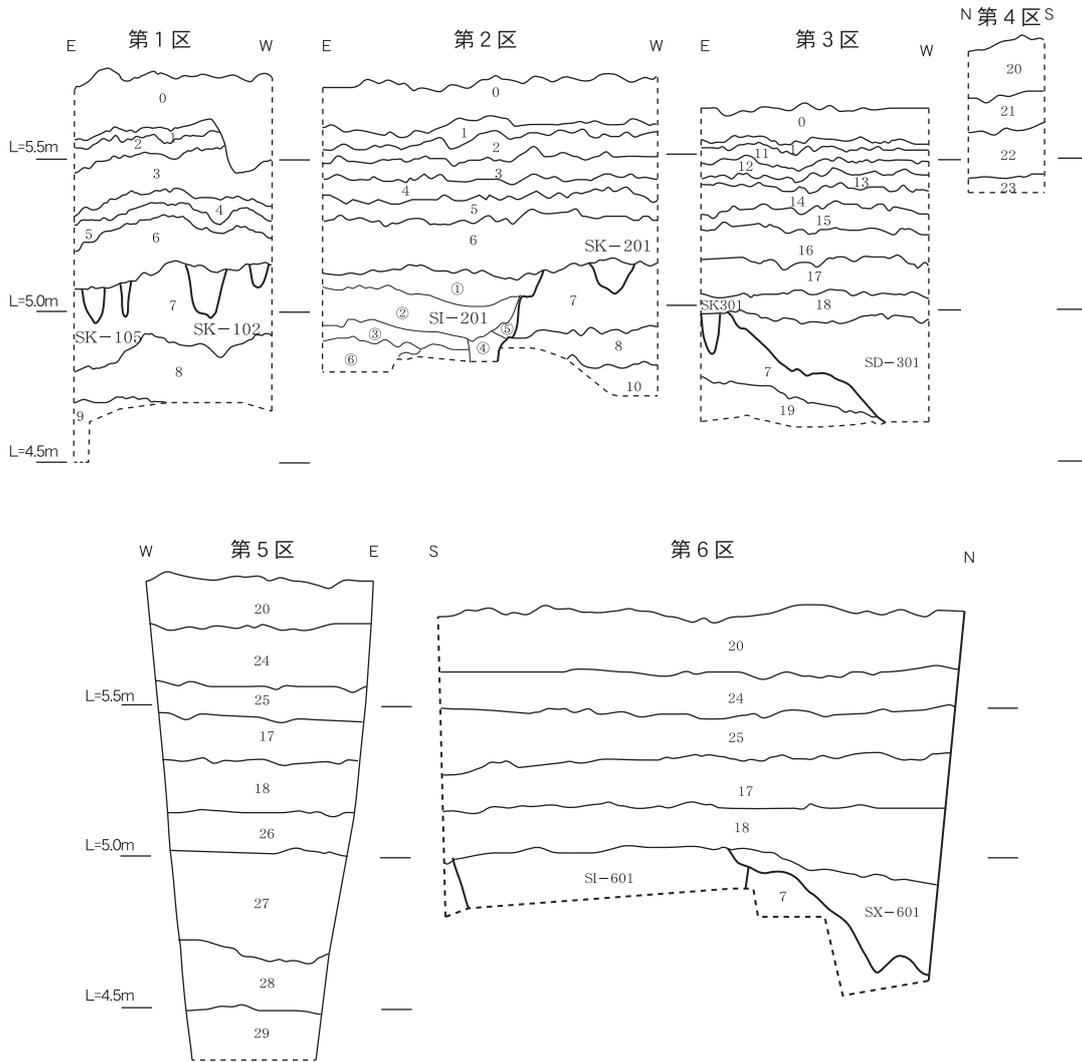
『田屋遺跡発掘調査報告書 ―一般国道24号線（和歌山バイパス）建設工事に伴う発掘調査報告書―』1990 財団法人和歌山県文化財センター

『田屋・小豆島遺跡発掘調査報告書 ―県紀伊停車場田井ノ瀬扇改良工事に伴う発掘調査報告書―』2005 財団法人和歌山県文化財センター

『田屋遺跡調査概報』2005 財団法人和歌山市文化体育振興財団

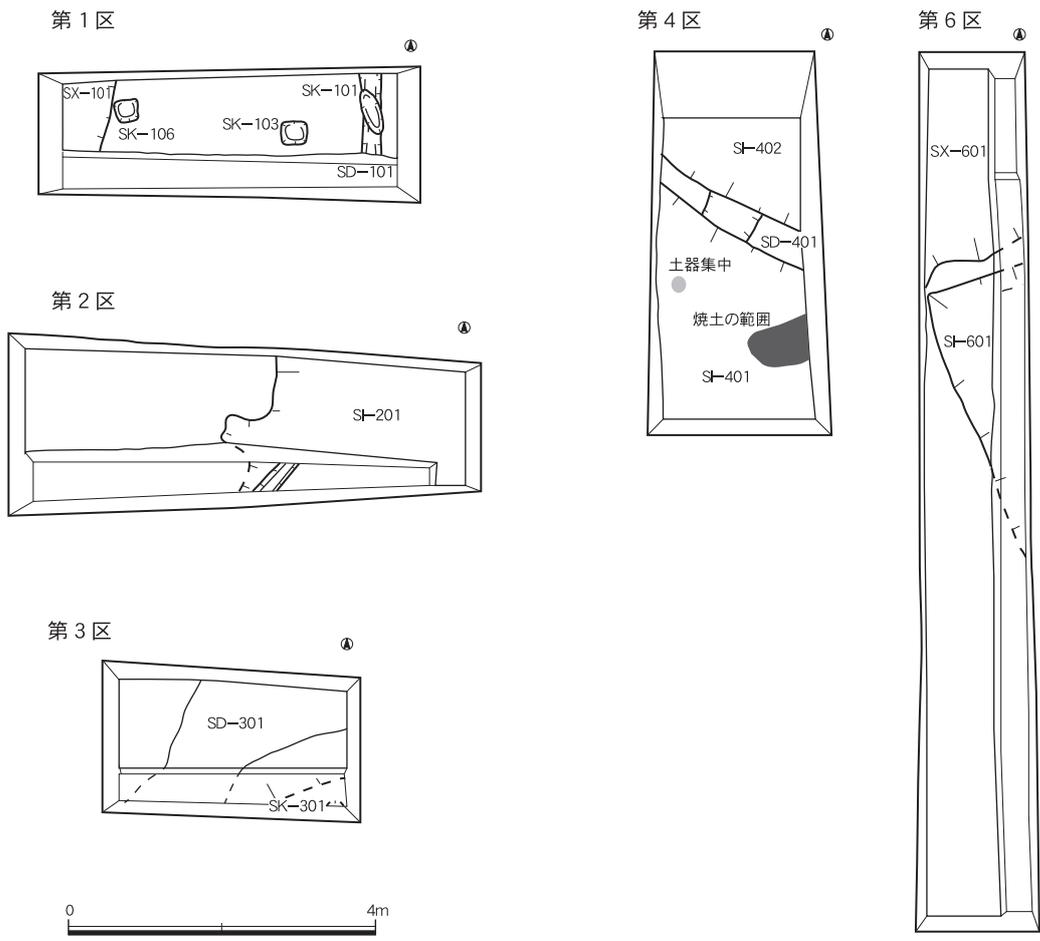
『和歌山市内遺跡発掘調査概報 ―平成21年度―』2011 和歌山市教育委員会

『和歌山市内遺跡発掘調査概報 ―平成22年度―』2012 和歌山市教育委員会

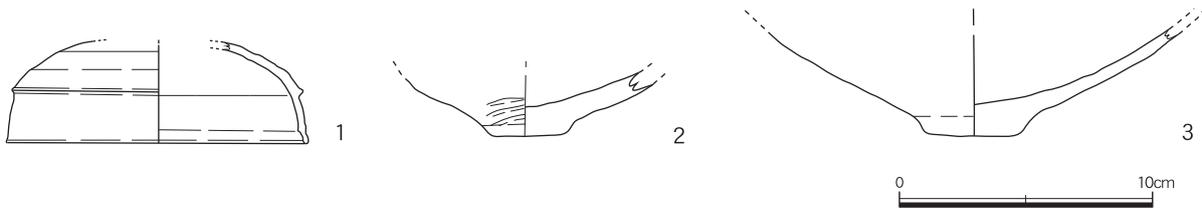


- 0 : 近現代耕作土。(0-1層)
- 1 : オリーブ褐 (2.5Y4/4) 極細粒砂混じり粘土質シルト
近現代耕作土。床土。(0-2層)
- 2 : 灰黄 (2.5Y6/2) 極細粒砂混じりシルト
ややシルトが強い。(1-1層)
- 3 : 灰黄 (2.5Y6/2) シルト
やや粘性が強い。(1-2層)
- 4 : 明黄褐色 (10YR6/6) 粘土質シルト
鉄分の錆着がみられる。床土。(1-3層)
- 5 : にぶい黄 (2.5Y6/3) シルト
やや粘性が強い。炭化物を含む (2-1層)
- 6 : 黄褐 (2.5Y5/3) シルト (2-2層)
- 7 : にぶい黄 (2.5Y6/3) シルト
鉄分の錆着、酸化マンガン斑の沈着が顕著
にみられる。土器を少量含む。(3-1層)
- 8 : にぶい黄 (2.5Y6/4) シルト
やや粘性が強い。鉄分の錆着がみられる。(3-2層)
- 9 : 黄褐 (2.5Y5/6) 粘土質シルト (4層)
- 10 : 黄褐 (2.5Y5/6) シルト。やや粘性が強い。
鉄分の錆着、酸化マンガン斑の沈着がみとめられる。(3-3層)
- 11 : にぶい黄 (2.5Y6/4) 極細粒砂混じりシルト (1-1-1層)
- 12 : 浅黄 (2.5Y7/4) シルト (1-1-2層)
- 13 : にぶい黄 (2.5Y6/4) シルト やや粘性が強い。(1-2-1層)
- 14 : 浅黄 (2.5Y7/4) シルト やや粘性が強い。(1-2-2層)
- 15 : にぶい黄 (2.5Y6/3) シルト (1-2-3層)
- 16 : 明黄褐 (2.5Y6/8) シルト やや粘性が強い。
鉄分の錆着がみられる。(1-3層)
- 17 : 浅黄 (2.5Y7/3) シルト やや粘性が強い。
酸化マンガン斑の沈着がみられる。
極弱く暗色化している。(2-1層)
- 18 : 灰黄 (2.5Y6/2) シルト (2-2層)
- 19 : 浅黄 (2.5Y7/4) シルト (3-2層)
- 20 : 現代耕作土。(0層)
- 21 : 暗灰黄 (2.5Y5/2) 細~極細粒砂混じりシルト
やや砂質が強い。中小偽礫を含む。客土。(1'-1層)
- 22 : 黄褐 (2.5Y5/3) 極細粒砂混じりシルト
大小偽礫を多く含む。客土。(1'-2層)
- 23 : オリーブ褐 2.5Y4/6) シルト (3層)
- 24 : 灰黄 (2.5Y6/2) 細粒砂混じりシルト
酸化マンガン斑の沈着がみられる。(1-a層)
- 25 : 浅黄 (2.5Y7/3) 細粒砂混じりシルト
酸化マンガン斑の沈着がみられる。(1-b層)
- 26 : オリーブ褐 (2.5Y4/6) シルト (5-1層)
- 27 : 黄褐 (2.5Y5/3) シルト (5-2層)
- 28 : 灰 (5Y6/1) シルト 大小偽礫を含む。(5-3層)
- 29 : 灰 (5Y5/1) シルト (5-4層)
- 鋤溝 : 暗灰黄 (2.5Y5/2) 細粒砂混じり粘土質シルト
- SK-102 : 黄褐 (2.5Y5/3) 粘土質シルト
- SK-105 : 黄褐 (2.5Y5/3) 粘土質シルト
土器をわずかに含む。
- SK-201 : オリーブ褐 (2.5Y4/6) シルト
- SI-201
①オリーブ褐 (2.5Y4/4) シルト
土器を含む。レンズ状堆積。
②オリーブ褐 2 (5Y4/3) シルト 土器を含む。
小偽礫を多く含む。遺構廃絶後の埋土か?
③にぶい黄 (2.5Y6/4) シルト 大小偽礫を含む
土器を含む。遺構廃絶後の埋土か?
④暗灰黄 (2.5Y4/2) シルト 壁溝の埋土か?
⑤オリーブ褐 (2.5Y4/3) シルト
中小偽礫を含む。壁際の埋土。
⑥オリーブ褐 (2.5Y4/4) シルト 土器を含む。
- SD-301 : 浅黄 (2.5Y7/3) 粘土質シルト
- SK-301 : 黄褐 (2.5Y5/3) 細粒砂混じりシルト
- SI-601 : オリーブ褐 (2.5Y4/4) 中~細粒砂混じりシルト
- SX-601 : オリーブ褐 (2.5Y4/3) 細粒砂混じりシルト

第4図 調査区土層図(縦S=1/25 横S=1/100)



第5図 調査区平面図 (S=1/100)



第6図 遺物実測図 (S=1/3)

⑦津秦Ⅱ遺跡第6次確認調査（調査一覧58）

〔経緯〕 宅地造成に伴う事前確認調査

〔場所〕 和歌山市秋月507番3

〔面積〕 29.56㎡

〔概要〕 津秦Ⅱ遺跡（遺跡番号407）は、紀ノ川下流域の南岸に立地し、南北約400m、東西約300mの範囲で古墳～奈良時代の遺物散布地として周知される。遺跡のほぼ中央で行われた第3・4次調査では、鎌倉～室町時代の粘土採掘坑・溝等の遺構が発見された。

今回の発掘調査は、遺跡の北側の水田で宅地造成が計画されたことから、工事に先立ち、遺跡の内容確認のために調査を実施した。

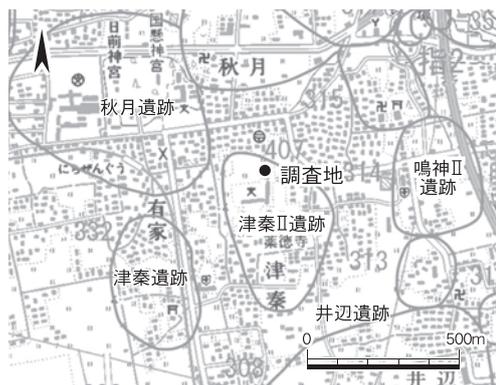
調査地の現況は水田であった。水準は、対象地南東の市道路肩を基準として、基準との比高差で示した。調査地周辺の標高は4.1m前後である。

調査区の基本層序は、第1層 黒褐色細砂混シルト（耕作土）、第2層 暗灰黄色細砂混シルト（床土）、第3・4層 暗灰黄色～黄褐色細砂混シルト、第5～8層 暗灰黄色～オリーブ褐色シルト、第9層 暗灰黄色シルト、第10層 灰色細砂層である。

第3・4層は出土遺物がないが、検出状況からみて中世以降の耕作土の可能性はある。第5～8層以下は、中世以前の遺物包含層であり、その上面は現地表下0.4～0.5mである。南に向かって落ち込み、南側の第4区では厚く堆積し、現地表下0.9mで第9層上面となる。北側の第1～3区では、現地表下0.6～0.7mで第10層上面となる。第9層については、遺物を含まないやや安定したシルト層であるが、基盤となる層であるか、それとも第5～8層と同様に南側に落ち込む堆積層であるかは判断できなかった。第10層は遺物を含まない旧流路の堆積層であるが、調査地の北に向かって展開するのか、それとも南の第9層の下に展開するかは確認できなかった。

調査区内では、遺構は検出されなかった。第5～8層からは土師器片・須恵器片・瓦器片が出土した。古代～中世にかけての堆積と考えられる。南に向かってやや落ち込んでおり、南側の第4区では厚く堆積し、有機質腐植土と思われる黒褐色シルトが混じる。第4区の南端では土器細片が多く出土したが、北側にいくほど希薄となり、第1区では遺物は出土しなかった。

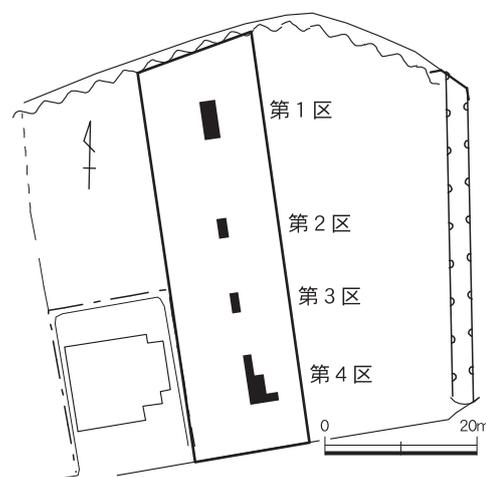
調査の結果、対象地周辺には遺構は展開しないと考えられる。現況では調査地の北西から南東にかけて水路が存在し、旧地形はこの水路に向かってやや谷状となる可能性がある。（富永）



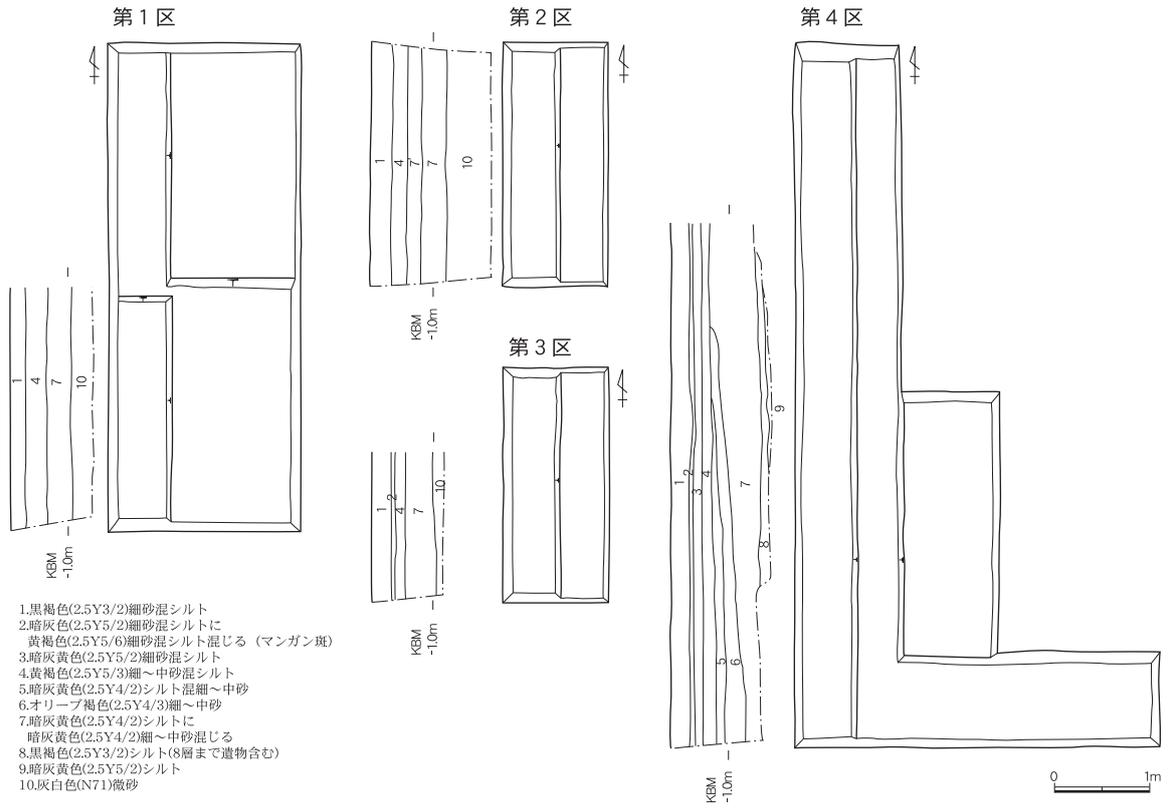
第1図 位置図



第2図 調査対象地



第3図 調査区位置図



第4図 調査区平面図・土層図 (S=1/80)

⑳和歌山城跡第15次確認調査（調査一覧61）

〔経緯〕 事務所に伴う事前確認調査

〔場所〕 和歌山市岡山丁36

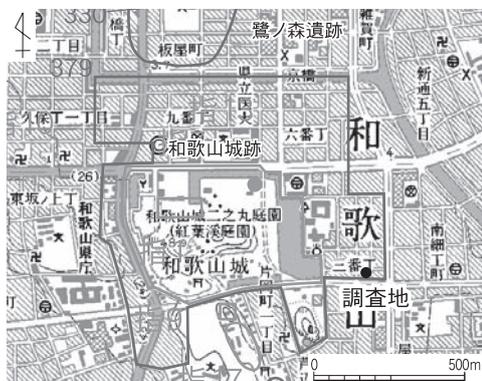
〔面積〕 10.57㎡

〔概要〕 和歌山城跡（遺跡番号379）は、紀ノ川南岸の平野部に存在する独立丘陵上に築かれた和歌山城を中心とする遺跡である（第1図）。

今回の調査地は、和歌山城三の丸の外堀に面した諸土屋敷地において、ビルの建て替え工事が計画された。調査は基礎解体により遺構が破壊される可能性が想定されたため、上屋及び基礎の一部が解体された後、既存基礎の影響が少ない部分について、遺跡の内容確認のために調査を実施した。

現地表面下約70～90cmが既存建物建設時の攪乱層で、その下に約30cmの灰黄褐色細砂（第1層）、26～40cmにぶい黄褐色シルト（第2層）、それ以下は褐灰色シルト混粘土（第3層）が堆積する。第2・3層は第2区ではやや砂質が強く第1区とは状況が異なる。第1層からは近世の土師器を含む土師器小片、第2層からは近世以前と考えられる土師器小片が出土した。第3層は無遺物層である。

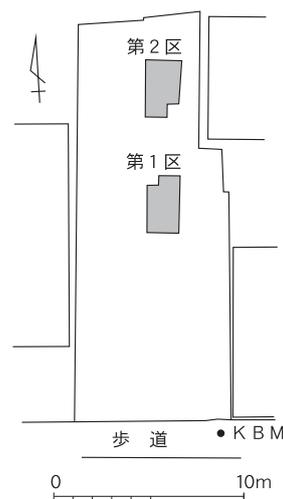
確認調査の結果、第1層上面及び第2層上面で遺構を確認した。第1層上面では土坑4基（SK-1・2・4・5）、第2層上面では断面により土坑1基（SK-3）を確認した。一部遺構掘削を実施したSK-1からは近世土師器、近世瓦、SK-4からは近世土師器小片が出土した。そのため、第1層上面で検出した遺構は近世の遺構の可能性が考えられる。第2層上面の遺構に関しては、埋土が第1層と類似するため、第1遺構面と同様に近世の遺構の可能性が高いと考える。（大木）



第1図 位置図

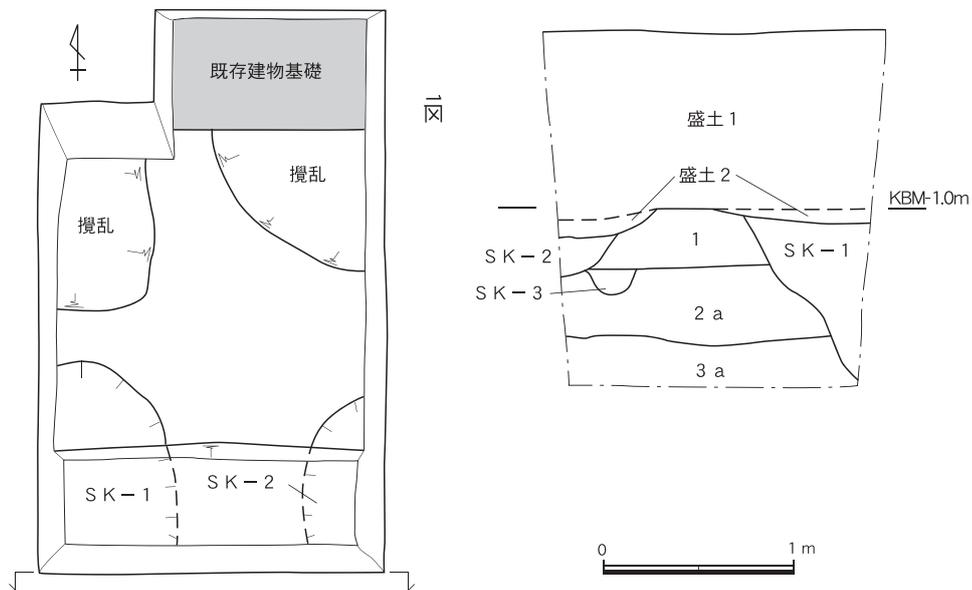


第2図 調査対象地

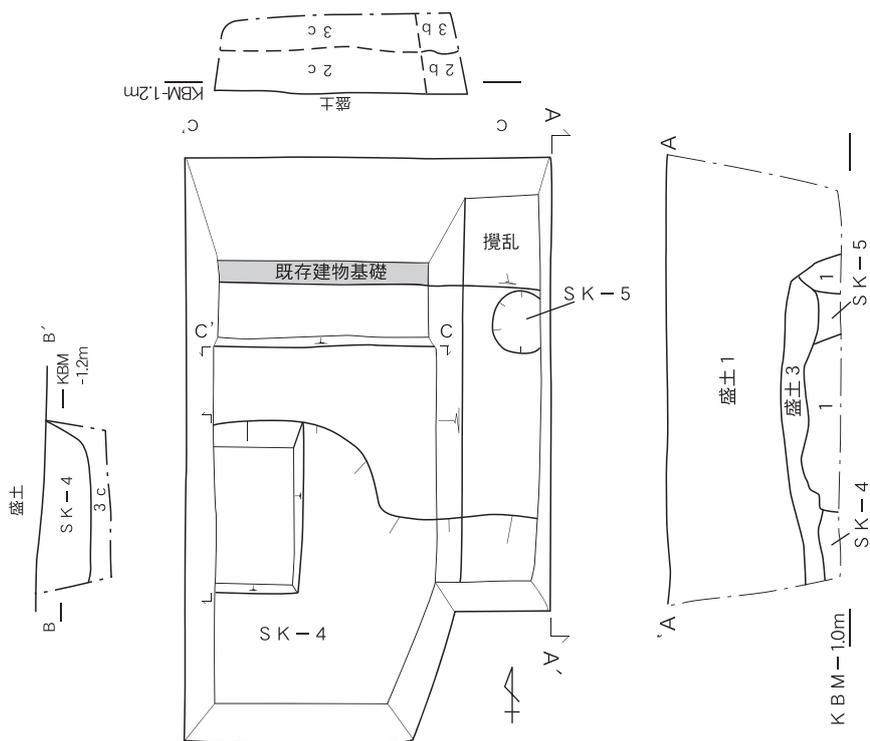


第3図 調査区位置図

第1区



第2区



- | | |
|--------------------------------|--------------------------------|
| 1 灰黄褐色 (10YR6/2) 細砂(マンガン含)砂質強い | SK-1 褐灰色 (10YR6/1) 細砂混シルト |
| 2 a にぶい黄褐色 (10YR5/3) シルト(やや粘質) | SK-2 褐灰色 (10YR6/1) 細砂混シルト |
| 2 b 2 a より砂質強い | SK-3 灰黄褐色 (10YR6/2) 細砂 |
| 2 c にぶい黄色 (2.5Y6/4) 微砂 | SK-4 灰色 (5Y6/1) 細砂 |
| 3 a 褐灰色 (10YR4/1~4/2) シルト混粘土 | SK-5 灰オリーブ 5Y 細砂 (オリーブ黄色ブロック混) |
| 3 b 3 a より砂質強い | |
| 3 c にぶい黄色 粘質シルト | |

第4図 調査区平・断面図 (S=1/40)

㊸ 秋月遺跡第13次確認調査・第14次発掘調査

(調査一覧62、68)

〔経緯〕 個人住宅建設に伴う事前確認調査
及び本発掘調査

〔場所〕 和歌山市秋月566番2

〔面積〕 第13次：9.60㎡、第14次：55.00㎡

〔概要〕 秋月遺跡(遺跡番号331)は、紀ノ川下流域の南岸に立地し、紀伊一ノ宮である日前宮を中心として南北約600m、東西約600mの範囲で、弥生時代から平安時代の遺跡として知られる。これまでに市関係で市立日進中学校内を中心として12次にわたる発掘調査が行われた。また県関係で県立向陽高等学校・中学校内を中心として、9次にわたる発掘調査が行われた。これらの調査により、弥生時代前期の土坑、古墳時代前期の竪穴住居、古墳時代前期～後期の古墳、日前宮の西に存在したとされる貞福寺に関わる古代～中世の遺構等が発見された。

今回の発掘調査は、遺跡の南側の宅地内で個人住宅建設が計画されたことから、工事に先立ち、遺跡の内容確認のために調査を実施し(第13次)、地盤改良部分について記録保存のための発掘調査を実施した(第14次)。水準はT.P.+値とし、座標値は世界測地系の座標を用いた。

調査地の現況は造成地であった。調査区の基本層序は、約0.5m厚の盛土以下、第1層 青灰色細砂混シルト(近現代耕作土、グライ化)、第2層 明黄褐色細砂混シルト(床土)、第3層 黄灰色細砂混シルト(古墳時代～中世の遺物包含層)、第4層 黄灰～暗灰黄色細砂混シルト(落込み埋土)、第5層 にぶい黄色～黄褐色微砂質シルト(地山)である。第3層は中世以降の堆積と考えられる。第4層は古墳～中世の遺物包含層で、SK-28の最終堆積であり、SK-28以外では削平され残存しない。第5層は、均質で安定した黄褐色系シルト層で、周辺の基盤となる土層である。

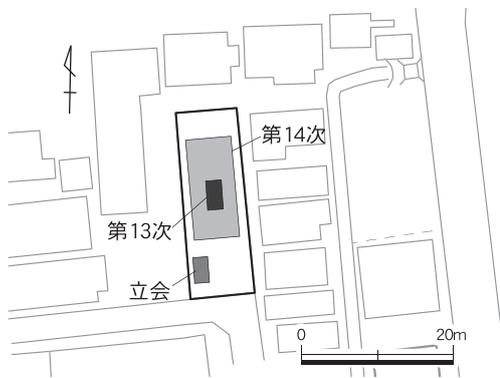
現地表面から約0.8m下で、標高3.3m前後の第5層上面で、古墳時代初頭～前期と平安～鎌倉時代の遺構を検出した。



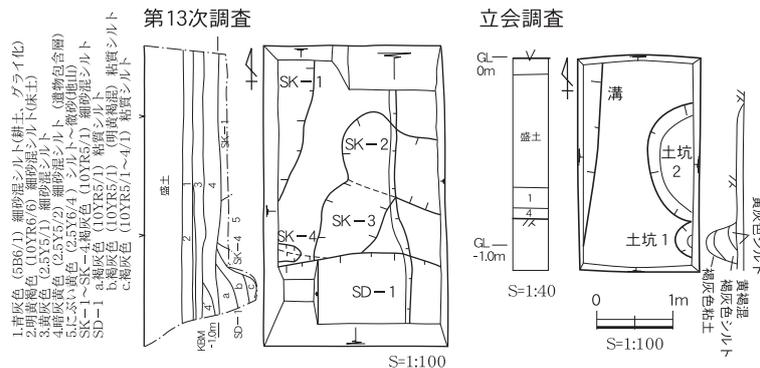
第1図 位置図



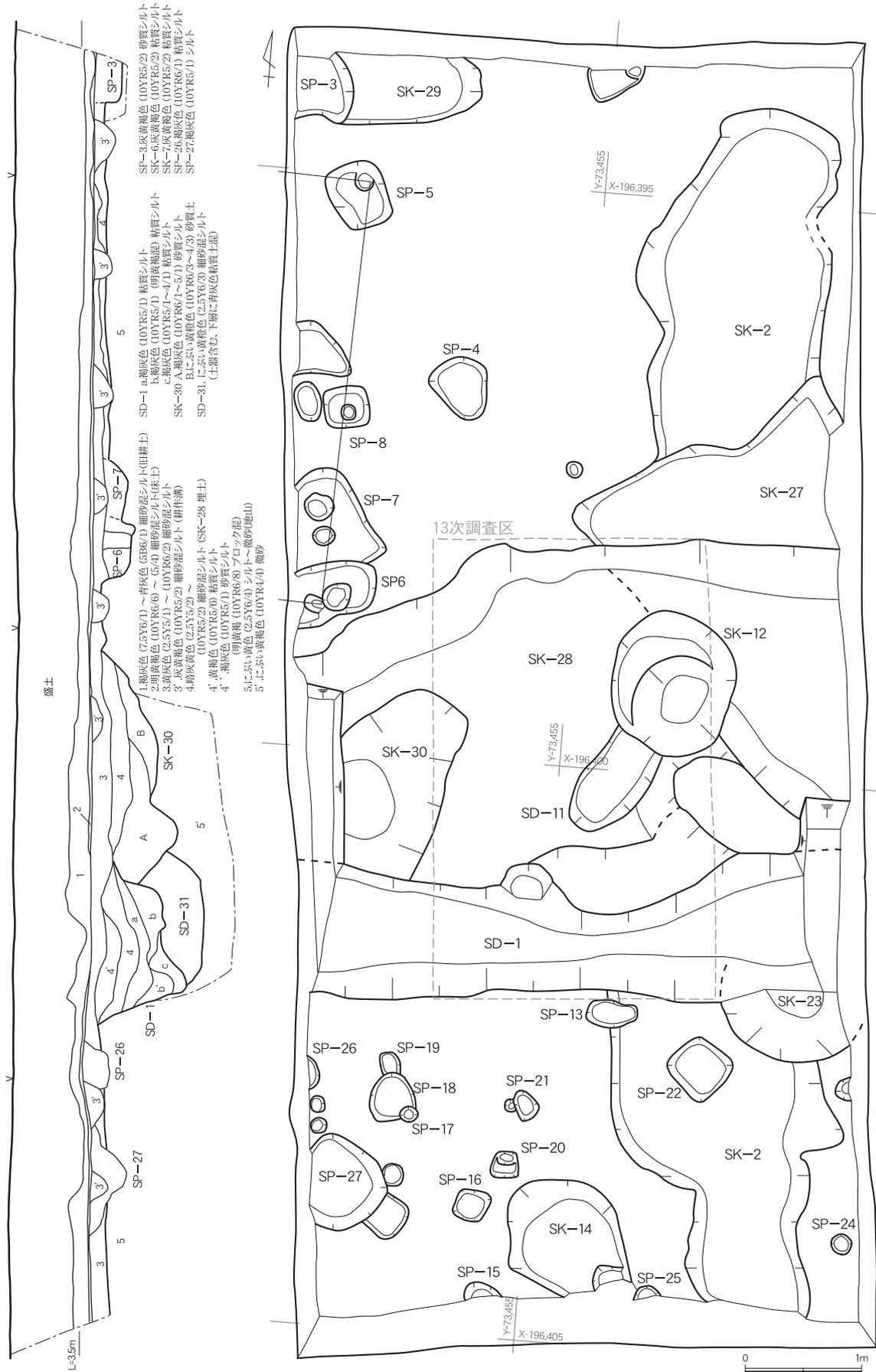
第2図 調査対象地



第3図 調査区位置図



第4図 第13次・立会調査区平面図・土層図

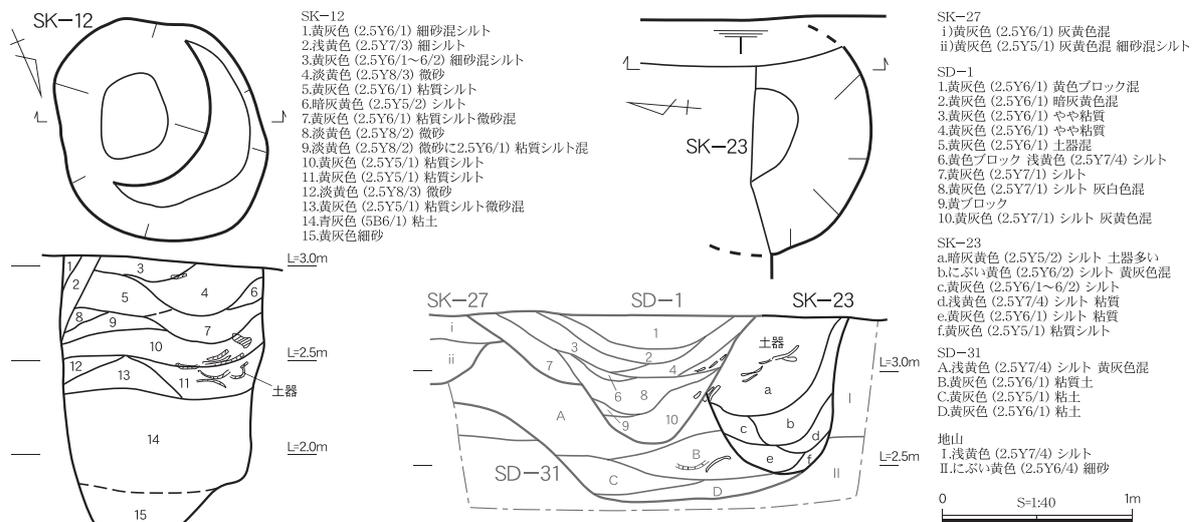
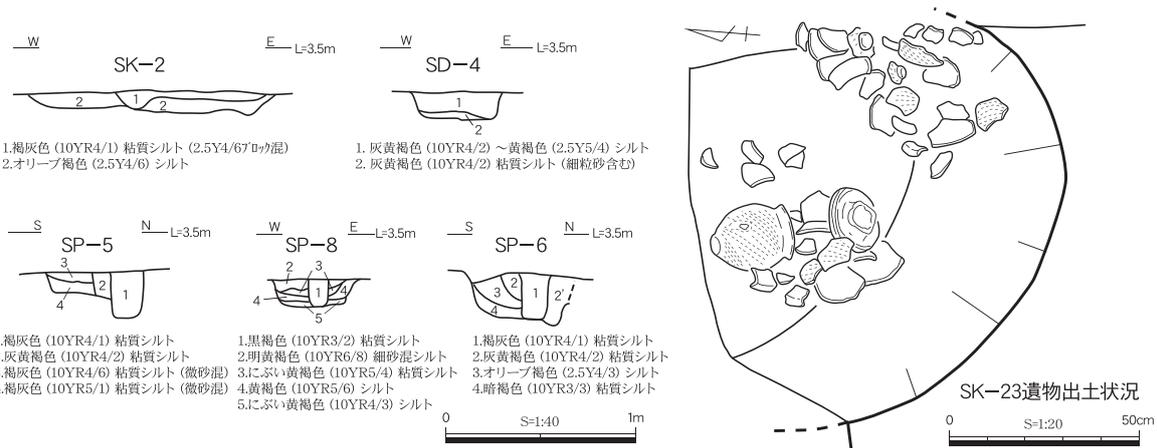


SP-3 灰緑褐色 (10YR5/2) 砂質シルト
 SK-6 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質シルト
 SK-7 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質シルト
 SP-26 褐色 (10YR5/1) 粘質シルト
 SP-27 褐色 (10YR5/1) シルト

SD-1 a 褐色 (10YR5/1) 粘質シルト
 b 褐色 (10YR5/1) (明黄褐色) 粘質シルト
 c 褐色 (10YR5/1) (10YR5/1) 粘質シルト
 SK-30 A 褐色 (10YR5/1) 粘質シルト
 B には、S-V 黄褐色 (10YR5/3) 砂質土
 SD-31 には、S-V 黄褐色 (10YR5/3) 粘質シルト
 (上部黄褐色、下部に黄褐色粘質土層)

1 褐色 (7.5Y6/1) ~ 黄褐色 (5Y6/1) 細砂質シルト (旧耕土)
 2 明黄褐色 (10YR6/6) ~ (5/4) 細砂質シルト (赤土)
 3 黄褐色 (2.5Y5/1) ~ (10YR6/2) 細砂質シルト
 4 黄褐色 (10YR5/2) 細砂質シルト (耕作層)
 4' 黄褐色 (2.5Y5/2) 細砂質シルト (SK-28 埋土)
 4'' 黄褐色 (10YR5/2) 粘質シルト
 4''' 褐色 (10YR5/1) 粘質シルト
 5 には、S-V 黄褐色 (2.5Y6/4) シルト ~ 微砂質土山
 5' には、S-V 黄褐色 (10YR4/4) 微砂

第5図 第14次調査区平面図・土層図 (S=1/50)



第6図 遺構平面図・断面土層図

〈古墳時代初頭～前期の遺構〉

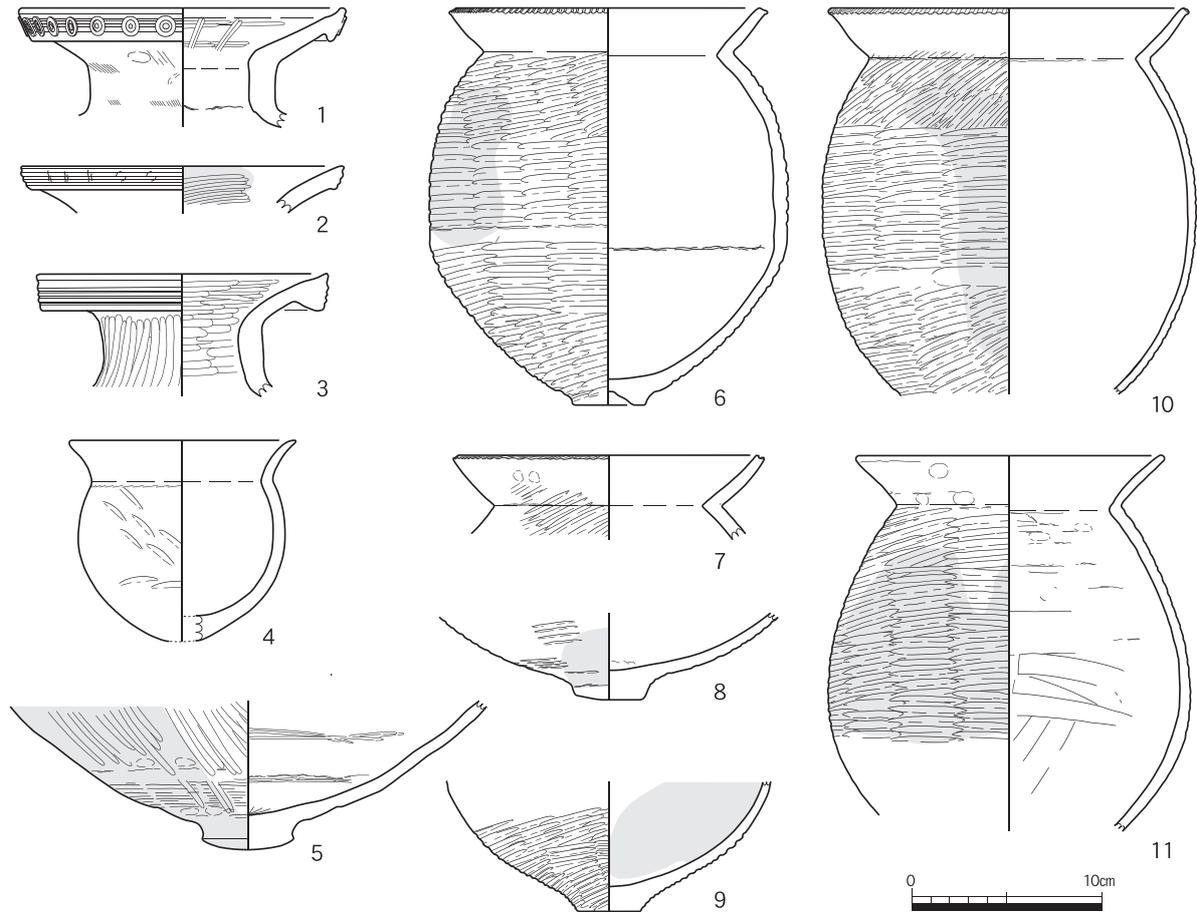
井戸状遺構2基 (SK-12・SK-23) と溝状遺構 (SD-31) がある。

SD-31は、中世の溝SD-1の下に存在し、SK-23より先行する大きな溝状の遺構である。調査区の東壁と西壁の断面で確認したため、東西方向の溝の可能性があるが、SD-1が重複するため平面形は不明。埋土は灰黄系シルトで地山に似るがやや暗色であり、土器片が出土した。SK-23は径0.8m、深さ0.9mの土坑で、壺・甕等10固体以上の庄内式期の土器がまとまって出土した (第7図)。甕は胴部に穿孔があるものを含む。SK-12は径約1.1m、深さ1.5mの深い土坑で、上～中層の南半からは壺・甕・高杯・小型丸底壺等の布留式期の土器がまとまって出土した (第8・9図)。下層には溜水痕跡と思われる砂層・粘土層が堆積し、縁辺部分から木片が出土した。井戸側の痕跡の可能性もある。

〈平安～鎌倉時代の遺構〉

溝 (SD-1)、土坑 (SK-27・SK-28・SK-30)、柱穴 (SP-5・SP-6・SP-8) がある。

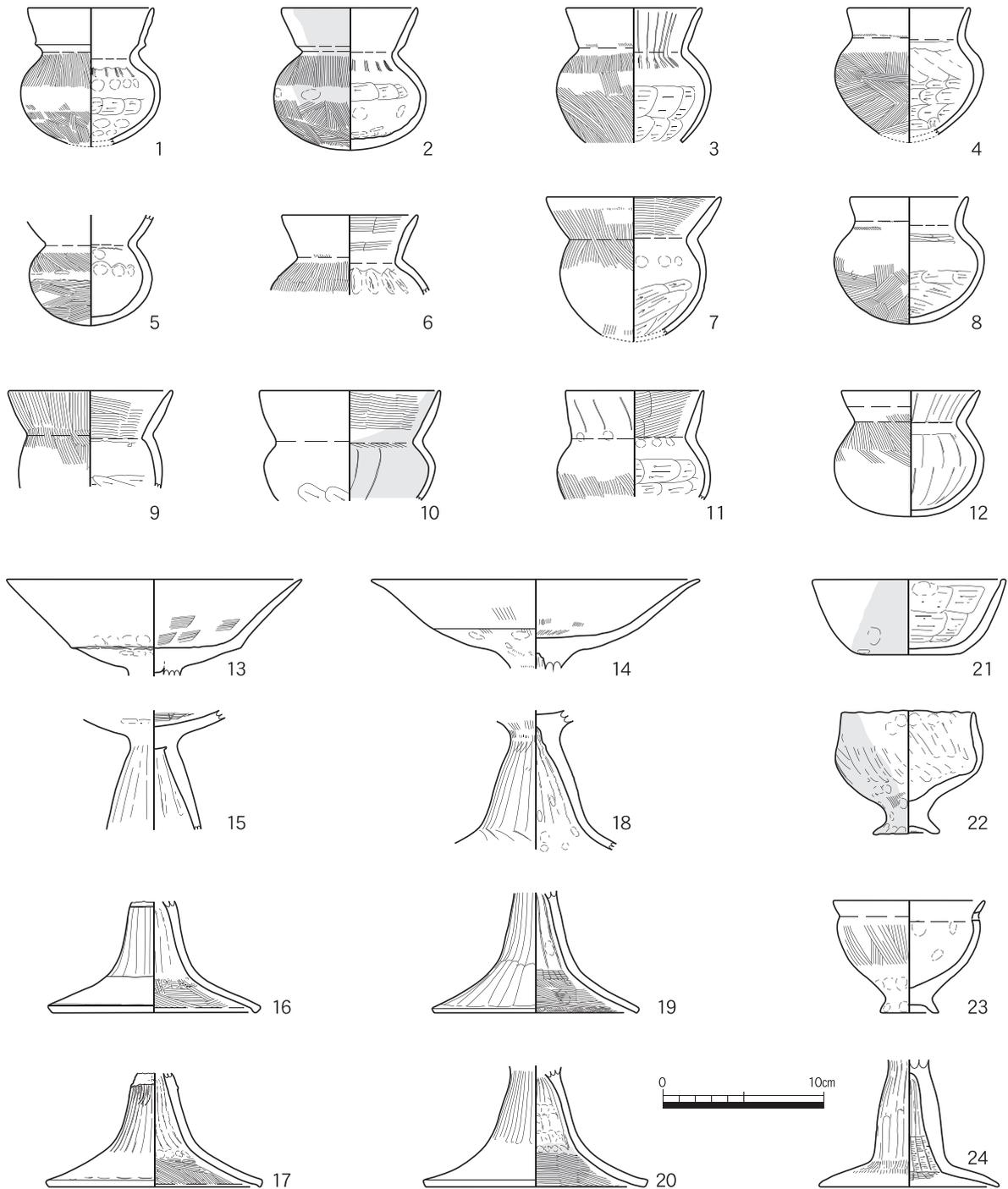
SD-1は東西方向の溝で、幅約1m、深さ0.7mである。瓦器・土師器小皿等が出土した。区画溝等と考えられる。SK-27・SK-28・SK-30は、SD-1に重複する不定形の土坑で、SD-1より先行する。SP-5・SP-6・SP-8は、径10～15cmの柱痕跡があり、南北方向に2間以上の掘立柱建物と考えられる。



第7図 SK-23出土土器 (S=1/4)

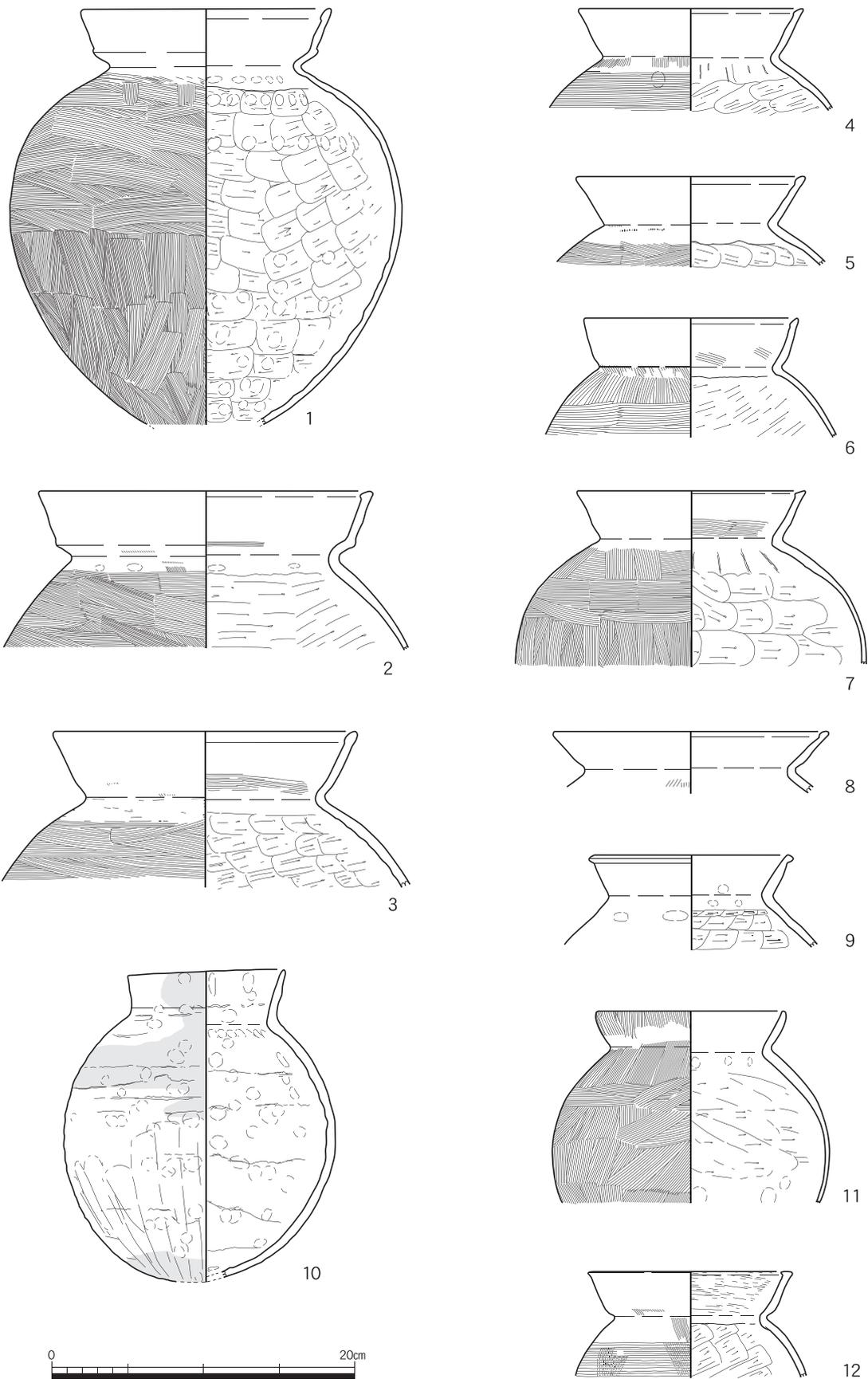
表 SK-23・SK-12出土土器一覧

No.	遺構・層位	種類	器種	器形・特徴	外面調整	内面調整	口径(cm)	高(cm)	色調(外)	胎土(含有物)
7-1	SK-23	土師器	広口壺	口端に擬凹線、円形浮文	ハケ後ナデ	ヘラミガキ(横)	17.0	6.0	5YR6/8橙	2mm石英、長石、片岩
7-2	SK-23	土師器	広口壺	口端に擬凹線、円形浮文痕	ナデ	ヘラミガキ(横)	17.0	2.5	5YR5/8明赤褐	3mm石英、長石、片岩
7-3	SK-23	土師器	広口壺	口端に擬凹線	頸部ヘラミガキ(縦)	ヘラミガキ(横)	15.4	6.5	7.5YR7/4にぶい橙	3mm石英、長石、片岩
7-4	SK-23下層	土師器	甕	小型、底部欠(平底か)	口縁横ナデ、胴部吹き後ナデ	オサエ、ナデ	12.0	10.6	5YR6/8橙	2mm石英、長石、片岩
7-5	SK-23下層	土師器	壺	底部のみ	ヘラミガキ(叩き目残る)	ナデ、ヘラミガキ	底4.8	7.9	2.5Y8/4淡黄	5mm石英、長石、片岩
7-6	SK-23	土師器	甕	庄内式期、弥生系、口縁刻み	胴部平行叩き	ナデ	15.8	21.0	2.5Y6/8橙	5mm石英、長石、片岩
7-7	SK-23	土師器	甕	庄内式期、弥生系、口縁刻み	胴部平行叩き	ナデ	15.8	4.0	2.5Y5/8明褐	5mm石英、長石、片岩
7-8	SK-23下層	土師器	壺	底部のみ	ヘラミガキ状(叩き目残る)	放射状にハケ残	底3.4	4.6	10YR7/4にぶい黄橙	5mm石英、長石、片岩
7-9	SK-23下層	土師器	甕	底部のみ	平行叩き	ナデ	底3.7	6.9	2.5Y5/8明褐	5mm石英、長石、片岩
7-10	SK-23下層	土師器	甕	庄内式期、弥生系、口縁刻み	胴部平行叩き	ナデ	17.0	20.7	5YR6/6橙	5mm石英、長石、片岩
7-11	SK-23下層	土師器	甕	庄内式期、弥生系	平行叩き	ナデ	16.0	20.0	2.5YR6/6橙	5mm石英、長石、片岩
8-1	SK-12 南半5層	土師器	小型丸底壺	底部欠、器壁やや薄	口縁横ナデ、胴部縦ハケ	頸部絞り、胴部ヘラ削り、底オサエ	9.8	8.5	7.5YR6/6橙	0.5mm石英、長石
8-2	SK-12 南半5層	土師器	小型丸底壺	完形、器壁やや薄	口縁横ナデ、胴部縦ハケ	頸部絞り、胴部ヘラ削り、底オサエ	8.2	8.9	7.5YR7/3にぶい橙	0.5mm石英、長石
8-3	SK-12 南半5層	土師器	小型丸底壺	底部欠、器壁やや薄	口縁横ナデ、胴部縦ハケ	頸部絞り、胴部ヘラ削り	8.5	8.5	7.5YR7/4にぶい橙	0.5mm石英、長石
8-4	SK-12 南半5層	土師器	小型丸底壺	底部欠、口縁短い、器壁やや厚	口縁横ナデ、胴部縦ハケ	胴部ヘラ削り、底部オサエ	7.5	7.9	5YR6/6橙	2mm石英、長石
8-5	SK-12 北半5層	土師器	小型丸底壺	口端欠	口縁横ナデ、胴部縦ハケ	指オサエ、板ナデ	-	6.8	5YR5/8明赤褐	0.5mm石英、長石
8-6	SK-12 北半5層	土師器	小型丸底壺	胴下半欠	口縁横ナデ、胴部縦ハケ	口縁横ハケ残、頸部絞り	10.4	5.0	5YR6/8橙	1mm石英、長石、片岩
8-7	SK-12 北半4層	土師器	小型丸底壺	底部欠、器壁やや厚	口縁横ナデ(縦ハケ残)	口縁横ハケ残、胴部ヘラ削り	11.0	8.7	7.5YR7/3にぶい橙	1mm石英、長石
8-8	SK-12 北半5層	土師器	小型丸底壺	口縁短い	口縁横ナデ(縦ハケ残)	胴部ヘラ削り	7.2	8.0	10YR8/3浅黄橙	0.5mm石英、長石、片岩
8-9	SK-12 南半3層	土師器	小型丸底壺	底部欠、器壁やや厚	口縁横ナデ(縦ハケ残)	口縁横ハケ残、胴部ヘラ削り	10.1	5.9	5YR6/6橙	1mm石英、長石
8-10	SK-12 北半上層	土師器	小型丸底壺	底部欠	横ナデ、胴部ヘラ削り	口縁横ハケ残、胴部板ナデ	11.2	6.9	7.5YR6/6橙	1mm石英、長石
8-11	SK-12 南半1層	土師器	小型丸底壺	底部欠、器壁やや厚	口縁横ナデ、胴部縦ハケ	口縁横ハケ残、胴部ヘラ削り	8.5	6.6	5YR6/6橙	1mm石英、長石
8-12	SK-12 南半1層	土師器	小型丸底壺	底部欠、器壁やや厚	口縁横ナデ、胴部縦ハケ	横方向に板ナデ	10.7	7.9	5YR5/6明赤褐	1mm石英、長石
8-13	SK-12 南半5層	土師器	高杯	杯部のみ、有稜	横ナデ	横ナデ	18.5	6.1	5YR5/8明赤褐	1mm石英、長石、片岩
8-14	SK-12上層	土師器	高杯	歪み有、口縁少し外反	ナデ(縦ハケ残)	放射状にハケ残	20.5	5.6	5YR6/8橙	1mm石英、長石、片岩
8-15	SK-12 南半4層	土師器	高杯	脚部のみ	ヘラミガキ状	絞り痕、底面横ハケ	-	7.4	5YR5/6明赤褐	1mm石英、長石、片岩
8-16	SK-12 南半4層	土師器	高杯	脚部のみ	ヘラミガキ状	絞り痕、底面横ハケ	底13.2	6.8	7.5YR6/6橙	1mm石英、長石
8-17	SK-12 南半4層	土師器	高杯	脚部のみ	ヘラミガキ状	絞り痕、底面横ハケ	底13.2	7.0	5YR6/6橙	2mm石英、長石
8-18	SK-12 北半4層	土師器	高杯	脚部のみ、端部欠	ヘラミガキ状	絞り痕、底面横ハケ	-	8.5	5YR6/6橙	1mm石英、長石、片岩
8-19	SK-12 南半3層	土師器	高杯	脚部のみ	ヘラミガキ状	絞り痕、底面横ハケ	底12.6	7.5	5Y5/3にぶい赤褐	1mm石英、長石、片岩
8-20	SK-12 南半3層	土師器	高杯	脚部のみ	ヘラミガキ状、端部横ナデ	絞り痕、底面横ハケ	底15.6	7.4	5YR6/6橙	2mm石英、長石
8-21	SK-12 南半5層	土師器	甕	完形、器壁やや厚	ナデ	ヘラ削り	11.9	7.0	5YR6/6橙	2mm石英、長石、片岩
8-22	SK-12 南半4層	土師器	製塩土器	桃形、脚台付	ハケ、指オサエ、ナデ	指オサエ、ナデ	8.2	7.7	7.5YR5/6明褐	1mm石英、長石
8-23	SK-12 南半3層	土師器	製塩土器	口縁に孔有、口縁外折、脚台付	縦ハケ残	指オサエ	11.4	7.0	5YR6/6橙	1mm石英、長石
8-24	SD-1・3	土師器	高杯	脚部のみ	ヘラミガキ、端部横ナデ	絞り痕、端部横ハケ、横ナデ	底11.0	7.9	10YR7/2にぶい黄橙	2mm石英、長石、片岩
9-1	SK-12 南半5層	土師器	甕	口端肥厚、胴部薄	口縁横ナデ、胴上横ハケ、胴下縦ハケ	胴部ヘラ削り	16.4	27.7	10YR5/3にぶい黄褐	1mm石英、角閃石
9-2	SK-12 北半上層	土師器	甕	口端肥厚、胴部薄	口縁横ナデ、胴横ハケ	胴部ヘラ削り	21.8	10.6	10YR6/3にぶい黄橙	1mm石英、角閃石
9-3	SK-12 南半5層	土師器	甕	布留系、口端肥厚、胴部薄	口縁横ナデ、胴部横ハケ	胴部ヘラ削り	14.8	7.3	7.5YR6/8橙	1mm石英、長石
9-4	SK-12 北半4層	土師器	甕	布留系、口端肥厚、胴部薄	口縁横ナデ、肩縦ハケ、胴横ハケ	胴部ヘラ削り	14.8	6.8	7.5YR6/6橙	0.5mm石英、長石
9-5	SK-12 南半5層	土師器	甕	布留系、口端肥厚、胴部薄	口縁横ナデ、胴横ハケ	胴部ヘラ削り	15.0	5.9	10YR7/3にぶい黄橙	1mm石英、長石
9-6	SK-12 南半3層	土師器	甕	布留系、口端肥厚、胴部薄	口縁横ナデ、肩縦ハケ、胴横ハケ	胴部ヘラ削り	14.2	7.9	5YR5/6明赤褐	1mm石英、長石
9-7	SK-12 北半上層	土師器	甕	布留系、口端肥厚、胴部薄	口縁横ナデ、肩・胴縦ハケ、胴横ハケ	頸部絞り、胴部ヘラ削り	15.0	11.5	7.5YR6/8橙	1mm石英、長石、片岩
9-8	SK-12 北半2層	土師器	甕	布留系、口端肥厚、胴部薄	口縁横ナデ	口縁横ナデ	16.8	3.7	7.5YR6/6橙	1mm石英、長石
9-9	SK-12 南半2層	土師器	甕	肩張らない、器壁やや厚	口縁横ナデ、胴ナデ	口縁横ナデ、胴部ヘラ削り	12.8	6.2	7.5YR7/4にぶい黄橙	2mm石英、長石、片岩
9-10	SK-12 南半4層	土師器	甕	やや粗製、底部穿孔	口縁横ナデ、胴下ヘラ削り状	指オサエ、ナデ(接合痕残)	10.3	20.5	5YR6/6橙	2mm石英、長石、片岩
9-11	SK-12 南半3層	土師器	甕	底部欠、器壁やや厚	口縁横ナデ(縦ハケ残)	頸部絞り、胴部ヘラ削り後ナデ	12.3	12.8	5YR6/8橙	2mm石英、長石、片岩
9-12	SK-28 最下層	土師器	甕	布留系、口端肥厚	口縁横ナデ、胴部横ハケ	口縁横ハケ残、胴部ヘラ削り	13.4	7.1	10YR6/3にぶい黄橙	1mm石英、長石



第8図 SK-12出土土器① (S=1/4)

調査地周辺の遺構変遷をまとめると、庄内～布留式期には、和歌山市立日進中学校内（市9次）から南西の宅地内（今回調査地）にかけて居住域があり、和歌山県立向陽高校内（県2次）に墓域があったと考えられる。古墳時代中期～後期には、向陽高校内（県4・5・9次）から日前宮にかけて造墓活動が活発化するが、居住域は鳴神Ⅳ遺跡方向に移動する可能性がある。平安時代末～鎌倉・室町時代には、日前宮とその東西にあった神宮寺・貞福寺を中心に展開し（県2・4・5・9次）、今回検出された遺構もそれに関連すると考えられる。また、北西に隣接する太田・黒田遺跡の弥生時代、奈良時代の遺構を合わせて捉えると、全時期を通して和歌山平野の中心的な地域であったと確認できる。（富永）



第9图 SK-12出土土器② (S=1/4)

③⑩ 神前遺跡第7次確認調査・第8次発掘調査（調査一覧65・81）

〔経緯〕 個人住宅建設に伴う事前確認調査・発掘調査

〔場所〕 和歌山市神前37-72

〔面積〕 確認調査 11.97㎡

本発掘調査 39.60㎡

〔概要〕 神前遺跡（遺跡番号307）は、岩橋山塊の南に位置する福飯ヶ峰の西麓に位置する。遺跡は東西約700m、南北約450mの規模を有し、弥生時代から江戸時代にかけての各時代の遺構・遺物が確認されている（第1図）。近年財団法人和歌山県文化財センターにより和歌山橋本線道路改良工事に伴う発掘調査が実施され、多数の弥生時代の水路跡や、古墳時代の金銅製鈴、室町時代から江戸時代の屋敷跡などが確認されている。

今回の調査は、神前遺跡の北東隅に位置する和歌山県和歌山市神前37-72地内において個人住宅建設が計画されたことに起因する（第2図）。建設予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地である神前遺跡に含まれることから、和歌山市教育委員会が遺構の有無や遺構検出面の深度等を確認するための確認調査を実施した。

確認調査の結果、第3層上面において、中世以前の溝を1条確認し、対象地に埋蔵文化財が展開している状況を把握した。

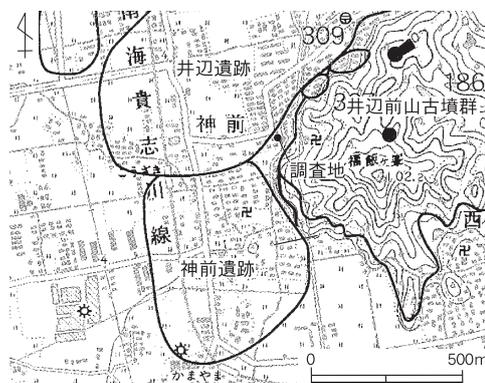
この結果を受け、事業者と和歌山市教育委員会及び和歌山県教育委員会が協議を重ねた結果、個人住宅建設工事において設計変更などによる現地保存は困難であり、記録保存のための本発掘調査が必要であるとの行政判断に達し、発掘調査を実施した。

第8次調査区は、個人住宅の建物基礎部分を対象に設定した（第3図）。

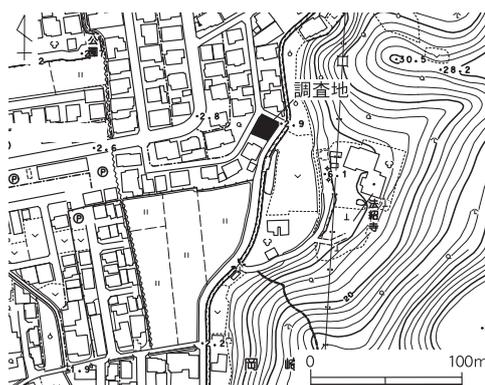
調査地の現況は宅地であり、機械掘削は宅地造成時の盛土、近現代の耕作土・床土層までとし、第3層上面で遺構検出を行った。遺構の掘削に関しては、土層観察用のセクションベルトを遺構に直交するライン上に設定し、遺物の出土状況や土層堆積状況について写真撮影、実測図を作成した。

図面による記録は、平面図に関しては国土座標を基準とした値を使用し実測を行った。遺構平面図及び断面図、壁面土層断面図については1/20の縮尺を用いた実測を行った。

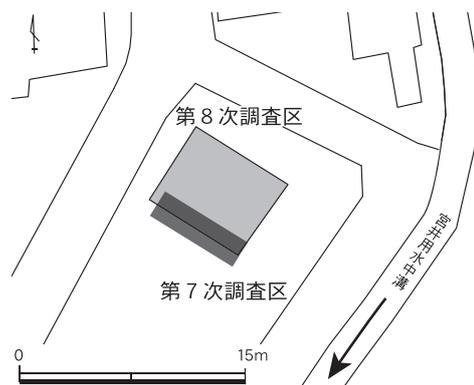
土層の色調観察は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帳』を用い、水準値



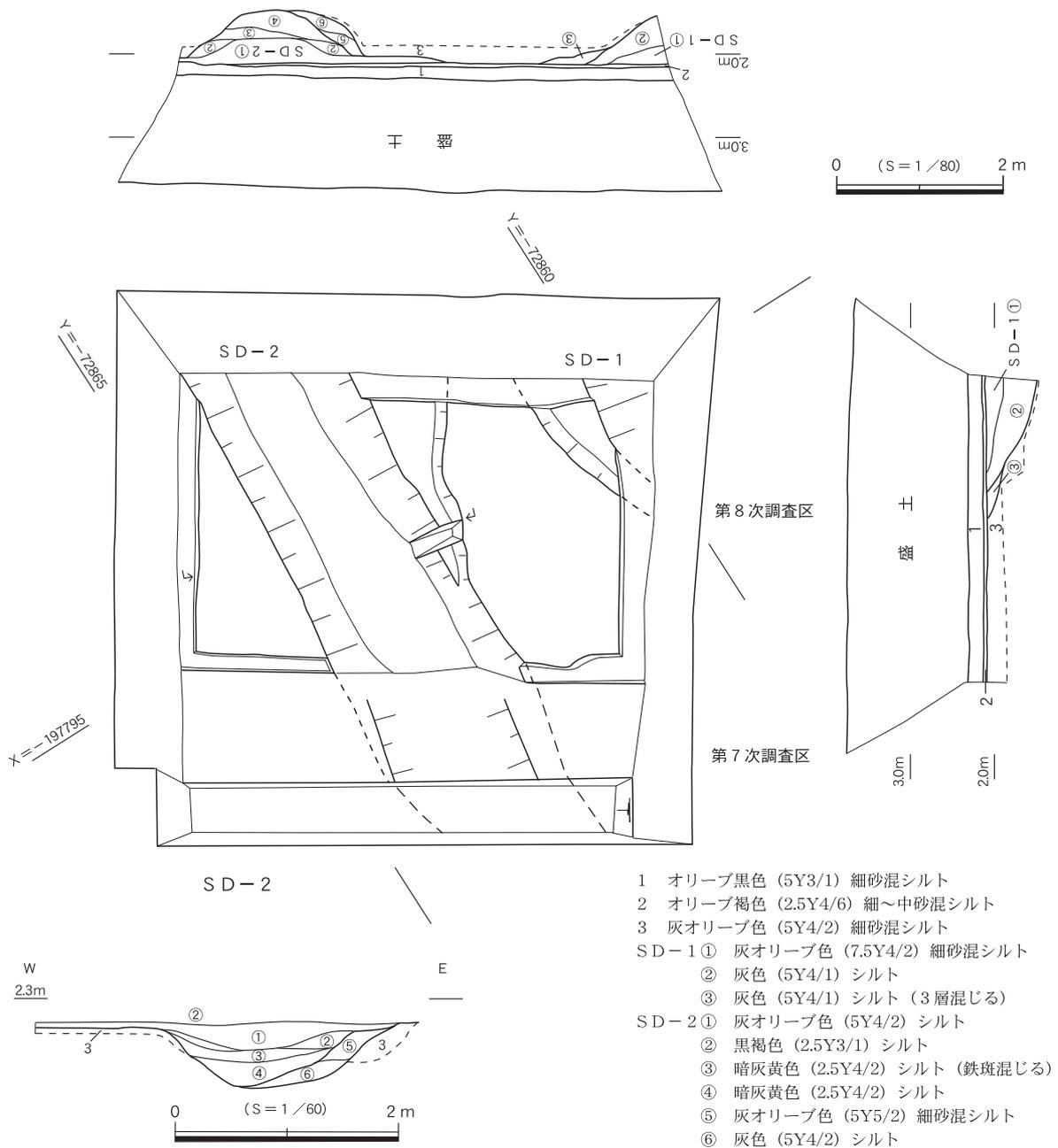
第1図 位置図



第2図 調査対象地



第3図 調査区位置図



はT.P.値を基準とした。

調査地の現況は宅地で、標高約3.7mを測り、ほぼ平坦地である。調査地の土層図に関しては、第4図に示した。

現地表土である造成土は、調査区全面に認められ、約150cmを測る。第1層は10～15cmを測る近現代の旧耕作土で、第2層はその床土と考えられる約5cmのオリーブ褐色細～中砂混シルト、それ以下は灰オリーブ色細砂混シルト（第3層）が堆積する。第3層は無遺物層でこの上面が遺構検出面である。

遺構は第3層上面で溝を2条（SD-1・2）確認した。

SD-1 南北方向の溝で幅1.3m以上、深さ約0.56mを測る。断面観察の結果、溝が再掘削されてい

る状況が確認できた。遺物は非常に少なく、最上層より土師器・瓦器の小片が出土した。出土遺物から中世の遺構と考えられる。土層断面から判断すると、対象地は10～20cm程度削平を受けている可能性が高く、SD-1・2とも掘削当初はもう少し規模が大きかったものと想定される。

SD-2 南北方向の溝で幅3.5m以上、深さ約0.8mを測る。溝は幅約2.0mの部分のみ深く掘削されており、それ以外の部分では約0.1mと浅くなっている。調査地内の両端で溝底のレベルを測ったところ、南に向かって約5cm低くなっており、緩やかに南に傾斜している。また、断面観察の結果、SD-1と同様に溝が再掘削されている状況が確認できた。遺物は非常に少なく、最上層より土師器の小片が出土した。

発掘調査の結果、中世以前に掘削された可能性のある溝を2条検出した。対象地の東側には現在の宮井用水中溝水路が通っており、この水路の延長部分で和歌山県文化財センターが実施した神前遺跡第3次発掘調査では中溝水路と重なるように平安時代末～鎌倉時代の溝が確認されている。今回検出した溝は遺構の時期が和歌山県文化財センターで確認されたものと近い可能性があり、また現在の用水路とほぼ同じ向きに掘削されている。加えて、溝底の傾斜も南に向かって低くなるなど、宮井用水に関連する溝である可能性も想定される。今後、周辺の開発時には注意する必要があると考える。(大木)

③ 関戸遺跡第3次確認調査（調査一覧66）

〔経緯〕 宅地造成に伴う事前確認調査

〔場所〕 和歌山市関戸3丁目775番5

〔面積〕 17.62㎡

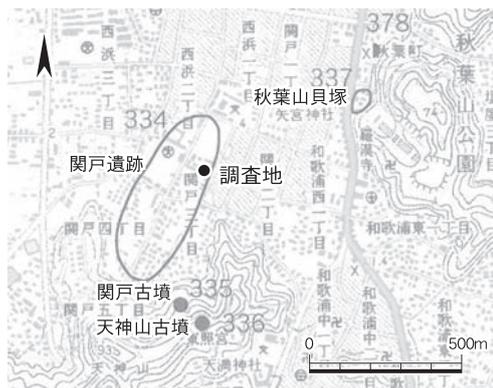
〔概要〕 関戸遺跡（遺跡番号334）は、和歌山市域南西部で、和歌浦東照宮・天満宮が南麓に立地する天神山の北側に位置する。南北約600m、東西約200mの範囲で、弥生時代から室町時代の遺物散布地として知られる。今回の発掘調査は、遺跡の北東の宅地内で分譲住宅の宅地造成が計画されたことから、工事に先立ち、遺跡の内容確認のために調査を実施した。

調査地の現況は、アスファルト舗装の駐車場であった。調査地周辺の標高は4.1m前後である。水準は、調査地の東側の道路鉄を基準とし、基準との比高差で示した。

調査区では、盛土厚が約1.1～1.2mであり、それ以下の基本層序は、第1層 暗灰黄色細砂～中砂、第2層 オリーブ褐色細砂～中砂、第3層 オリーブ褐色細砂、第4層 灰色細砂である。

遺構は確認されなかった。遺物は、第2層から土師器・須恵器細片が出土した。

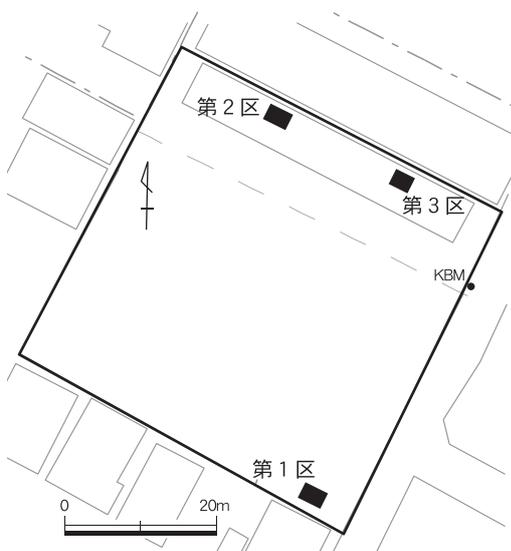
調査の結果、調査地周辺では希薄な遺物包含層が確認されたほかは、埋蔵文化財の展開はないことが確認された。（富永）



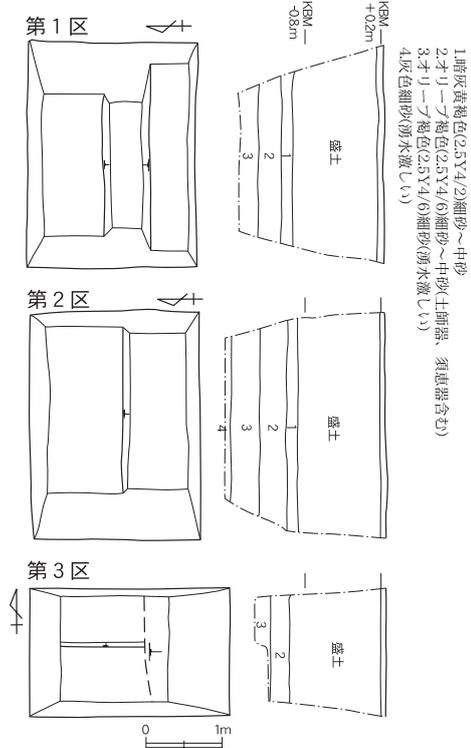
第1図 位置図



第2図 調査対象地



第3図 調査区位置図



第4図 調査区平面図・土層図 (S=1/100)

③有功遺跡第9次確認調査（調査一覧67）

〔経緯〕 個人住宅建設に伴う事前確認調査

〔場所〕 和歌山市六十谷1045-6

〔面積〕 4.75㎡

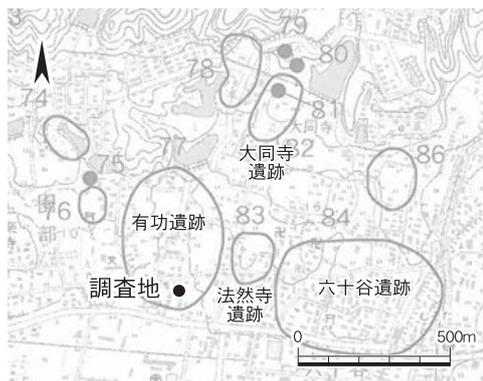
〔概要〕 有功遺跡（遺跡番号77）は、紀ノ川下流域北岸に立地し、南北約450m、東西約300mの範囲で、主に平安時代や鎌倉時代の遺構・遺物が発見された。

今回の発掘調査は、遺跡の南側の宅地で個人住宅建設が計画されたことから、工事に先立ち、遺跡の内容確認のために調査を実施した。調査地の現況は造成地であった。調査地周辺の標高は5.5m前後である。

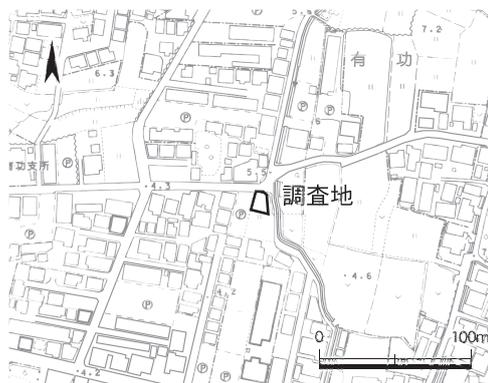
調査区では、造成後の盛土の深さが約0.95mあり、それ以下は、第1層 黄灰色シルト（耕作土）、第2層 青灰色シルト（床土）、第3層 緑灰色細砂混シルト（近世か）、第4層 青灰色礫混細砂（中世）、第5～7層 黄灰色系砂礫（中世以前）、第8層 青灰色粘土である。第4層上面が現地表下1.2mであり、第4層以下は谷状地形の堆積層と考えられる。第4層から第7層までが砂礫層で、現地表下1.7mの第8層は粘土層となる。

調査区内では遺構は検出されなかった。第4層から瓦器碗の底部1点が出土したことから、谷状堆積の下限は中世と考えられる。それ以下の層から出土遺物はなく、上限は不明である。

調査の結果、対象地周辺は谷状地形の堆積が展開することが確認された。現況では調査地の東に南北方向の水路があり、旧地形はこの水路に沿って谷状となることが予想される。（富永）



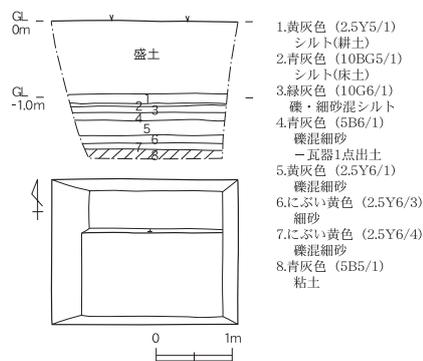
第1図 位置図



第2図 調査対象地



第3図 調査区位置図



第4図 調査区平面図・土層図 (S=1/100)

③鳴神Ⅱ遺跡第3次確認調査（調査一覧67）

〔経緯〕 宅地造成に伴う事前確認調査

〔場所〕 和歌山市鳴神99番1、99番3

〔面積〕 34.42㎡

〔概要〕 鳴神Ⅱ遺跡（遺跡番号314）は、紀ノ川下流域南岸に立地し、岩橋千塚古墳群が存在する岩橋丘陵の西に位置する。南北約380m、東西約280mの範囲で、弥生～平安時代の用水路跡を中心とした遺跡として知られる。今回は、遺跡のほぼ中央で宅地造成工事が計画されたことから、工事に先立ち、遺跡の内容確認のために発掘調査を実施した。その結果、道路部分が記録保存の発掘調査対象となった（第4次）。

調査地の現況は、水田であった。水準は、対象地北西の道路鉤を基準として、基準との比高差で示した。調査地周辺の標高は4.4m前後である。

調査区の基本層序は、第1層 黒褐色細砂混シルト（耕作土）、第2層 黄灰色細砂混シルト（床土）、第3層 黄灰色細砂混シルト、第4層 黄灰色細粘質シルト（遺物包含層）、第5層 暗黄灰色～黒褐色粘質シルト（遺物包含層）、第6層 灰黄色粘質シルト（地山）である。北端の第5区では、遺物包含層の堆積は第5層のみである。南端の第1区では、第3～5層が厚く堆積する。第6層（地山）上面は、南端の第1区では現地地表下0.95m、北端の第5区では現地地表下0.4m前後であり、旧地形は北東方向に向けて高くなる。

調査地北西の第4区を除いて、第1～3・5区は第6層上面で遺構を検出した。第1区はピット2基、第2区は溝1条、第3区はピット2基、第5区は土坑1基である。第1～3区の遺構の埋土は暗黄灰色シルトである。第5区SK-1は黄灰色細砂混シルトで、大型の土坑の可能性がある。土師器小片が出土した。遺構の時期は中世以前の可能性が高い。

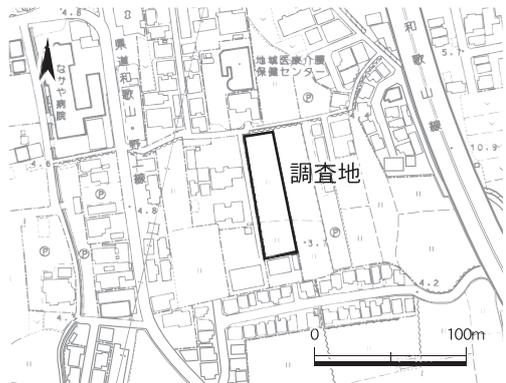
遺物は、第1～3・5区の第4・5層から土師器・瓦器片が出土した。調査地北東の第5区では出土量がやや多く、調査地外の北東への遺構の展開が予想される。

調査の結果、調査地のほぼ全面に中世以前の遺構が残存する可能性が高い。旧地形は北側が微高地となり、微高地を中心に遺構が展開すると考えられる。

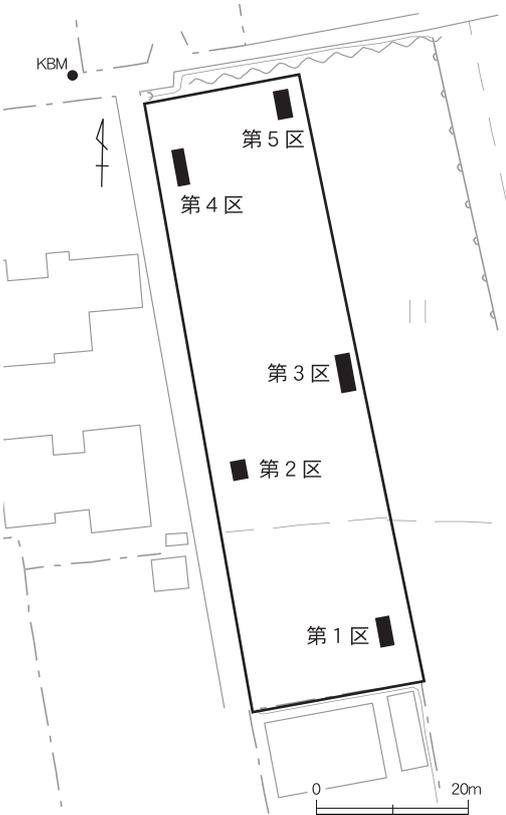
（富永）



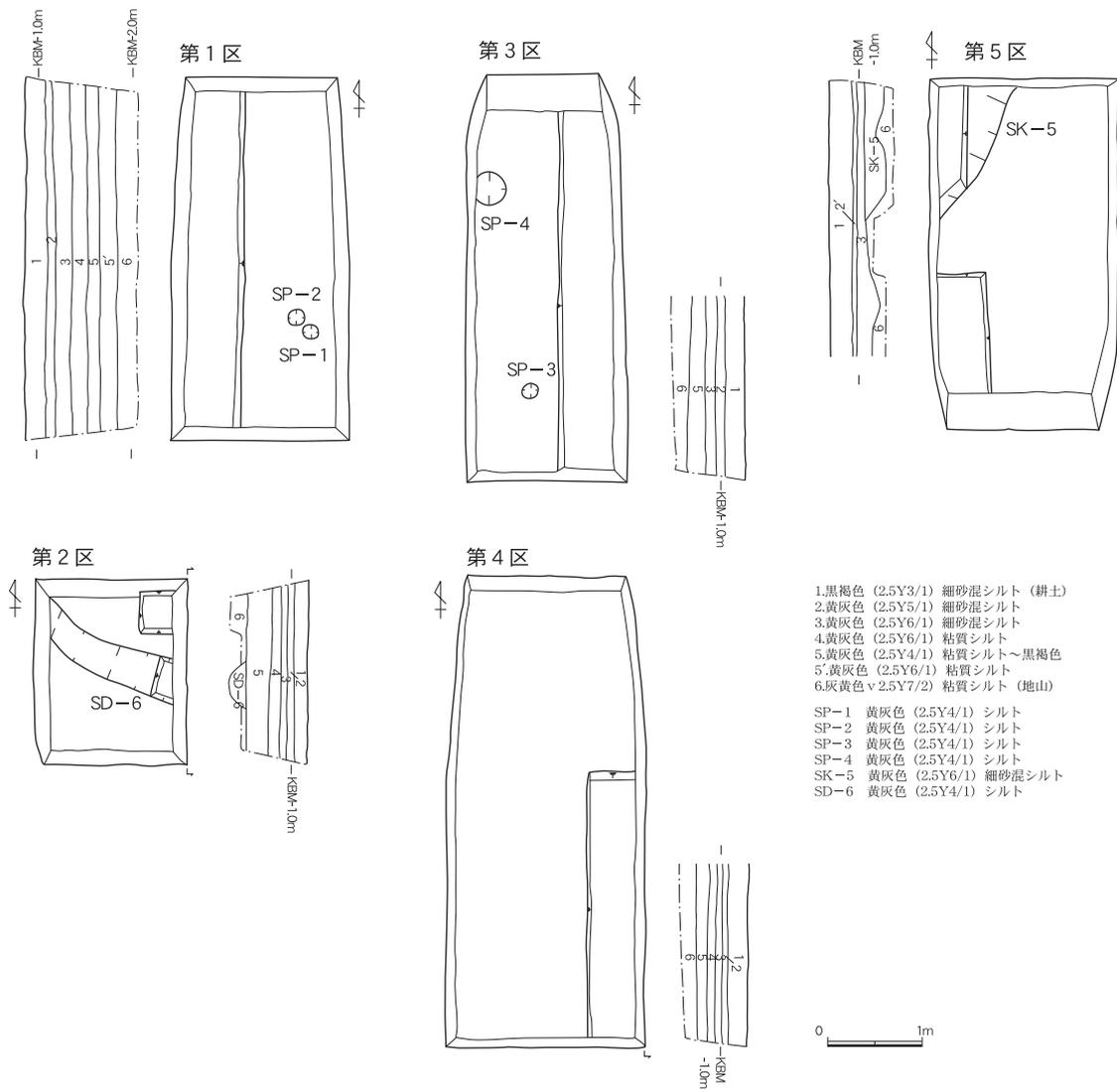
第1図 位置図



第2図 調査対象地



第3図 調査区位置図



第4図 調査区平面図・土層図 (S=1/80)

③田屋遺跡第14次確認調査（調査一覧70）

〔経緯〕 集合住宅建設に伴う事前調査

〔場所〕 和歌山市田屋233番 4

〔面積〕 19.84㎡

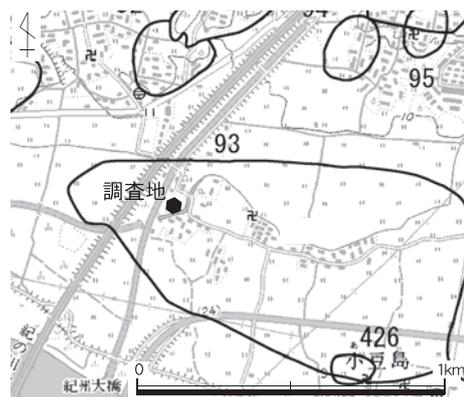
〔概要〕 田屋遺跡（遺跡番号93）は、紀ノ川北岸の沖積平野に立地する弥生時代から古墳時代にかけての集落遺跡である。今回の調査は、遺跡の北西部において集合住宅の建設が計画されたことに起因する。

事業者から建設計画の打診を受け、埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行った結果、建設予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地である田屋遺跡に含まれることから、和歌山市教育委員会で遺構の有無や遺構検出面の深度等を確認するための確認調査を実施した（第1・2図）。過去の調査においては、本調査地の南西側で行われた田屋遺跡第5次～8次（財団法人和歌山市都市整備公社）、阪和自動車道を隔てた東側の一般国道24号バイパス関連の調査（財団法人和歌山県文化財センター）では弥生時代後期から古墳時代後期にかけての竪穴建物約50棟のほか、掘立柱建物や溝、平安時代の掘立柱建物などが検出されている。

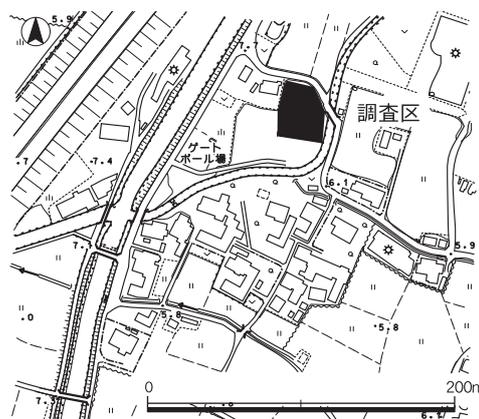
田屋遺跡周辺では東に隣接する西田井遺跡で竪穴建物やベッド状遺構等の弥生時代後期の竪穴建物の他、室町時代の掘立柱建物や井戸を検出した。また、北側の丘陵上に所在する府中Ⅳ遺跡や高井遺跡でも古墳時代の竪穴建物や平安時代の掘立柱建物が多数検出されている。

調査地は水田地帯の一角にある六ヶ井用水に隣接し、阪和自動車道の東に位置する集合住宅建設予定地である。

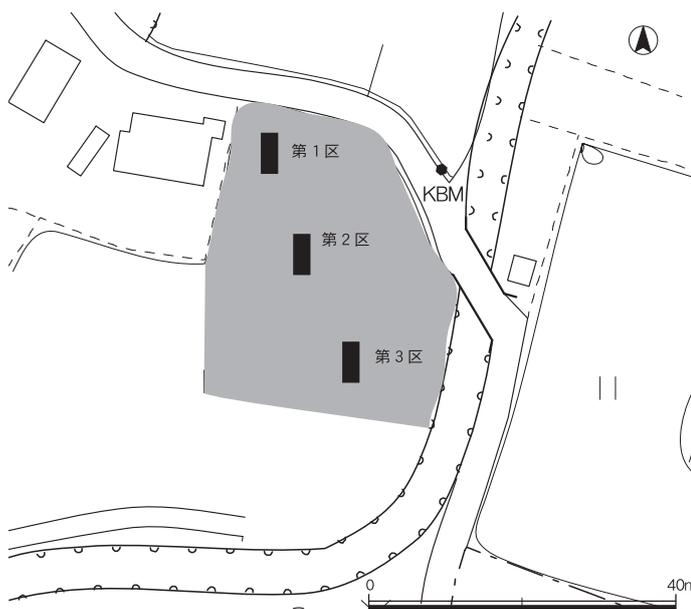
調査地は北東－南西の縦長の台形であることから、北側から順に第1～3区を設定した（第3図）。調査地の現況は造成地であり、現代盛土、近世～近現代の堆積層までを機械掘削とし、それ以下は機械掘削後人力による精査を行い遺構や遺物の有無を確認した。土層堆積状況や遺構の検出状況については写真撮影、実測図を作成した。図面による記録は、平面図に関しては調査地西側の隣地境界線を基準とし、断面図に関しては調査地北東に隣接する橋脚にある金属釘をKBM=0.00mとして実測を行った。壁面土層断面図と遺構



第1図 位置図



第2図 調査対象地



第3図 調査区位置図

平面図については1/20の縮尺を用いて、手測りによる実測を行った。また、土層の色調観察は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖2006年版』を用いた。

本調査地の基本層序は以下の通りである（第4図）。

第0層；現代の耕作土である。

第1層；第1層は層厚2～7cmの中小偽礫（1～2層起源）を含む暗灰黄色土からなる1-1層と層厚約5cmの黄褐色シルトからなる1-2層に細分される。近現代耕作土と考えられる。

第2層；第2層は2-1～2-6層に細分される。2-1層は層厚5～35cmでさらに2～6層に細分される（各調査区における2-1層内の細分は異なる）。2-2層は層厚5～10cmの灰黄色シルトからなる2-2-1層と層厚5～10cmのやや粘性の強い灰黄色細粒砂混じりシルトからなる。2-3層は層厚5～15cmの明黄褐色極細粒砂混じり粘土質シルト、2-4層は層厚5～15cmのやや粘性の強い灰黄色シルト、2-5層は層厚8～20cmのにぶい黄色極細粒砂混じりシルト、2-6層は層厚5～15cmの明黄褐色極細粒砂混じり粘土質シルトからなる。土器片をごく少量含むことから中世～近世の遺物包含層と考えられる。

第3層；第3層はやや粘性が強く、ごく弱く暗色化している層厚5～10cmの暗黄灰色極細粒砂混じりシルトからなる3-1層と、やや粘性が強く、酸化マンガンの沈着がみとめられ、暗色化しているにぶい黄色細～極細粒砂混じりシルトからなる3-2層、層厚約10cmの灰黄色粘土質シルトからなる3-3層、層厚10cm以上のにぶい黄色粘土質シルトからなる3-4層に細分される。遺物の出土はごく少量であったが、3-2層から瓦器や土師器、須恵器の小片が出土することから、3-1層および3-2層下面から切り込む遺構群は古墳時代～中世に相当すると考えられる。

第4層；鉄分の錆着がみられる第4層は層厚約15cmの明黄褐色シルトからなる4-1層と、層厚約10cmの酸化マンガンの沈着がみとめられるにぶい黄色粘土質シルトからなる4-2層、層厚10cm以上の黄褐色粘土質シルトからなる4-3層に細分される。4-1層上面から土師器がごく少量出土している。

遺構に関しては、第2区第3-2層下面において土坑（SK-201）を、第3区第3-1層下面において落ち込み（SX-301・302）、第3-2層下面で溝（SD-301・302）、土坑（SK-301～303）、落ち込み（SX-303）を確認した。また、遺物は第2層からは瓦器の小片が、第3層からは瓦器や土師器、須恵器が、第4層上面で土師器の小片が少量出土した。

確認調査の結果、第2区および第3区の第3層内において古墳時代～中世の溝や土坑、落ち込みを検出した。各遺構からの遺物の出土は無かった為、時期を確定するには至らなかったが、今回の調査の結果、遺跡の東端である本調査地まで遺構が密に展開する範囲が広がっているものと想定される。（清水）

【参考文献】

『田屋遺跡発掘調査報告書 一般国道24号線（和歌山バイパス）建設工事に伴う発掘調査報告書-』1990 財団法人和歌山県文化財センター

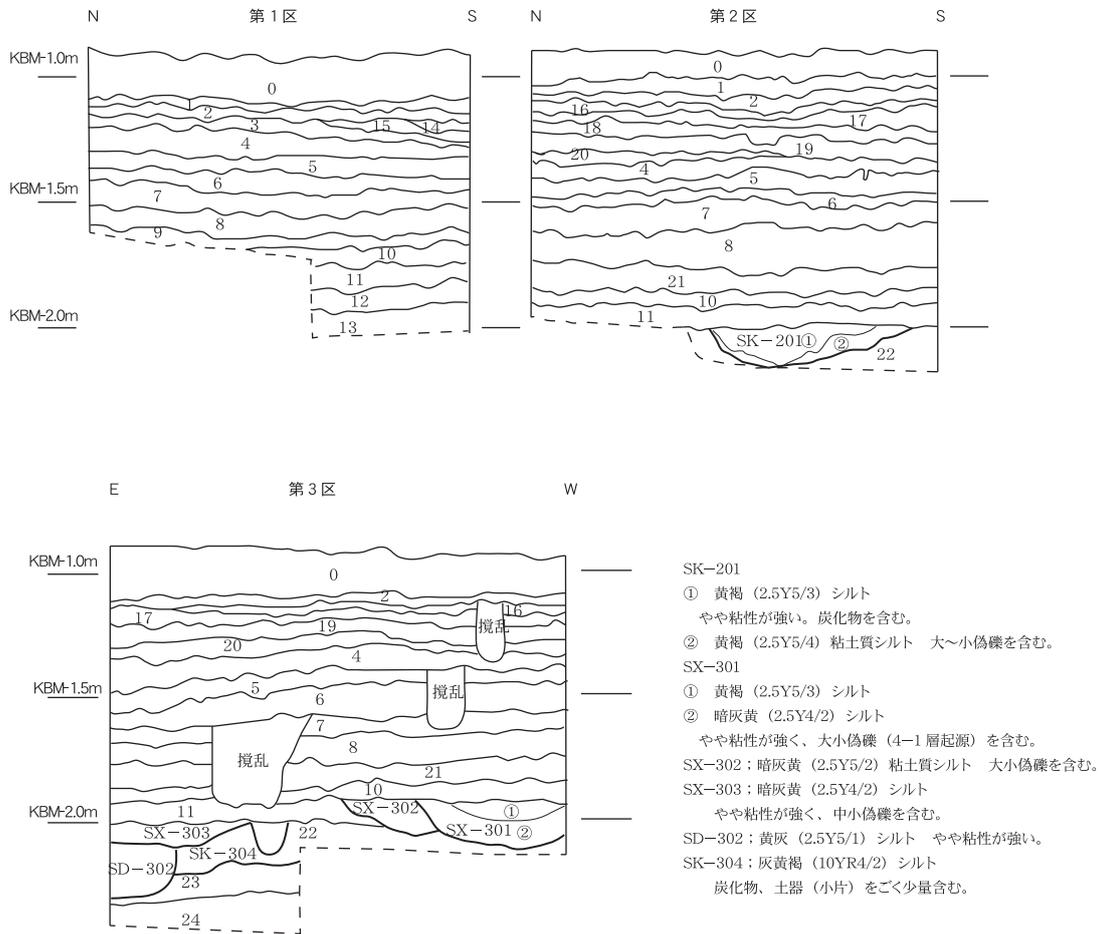
『田屋・小豆島遺跡発掘調査報告書 県紀伊停車場田井ノ瀬扇改良工事に伴う発掘調査報告書-』2005 財団法人和歌山県文化財センター

『大和紀伊平野農業水利事業に伴う田屋遺跡確認調査報告書』2011 和歌山県教育委員会

『田屋遺跡調査概報』2005 財団法人和歌山市文化体育振興財団

『和歌山市内遺跡発掘調査概報 -平成21年度-』2011 和歌山市教育委員会

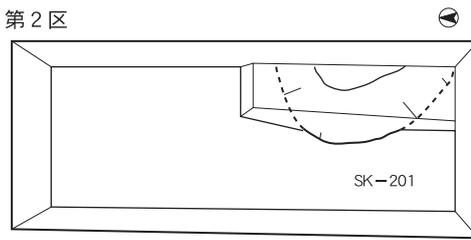
『和歌山市内遺跡発掘調査概報 -平成22年度-』2012 和歌山市教育委員会



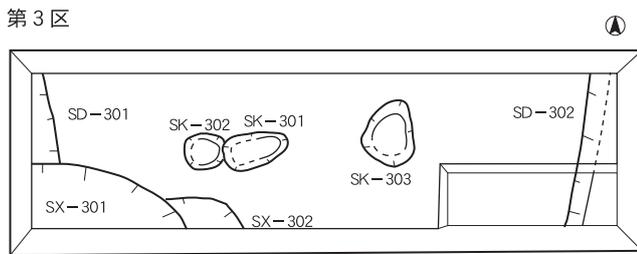
- 0：現代耕作土 (0層)
- 1：暗灰黄 (2.5Y5/2) シルト混じり細～極細粒砂
中小偽礫 (1-2層起源) を含む。
近現代耕作土 (1-1層)
- 2：灰黄 (10YR5/6) 細～極細粒砂混じりシルト
やや粘性が強い。
近現代耕作土 (床土) (1-2層)
- 3：灰黄 (2.5Y6/2) 極細粒砂混じりシルト
ごく弱く、鉄分の錆着がみられる。(2-1層)
- 4：黄褐 (2.5Y5/4) 極細粒砂混じりシルト
ごく弱く鉄分が執着する。(2-2-1層)
- 5：灰黄 (2.5Y6/2) 極細粒砂混じりシルト
やや粘性が強い。(2-2-2層)
- 6：明黄褐 (2.5Y6/8) 極細粒砂混じり粘土質シルト
鉄分の錆着がみられる。(2-3層)
- 7：灰黄 (2.5Y6/2) シルト やや粘性が強い。
ごく弱く鉄分の錆着がみられる。(2-4層)
- 8：にぶい黄 (2.5Y6/3) 極細粒砂混じりシルト (2-5層)
- 9：明黄褐 (2.5Y7/6) 極細粒砂混じり粘土質シルト
鉄分の錆着がみられる。(2-6層)
- 10：暗灰黄 (2.5Y5/2) 極細粒砂混じりシルト
やや粘性が強く、ごく弱く暗色化している。
土器を含む。(3-1層)
- 11：にぶい黄 (2.5Y6/3) 細～極細粒砂混じりシルト
やや粘性が強く、酸化マンガン斑の沈着がみられる。
暗色化している。土器を含む。(3-2層)
- 12：灰黄 (2.5Y7/2) 粘土質シルト (3-3層)
- 13：にぶい黄 (2.5Y6/3) 粘土質シルト (3-4層)
- 14：灰黄 (2.5Y7/2) 細～極細粒砂混じりシルト (2-1-1層)
- 15：明黄褐 (2.5Y7/6) 極細粒砂混じりシルト (2-1-2層)
- 16：灰黄 (2.5Y7/2) シルト (2-1-a層)
- 17：灰黄 (2.5Y6/2) 細～極細粒砂混じりシルト (2-1-b層)
- 18：浅黄 (2.5Y7/3) 極細粒砂混じりシルト
中小偽礫を含む。(2-1-c層)
- 19：明黄褐 (2.5Y6/6) 細粒砂混じりシルト
(鉄分がごく弱く錆着。(2-1-d層)
- 20：にぶい黄 (2.5Y6/3) シルト (2-1-e層)
- 21：黄褐 (2.5Y5/3) 粘土質シルト
鉄分がごく弱く錆着。(2-6層)
- 22：明黄褐 (2.5Y6/6) シルト
鉄分の錆着がみられる。(4-1層)
- 23：にぶい黄 (2.5Y6/4) シルト 鉄分の錆着が著しい。
酸化マンガン斑の沈着がみられる。(4-2層)
- 24：黄褐 (2.5Y5/3) 粘土質シルト
鉄分がごく弱く錆着。(4-3層)

第4図 調査区土層図 (縦; S=1/30 横; S=1/60)

第2区



第3区



第5図 調査区平面図 (S=1/60)

⑤友田町遺跡第5次試掘調査（調査一覧72）

〔経緯〕 事務所に伴う事前の確認調査

〔場所〕 和歌山市友田町3丁目34・37・38

〔面積〕 27.08㎡

〔概要〕 友田町遺跡（遺跡番号406）は和歌山県和歌山市友田町周辺に所在し、紀ノ川南岸の標高3.5m前後の沖積低地に立地する遺跡である。この遺跡は、東西約240m、南北約240mの規模をもつ弥生時代から平安時代の集落遺跡として周知されている（第1図）。

今回の調査は、友田町遺跡の南西に位置する近接地で集合住宅建設が計画されたため、事業者の協力を得て、工事に先立ち、友田町遺跡の範囲を確認するための試掘調査を実施した（第2図）。

現地表土である造成土は、調査区全面に認められ、第1～3区では厚く130～150cm、第4区では第1～3区と比較すると浅く約84cmを測る。第1～3区では第4区と比較して50～70cm程度盛土が厚いため、以前の建物基礎により対象地南側は全体的に旧地表面から50～70cm程度破壊されているものと考えられる。そのため、第4区でのみそれより上部の堆積が確認できた。

第1層は約10cmを測る明黄褐色シルト、第2層は約20cmを測る黄褐色細砂混シルト、第3層は黄褐色シルトである。第3層以下に関しては第4区では確認していないものの、第1・3区の以前の建物基礎の攪乱層の下位で第3層以下に対応するものと考えられる堆積を確認している。第4層は6～14cmを測る灰色細砂混シルトである。グライ化していることから、建物基礎の攪乱層により変質している。第5層は約20cmを測る黄灰色細砂混シルトが混じるオリーブ褐色細砂混シルト、第6層は約12cmの灰オリーブ色シルト、それ以下はオリーブ黒色シルトである。第2層からは弥生土器が出土した。それ以下は無遺物層である。

遺構は第4区第2層上面で弥生時代の土坑を1基（SK-1）確認した。SK-1は南北1.0m以上、東西1.2m以上、深さ約0.2mを測る。埋土から弥生土器が出土した。

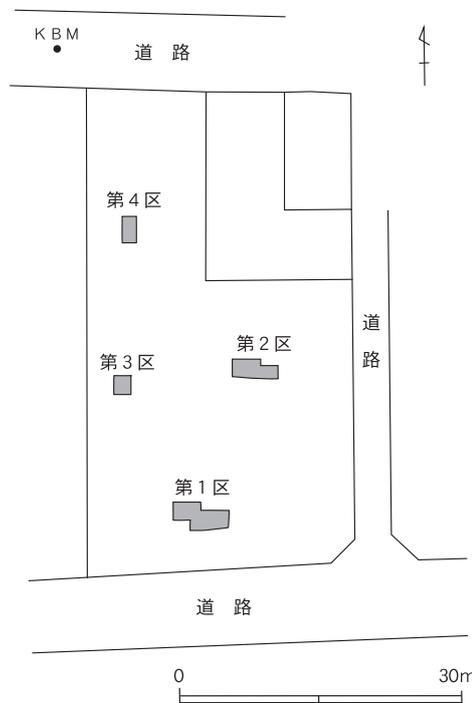
第1～3区では既存建物基礎により遺構面は破壊されているものの、攪乱層より下位の堆積層は比較的安定しており、第4区と同様の堆積状況であったものと考えられる。そのため、第1～3区周辺にも第4区と同様に遺構が展開していた可能性がある。（大木）



第1図 位置図

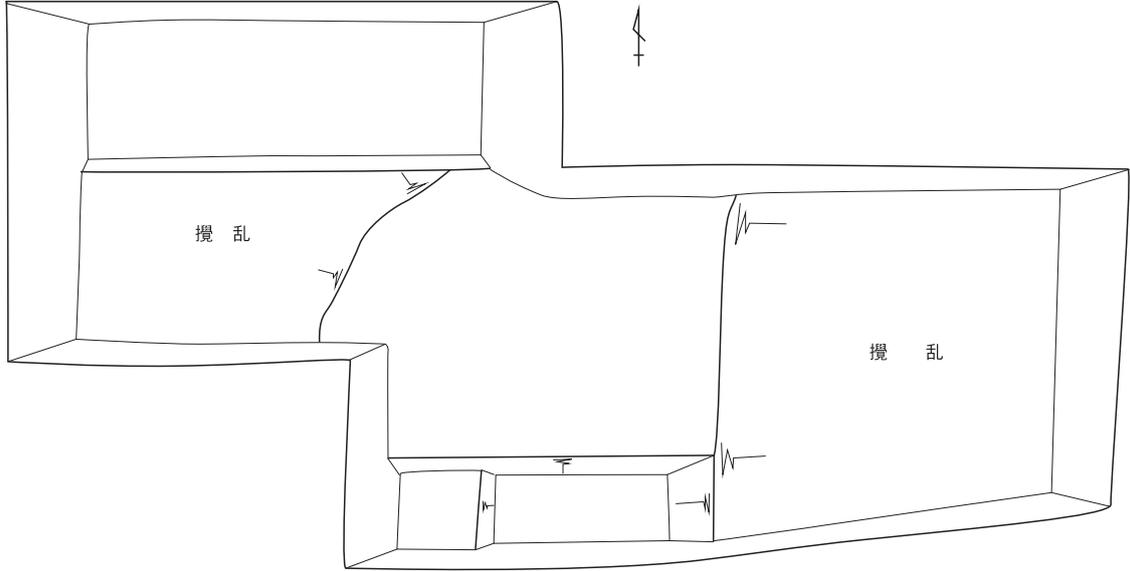


第2図 調査対象地

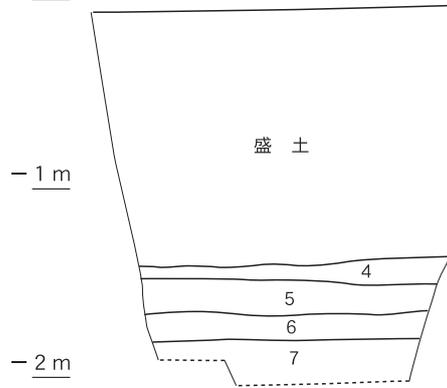


第3図 調査区位置図

第1区

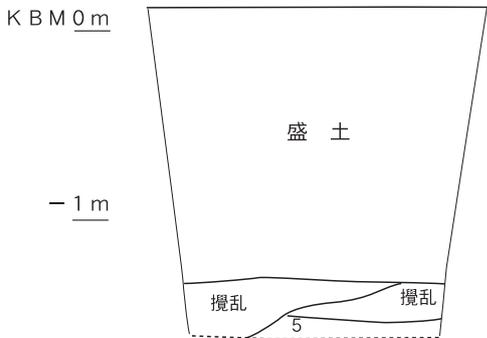


K B M 0 m

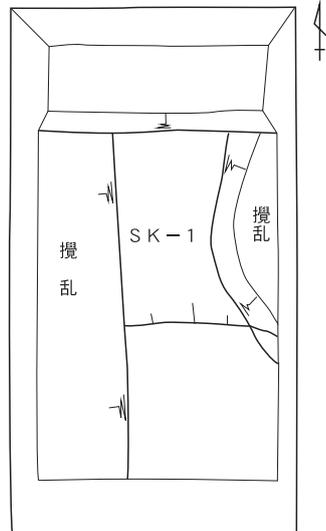
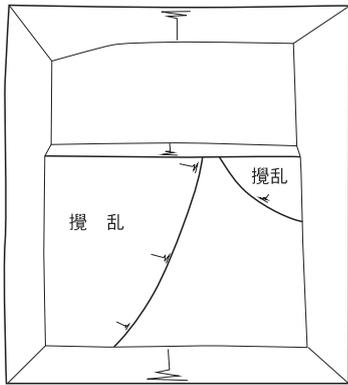
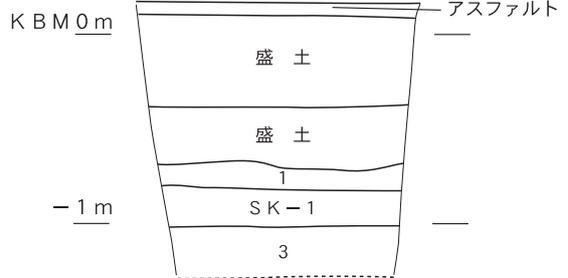


- 1 明黄褐色 (2.5Y7/6) シルト
- 2 黄褐色 (2.5Y5/4) 細砂混シルト
- 3 黄褐色 (2.5Y5/3) シルト
- 4 灰色 (7.5Y4/1) 細砂混シルト
- 5 オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 細砂混シルトに黄灰色 (2.5Y5/1) 細砂混シルト混じる
- 6 灰オリーブ色 (5Y5/2) シルト
- 7 オリーブ黒色 (7.5Y3/1) シルト

第3区



第4区



第4図 調査区平・断面図 (S=1/40)

㊦木ノ本Ⅰ遺跡第1次確認調査（調査一覧74）

〔場所〕和歌山市西庄92番2、92番5、94番2、
94番4、94番6、94番7

〔面積〕36.8㎡

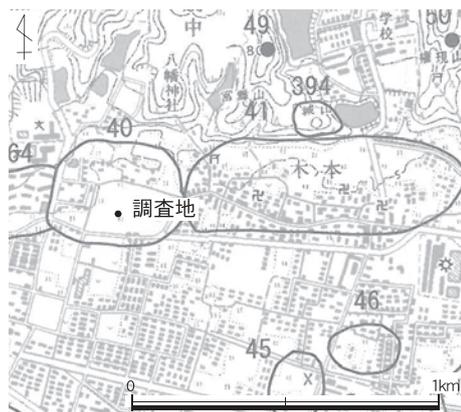
〔概要〕木ノ本Ⅰ遺跡（遺跡番号40）は、和泉山脈南麓の扇状地および沖積低地に展開する、東西約450m、南北約350mの遺跡である。今回の調査は、遺跡の南部において宅地造成が計画されたことから埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行った結果、造成予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地である木ノ本Ⅰ遺跡に含まれることから、和歌山市教育委員会で遺構の有無や遺構検出面の深度等を確認するための確認調査を実施した（第1・2図）。過去の調査においては、本調査地の南側で行われた木ノ本Ⅰ遺跡確認調査（和歌山市教育委員会（2009））では時期不明の杭跡と古代～近世にかけての希薄な包含層が確認されている。

木ノ本Ⅰ遺跡の周辺では和泉山脈南麓裾部にそって東側には金製勾玉の出土した車駕之古址古墳が、西側には中世の遺構や遺物が出土している木ノ本Ⅲ遺跡や、弥生時代後期～古墳時代にかけての竪穴建物や中世の住居址が確認されている西庄遺跡が連なっており、紀ノ川河口域北岸の遺跡の密集する地域であると位置づけられる。調査地は和泉山脈南麓裾部に広がる住宅地に立地する資材置き場建設予定地である。対象地は約2247㎡の北東-南西を長軸とする長方形であり、対象地内の擁壁設置予定地に隣接する形で調査区を設定した（第3図）。調査地の現況は旧耕作地であり、近現代～近世の耕作土までを機械掘削とし、以下は機掘削後人力による精査を行い遺構や遺物の有無を確認した。土層堆積状況や遺構の検出状況については写真撮影、実測図を作成した。図面による記録は、平面図に関しては調査地と隣地とを区画する隣地境界線を、断面図に関しては調査地に南面する道路にあるマンホールをKBM=0.0mとして実測を行った（第3図）。壁面土層断面図と遺構平面図については1/20の縮尺を用いて、手測りによる実測を行った。また、土層の色調観察は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖2006年版』を用いた。

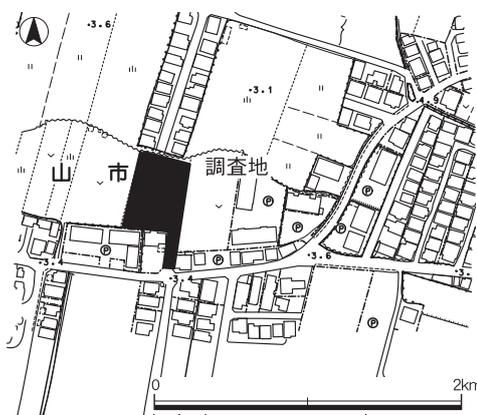
本調査地の基本層序は以下の通りである（第4図）。

第0層：現代の耕作土である。

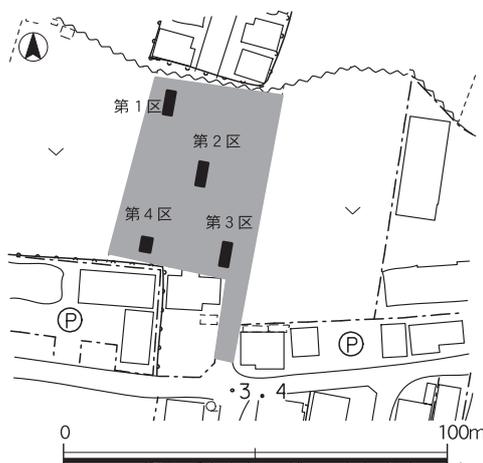
第1層：層厚5～10cmで灰色砂質土からなる。近世～近現代の堆積層と考えられる。



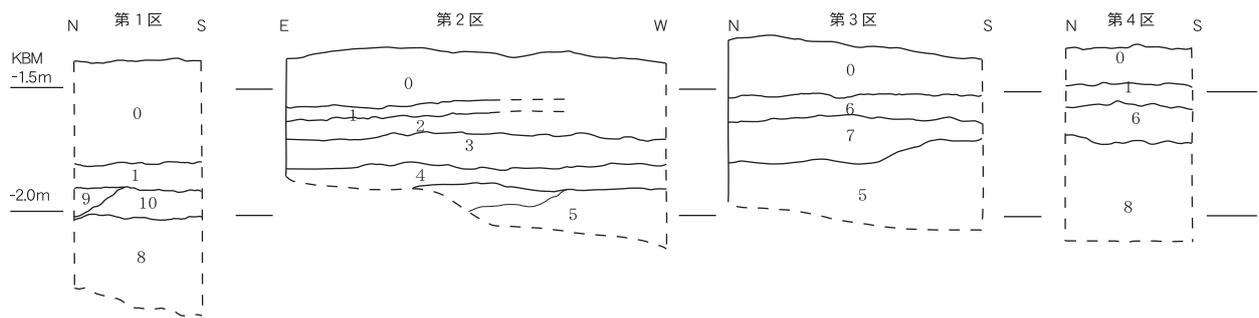
第1図 位置図



第2図 調査対象地



第3図 調査区配置図



- 0：現代耕作土（0層）
- 1：灰（5Y5/1）シルト混じり中～細粒砂（1層）
- 2：灰（5Y6/1）中～極細粒砂（土器を含む。水成堆積層。2層）
- 3：黄褐色（2.5Y5/3）中～細粒砂（水成堆積層。3層）
- 4：にぶい黄（2.5Y6/4）中～細粒砂（土器を含む。水成堆積層。4層）
- 5：にぶい黄（2.5Y6/3）～暗オリーブ黒（5Y4/3）中～細粒砂（水成堆積層。極めて淘汰が良い。5層）
- 6：オリーブ黒（5Y3/1）中～極細粒砂（土器を含む。グライ化している。水成堆積層。2層）
- 7：灰（5Y4/1）中～細粒砂（炭化物・土器を含む。水成堆積層。4層）
- 8：オリーブ灰（2.5GY5/1）中～細粒砂（水成堆積層。淘汰が良い5層）
- 9：緑灰（10GY5/1）極細粒砂質シルト（6層）
- 10：オリーブ灰（5GY5/1）粘土質シルト混じり中～細粒砂（グライ化している。水成堆積層。4層）

第4図 調査区土層図 (S=1/30)

第2層；層厚10～20cmの灰色砂質土からなり、第3・4区ではグライ化している。近世の国産陶器および須恵器、土師器、瓦器が出土していることから、中世～近世の水成堆積層と考えられる。

第3層；層厚約10cmの黄褐色砂質土からなる。第2区でのみ確認された。

第4層；層厚10～20cmのにぶい黄～灰色砂質土からなる。第1区の第4層は第4層がグライ化したものである。須恵器、土師器、瓦器が出土していることから第4層は古代～中世の水成堆積層と考えられる。

第5層；層厚20cm以上のオリーブ灰色砂質土からなる。淘汰の良い水成堆積層である。

第6層；粘性の強いオリーブ灰色砂質土からなり、第1区でのみ確認できた。

本調査の結果、第1～4区の各調査区で遺構を確認することは出来なかった。しかしながら、水成堆積層から出土した遺物は小片だけでなく、やや大ぶりの破片も含まれていることから、今回の調査地の周辺に中世の遺構が存在するものと考えられる。(清水)

【参考文献】

『平成21年度和歌山市内遺跡発掘調査概報』2011 和歌山市教育委員会

③7 田屋遺跡第15次確認調査（調査一覧75）

〔経緯〕 宅地造成に伴う事前調査

〔場所〕 和歌山市田屋163番他

〔面積〕 119.44㎡（対象範囲14393㎡）

〔概要〕 田屋遺跡（遺跡番号93）は、紀ノ川北岸の沖積平野に立地する弥生時代から古墳時代にかけての集落遺跡である。今回の調査は、遺跡の西部において宅地造成が計画されたことから、工事に先立ち、遺跡の内容を確認するための調査を実施した（第1・2図）。

過去の調査においては、本調査地の東側で行われた田屋遺跡第5次～8次（財団法人和歌山市都市整備公社）、一般国道24号バイパス関連の調査（財団法人和歌山県文化財センター）では弥生時代後期から古墳時代後期にかけての竪穴建物約50棟のほか、掘立柱建物や溝、平安時代の掘立柱建物などが検出されている。田屋遺跡周辺では東に隣接する西田井遺跡で竪穴建物やベッド状遺構等の弥生時代後期の竪穴建物の他、室町時代の掘立柱建物や井戸を検出した。また、北側の丘陵上に所在する府中Ⅳ遺跡や高井遺跡でも古墳時代の竪穴建物や平安時代の掘立柱建物が多数検出されている。

調査地は一般国道24号線から旧集落に入る市道に面する造成予定地である。今回の造成計画ではL型擁壁だけでなく道路の敷設が予定されることから、調査地全面に21ヶ所の調査区を設定した（第8図）。

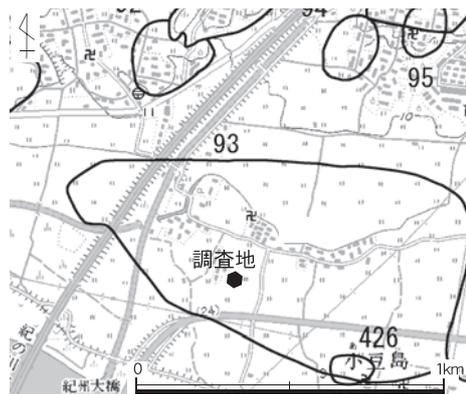
調査地の現況は耕作地であり、現代耕作土、近世～近現代の堆積層までを機械掘削とし、それ以下は機械掘削後人力による精査を行い遺構や遺物の有無を確認した。土層堆積状況や遺構の検出状況については写真撮影、実測図を作成した。図面による記録は、平面図に関しては調査地に南面する市道を基準とし、断面図に関しては調査地に東面する用水路の肩にある金属鋸（T-7）をL=6.441m（国道24号沿いにある3級基準点から移設）として実測を行った。壁面土層断面図と遺構平面図については1/20の縮尺を用いて、手測りによる実測を行った。また、土層の色調観察は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖2006年版』を用いた。

本調査地の基本層序は以下の通りである（第3図）。

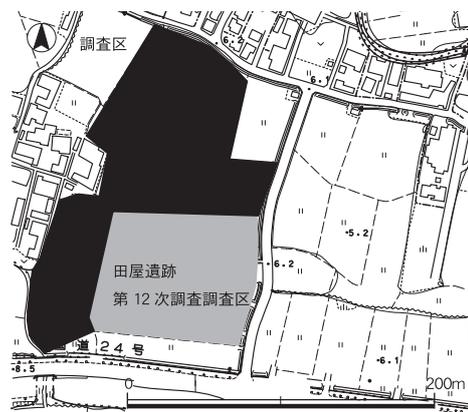
第0層；現代耕作土である。

第1層；近現代耕作土（床土）である。

第2層；第2層は2-1と2-2層に大別される。2-1層は層厚5～15cmのにおい黄色シルトからなる2-1-1層と、層厚5～15cmのにおい黄色シルトからなる2-1-2層、層厚5～10cmのごく弱く鉄分の銹着する、土器を含む明黄褐色シルトからなる2-1-3層からなる。2-2層は層厚約10cmのやや粘性の強い黄褐色シルトからなる2-2-1層（1区でのみさらに2-2-1-1層と2-2-1-2層に細分される）と、層厚約10cmの暗灰黄色シルトからなる。土器片をごく



第1図 位置図



第2図 調査対象地

少量含むことから中世～近世の遺物包含層と考えられる。

第3層：第3層は3-1層と3-2層に大別される。3-1層は層厚5～10cmのやや粘性が強い黄褐色シルトからなる3-1-1層と、層厚5～10cmのやや粘性が強い灰黄色シルトからなる3-1-2層に細分される。3-2層は層厚約10cmのやや粘性が強く、土器を含む暗灰黄色シルトからなる3-2-1層と、層厚10～15cmのごく弱く鉄分が銹着し、土器を含むにぶい黄色極細粒砂混じりシルトからなる3-2-2層に細分される。3-1層からは瓦器や土師器、須恵器の小片が、3-2層からは土師器や須恵器、弥生土器の小片が出土することから、3-1層は古代～中世の遺物包含層、3-2層は古墳時代の遺物包含層と考えられる。

第4層：第4層は層厚10～15cmからなる鉄分の銹着が強く、酸化マンガン斑の沈着がみとめられる土器を含む黄褐色シルトからなる4-1層と、層厚15cm以上の鉄分が銹着し、酸化マンガン斑の沈着がみられるにぶい黄色シルトからなる4-2層に細分される。

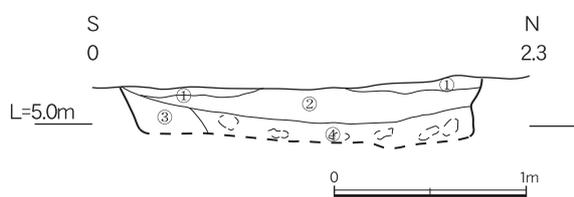
第5層：暗灰黄色粘土質シルトからなり、ごく弱く暗色化している。

遺構に関しては、第5区と第N6区、第N8区の第3-2層上面および、各調査区の第4層上面で確認した(第4図・5図)。第4区第4層上面では土坑(SK-401)およびピット(SP-401)を、第5区では第3-2層上面で落ち込み(SX-501)、第4層上面で土坑(SK-501)を、第6区第4層上面で土坑(SK-601～605)を、第7区第4層上面で土坑(SK-701)を第8区第4層上面では住居址(SI-801)および土坑(SK-801・802)、溝(SD-801)とこれらの遺構を切る落ち込みの可能性のある堆積(第8区基本層序3-1'層相当(第6図))を、第N1区第4層上面では土坑(SK-901・902)を、第N2区第4層上面では溝(SD-1001)を、第N3区第4層上面ではピット(SP-1101～1103)を第N4区第4層上面では土坑(SK-1201・1202)を、第N6区第3-2層上面ではピット(SP-1401～1404)、第N7区第4層上面では溝(SD-1501)を、第N8区第3-2層上面では溝(SD-1601・1602)と土坑(SK-1601)を、第4層上面では土坑(SK-1602)を、第N9区第4層上面では土坑(SK-1701)とピット(SP-1701～1704)を、第S1区第4層上面では土坑(SK-1801・1802)、ピット(SP-1801～1803)、落ち込み(SX-1801)を、第S2区第4層上面では住居址(SI-1901)を、第S3区第4層上面では住居址(SI-2001)と土坑(SK-2001・2002)を、第S4区第4層上面では溝(SD-2101)および住居址の可能性のある土坑(SK-2101)を確認した。なお、遺構を検出することが出来なかった第1～3区および第N5区でも地層の堆積状況が周辺状況と同様であることから、今回の調査対象地全体に遺構が存在するものと思われる。

なお、遺物は第2-2層および第3-1層からは土師器や瓦器が、第3-2層からは土師器や須恵器が、第4-1層からは土師器や弥生土器の小片が少量出土した。なお、第3-2層上面で検出したSX-501からは土師器および瓦器の小片が、第4層上面で検出したSI-801やSK-1701からは土師器が出土している。

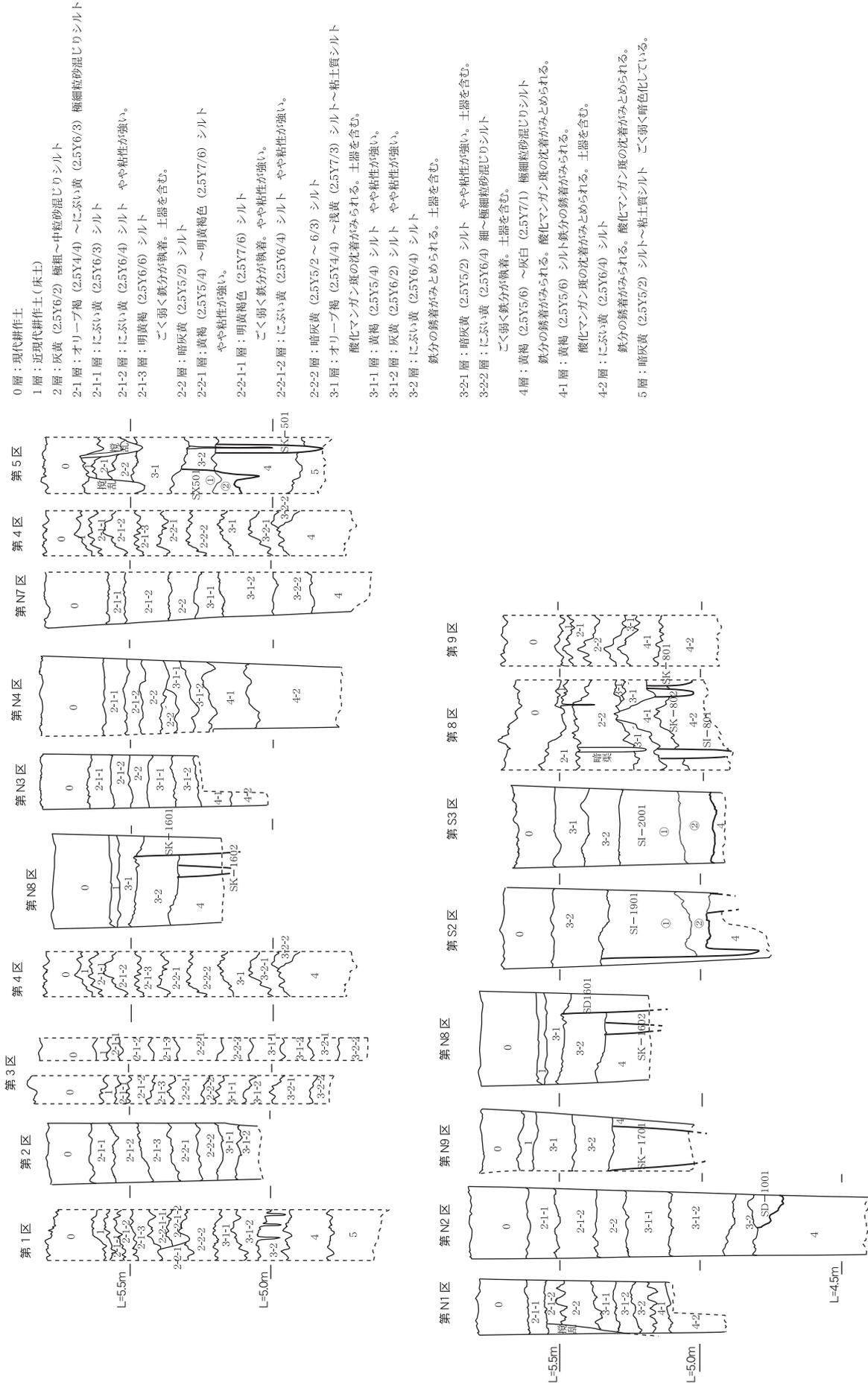
確認調査の結果、第3-2層上面において古代～中世と考えられる遺構を、第4層上面において古墳時代を中心とする遺構群を検出した。

今回の調査の結果、地形が高くなる本調査地の



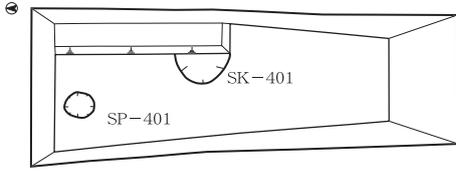
- ①灰オリーブ (2.5Y5/3) 極細粒砂混じりシルト (3-1'層相当)
- ②暗オリーブ (2.5Y4/3) シルト
やや粘性が強く、中小偽礫や土器を含む。(SI-801 埋土上層)
- ③オリーブ (2.5Y5/6) 極細粒砂混じりシルト
ややシルトが強い。(SI-1801の埋土)
- ④灰オリーブ (2.5Y5/3) シルト
やや粘性が強く、大中偽礫を含む。
土器や炭化物を含む。(SI-1801 埋土下層)

第4図 SI-801土層断面 (S=1/40)

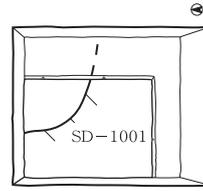


第3図 調査区土層図 (縦；S=1/20 横；S=1/200)

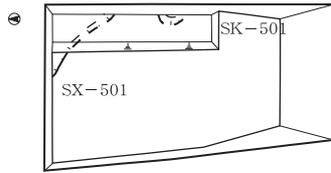
第4区



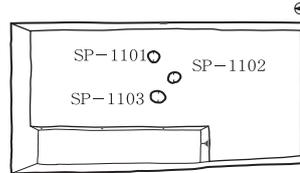
第N2区



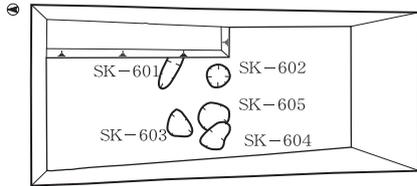
第5区



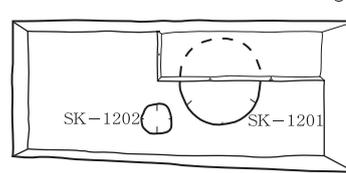
第N3区



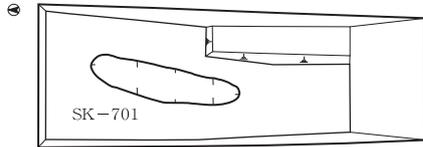
第6区



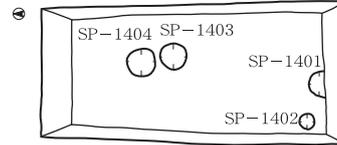
第N4区



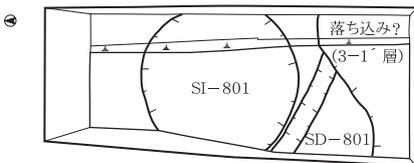
第7区



第N6区



第8区



SX-501

①: 黄灰 (2.5Y6/1) 中~細粒砂混じりシルト 土器を含む。

②: 灰黄 (2.5Y6/2) シルト 土器を含む。

SK-501; 黄褐 (2.5Y5/6) 極細粒砂混じりシルト SI-801; 黄褐 (2.5Y5/3) 極細粒砂混じりシルト

SK-801; にぶい黄 (2.5Y6/3) シルト

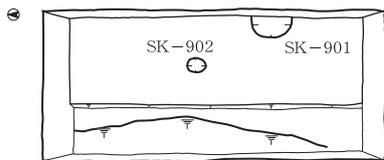
SK-802; にぶい黄 (2.5Y6/3) シルト やや粘性が強い。

3-1層; 黄褐 (2.5Y5/3) 中~極細粒砂混じりシルト (落ち込みの可能性あり)

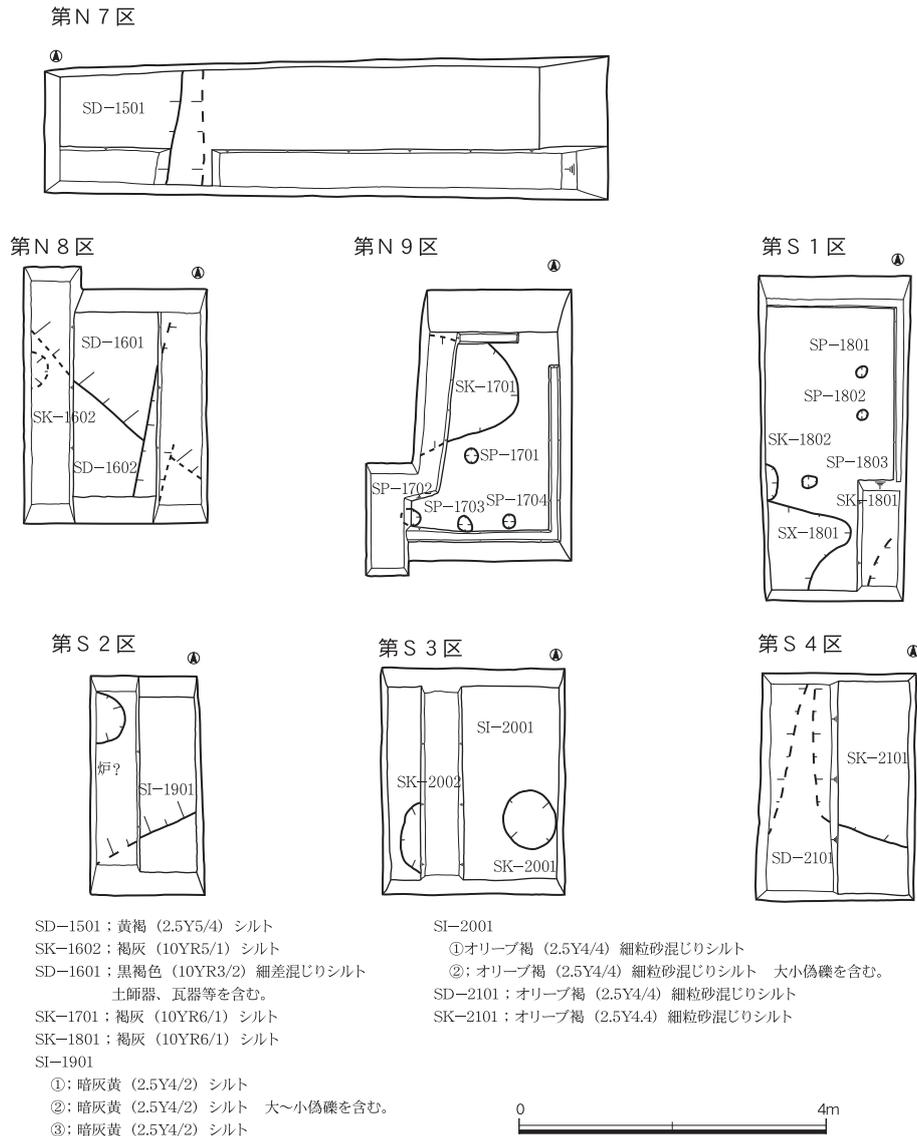
SD-1001; 黄褐 (2.5Y5/3) 細粒砂混じりシルト

SP-1401; 黄褐 (2.5Y5/4) シルト

第N1区



第5図 調査区平面図 (S=1/100)

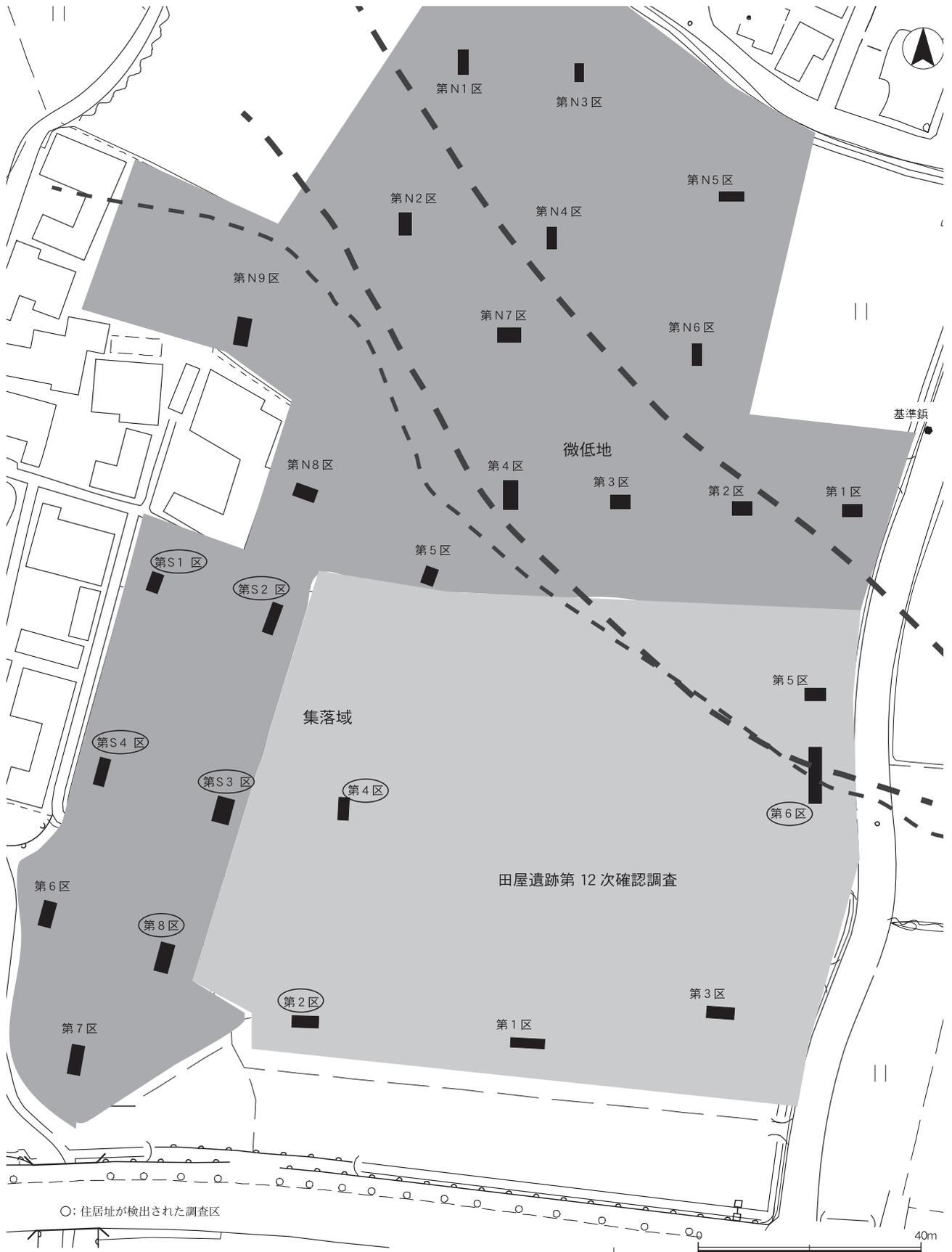


第6図 調査区平面図 (S=1/100)

南西側調査区（第8区、第S2～4区）だけでなく、調査区に隣接する田屋遺跡第12次確認調査（和歌山市教育委員会）の西側の調査区（第2区、第4区）でも竪穴建物が確認されていることから、微低地の南側を中心に遺構が密に展開するものと考えられる。本調査地の東側の田屋遺跡第5次～8次（財団法人和歌山市都市整備公社）および、南側の一般国道24号バイパス関連の調査（財団法人和歌山県文化財センター）でも弥生時代～古墳時代の集落が確認されていることから、本調査地一帯は弥生時代～古墳時代の大規模な集落域であるものと想定される。（清水）

【参考文献】

- 『田屋遺跡発掘調査報告書 ―一般国道24号線（和歌山バイパス）建設工事に伴う発掘調査報告書―』1990 財団法人和歌山県文化財センター
- 『田屋・小豆島遺跡発掘調査報告書 ―県紀伊停車場田井ノ瀬線改良工事に伴う発掘調査報告書―』2005 財団法人和歌山県文化財センター
- 『田屋遺跡調査概報』2005 財団法人和歌山市文化体育振興財団
- 『和歌山市内遺跡発掘調査概報 ―平成21年度―』2011 和歌山市教育委員会
- 『和歌山市内遺跡発掘調査概報 ―平成22年度―』2012 和歌山市教育委員会



第7図 微低地および竪穴建物の展開する範囲の想定図 (S=1/100)

③⑧府中遺跡立会調査（調査一覧76）

〔経緯〕 個人住宅建設に伴う立会調査

〔場所〕 和歌山市府中1174番地2ほか

〔面積〕 53.00㎡

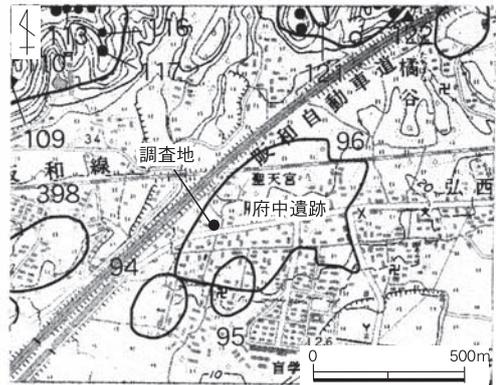
〔概要〕 府中遺跡は、紀ノ川北岸の段丘上に立地し、個人住宅建設に伴い立会調査を実施した（第1図）。

既設建物建設及び撤去に伴うとみられる盛土が14～24cmあり、表面10cmほどが、黒く濁り表土化する。1層は黄茶色シルトで建物予定地北西部にわずかに遺存する。2層は厚さ8～16cmの暗茶褐色シルトで第2区全域と第1区の西端から東側へ4m付近まで遺存する。3層は黄茶色砂礫混土層で、岩盤上部の風化層であり、無遺物のベース層とみなされる（第4・5図）。

第2区の南端部で2層下部に炭・焼土を混じえるシルト層（2a層、厚さ約8cm）があったが、堆積下面の傾斜がなだらかであり、下面が被熱した形跡がなく、遺物の出土もなかったため、遺構とは認定できず、2次の堆積の可能性が高いと判断した。

遺物は、盛土内より瓦器、1～2層から土師器、黒色土器が少量出土した。遺構としては第2区の2層下面で土坑（SK-1）が確認された。土坑は、長さ1.5m、幅0.7m以上、深さ0.35mで、埋土上層より土師器片が出土した。遺物量が少ないが、2層下面での検出であり、平安時代頃と推定される。

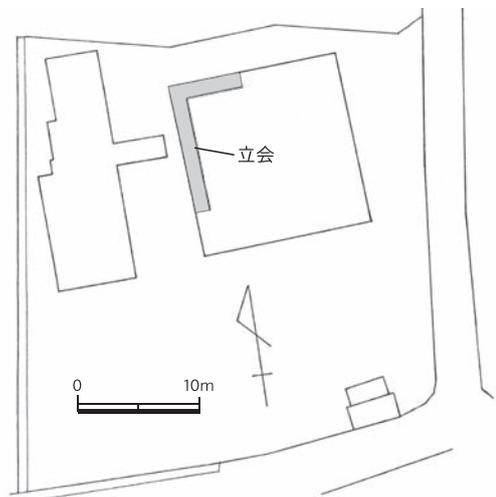
対象地は遺構面が地表から40～50cm程度で確認される。遺構密度・遺物量は希薄であるが、周辺の遺構・遺物は古代を中心とする時期と思われる。（前田）



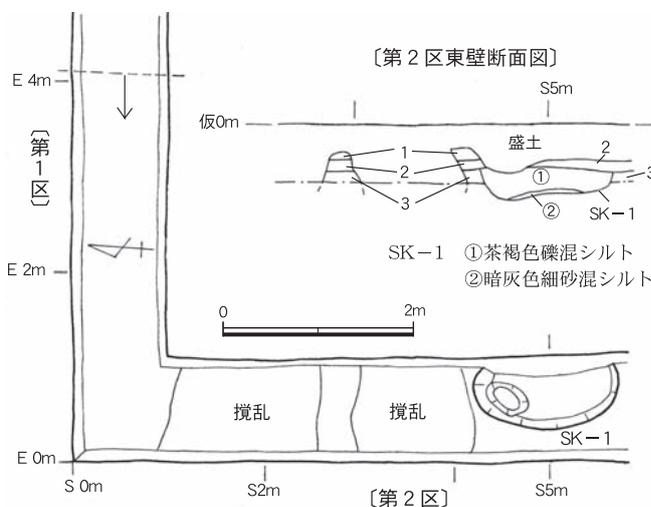
第1図 位置図



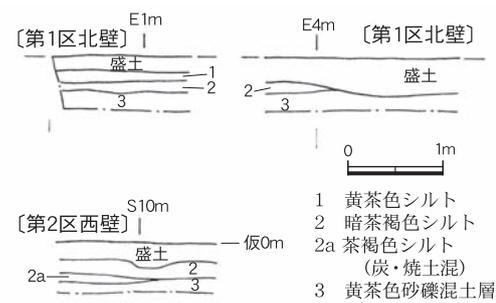
第2図 調査対象地



第3図 調査区位置図



第4図 調査区平・断面図 (S=1/80)



第5図 土層断面図 (S=1/80)

㊦ 鳴神Ⅲ遺跡第4次確認調査（調査一覧84・107）

〔経緯〕 個人住宅建設に伴う事前確認調査

〔場所〕 和歌山市鳴神1075番6、1075番9

〔面積〕 7.80㎡

〔概要〕 鳴神Ⅲ遺跡（遺跡番号315）は、紀ノ川下流域南岸に立地し、国指定史跡鳴神貝塚が存在する花山丘陵西麓の南西に位置する。今回は、遺跡の北東の宅地内で個人住宅新築工事が計画されたことから、工事に先立ち、遺跡の内容確認のために調査を実施した。その結果、建物部分は遺構面に達しないため慎重工事となり、浄化槽部分が遺構面に達するため立会調査対象となった。

調査地の現況は、造成地であった。調査地周辺の標高は5.2m前後である。調査区では、盛土厚が約0.8mであり、現地表下1.1～1.2mで、縄文時代晩期の遺物包含層である第3層上面となる。第3層～第5層は縄文時代の遺物包含層で、約0.6mの厚さで堆積する。その下の第6層は、第3層～第5層と類似する土質であるが、調査範囲内では遺物は出土しなかった。

第8層は、現地表下2.1～2.5mで検出した硬いシルト質の基盤層で、北から南に下がる比高差0.4mの急な傾斜がある。その直上に、腐食質を含むと思われる黒褐色シルト層である第7層が堆積する。

遺構は確認されなかった。遺物は、第3～5層から縄文土器片が多数出土した。第3層からは比較的大きな破片がややまとまって出土し、第4・5層では小片が散在して出土した。器形が判明するものは縄文時代晩期の突帯文深鉢、浅鉢等であり、時期不明の胴部片等も縄文土器の可能性が高い。

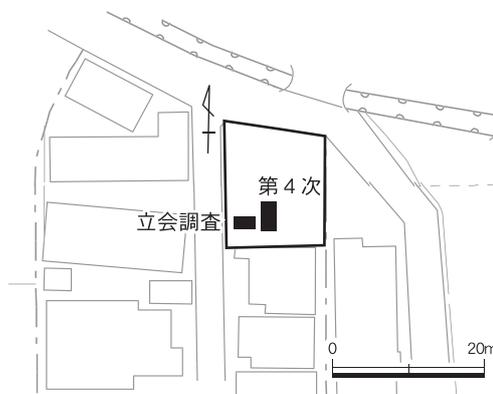
調査の結果、北から南に急傾斜する旧地形を検出し、その上に縄文土器を含む厚い堆積層を確認したが、遺構は確認されなかった。出土した晩期の縄文土器は、鳴神貝塚出土土器とほぼ同時期のものであり、鳴神貝塚を中心とする縄文時代晩期の遺構が、調査地周辺まで広がる可能性がある。（富永）



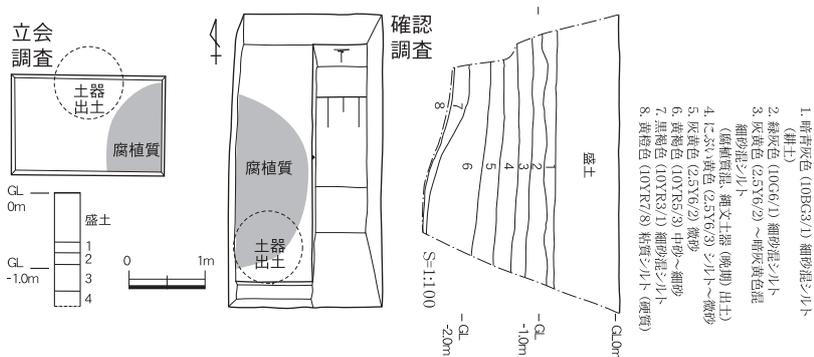
第1図 位置図



第2図 調査対象地



第3図 調査区位置図



第4図 調査区平面図・土層図 (S=1/100)

④川辺遺跡第19次確認調査（調査一覧85）

〔経緯〕 事務所建設のための事前確認調査

〔場所〕 和歌山市里84番 6

〔面積〕 35.80㎡

〔概要〕 川辺遺跡（遺跡番号145）は、和歌山市域の東端部にあたる紀ノ川北岸の沖積平野に立地する、東西約1.0km、南北約0.7kmの大規模遺跡である。今回の調査は、遺跡の北端部において事務所建設が計画されたことから工事に先立ち、遺跡の内容を確認するための確認調査を実施した（第1・2図）。

過去の調査においては、本調査地の南側で行われた川辺遺跡第2・3次確認調査（財団法人和歌山市都市整備公社）や第4～6次調査（財団法人和歌山市都市整備公社）、一般国道24号バイパス建設に伴う事前調査および県道和歌山貝塚線道路改良工事に伴う発掘調査（財団法人和歌山県文化財センター）では、縄文時代～中世にかけての竪穴建物や掘立柱建物址、墓域などの遺構群を検出している。

川辺遺跡周辺約2kmの範囲内には、北側に上野廃寺、山口廃寺、山口遺跡、山口御殿跡など古代～近世を中心とする遺跡が、西側には西田井遺跡や宇田森遺跡などの弥生時代～中世を中心とする遺跡が存在している。

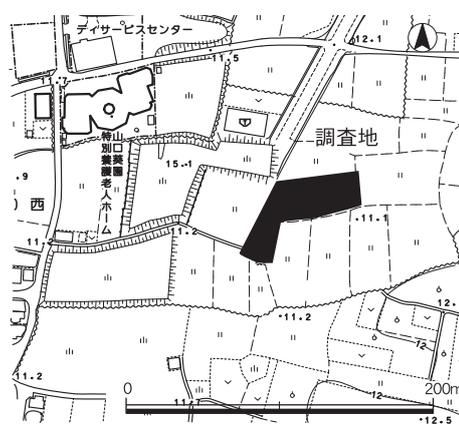
調査地は主要地方道和歌山・貝塚線に面する事務所建築予定地である。対象地は約849㎡の北東側に張り出しをもつL型であり、対象地内の建物設置予定地に第1～3区を、浄化槽と建物設置予定地の間に4区調査区を設定した（第3図）。

調査地の現況は造成地であり、現代および近世～近代の耕作土までを機械掘削とし、以下は機械掘削後人力による精査を行い遺構や遺物の有無を確認した。土層堆積状況や遺構の検出状況については写真撮影、実測図を作成した。

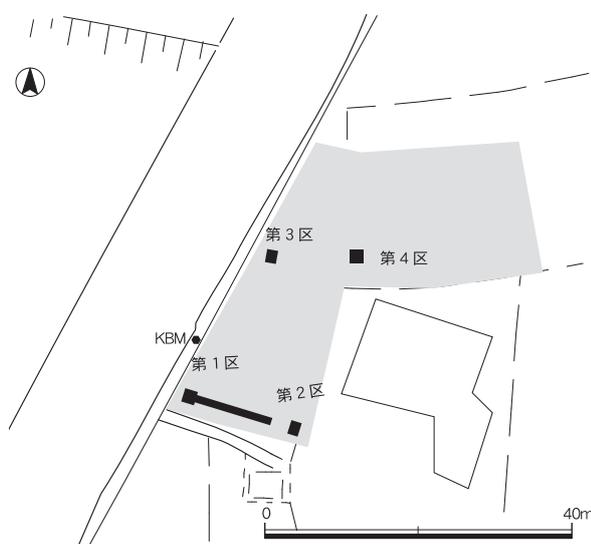
図面による記録は、平面図に関しては隣地境界線を基準とし、断面図に関しては調査地に面する道路側溝に設けられた金属鉾（KBM=5.18m）を基準として実測を行った。壁面土層断面図と遺構平面図については1/20の縮尺を用いて、手測りによる実測を行った。また、土層の色調観察は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖2006年版』を用いた。



第1図 位置図



第2図 調査対象地



第3図 調査区配置図

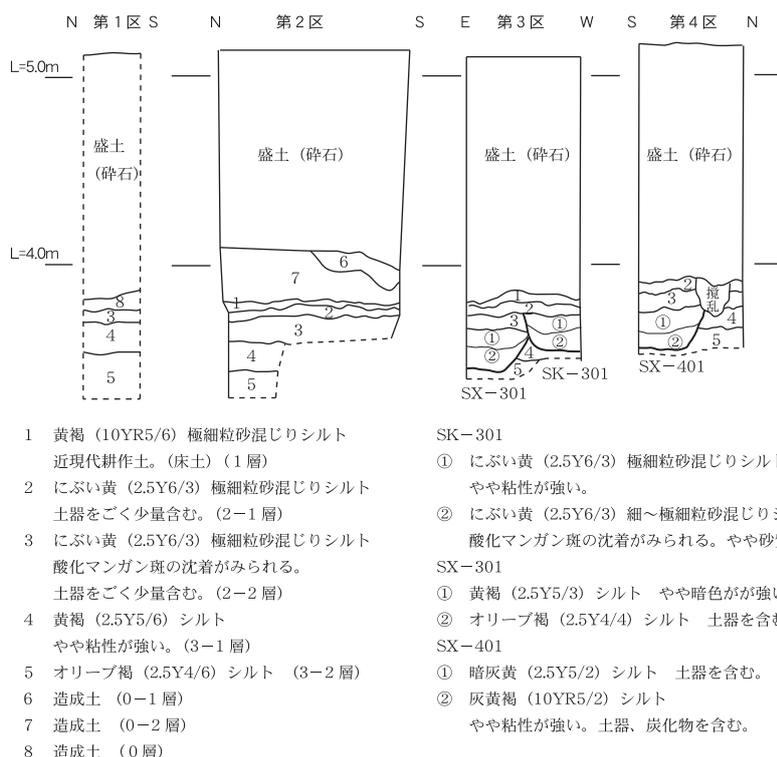
本調査地の基本層序は以下の通りである（第4図）。

第0層；造成土である

第1層；層厚約5cmで黄褐色土からなり、近現代の耕作土と考えられる。

第2層；層厚約5cmでにぶい黄色土からなる第2-1層と、酸化マンガン斑の沈着がみとめられる層厚5~15cmでにぶい黄色土からなる第2-2層に細分化される。土器をごくわずかに含む遺物包含層である。

第3層；層厚10~15cmで黄褐色土からなる第3-1層と、上部に鉄分の集積がみられ、層厚15cm以上のオリーブ褐色土からなる第3-2層に細分される。



第4図 調査区土層図 (縦S=1/40 横S=1/80)

遺構は、第3区第2-1層下面で土坑と鋤溝を、第1~4区第2-2層下面で古墳時代~古代の遺構群を確認した。なかでも遺構の大部分が調査区外であった為、詳細は不明であるが、SX-301およびSX-401に関しては住居址である可能性も考えられる。なお、出土した土器は全体的に小片で摩耗が進んでいるため、時期を確定できるものは少なかったが、第3区SX-301からは口縁部が有段で、口縁端部が垂直に立ち上がる土師器の鉢が、第4区SX-401からは羽釜や須恵器の甕口縁部が出土している。

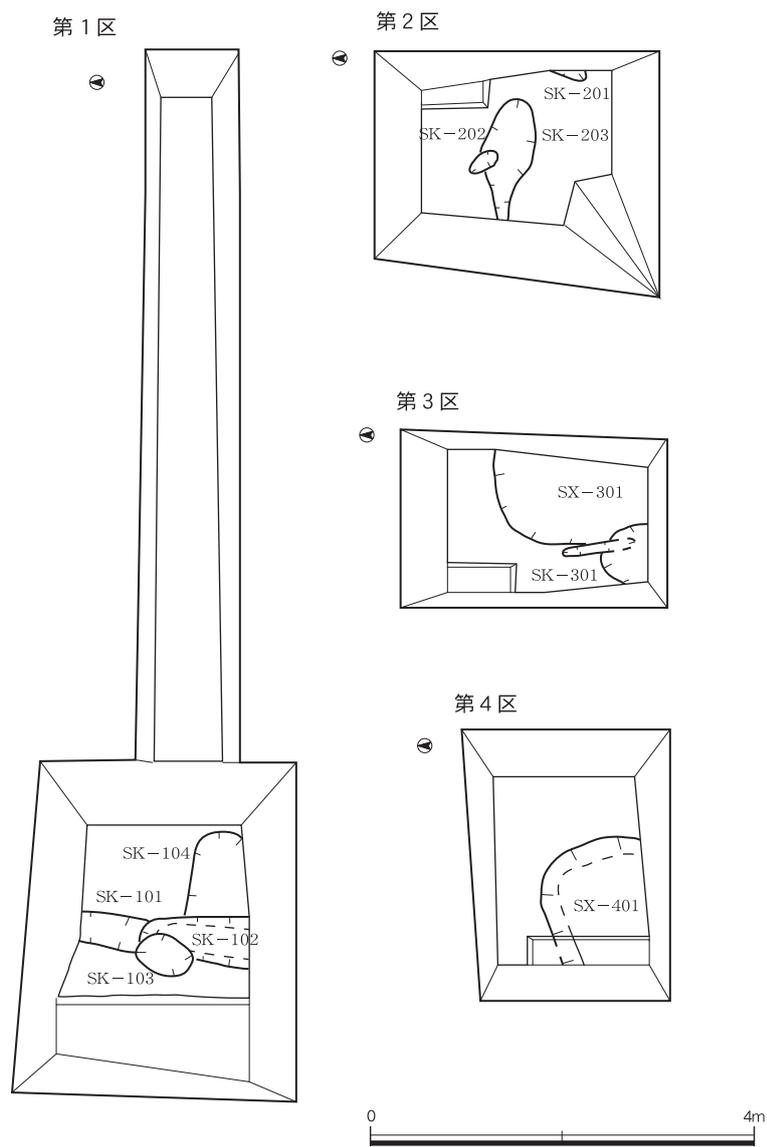
今回の確認調査の結果から、県道和歌山貝塚線改良工事に伴う発掘調査で確認された古墳時代~古代の遺構が密になる範囲は本調査区まで続いているものと考えられる。(清水)

【参考文献】

『山口遺跡・川辺遺跡第発掘調査事業報告書 - 県道と歌山貝塚線・県道粉河加太線道路改良工事に伴う発掘調査-』 2005 財団法人和歌山県文化財センター

『川辺遺跡第4・5・6次発掘調査事業実績報告書』 2008 財団法人和歌山市都市整備公社

『川辺遺跡第10・11・12・13次発掘調査報告書』 2010 財団法人和歌山市都市整備公社



第5図 調査区平面図 (S=1/80)

④西庄遺跡第9次確認調査（調査一覧87）

〔経緯〕 個人住宅建設に伴う事前確認調査

〔場所〕 和歌山市本脇65番3の一部

〔面積〕 4.0㎡

〔概要〕 西庄遺跡（遺跡番号38）は、標高4.5m前後の砂堆に展開する、東西約900m、南北約400mの遺跡である。今回の調査は、遺跡の南西部において個人住宅の建設が計画されたことから、工事に先立ち遺跡の内容を確認するための確認調査を実施した（第1・2図）。

過去の調査においては、本調査地の北側で行われた西庄遺跡第4次調査（財団法人和歌山市都市整備公社）、都市計画道路西脇・山口線道路改良工事に伴う発掘調査（財団法人和歌山県文化財センター（2003））では古墳時代の竪穴建物のほか、掘立柱建物や溝、土坑などが検出されている。

西庄遺跡の周辺では和泉山脈南麓裾部にそって東側には金製勾玉の出土した車駕之古址古墳や中世の遺構や遺物が出土している木ノ本Ⅲ遺跡、弥生時代後期～古墳時代にかけての竪穴建物や中世の掘立柱建物が確認されている西庄Ⅱ遺跡が、西側には磯脇遺跡が連なっており、紀ノ川河口域北岸の遺跡の多い地域であると位置づけられる。

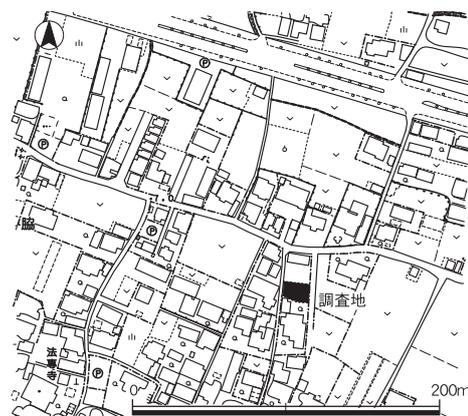
調査地は和泉山脈南麓裾部から広がる住宅地に立地する個人住宅建設予定地である。対象地は331.5㎡の北-南を長軸とする長方形であり、対象地内の建物建設予定地に隣接する形で調査区を設定した（第3図）。

調査地の現況は宅地であり、近現代～近世の耕作土までを機械掘削とし、以下は機械掘削後人力による精査を行い遺構や遺物の有無を確認した。土層堆積状況や遺構の検出状況については写真撮影、実測図を作成した。

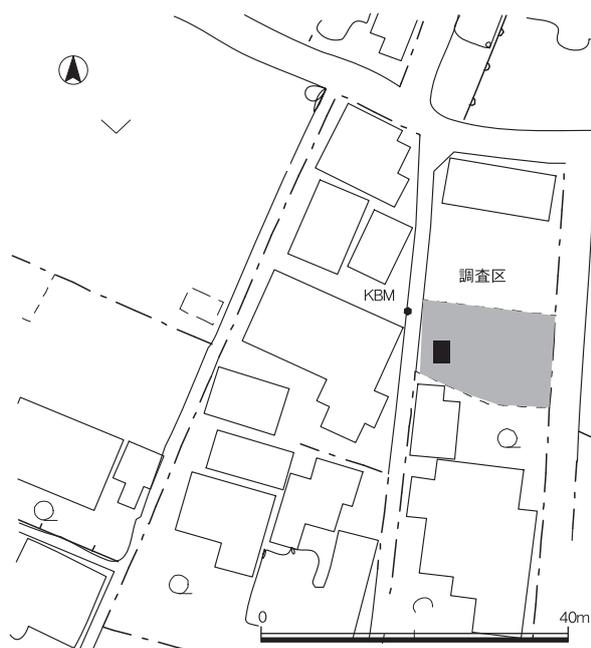
図面による記録は、平面図に関しては調査地と隣地とを区画する隣地境界線を、断面図に関しては調査地に西面する市道内にある金属鋸をKBM=0.0mとして実測を行った（第3図）。壁面土層断面図と遺構平面図については1/20の縮尺を用いて、手測りによる実測を行った。また、土層の色調観察は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準



第1図 位置図



第2図 調査対象地



第3図 調査区配置図

土色帖2006年版』を用いた。

本調査地の基本層序は以下の通りである（第4図）。

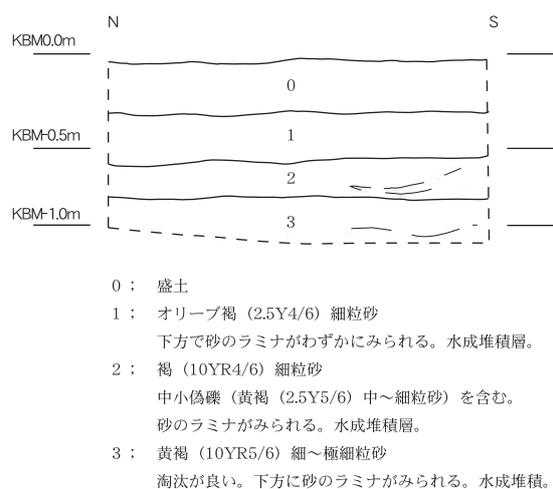
第0層；現代の盛土である。

第1層；層厚約25cmのオリーブ褐色砂質土からなる。水成堆積と考えられる。

第2層；層厚約20cmの褐色砂質土からなり、砂のラミナがみられる。水成堆積と考えられる。

第3層；層厚約15cm以上の黄褐色砂質土からなる。水成堆積と考えられる。

確認調査の結果、今回の調査地では遺構・遺物の存在を確認することは出来なかった。また、本調査地内の層相は水成堆積であったことから、調査地周辺は大規模な自然流路の氾濫原、または海浜であった可能性が考えられる。（清水）



第4図 調査区土層図（S=1/40）

【参考文献】

『西庄遺跡 -都市計画道路西脇・山口線道路改良工事に伴う発掘調査報告書』2003 財団法人和歌山県文化財センター
『和歌山市内遺跡発掘調査概報 -平成17年度-』2007 和歌山市教育委員会
『西庄遺跡第6次発掘調査事業実績報告書』2011 財団法人和歌山市都市整備公社

④和歌山城第17次確認調査（調査一覧91）

〔経緯〕 事務所建設に伴う事前確認調査

〔場所〕 和歌山市九番丁14・15・16-1

〔面積〕 16.12㎡

〔概要〕 和歌山城跡（遺跡番号379）は、紀ノ川南岸の平野部に存在する独立丘陵上に築かれた和歌山城を中心とする遺跡である（第1図）。今回の調査地は、和歌山城三の丸において、事務所建設工事が計画された工事に先立ち、遺跡の内容確認のために調査を実施した（第2図）。

第2区は大部分が近代の攪乱であったため、調査対象地の堆積状況が把握できたのは第1区のみである（第4図）。

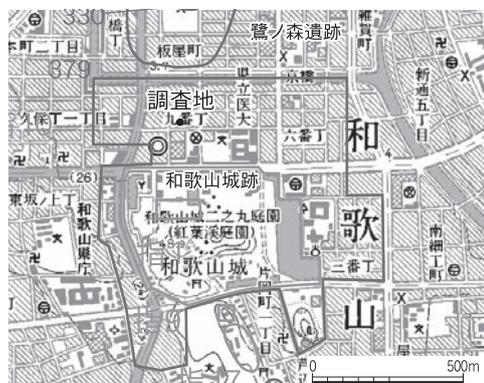
まず、現地表面下約10cmがアスファルト、その下約70cmが近現代の堆積層である。そのため、江戸時代以前の堆積層は第8層以下となる。第8層は黄褐色のシルト混細砂、第9層は褐色の細～中砂、第10層はにぶい褐色細～中砂である。第8・9層は遺物を少量含む包含層であり、第10層以下が無遺物層となる。

遺構は第1区第8層上面、第9層上面、第2区では近代の攪乱の下位で遺構を検出した（第4・5図）

〔第1区〕 第8層上面及び第9層上面で遺構を確認した。第8層上面では根石1基(SP-1)、第9層上面ではピット2基を検出した。また、近代の攪乱により検出面が不明な落ち込みを2基検出した。第8層上面の遺構からは国産陶磁器などが出土しており、江戸時代の遺構である。

〔第2区〕 近代の攪乱により検出面は不明であるが、近世の遺物のみを含む落ち込みを1基検出した。確認調査の結果、一部近代の攪乱により破壊されているものの、対象地内に江戸時代の遺構面が展開している状況を確認した。第1区では根石を確認しており、「安政二年和歌山城下町絵図」に描かれているように、武家屋敷などの建物が存在していたものと考えられる。

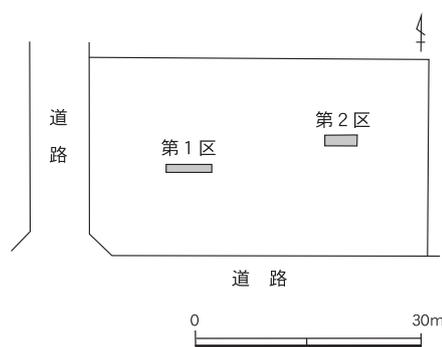
（大木）



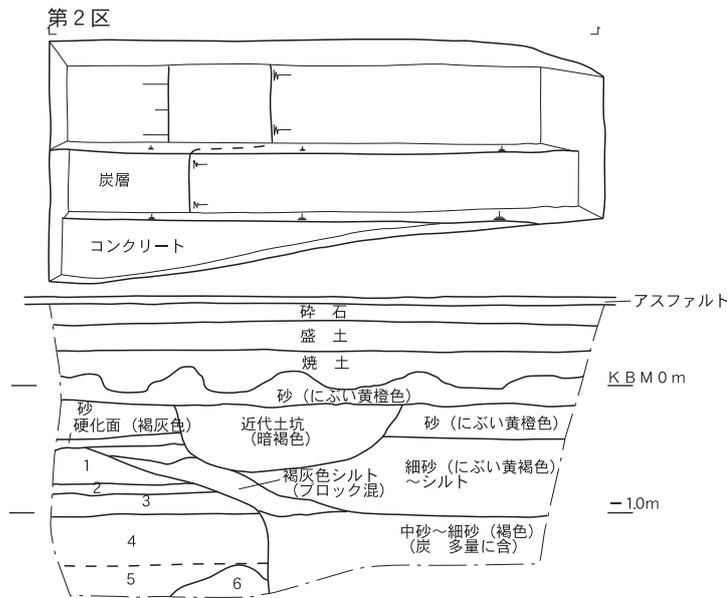
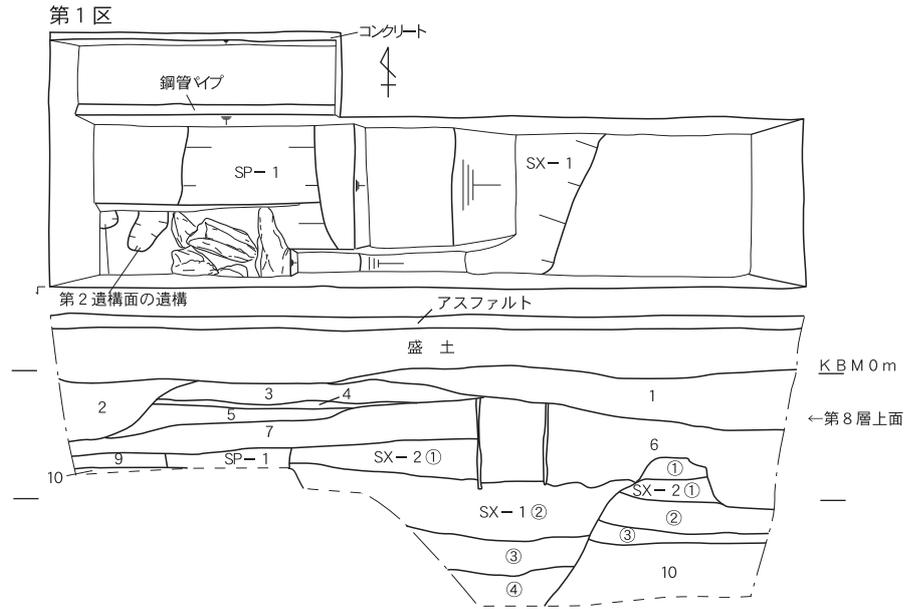
第1図 位置図



第2図 調査対象地



第3図 調査区位置図



〔第1区土層凡例〕

- 1 オリーブ褐色(2.5Y4/4)細砂
- 2 オリーブ褐色(2.5Y4/4)細砂混シルト
- 3 オリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト混細砂
- 4 オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト混細砂 (礫多く混じる)
- 5 オリーブ褐色(2.5Y4/6)シルト混細砂
- 6 黄褐色(2.5Y5/3)シルト混細砂
- 7 オリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト混細砂 (礫多く混じる)
- 8 黄褐色(2.5Y5/3)シルト混細砂
- 9 褐色(10YR4/4)細~中砂
- 10 にぶい黄褐色(10YR4/3)細~中砂
- SX-1 ①オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト混細砂
- ②オリーブ褐色(2.5Y4/4)シルト混細~中砂
- ③黄褐色(2.5Y5/4)細~中砂
- ④暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)細砂混シルト
- SX-2 ①黄褐色(2.5Y5/4)細~中砂 (炭多く含む)
- ②オリーブ褐色(2.5Y4/4)細~中砂
- ③オリーブ褐色(2.5Y4/4)細~中砂 (10層混じる)
- SP-1 灰黄褐色(10YR4/2)シルト混細砂

〔第2区土層凡例〕

- 1 暗灰黄色(2.5Y4/2)細砂混シルト
- 2 2と同じ (炭多量に含)
- 3 4と同じ 黄灰色混じらない
- 4 暗灰黄色 (2.5Y4/2)細砂混シルト (黄灰色混)
- 5 暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト~細砂
- 6 浅黄色(2.5Y7/4)細砂



第4図 調査区平面図・土層断面図 (S=1/60)

④神前Ⅱ遺跡第5次確認調査（調査一覧98）

〔経緯〕 店舗建設に伴う事前確認調査

〔場所〕 和歌山市神前166-3、166-1、167-1

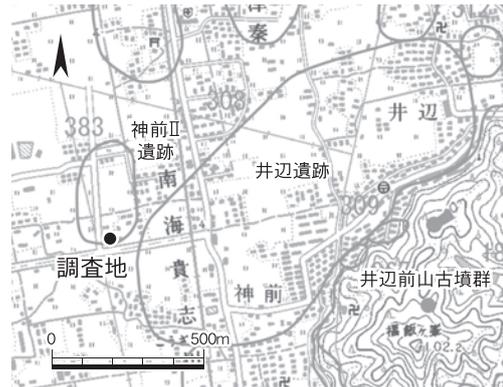
〔面積〕 30㎡

〔概要〕 神前Ⅱ遺跡（遺跡番号383）は、紀ノ川下流域南岸で、福飯ヶ峯西麓の井辺遺跡の西に立地し、南北約300m、東西約200mの範囲で古墳～室町時代の遺物散布地として知られる。今回の発掘調査は、遺跡の南側で店舗建設が計画され、浄化槽設置部分と看板設置部分が遺構面に達する可能性があったため、工事に先立ち、遺跡の内容確認のために調査を実施した。調査地の現況は、前身建物撤去後の更地であった。

第1区は、現地表下0.9mまで盛土で、その下は自然流路堆積層と思われる暗灰黄色中砂で、現地表下2.5mまで確認した。地盤調査ではその下は現地表下5mまで砂礫層が確認された。第2区は、現地表下0.9mまで盛土で、その下は暗青灰色細砂～シルト（耕土）、黄灰色細砂～シルト（遺物包含層か）、黄灰色～暗灰黄色中砂である。黄灰色～暗灰黄色中砂は第1区と同様の自然流路堆積層と思われる。

検出遺構はない。遺物は、第2区で遺物包含層から土師器細片が出土した。以上から調査地周辺は、南流する自然流路跡に相当すると考えられる。流路堆積の砂層の上は、近世以降の開発の耕作土と考えられる。

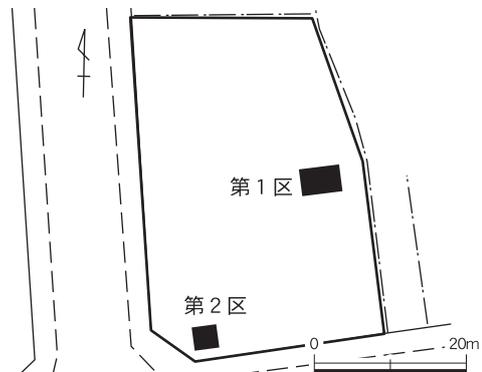
（富永）



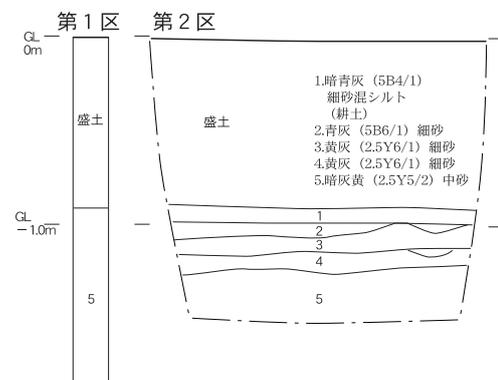
第1図 位置図



第2図 調査対象地



第3図 調査区位置図



第4図 調査区平面図・土層図

④鷺ノ森遺跡第9次確認調査、第10次発掘調査（調査一覧94・99）

〔経緯〕 個人住宅に伴う事前確認調査

〔場所〕 和歌山市九番丁14・15・16-1

〔面積〕 第9次調査：14.40㎡

発掘調査：48.18㎡

〔概要〕 鷺ノ森遺跡（遺跡番号329）は、和歌山城の北約1.0kmに位置する鷺ノ森別院の周辺に広がる遺跡で、弥生時代から江戸時代の散布地として周知されている。今回の調査地は、鷺ノ森遺跡の中心からやや東に寄った場所で、安政二年（1855）の城下町絵図では鍛冶町と記載されている部分にあたる。事業者である友瀬佳明氏から建設計画の打診を受け、埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行った結果、建設予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地である鷺ノ森遺跡に含まれることから、和歌山市教育委員会が遺構の有無や遺構検出面の深度等を確認するための確認調査実施した（第9次調査）。

確認調査の結果、第2層上面で近世の遺構面、第5層上面で中世に遡る可能性のある遺構を確認した。第2層上面では鍛冶屋町に関連する遺構、第5層上面では城下町形成以前の遺構が展開している可能性が判明した。（第4図）。

この結果を受け、事業者と和歌山市教育委員会及び和歌山県教育委員会が協議を重ねた結果、個人住宅建設において現地保存は困難であり、記録保存のための本発掘調査を実施することとなった。

調査区は、個人住宅の建物基礎部分を対象に設定した（第3図）。

調査地の現況は宅地であり、機械掘削は既存建物の攪乱層までとし、それ以下を人力により掘削した。土坑等の掘削に関しては、土層観察用のセクションベルトを遺構に直交するライン上に設定し、土層堆積状況について写真撮影、実測図を作成した。

図面による記録は、平面図に関しては国土座標を基準とした値を使用し、このラインを基準として実測を行った。遺構平面図及び断面図、壁面土層断面図については1/20の縮尺を用いた実測を行った。

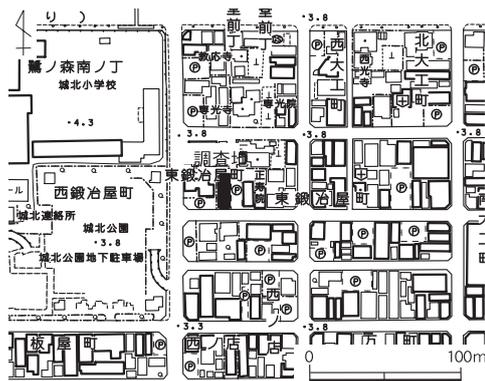
土層の色調観察は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帳』を用い、T.P.値を基準とした。

また、調査区南壁に一部サブトレンチを設定し、下層遺構の調査を実施した。

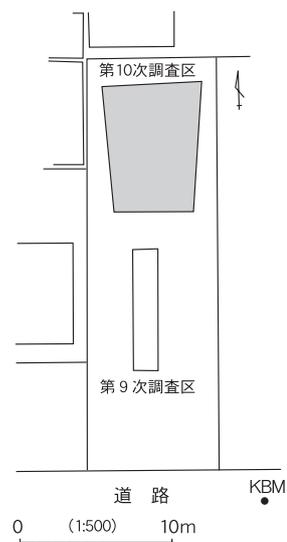
調査地の地表面標高は標高約3.5m前後をはかる。確認調査時は既存



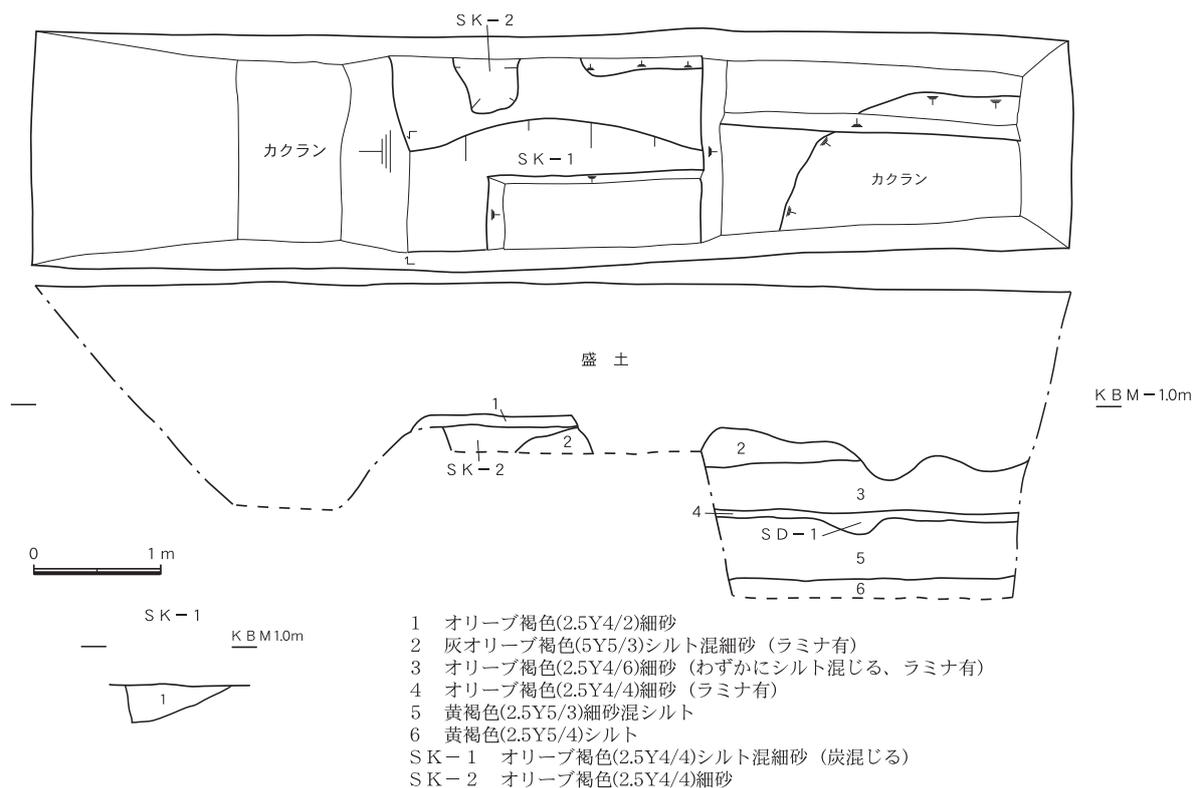
第1図 位置図



第2図 調査対象地



第3図 調査区位置図



第4図 調査区平・断面図 (S=1/60)

建物の攪乱層が現地表面下、約1.0mまでしか及んでいなかったが、本発掘調査地では攪乱層が現地表面下1.4~1.9mまで達していた。そのため、確認調査時の第1~3層は破壊されて残っていなかった。そのため、ここでは確認調査時の成果も踏まえて、記述する。

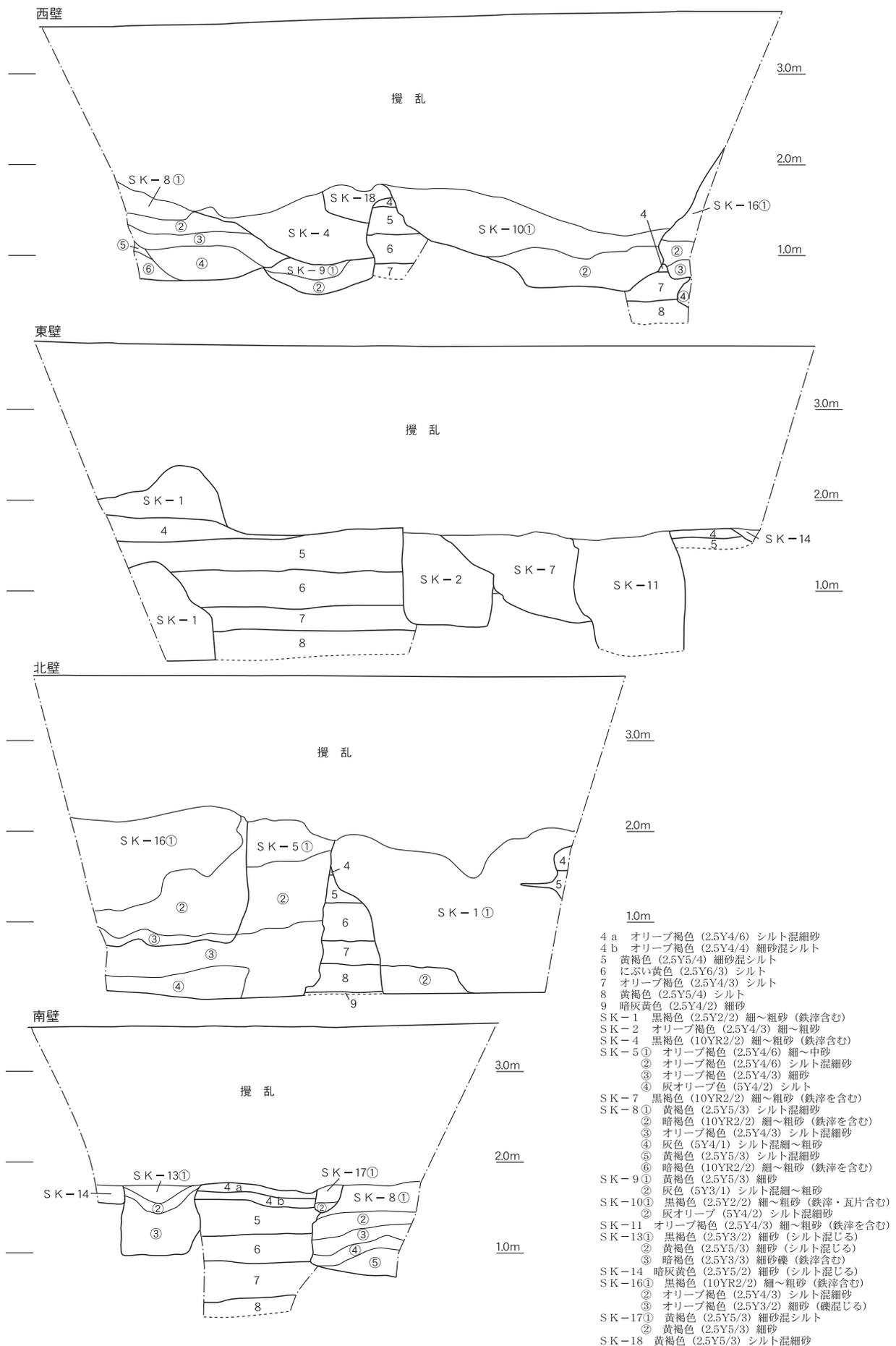
第1層は約8cmのオリーブ褐色細砂、第2層は約30cmの灰オリーブ色シルト混細砂、第3層は約40cmのわずかにシルトが混じるオリーブ褐色細砂、第4層は約20cmのオリーブ褐色シルト混細砂、第5層は30~45cmの黄褐色細砂混シルト、第6層は約30cmのにぶい黄色シルト、第7層は約30cmのオリーブ褐色シルト、第8層は約25cmの黄褐色シルト、第9層は暗灰黄色細砂である。

第5~8層は土師器・瓦器を含む遺物包含層で、第9層以下は無遺物層であると考えられる。

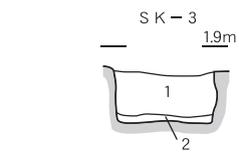
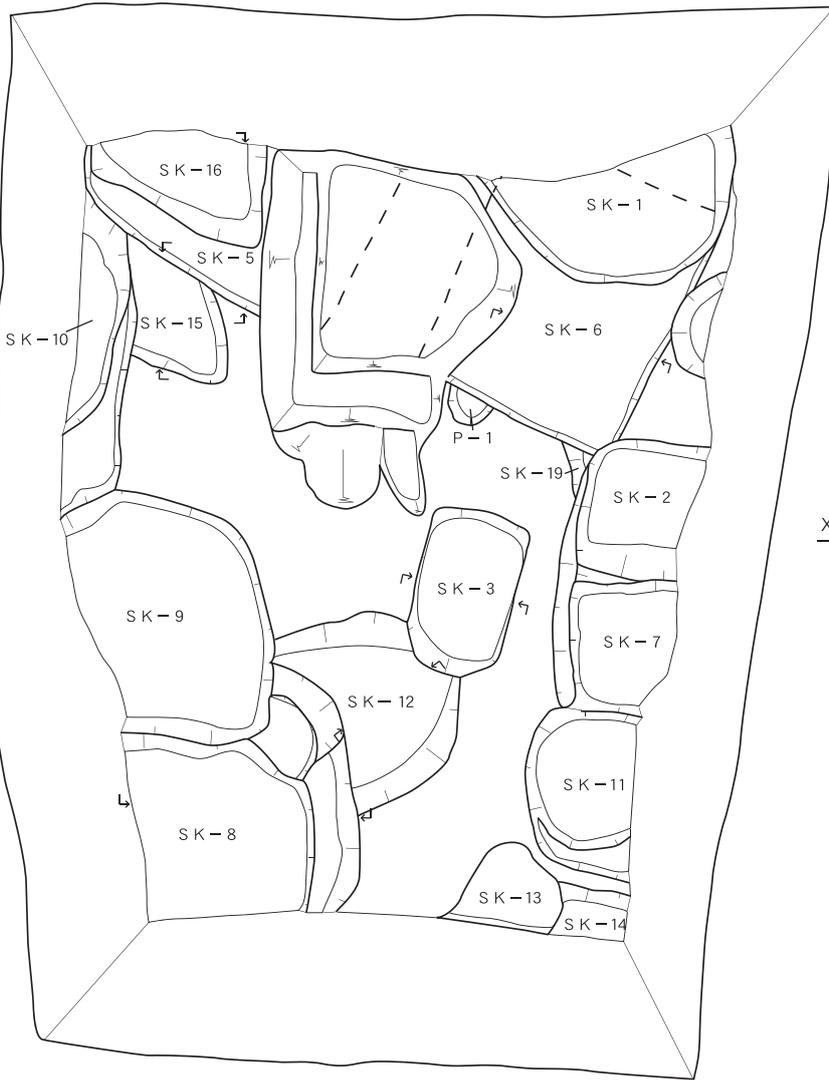
遺構は、第1~3層と調査区の大部分で第4層まで破壊されていたため、第5層上面で検出をおこなった。検出した遺構は全て江戸時代の遺構である。以下では主な遺構と遺構から出土した遺物について概要を記載する。

SK-1 調査区北東隅で検出した土坑で、おおよそ遺構の南半分を確認した。平面形は円形を呈し、東西約2.1m、南北1.0m以上、深さ約1.8mを測る。後世の攪乱によりこの遺構に帰属する遺物を抽出できなかったため遺構の時期は不明である。ただし、調査区の断面より寛永通宝が1点出土している(第8図52)。

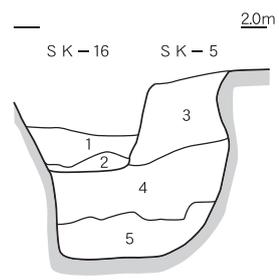
SK-2・7・11 調査区の東端で検出した土坑で、平面形は隅丸方形を呈し、東西0.9m以上、南北1.0~1.3m、深さはSK-2・7が約1.0m、SK-11は1.3mまで掘削したが、湧水のため掘りきれなかった。土層観察の結果、これらの土坑はSK-2→SK-7→SK-11の順に掘削されていることが判明した。埋土からは肥前系陶磁器、瀬戸美濃焼、備前焼、堺焼、フイゴの羽口、鉄滓が出土した(第6図)。1~3は肥前系染付碗で、1は高台無釉碗、2は腰張筒形碗、3は筒形碗である。3に



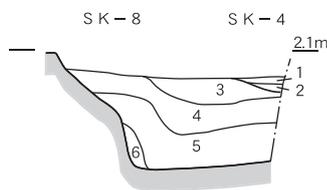
第4図 土層断面図 (S=1/60)



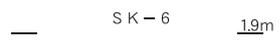
- 1 暗褐色 (10YR3/4) 細砂混礫 (鉄滓少量含む)
- 2 オリーブ褐色 (2.5Y4/3) シルト混細~中砂



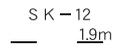
- 1 オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 細砂 [SK-16]
- 2 黒褐色 (7.5Y3/2) 細砂礫 (鉄滓含む) [SK-16]
- 3 褐色 (10YR4/4) 細砂 (わずかにシルト混じる) [SK-5]
- 4 オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 細砂 (わずかにシルト混じる) [SK-5]
- 5 オリーブ褐色 (2.5Y4/4) シルト [SK-5]



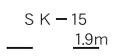
- 1 暗褐色 (10YR3/3) 細砂混礫 [SK-4]
- 2 黄褐色 (2.5Y5/3) 細~中砂 [SK-4]
- 3 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 細砂混シルト (鉄滓多く含む) [SK-4]
- 4 にぶい黄色 (2.5Y6/3) シルトに褐色 (10YR4/4) 細砂混シルト混じる [SK-8]
- 5 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 細砂混シルト [SK-8]
- 6 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 細砂混シルトに褐色 (7.5Y4/4) 粗砂混じる [SK-8]



- 1 オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 細~中砂 (黄褐色 (2.5Y5/2) シルトブロック多く含む)
- 2 オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 細~中砂 (黄褐色 (2.5Y5/2) シルトブロック多く含む)
- 3 オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 細~中砂 (暗灰黄色 (2.5Y4/2) シルトブロック少量含む)
- 4 オリーブ褐色 (2.5Y4/6) 中~粗砂



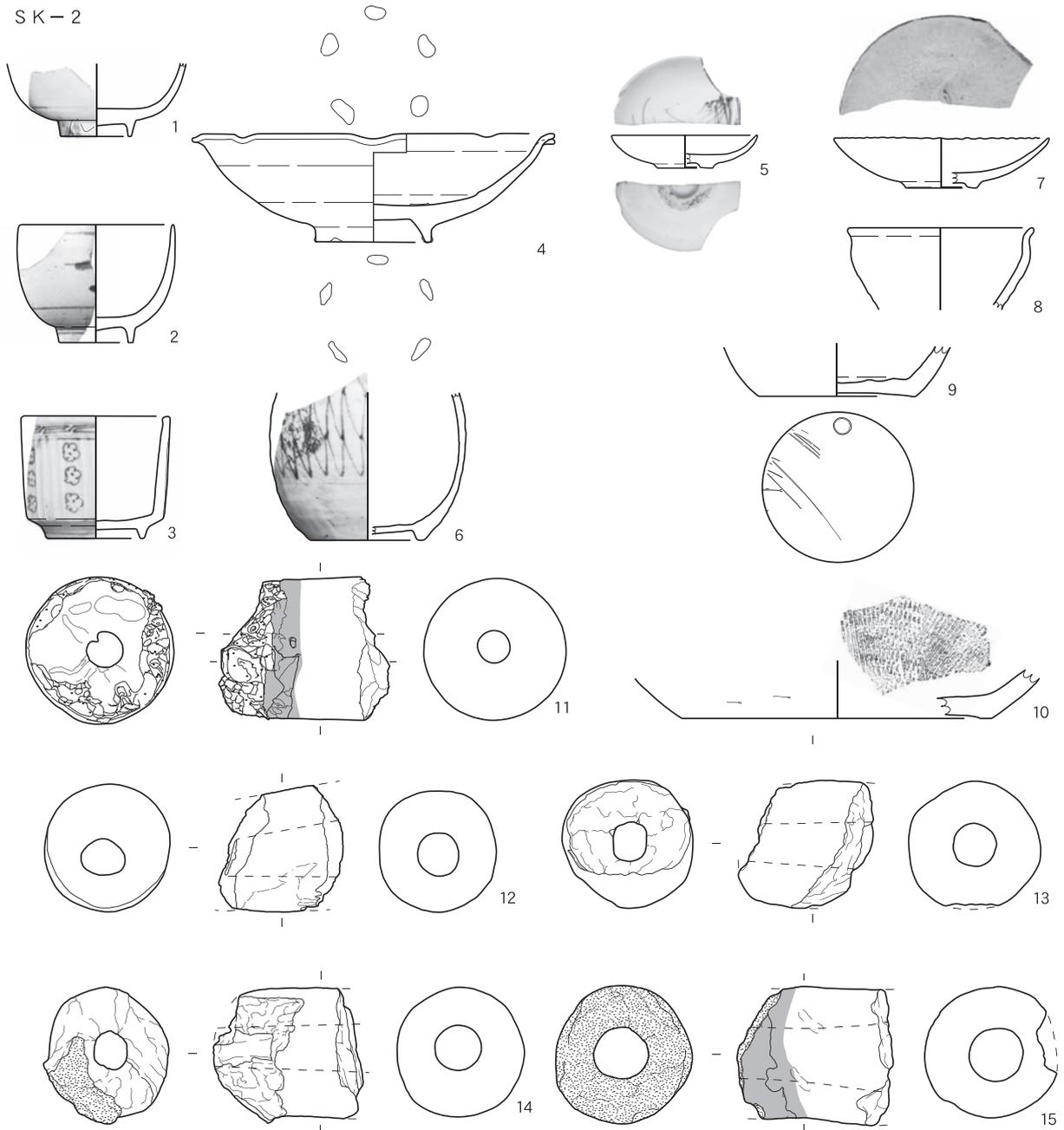
- 1 オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 細~中砂 (わずかにシルト混じる)



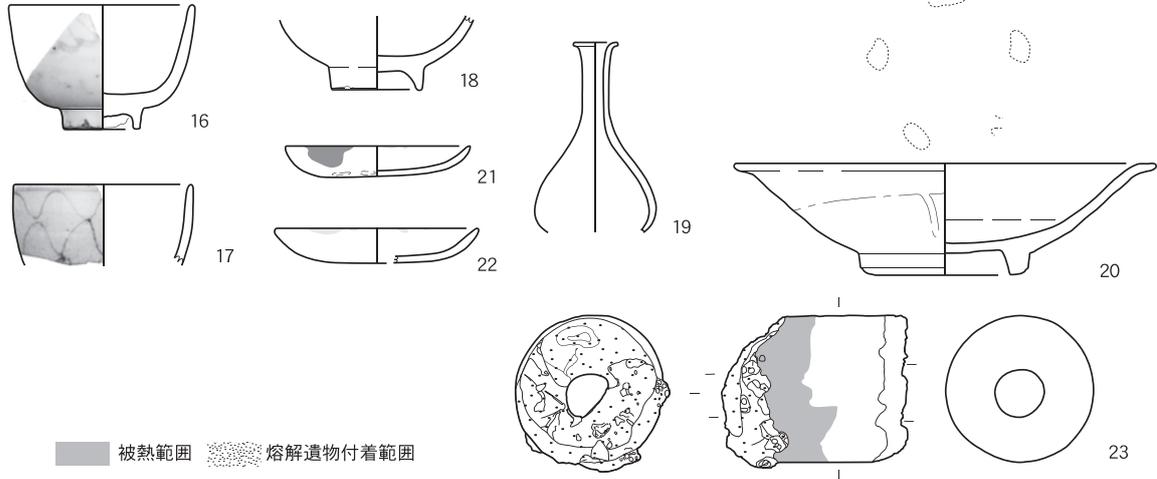
- 1 黄褐色 (2.5Y5/6) 細~中砂

第5図 調査区平・断面図 (S=1/60)

SK-2



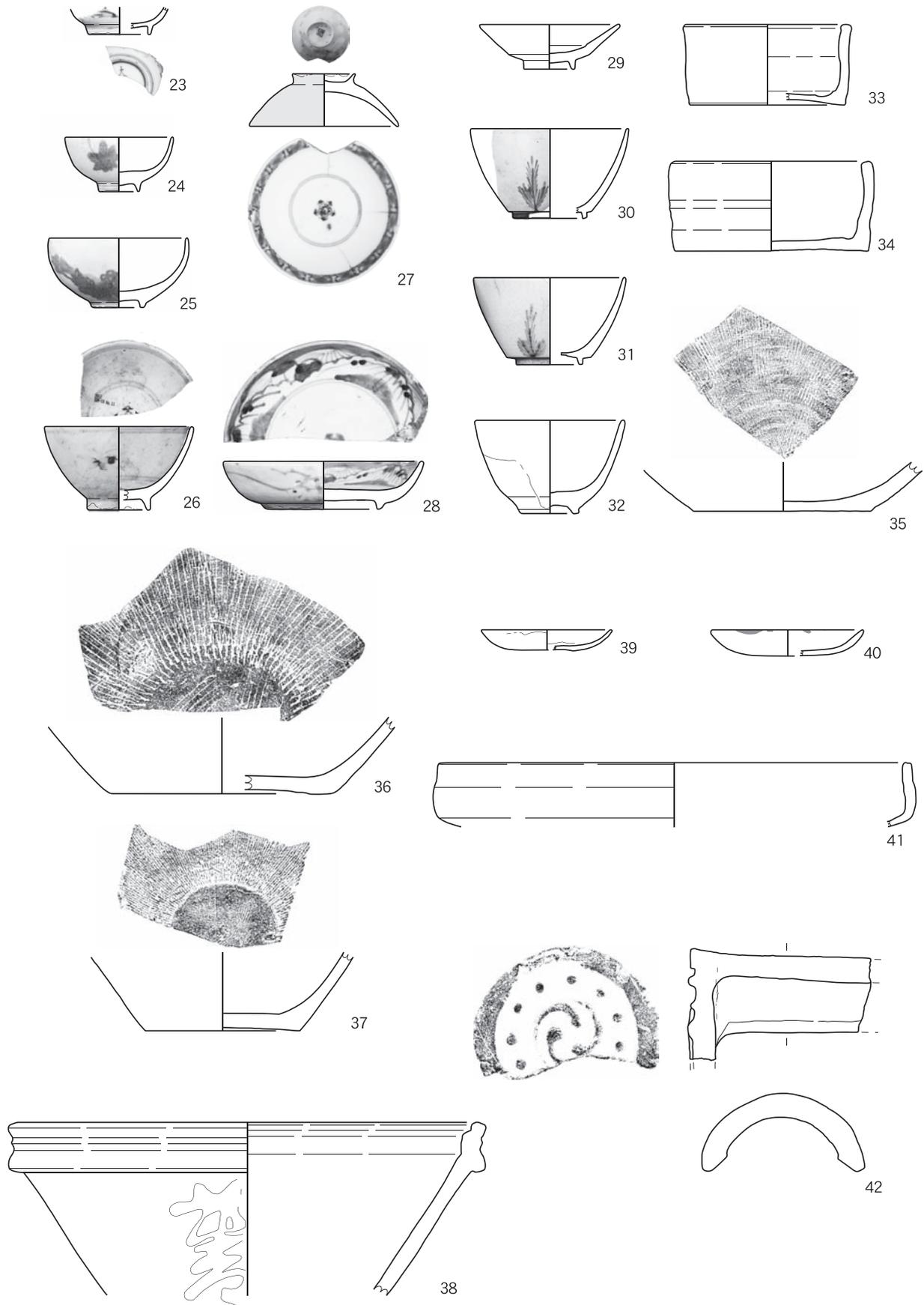
SK-3



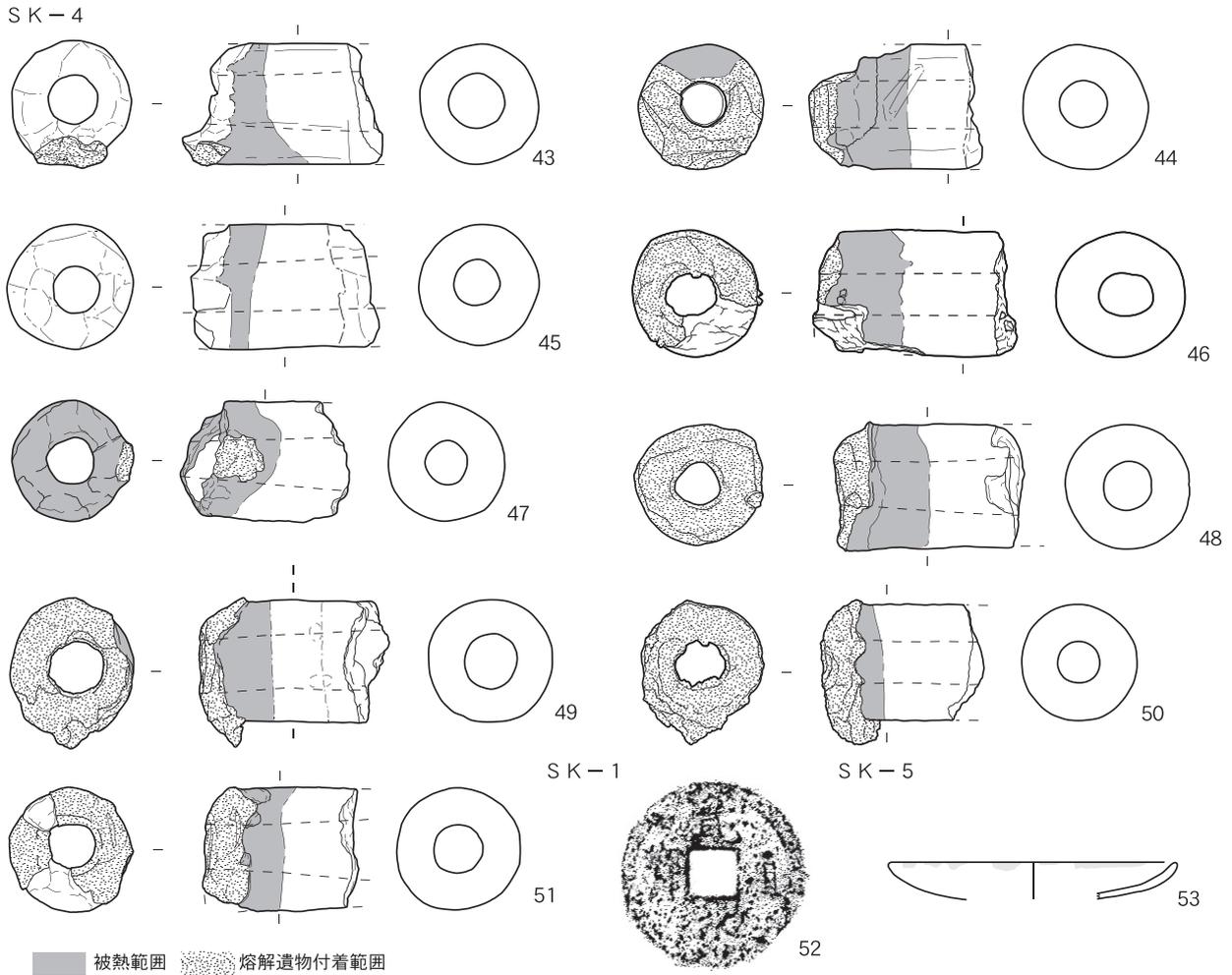
被熱範囲 溶解遺物付着範囲

第6図 遺物実測図① (S=1/4)

SK-4



第7図 遺物実測図② (S=1/4)



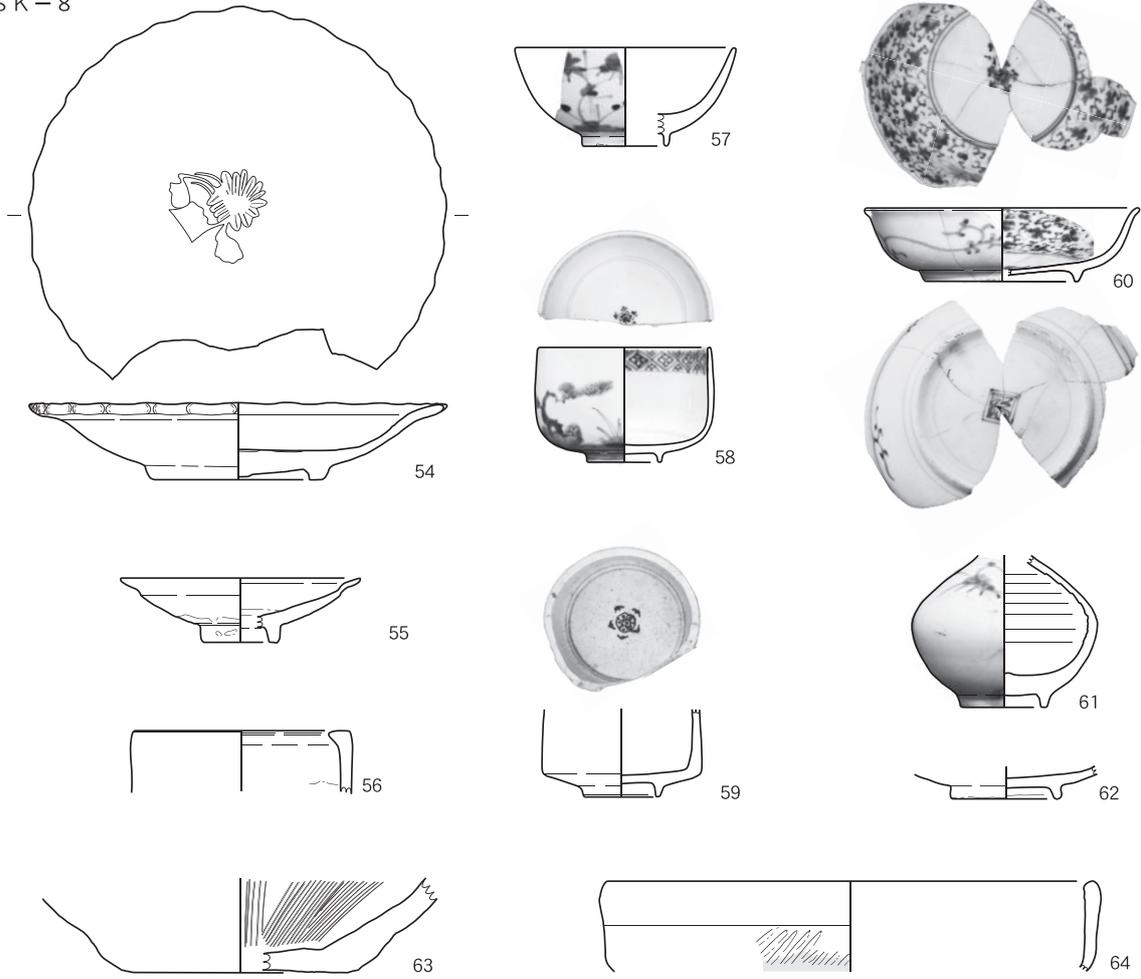
第8図 遺物実測図③ (S=1/4)

は外面に梅文が施される。4は肥前系陶器皿で内面及び高台部分に胎土目の痕跡が確認できる。5は肥前系染付皿で蛇ノ目高台を有し、内面に草花文を施す。6は肥前系染付瓶で外面に一重網目文を施す。7・8は瀬戸美濃焼である。7は長石釉を施した菊花皿である。8は褐釉施した天目茶碗である。9は備前焼の瓶で底部に円形のスタンプを施す。10は備前焼播鉢である。11～15はフイゴ羽口で、内径は2.0～3.0cm、外形は7.0～9.0cmを測る。遺構の時期は3や5のように17世紀前半に遡る遺物も存在するものの、一重網目文を施す染付瓶（6）などから17世紀中頃～後半とみられる。

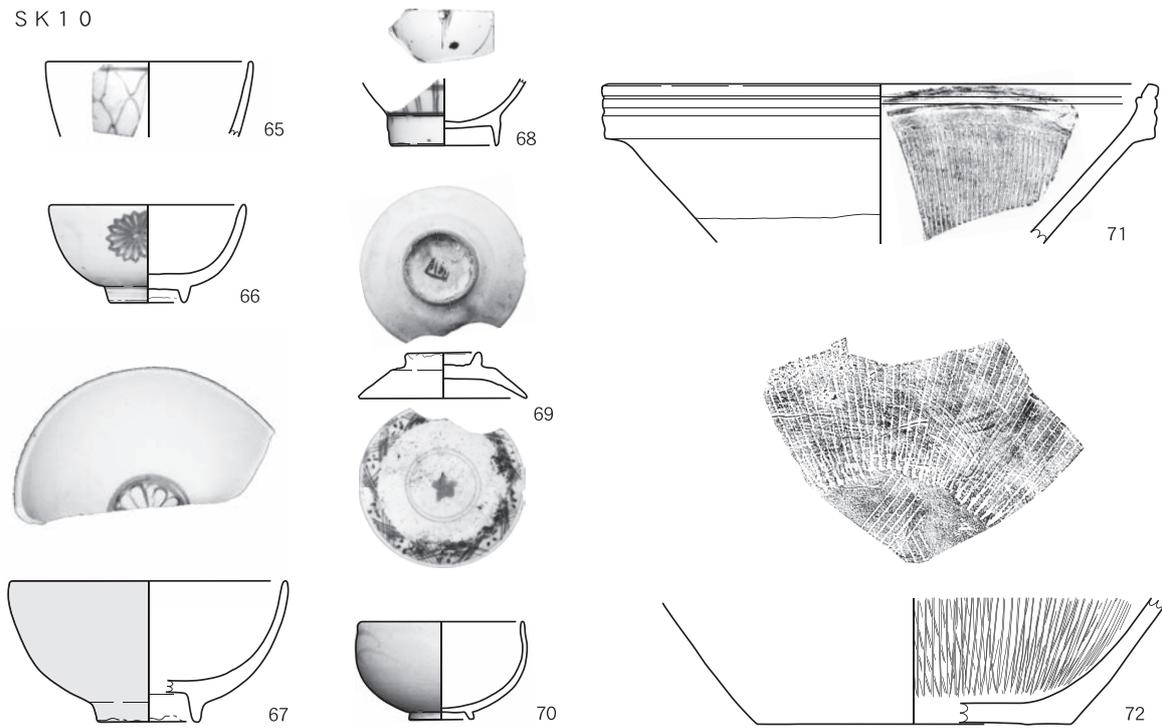
SK-11からは肥前系陶磁器、堺焼、フイゴ羽口などが出土した（第10図）。73は肥前系染付皿である。74は肥前系白磁碗で、内面に蛇ノ目釉剥ぎが確認できる。75は堺焼播鉢、76はフイゴ羽口である。76は復元で内径約3.0cm、外径約11.0cmを測る。遺構の時期は、堺焼播鉢のすり目の間隔が口縁部付近で広くなど古相の特徴を有していることから、18世紀前半とみられる。

SK-3 調査区中央で検出した土坑で、平面形が隅丸長方形を呈し、長軸約1.3m、短軸0.75m、深さ0.45mを測る。埋土からは肥前系陶磁器、土師器、フイゴの羽口、鉄滓などが出土している（第6図）。16・17は肥前系染付腰張筒形碗で16は外面に草花文、17は一重網目文を施す。18は肥前系白磁碗、19は肥前系白磁瓶である。20は肥前系陶器皿で内面に砂目が確認できる。21・22は土師器皿である。口縁端部に煤の付着が確認できる。遺構の時期は一重網目文を施す染付碗（17）や陶器皿（20）からみて17世紀中頃とみられる。

SK-8

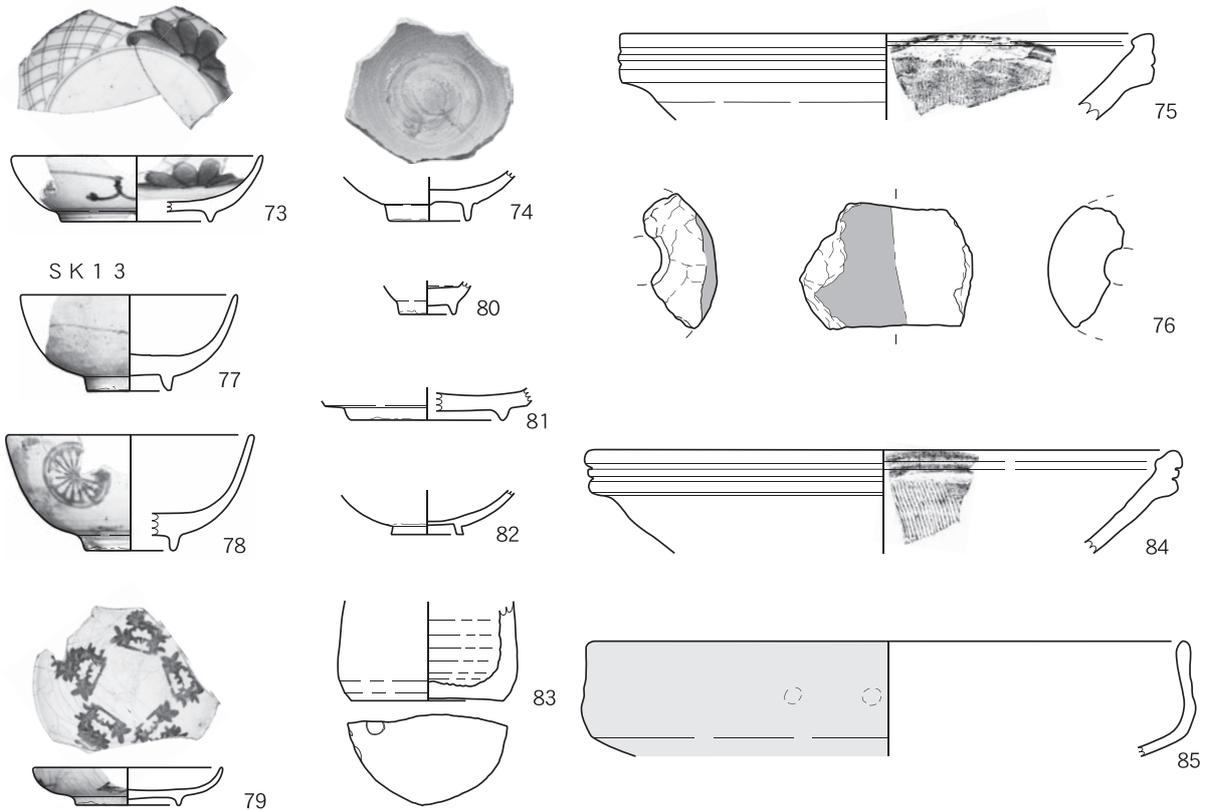


SK10



第9図 遺物実測図④ (S=1/4)

SK-11



第10図 遺物実測図⑤ (S=1/4)

SK-4・8・9 調査区南西隅で検出した土坑で、3基の土坑が重複しており、SK-9→SK-8→SK-4の順に掘削されている。それぞれの土坑の深さはSK-4が約0.8m、SK-8が約1.05m、SK-9が約1.2mである。SK-4からは中国製磁器、肥前系陶磁器、京・信楽焼系陶器、備前焼、堺焼、土師器、瓦、フイゴ羽口などが出土した(第7・8図)。23は中国製磁器碗で高台内に「大」の銘が確認できる。24~26は肥前系染付碗で24・25の外面にコンニャク印判による施文が確認できる。26は外面に草花文が施されるが後世に火を受けた影響により文様が消えている。27は肥前系青磁染付皿である。高台内に渦「福」銘、見込みに五弁花文を施す。28は肥前系染付皿で見込みに五弁花文を施す。29は肥前系白磁皿、30・31は京・信楽系の小杉碗、32は肥前系陶器碗、33・34は備前焼の建水である。35~38は堺焼播鉢である。38は外面に墨書が確認できる。割れているため文字の判別は難しいものの、「菁」と書かれていた可能性がある。39・40は土師器皿である。39は内面に透明釉が施されている。40は口縁端部に煤が付着している。41は土師器焙烙である。42は軒丸瓦で、瓦頭文様は左巻き三巴文である。43~51はフイゴの羽口で、内径は2.0~3.0cm、外形は6.0~7.0cmを測る。遺構の時期は陶器碗(32)など17世紀に遡る遺物もあるが、青磁染付蓋(27)などから18世紀後半とみられる。

SK-8から中国製青磁、肥前系陶磁器、備前焼、土師器、フイゴ羽口などが出土した(第9図)。54は中国製龍泉窯系青磁大皿である。55~62は肥前系陶磁器である。55は青磁皿で内面に蛇ノ目釉剥ぎが確認できる。56は青磁香炉である。57~59は染付碗で、58・59は見込みに五弁花文を施す。59は火を受けたため外面の文様が消えている。60は染付皿で高台内に渦「福」銘、見込みに五弁花文を施す。61は染付瓶で外面に草花文を施す。62は陶器皿である。63は備前焼播鉢、64は土師器焙

烙で外面にタタキを施す。遺構の時期は中国産青磁大皿（54）など16世紀代の遺物も含むが、見込みに五弁花を施す染付碗（58・59）や染付皿（60）から18世紀中～後半とみられる。

SK-5 調査区北西隅で検出した土坑で、平面形が一辺約2.2mの方形を呈し、深さ約1.95mを測る。ほぼ垂直に掘削されており、シルトブロックの混じる細～中砂で埋め立てられている。埋からは土師器、須恵器、備前焼の小片が出土した（第8図53）。53は土師器皿である。口縁端部に煤が付着している。遺構の時期を確定できる遺物は少ないものの、SK-6と遺構の形態や埋没状況が類似することから同時期の遺構と考えられる。

SK-6 SK-5に隣接する、平面形が長方形を呈する土坑で、長軸約2.15m、短軸約1.65m、深さ約1.55mを測る。SK-5と同様にほぼ垂直に掘削されており、シルトブロックの混じる細～中砂で埋め立てられている。埋土からは土師器・瓦器のほか、中国製染付磁器が出土している（第11図）。86は漳州窯系の呉須赤絵の染付碗、87は染付皿の底部である。この遺物から遺構の時期は16世紀後半～17世紀初頭とみられる。

SK-10 調査区北西隅で検出した土坑で、南北約2.5m、東西0.5m以上、深さ約1.1mを測る。埋土からは肥前系陶磁器、堺焼、瓦等が出土した。65～70は肥前系陶磁器である。65・66は染付碗で、65は外面に一重網目文、65はコンニャク印判による菊花文を施す。67は青磁染付碗で見込みに菊花文を施す。68は染付広東碗である。69は染付蓋で高台内に渦「福」銘、見込みにコンニャク印判による五弁花文を施す。70は京焼風陶器碗で、外面に草花文を施す。71・72は堺焼播鉢である。遺構の時期は、出土遺物が17世紀後半～19世紀前半と時期的なまとまりがないが、染付広東碗（68）から19世紀前半の遺構と考えておきたい。

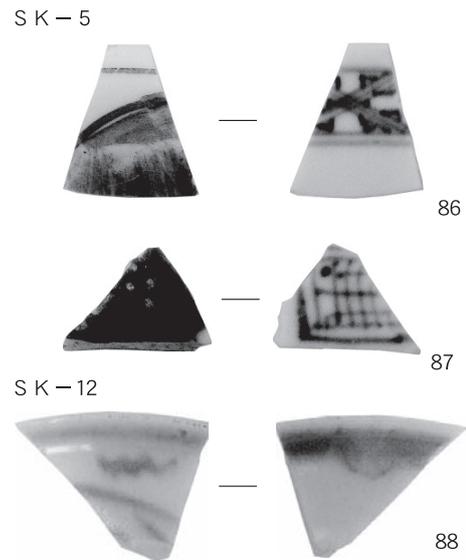
SK-12 調査区中央南で検出された土坑で、長軸1.5m以上、短軸約1.45m、深さ約0.2mを測る。埋土からは中国製染付磁器、土師器、瓦が出土した。遺構の時期は、染付皿（第11図88）の存在から16世紀頃とみられる。

SK-13 調査区南端で検出された土坑で、平面形が不整形円形を呈し、深さ約0.8mを測る。埋土からは、肥前系陶磁器、瀬戸美濃系陶器、京・信楽焼系陶器、堺焼、土師器、フイゴ羽口、鉄滓などが出土した（第10図）。77～80は肥前系陶磁器である。77・78は染付碗、79は染付皿である。80は白磁小碗、81は瀬戸美濃系灰釉皿である。82は京・信楽焼系の碗である。83は丹波焼の可能性のある小型の壺である。底部に円形のスタンプが施される。84は堺焼播鉢、85は土師器焙烙である。遺構の時期はコンニャク印判による施文が認められる染付皿（79）などから18世紀中～後半とみられる。

SK-15 調査区北西で検出した土坑で、平面形が不整形な長楕円形を呈し、深さ約0.1mを測る。

SK-16 調査区北西隅で検出した土坑で、平面形が不整形方形を呈し、検出できた部分では1辺1.5m、深さ1.45mを測る。埋土より肥前系陶磁器、鉄滓などが出土した。

調査の結果、第5層上面で江戸時代の遺構面を確認した。検出した遺構はピット1基（SP-1）、をのぞくと全て土坑である。検出した遺構は、城下町の鍛冶町に関連する鉄滓やフイゴ羽口、火を



第11図 SK-6・12出土遺物

受けた土器など廃棄土坑と考えられる遺構（SK-1～4・7～9・11・13・14・16）とそれ以外の遺構（SK-5・6・12・15・19、P-1）に大きく分かれる（第12図）。また、遺構の重複関係から後者の遺構の方が古く、土質も異なる傾向がある。

廃棄土坑は17世紀中頃～18世紀後半の間形成されており、19世紀以降はSK-10の瓦の廃棄土坑のみのため、対象地周辺の鍛冶行為は17世紀中頃からはじまり、19世紀には低調になっていた可能性が想定される。廃棄土坑形成以前の遺構は遺物量が少なく、詳細は不明であるが、SK-5から16世紀末～17世紀初頭の遺物が出土しているため、桑山期（1585～1600年）～浅野期（1600～1619年）に形成された遺構の可能性がある。以上の状況から、対象地周辺は城下町形成時にはまだ鍛冶屋町として明確には機能しておらず、17世紀中頃以降、鍛冶関係をおこなう職人町として機能するようになった可能性が想定される。19世紀以降の状況に関しては、周辺の状況も踏まえて検討する必要がある。

④5 鳴神Ⅱ遺跡第4次確認調査（調査一覧95）

〔経緯〕 個人住宅建設に伴う事前確認調査

〔場所〕 和歌山市鳴神103-4

〔面積〕 9.0㎡

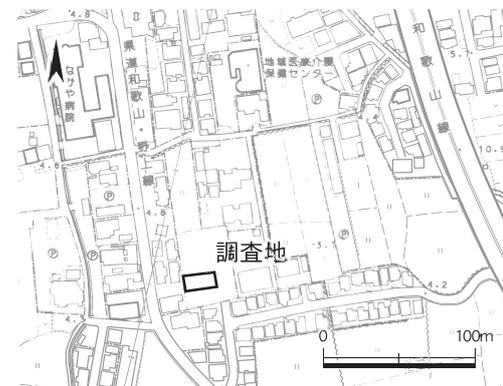
〔概要〕 鳴神Ⅱ遺跡（遺跡番号314）は、紀ノ川下流域南岸に立地し、岩橋千塚古墳群の西に位置する。南北約380m、東西約280mの範囲で、弥生～平安時代の用水路跡を中心とした遺跡として知られる。今回、遺跡のほぼ中央で個人住宅新築工事が計画されたことから、工事に先立ち、遺跡の内容確認のために発掘調査を実施した。調査地の現況は、造成地であった。

調査地周辺の標高は4.4m前後である。調査地は盛土厚が0.95mあり、それ以下の基本層序は、第1層 暗青灰色シルト（耕作土）、第2層 青灰色～緑灰色細砂混シルト、第3層 青灰色細砂混シルト、第5層 黄灰色粘質シルト（遺物包含層）、第6層 黄灰色～明黄褐色粘質シルト（地山）、第7層 暗い黄灰色粘土である。第6層以下が無遺物層（地山）で、軟弱な粘質シルト・粘土である。現地表下1.55mで第6層上面となる。遺構は検出されなかった。遺物は、第4・5層から土師器・瓦器小片が出土した。

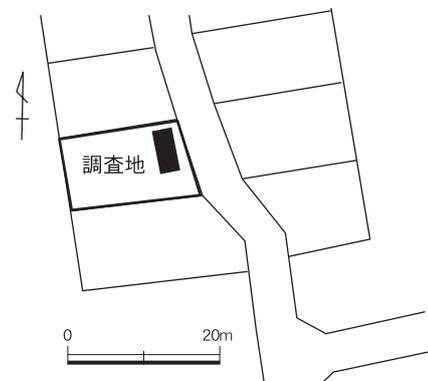
調査の結果、希薄な遺物包含層が確認されたが、遺構は検出されず、対象地内に遺構が展開する可能性は低い。調査地の北西の第1次調査では、古墳時代の溝が発見された。調査地の北東の第3次調査では、北東方向に微高地が展開し、南側は低地になることが確認された。以上から、調査地周辺では、南に向かって遺構が希薄となる可能性がある。（富永）



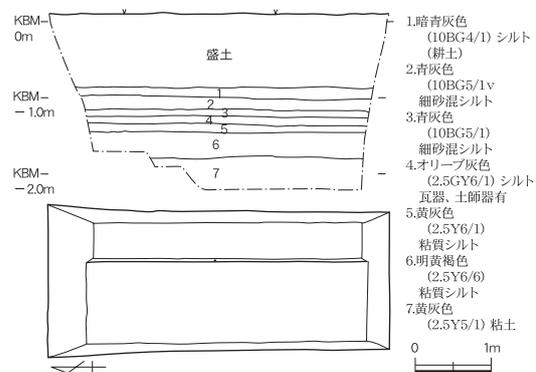
第1図 位置図



第2図 調査対象地



第3図 調査区位置図



第4図 調査区平面図・土層図 (S=1/100)

④木ノ本Ⅱ遺跡第3次確認調査（調査一覧101）

〔場所〕和歌山市木ノ本224-8、224-14

〔面積〕3.5㎡

〔概要〕木ノ本Ⅱ遺跡（遺跡番号41）は、和泉山脈南麓の扇状地および沖積低地に展開する、東西約0.9km、南北約0.3kmの遺跡である。今回の調査は、遺跡の南西部において個人住宅の建設が計画されたことに起因する。事業者から計画の打診を受け、埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行った結果、建設予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地である木ノ本Ⅱ遺跡に含まれることから、和歌山市教育委員会で遺構の内容を確認するための確認調査を実施した（第1・2図）。過去の調査においては、本調査地の南側で行われた木ノ本Ⅱ遺跡確認調査（和歌山市教育委員会（2011））では中世の遺構が確認されている。

木ノ本Ⅱ遺跡の周辺では和泉山脈南麓裾部にそって東側には金製勾玉の出土した車駕之古址古墳が、西側には中世の遺構や遺物が出土している木ノ本Ⅲ遺跡や、弥生時代後期～古墳時代にかけての住居址や中世の住居址が確認されている西庄遺跡が連なっている。

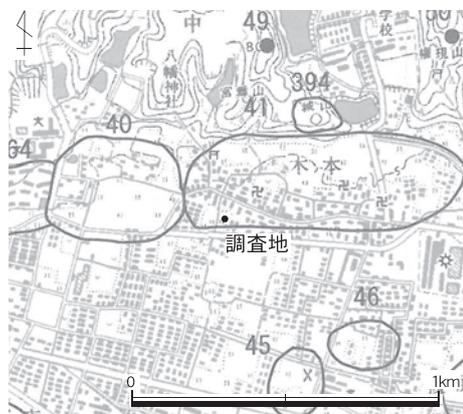
調査地は和泉山脈南麓裾部に広がる住宅地に立地する個人住宅建設予定地である。対象地は約100㎡の北東-南西を長軸とする長方形であり、対象地内の建物建設予定地を避ける形で調査区を設定した（第3図）。調査地の現況は宅地であり、近現代の盛土までを機械掘削とし、以下は機械掘削後人力による精査を行い遺構や遺物の有無を確認した。土層堆積状況や遺構の検出状況については写真撮影、実測図を作成した。

図面による記録は、平面図に関しては調査地と隣地とを区画する隣地境界線を、断面図に関しては調査地に南面する道路にある消火栓をKBM=0.0mとして実測を行った（第3図）。壁面土層断面図と遺構平面図については1/20の縮尺を用いて、手測りによる実測を行った。また、土層の色調観察は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖2006年版』を用いた。

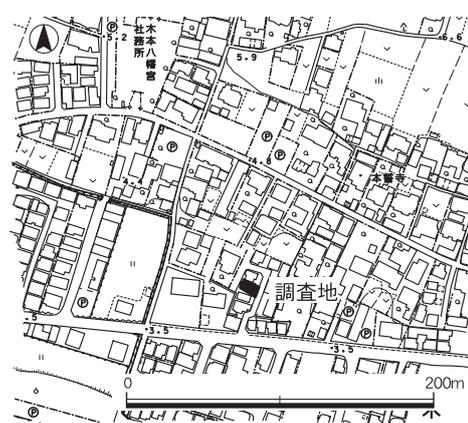
本調査地の基本層序は以下の通りである（第4図）。

第0層：現代の盛土である。

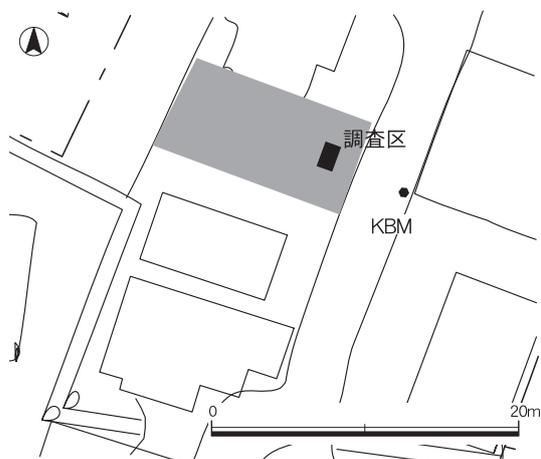
第1層：層厚20～25cmでオリーブ黒色砂質土からな



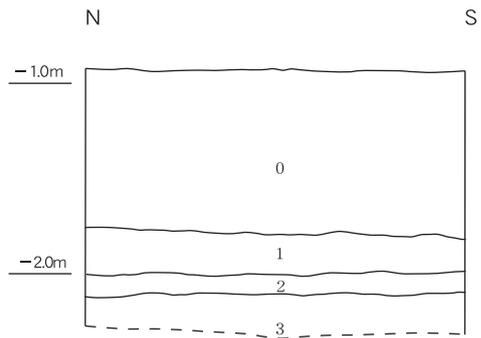
第1図 位置図



第2図 調査対象地



第3図 調査区配置図



- 0 : 盛土
 1 : オリーブ黒 (5Y3/1) シルト混じり極細粒砂 (1層)
 2 : 灰 (10Y4/1) 細～極細粒砂 (3層との層離面付近に土器を含む。2層)
 3 : 灰 (10Y4/1) 細～極細粒砂質シルト (3層)

第4図 調査区土層図 (S=1/40)

る。近世～近現代の堆積層と考えられる。

第2層；層厚約10cmの灰色砂質土からなり、第3層との層離面付近から土師器の小片が数点出土していることから、希薄な遺物包含層と考えられる。

第3層；層厚15cm以上の灰色砂質土からなる。水成堆積層と考えられる。

本調査の結果、第2層からは時期不明の土師器小片が数点出土したが、遺構を確認することは出来なかった。以上のことから、今回の調査地内には埋蔵文化財が展開しないものと考えられる。

(清水)

【参考文献】

『平成21年度和歌山市内遺跡発掘調査概報』2011 和歌山市教育委員会

④7 鳴神V遺跡第12次確認調査（調査一覧102）

〔経緯〕 土地造成に伴う事前確認調査

〔場所〕 和歌山市鳴神1012番2、1023番2、1023番12

〔面積〕 23.20㎡

〔概要〕 鳴神V遺跡（遺跡番号318）は、紀ノ川下流域南岸に立地し、花山丘陵の西に位置する。南北約300m、東西約400mの範囲で、弥生～平安時代の遺物散布地として知られる。今回調査地の東の鳴神V遺跡第2次・第3次発掘調査では、古墳時代から鎌倉時代の遺構が検出された。

今回は、遺跡内の南の耕作地で、擁壁設置工事が計画されたことから、工事に先立ち、遺跡の内容確認のために調査を実施した。その結果、擁壁設置部分が記録保存の発掘調査対象となった（第13次）。

調査地の現況は、水田であった。水準は、対象地東のマンホール蓋を基準として、基準との比高差で示した。調査地周辺の標高は3.8～4.1mである。

調査区の基本層序は、上から第1層：近現代耕作土、第2～4層：中世～近世耕作土・床土、第5層：中世遺物包含層、第6～7層：古墳時代～遺物包含層、第8～9層：地山である。第8層はにぶい黄橙色シルト層で、現地表下0.5～0.6mで検出した。

第8層上面で、第1区でピット5基、第2区で溝1条・土坑5基、第3区で浅い土坑3基を検出した。遺構の出土遺物は少ないが、主に古墳時代となる可能性がある。

第3～5層から土師器・須恵器・瓦器が出土し、第6～7層から土師器・須恵器が出土した。調査地東側の第1・3区は遺構・遺物とも少なく、西側の第2区はやや多い。

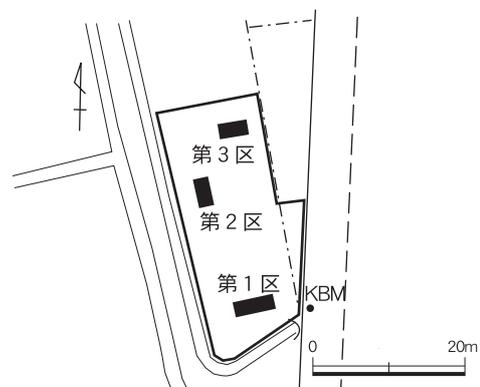
調査の結果、今回調査地は、東隣接地の鳴神V遺跡第2次・第3次発掘調査で検出された古墳時代から鎌倉時代の遺構が、同様に展開していることが確認された。第2次・第3次調査では、北半分が微低地となり、南半分の微高地部分に主に遺構が展開していた。今回調査地は、第2・3次調査との位置関係及び耕作土からの比高差では、微低地にあたると思われるが、微高地部分ほど密ではないが、遺構の展開がみられる。（富永）



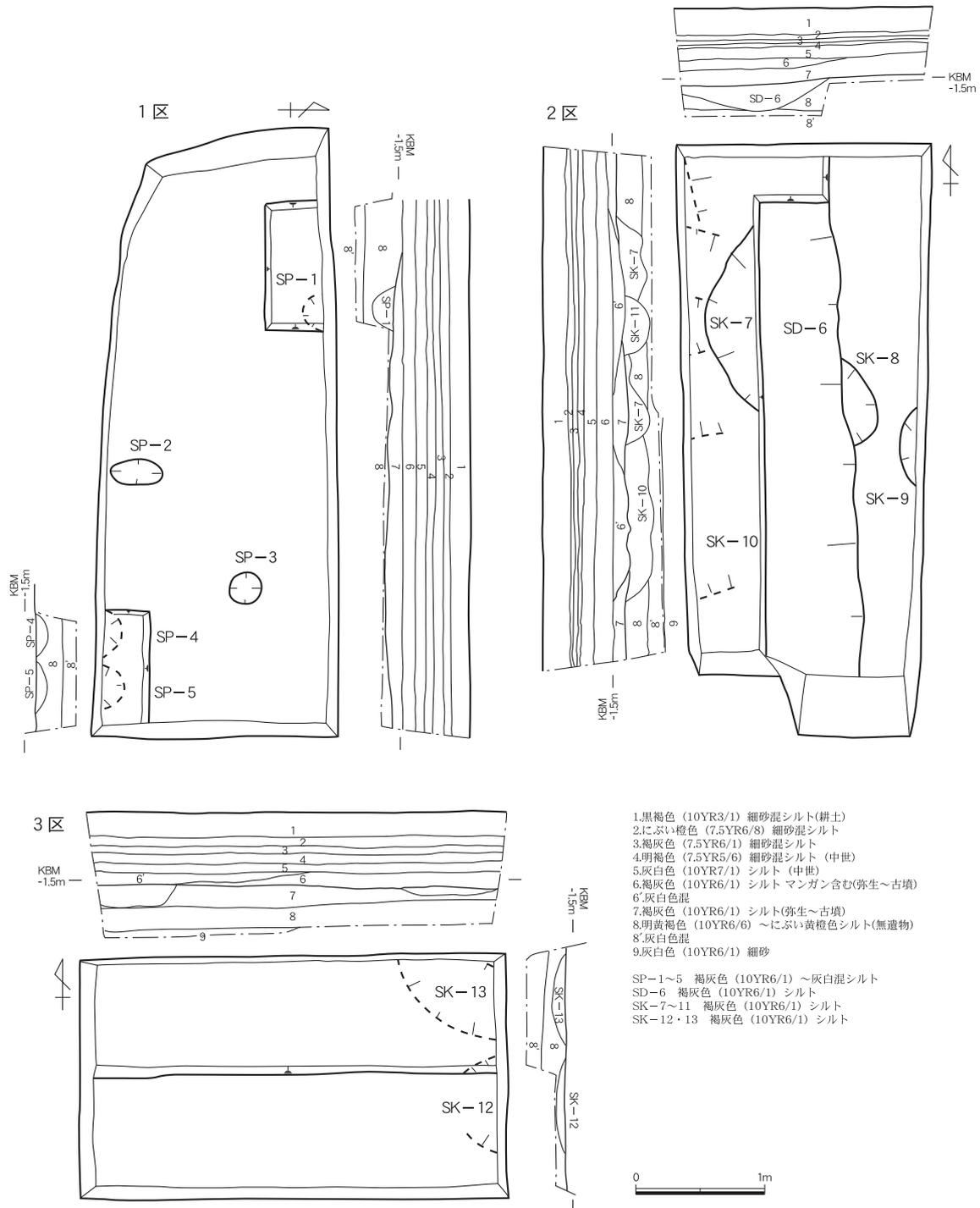
第1図 位置図



第2図 調査対象地



第3図 調査区位置図



第4図 調査区平面図・土層図 (S=1/50)

④山吹丁遺跡第3次確認調査（調査一覧105）

〔経緯〕 個人住宅に伴う事前確認調査

〔場所〕 和歌山市本町5丁目11番

〔面積〕 7.40㎡

〔概要〕 山吹丁遺跡（遺跡番号405）は、紀ノ川南岸の沖積低地に立地する。遺跡は南北約650m、東西約1000mの規模をもち、弥生時代から古墳時代の遺物散布地として周知されている（第1・2図）。

今回の調査地は、遺跡の南端部分において、個人住宅建設が計画されたことから、工事に先立ち、遺跡の内容確認のための調査を実施した。

現地表面下、約30cmが造成土で、その下に40～50cmの近現代の整地層（第1層）、約30cmのオリーブ褐色細～中砂（第2層）、約30cmのオリーブ褐色細砂シルト（第3層）、約24cmの暗オリーブ色シルト（第4層）、約34cmのにぶい黄褐色シルト（第5層）、約36cmのオリーブ褐色シルト（第6層）が堆積する。第7層は36～42cm以上の黄褐色細砂混シルトで西側に向かって厚く堆積する。第8層は黄褐色細～中砂である。第3～6層は土師器・平安時代後期の瓦器を含む中世の遺物包含層で、第7層以下は無遺物層である。

遺構は第2層上面で江戸時代の土坑2基（SK-1・2）、第7層上面で中世の可能性のあるピット1基（SP-1）を検出した。SP-1は柱痕跡が確認できたため、対象地周辺に中世の居住域が展開している可能性が想定される。

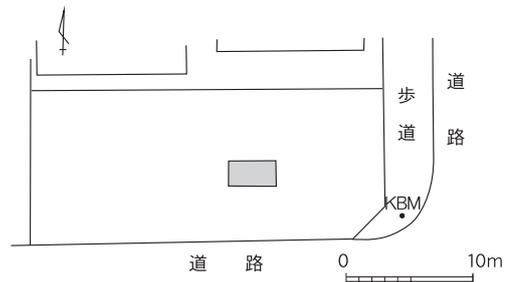
（大木）



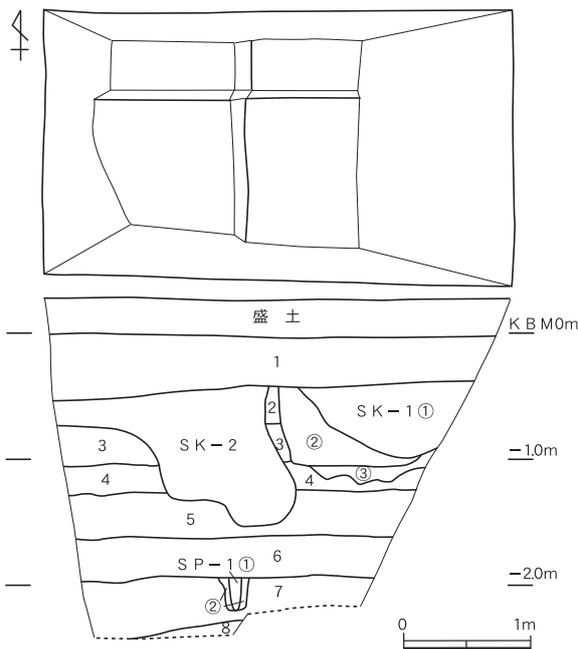
第1図 位置図



第2図 調査対象地

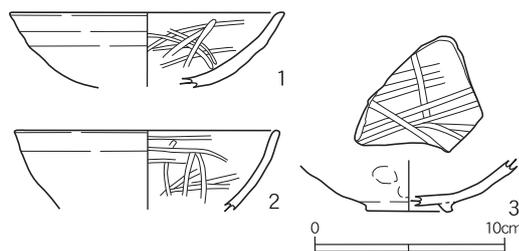


第3図 調査区位置図



第4図 調査区平・断面図 (S=1/60)

- 1 オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 細～中砂混シルト
- 2 オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 細～中砂
- 3 オリーブ褐色 (2.5Y4/6) 細砂混シルト
- 4 暗オリーブ (5Y4/4) シルト
- 5 にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト
- 6 オリーブ褐色 (2.5Y4/4) シルト
- 7 黄褐色 (2.5Y5/4) 細砂混シルト
- 8 黄褐色 (2.5Y5/3) 細～中砂
- SK-1 ① 黄褐色 (2.5Y5/3) 細～粗砂 (礫混じり)
- ② 黄褐色 (2.5Y5/3) 細～中砂 (シルト混じる)
- ③ 黄褐色 (2.5Y5/3) シルトに オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 細砂混じる
- SK-2 オリーブ褐色 (2.5Y4/3) シルト混細砂
- SP-1 ① オリーブ褐色 (2.5Y4/4) シルト
- ② オリーブ褐色 (2.5Y4/4) シルトに 7層のブロック混じる



第5図 遺物実測図 (S=1/4)

⑤坂田遺跡第1次確認調査（調査一覧116）

〔経緯〕 宅地造成に伴う事前確認調査

〔場所〕 和歌山市坂田365番1、366番、367番

〔面積〕 45.38㎡

〔概要〕 坂田遺跡（遺跡番号435）は、和田川南岸の竈山神社の北側に立地し、南北約80m、東西約80mの範囲で古墳時代から中世の集落跡として知られる。これまでに、県道建設にともなう県関係の発掘調査で、古墳時代から中世の掘立柱建物等の遺構が発見され、琴柱形石製品等の古墳に関係する遺物が出土した。

今回の発掘調査は、遺跡の西側で県道北の耕作地で宅地造成が計画されたことから、工事に先立ち、遺跡の内容確認のために調査を実施した。その結果、東半の道路部分が記録保存のための発掘調査対象となった（第2次）。

調査地の現況は耕作地であった。水準は、対象地南西の道路面を基準として、基準との比高差で示した。調査地周辺の標高は1.7mである。

調査区の基本層序は、第1層 褐灰色細砂混シルト（耕作土）、第2層 褐灰色細砂混シルト（床土）、第3層 灰白色中砂混シルト、第4・5層 灰黄褐色中砂混シルト、第6層 黄灰色細礫混シルト、第7層 黄灰色細礫混粘質シルト（古墳～中世遺物包含層）、第8層 明黄褐色粘質シルト（無遺物層）、第9層 黄灰色粘土である。第8層は無遺物層（地山）で、その上面が古墳時代～中世の遺構面と考えられる。第8層の色調は共通して黄褐色系であるが、調査区の東側と西側では土質が異なる。東側では硬質のシルト層で地山面は高い。西側では軟質な粘土層でやや薄く、地山面は低く落ち込んでいる。その上に第3～7層が厚く堆積し、現地表は東側とほぼ同レベルとなっている。

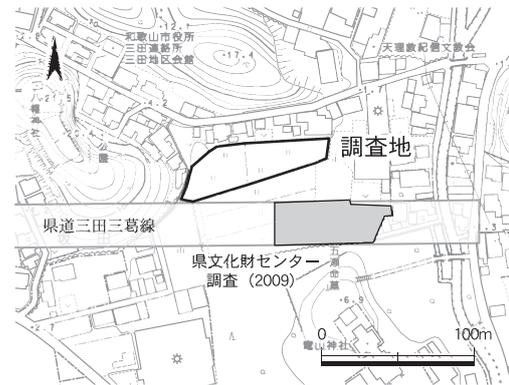
遺構は主に微高地となる調査区東側に展開し、遺物も東側は出土量が多い。

東端の第5区では、溝状遺構が検出され、第7層から瓦器・須恵器・土師器片約30点が出土した。第4区では、ピット2基が検出され、第7層から瓦器・須恵器・土師器片約50点が出土した。第4区では遺構は少ないものの、出土遺物量が多いため、微高地から低地に向かう落ち際に遺物が溜まった状況と考えられる。第3区では、検出遺構はなく、出土遺物は極少ない。第2区では浅いピット状の落ち2基があるが、出土遺物は極少ない。第1区では、浅い落ちが複数検出されたが、樹木痕等の可能性がある。

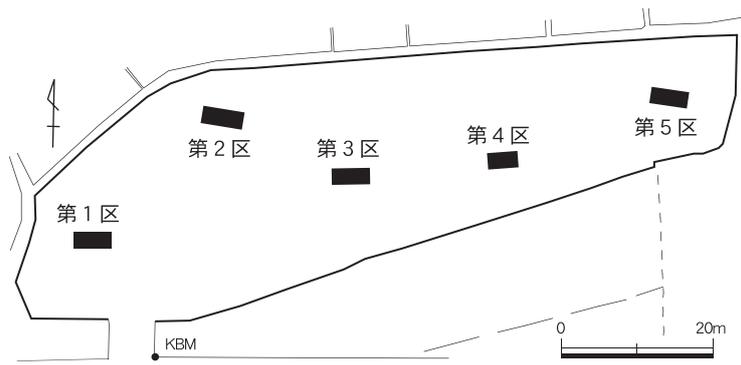
調査の結果、東側の第4・5区では、出土遺物量が多く、明確な遺構が検出されたが、西側の第1～3区は埋蔵文化財の展開は希薄といえる。調査区の東側が微高地となり、西に向けて低く湿地状となる旧地形が確認でき、南西に位置する県文化財センター調査区と同様であることが判明した。微高地には中世以前の遺構が展開し、西側の低地部分には埋蔵文化財の展開は希薄であることが確認された（富永）。



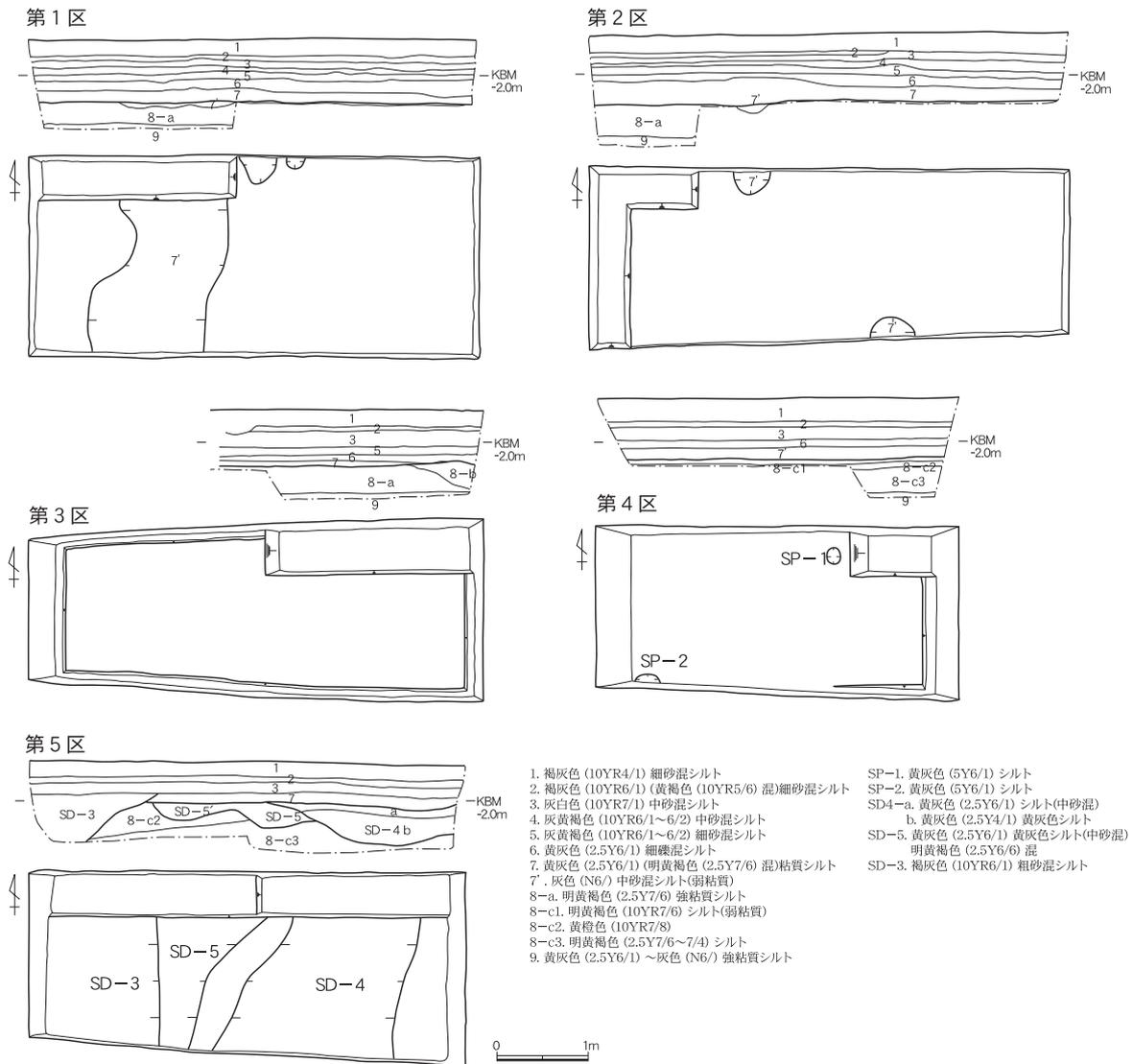
第1図 位置図



第2図 調査対象地



第3図 調査区位置図



- | | |
|---|---------------------------------|
| 1. 褐灰色 (10YR4/1) 細砂混シルト | SP-1. 黄灰色 (5Y6/1) シルト |
| 2. 褐灰色 (10YR6/1) (黄褐色 (10YR5/6) 混) 細砂混シルト | SP-2. 黄灰色 (5Y6/1) シルト |
| 3. 灰白色 (10YR7/1) 中砂混シルト | SD4-a. 黄灰色 (2.5Y6/1) シルト(中砂混) |
| 4. 灰黄褐色 (10YR6/1~6/2) 中砂混シルト | b. 黄灰色 (2.5Y4/1) 黄灰色シルト |
| 5. 灰黄褐色 (10YR6/1~6/2) 細砂混シルト | SD-5. 黄灰色 (2.5Y6/1) 黄灰色シルト(中砂混) |
| 6. 黄灰色 (2.5Y6/1) 細砂混シルト | 明黄褐色 (2.5Y6/6) 混 |
| 7. 黄灰色 (2.5Y6/1) (明黄褐色 (2.5Y7/6) 混) 粘質シルト | SD-3. 褐灰色 (10YR6/1) 粗砂混シルト |
| 7'. 灰色 (N6) 中砂混シルト(弱粘質) | |
| 8-a. 明黄褐色 (2.5Y7/6) 強粘質シルト | |
| 8-c1. 明黄褐色 (10YR7/6) シルト(弱粘質) | |
| 8-c2. 黄褐色 (10YR7/8) | |
| 8-c3. 明黄褐色 (2.5Y7/6~7/4) シルト | |
| 9. 黄灰色 (2.5Y6/1) ~灰色 (N6/) 強粘質シルト | |

第4図 調査区平面図・土層図 (S=1/80)

⑤ 木ノ本Ⅱ遺跡第4次確認調査（調査一覧118）

〔経緯〕 個人住宅建設に伴う事前確認調査

〔場所〕 和歌山市木ノ本1065番地

〔面積〕 13.87㎡

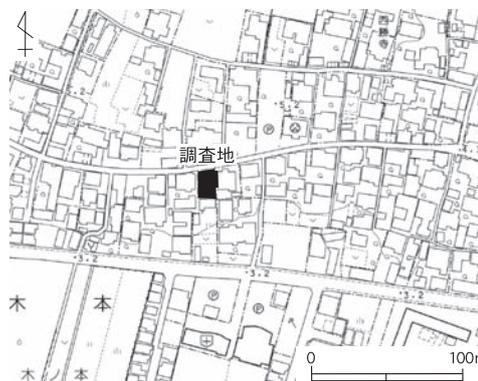
〔概要〕 木ノ本Ⅱ遺跡（遺跡番号41）は東西約950m、南北300mの規模をもつ遺跡で、近年、和歌山市教育委員会による確認調査等により鎌倉時代を中心とするピット・溝・土坑などの遺構や縄文時代中～後期の縄文土器が出土する状況が確認されている（第1図）。

今回の調査は、遺跡の中央南端で、個人住宅建設が計画されたため、工事に先立ち、遺跡の内容確認のために調査を実施した。

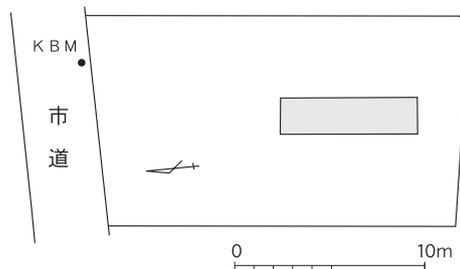
現地表面下、約60cmが造成土で、その下に、約10cmの黄褐色シルト混細砂（第1層）、約10cmの黄褐色細砂（第2層）、約25cmの暗褐色細砂（第3層）、約15cmの暗オリーブ褐色細砂（第4層）、それ以下はオリーブ褐色細砂（第5層）が堆積する。第3・4層から土師器の微細片が極少量出土した。第5層以下は遺物を含まず、無遺物層である。（大木）



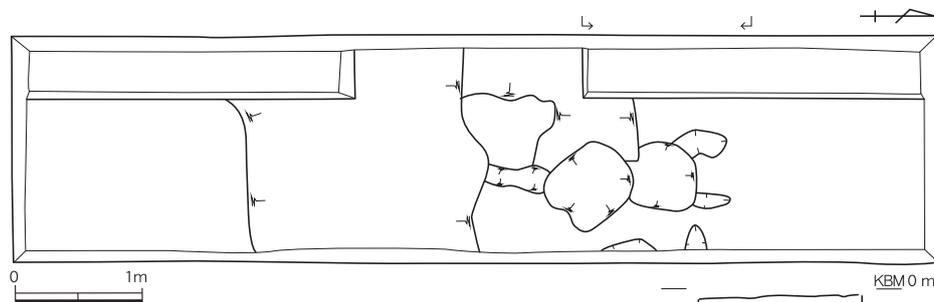
第1図 位置図



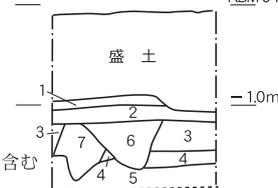
第2図 調査対象地



第3図 調査区位置図



- 1 黄褐色 (10YR5/8) シルト混細砂
- 2 黄褐色 (2.5Y5/4) 細砂に黄褐色 (10YR5/8) 細砂ブロック含む
- 3 暗褐色 (10YR3/3) 細砂
- 4 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 細砂
- 5 オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 細砂
- 6 暗褐色 (10YR3/3) シルト混細砂に黄褐色 (10YR5/8) 粘土ブロックを含む
- 7 褐色 (10YR4/4) 細砂に黄褐色 (10YR5/8) 粘土ブロックを含む



第4図 調査区平・断面図 (S=1/60)

⑤太田・黒田遺跡立会調査（調査一覧124）

〔経緯〕店舗建設に伴う立会調査

〔場所〕和歌山市太田1丁目1-12, 13

〔面積〕42.90㎡

〔概要〕太田・黒田遺跡は和歌山県和歌山市太田及び黒田周辺に所在し、紀ノ川南岸の標高4m前後の沖積低地に立地する遺跡である。この遺跡は、東西約500m、南北約900mの規模をもつ弥生時代から江戸時代の集落遺跡として周知されている（第1図）。今回の調査は、事前の確認調査（第73次調査）により埋蔵文化財が確認されたため、建物基礎によって破壊される部分について立会調査を実施した。

現地表土である造成土は、調査区全面に認められ、対象地の南西方向に向かって厚く第5区では厚く約115cmを測る。最も薄い第9区では約50cm程度である。第1層は6～14cmを測る近現代の旧耕作土で一部の調査区では削平され残存していない。第2層は4～10cmを測る明黄褐色細砂混シルトで第8区では2層に細分される。床土と考えられる。第3層は約20cmを測る浅黄色細砂混シルト、第4層は約20cmを測る灰黄色シルト、第5層は約30cmを測る灰黄色シルト、第6層は黒褐色粘土である。第3層は弥生土器の小片を含む遺物包含層で、第4・5層に関しては周辺の調査成果から弥生時代の遺物包含層の可能性が想定されるが、今回の調査では遺物は確認できなかった。

遺構は第3層上面において土坑8基（SK-1～8）、溝1条（SD-1）、落ち込み1基（SX-1）を確認した。

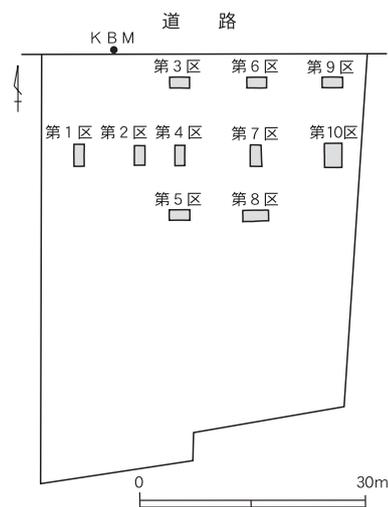
SK-1おそらく平面形が円形を呈し、深さ0.7mを測る。埋土からは、弥生土器小片が出土した。SK-2は深さ0.2mを測る。弥生土器小片が出土した。SK-3～6は深さ0.8～1.05mを測る土坑で、埋土からは、土師器・須恵器などが出土した（第6図）。しかし、土坑の形状や埋土が対象地近隣で確認されている近世の土取り穴に類似しており、近世の遺構の可能性も考えられる。SK-7は深さ0.4mを測る。SK-8は深さ0.6mを測る。SD-1は幅1.0m以上、深さ0.15mを測る浅い溝で、遺物は出土しなかった。SX-1は深さ0.1mを測る。



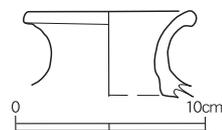
第1図 位置図



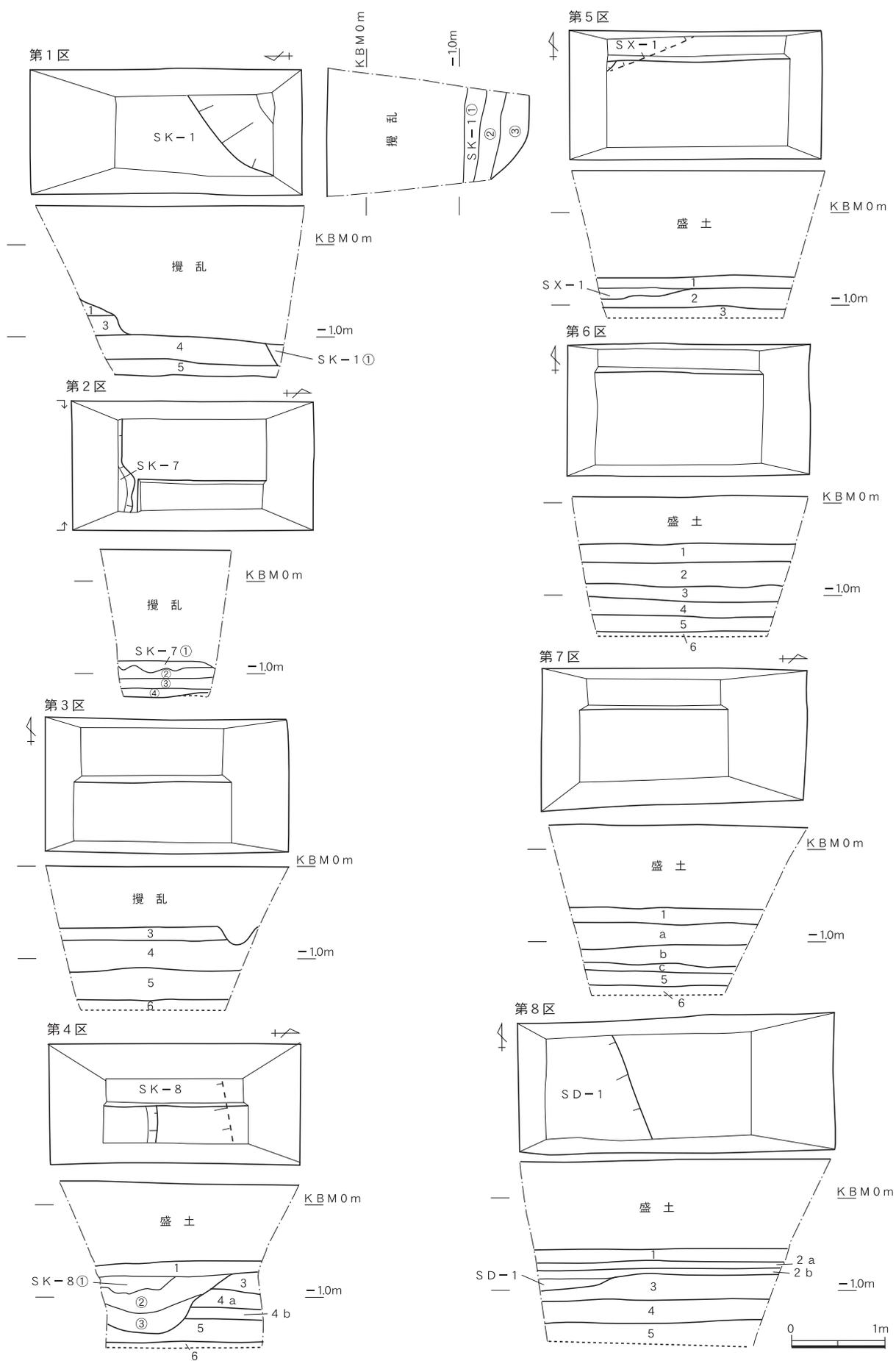
第2図 調査対象地



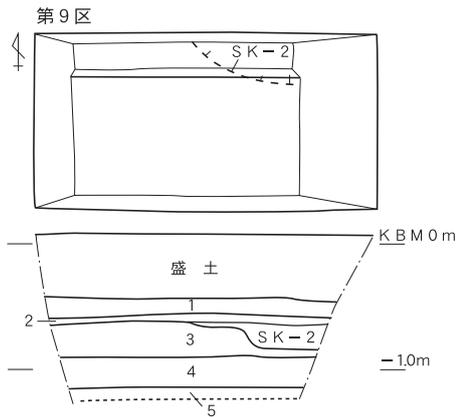
第3図 調査区位置図



第6図 遺物実測図 (S=1/4)

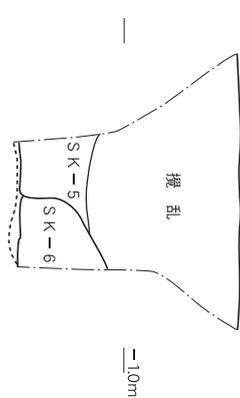


第4図 第1～8区平・断面図 (S=1/60)

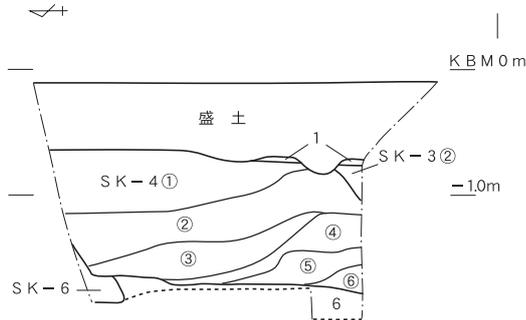
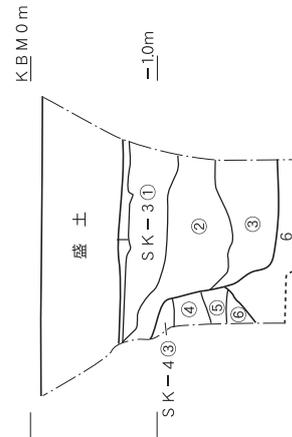
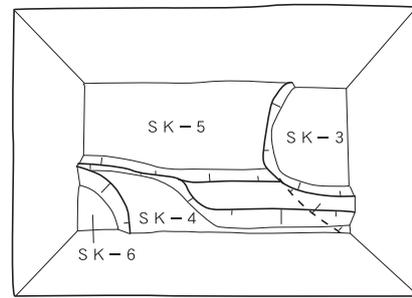


【土層凡例】

- 1 黒褐色 (2.5Y3/1) 細砂混シルト (耕土)
- 2 a 明黄褐色 (2.5Y7/6) 細砂混シルト (床土)
- 2 b 浅黄色 (2.5Y7/4) 細砂混シルト (床土)
- 3 浅黄色 (2.5Y7/3) 細砂混シルトにマンガン斑・鉄分含む
- 4 灰黄色 (2.5Y6/2) シルト
- 5 黄灰色 (2.5Y6/1) シルト
- SK-1 ① オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 細砂混シルトに暗灰黄色 (2.5Y4/2) 細砂混シルト混じる
- ② オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 細砂混シルトに暗灰黄色 (2.5Y4/2) 細砂混シルト多く混じる
- ③ オリーブ褐色 (2.5Y4/6) シルト混細砂に暗灰黄色 (2.5Y4/2) 細砂混シルト少量混じる
- SK-2 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 細砂混シルト
- SK-3 ① 灰色 (5Y5/1) 細砂混シルト
- ② 灰オリーブ色 (5Y4/2) 細砂混シルト
- ③ 灰オリーブ色 (5Y5/3) 細砂混シルト
- SK-4 ① 灰色 (10YR4/1) シルト混細砂
- ② 灰色 (7.5Y5/1) 細砂混シルト
- ③ 灰色 (10YR4/1) 細～中砂
- ④ 灰オリーブ色 (5Y4/2) シルト混細砂
- ⑤ 黄褐色 (2.5Y5/3) シルト
- ⑥ 暗灰黄色 (2.5Y4/2) シルト
- SK-5 灰色 (5Y4/1) シルト
- SK-6 暗灰黄色 (2.5Y4/2) シルト
- SK-7 オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 粘土
- SK-8 ① オリーブ黒色 (10Y4/2) 細砂混シルト
- ② 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) 細砂混シルト
- ③ 灰色 (10Y4/1) シルト
- SD-1 暗灰色 (2.5Y5/2) 細砂混シルト
- SX-1 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 細砂混シルト
- a 灰オリーブ色 (5Y5/2) 細～中砂
- b 灰色 (5Y5/1) 細～中砂
- c 黄褐色 (2.5Y5/4) シルトに灰色 (5Y5/1) 細砂混じる



第10区



第5図 第9・10区平・断面図 (S=1/60)

そのほか、第7区で遺構検出面から約0.5m下まで細～中砂層が確認できた。他の調査区で同様の堆積が確認されていないことから、遺構の埋土の可能性が想定される。

立会調査の結果、第3層上面で弥生時代及び近世の可能性のある遺構を確認した。事前の確認調査では、第4・5層上面でも遺構を確認したが、今回の調査では確認できなかった。(大木)

㊦井辺遺跡第28次確認調査（調査一覧126）

〔経緯〕 集合住宅建設に伴う事前確認調査

〔場所〕 和歌山市井辺50番1

〔面積〕 23.80㎡

〔概要〕 井辺遺跡（遺跡番号308）は、紀ノ川南岸の下流域に立地し、井辺前山古墳群が存在する福飯ヶ峯の北西に位置する。今回は、遺跡の中央北側で集合住宅建設が計画されたことから、工事に先立ち、遺跡の内容確認のために調査を実施した。調査地の現況は耕作地で、周辺の標高は2.7mである。

現耕作土及び中世～近世の耕作土と考えられる第1層から第5層までは、第1～3区とも共通する。第6層は弥生～古墳時代の遺物包含層であり、北側の第1・2区では遺物は少なく、南側の第3区では遺物が多い。第7～10層は北側の第1・2区で確認し、南側の第3区には、それに代わって自然流路の可能性のある砂層である第11層が堆積する。調査区内では遺構は検出されなかった。遺物包含層からの出土遺物は、弥生土器高杯・甕底部等で、第3区がやや多い。

遺物包含層直下で、北側では軟弱な粘質土層が地山となり、南側では自然流路状の砂層が堆積する。北西から北東に向かってやや硬質でシルト混の土層になり、遺物包含層からの遺物量が多くなるため、調査区外の西側に遺構が展開する可能性がある。また南側は、自然流路が埋没した後に、遺物を含む土で整地した可能性があり、南西方向に遺構が展開する可能性がある。

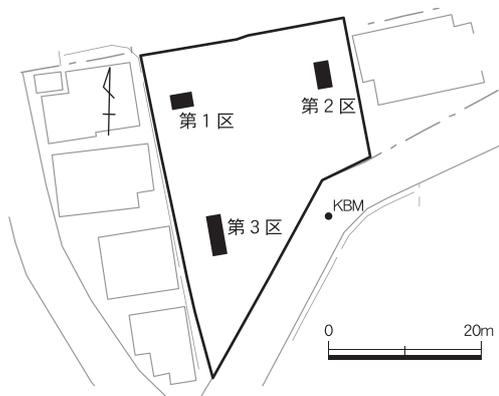
調査の結果、調査地内では人為的な遺構が展開する可能性は低い。調査地の南には、北東から南西へ斜行する地割が残り、それにそって自然流路が存在したと考えられる。（富永）



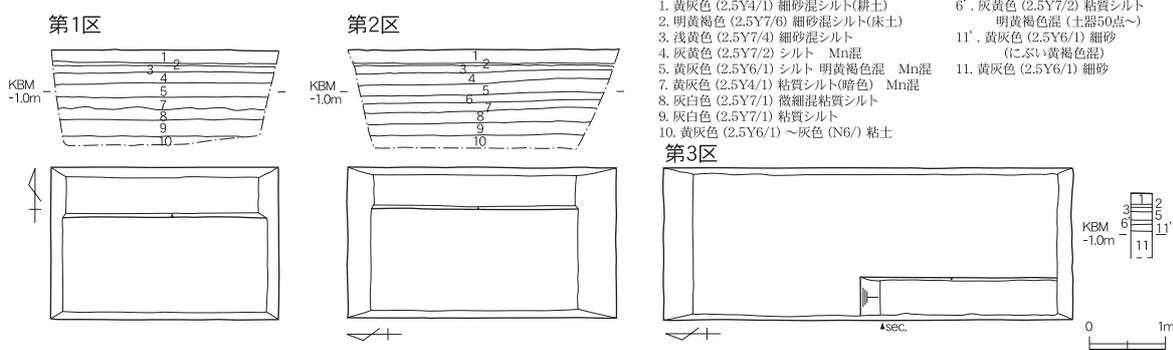
第1図 位置図



第2図 調査対象地



第3図 調査区位置図



第4図 調査区平面図・土層断面図 (S=1/100)

⑤六十谷遺跡立会調査（調査一覧128）

〔経緯〕 集合住宅建設に伴う立会調査

〔場所〕 和歌山市六十谷428-4

〔面積〕 18.80㎡

〔概要〕 六十谷遺跡（遺跡番号84）は、紀ノ川下流域北岸に立地し、南北約300m、東西約500mの範囲で弥生時代の遺物散布地として知られる。今回は、遺跡の中央東寄りで集合住宅の浄化槽設置にともない立会調査を行った。

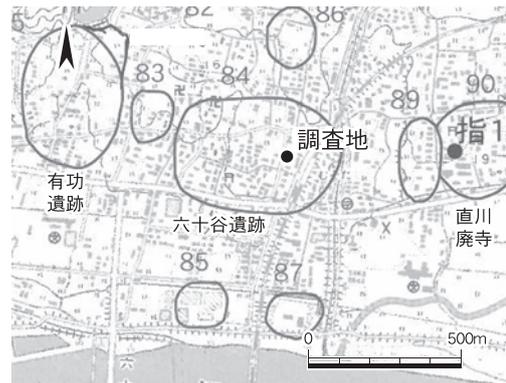
調査区の基本層序は、現地表下、造成土、灰色～褐色細砂混シルト（旧耕土）、にぶい黄橙色細砂混シルト（整地土か）、灰黄褐色～黒褐色（黄褐砂岩混）シルト（弥生時代の遺物包含層、崩落土か）、黄褐色礫混シルト（地山）である。

現地表下0.6mで弥生時代の遺物包含層の上面となり、現地表下1.7mで地山で遺構面となる。

遺物包含層は、厚1.1mで大量の土器片を含む。時期は弥生時代中期が中心であるが、前期～後期まで含む。採集できたのは100片余りだが、本来はもっとあった可能性がある。摩滅した小片から、かなり大きな破片まで含む。

包含層直下の地山直上で、土坑4基、焼土2基を確認した。土坑の出土土器は小片であるが、包含層の土器とほぼ同時期とみられる。

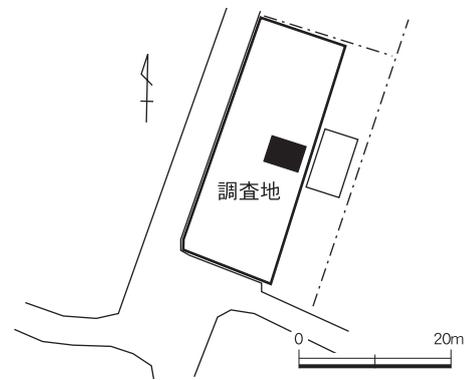
調査地は、段丘上の緩斜面で、六十谷遺跡内の中央西方に位置する。調査地の北西方に弥生時代の集落の中心があった可能性があり、そこから大量の土器を含む土が流出し、今回調査地点に堆積したと考えられる。（富永）



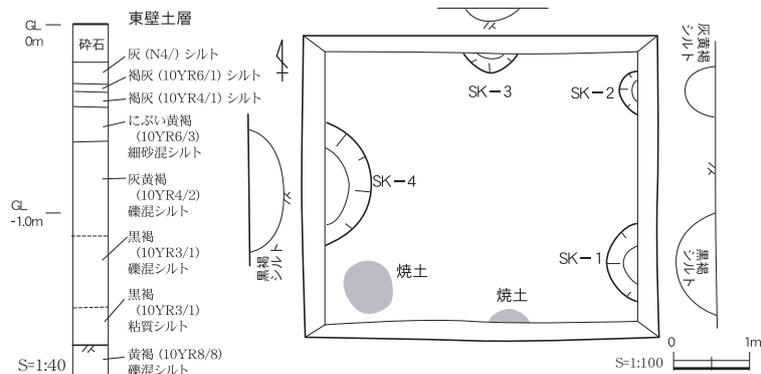
第1図 位置図



第2図 調査対象地



第3図 調査区位置図



第4図 調査区平面図・土層断面図

㊦西庄遺跡第10次確認調査（調査一覧132）

〔経緯〕 宅地造成に伴う事前確認調査

〔場所〕 和歌山市本脇字野田554

〔面積〕 69.3㎡

〔概要〕 西庄遺跡（遺跡番号38）は、標高4.5m前後の砂堆に展開する、東西約0.9km、南北約0.4kmの遺跡である。今回の調査は、遺跡の北西端部において用地利用計画のための事前調査を実施した（第1・2図）。

過去の調査においては、本調査地の東側で行われた西庄遺跡第4次調査（財団法人和歌山市都市整備公社）、都市計画道路西脇・山口線道路改良工事に伴う発掘調査（財団法人和歌山県文化財センター（2003））では古墳時代の竪穴建物のほか、掘立柱建物や溝、土坑などが検出されている。西庄遺跡の周辺では和泉山脈南麓裾部にそって東側には金製勾玉の出土した車駕之古址古墳や中世の遺構や遺物が出土している木ノ本Ⅲ遺跡、弥生時代後期～古墳時代にかけての竪穴建物や中世の掘立柱建物が確認されている西庄Ⅱ遺跡が、西側には磯脇遺跡が連なっている。調査地は和泉山脈南麓裾部に広がる住宅地に立地する耕作地である。対象地は約2438㎡の南西に張り出し部分を持つ北西-南東方向の方形であり、対象地内に第1～7区の調査区を設定した（第3図）。

調査地の現況は旧耕作地であり、近現代～近世の耕作土までを機械掘削とし、以下は機械掘削後人力による精査を行い遺構や遺物の有無を確認した。土層堆積状況や遺構の検出状況については写真撮影、実測図を作成した。図面による記録は、平面図に関しては調査地と隣地とを区画する隣地境界線を、断面図に関しては調査地に南面する県道西脇・山口線歩道内マンホールをKBM=0.0mとして実測を行った（第3図）。

壁面土層断面図と遺構平面図については1/20の縮尺を用いて、手測りによる実測を行った。また、土層の色調観察は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖2006年版』を用いた。

本調査地の基本層序は以下の通りである（第4図）。

第1層；現代の耕作土である。第4、6、7区では第1層と第1'層とに細分される。

第2層；層厚10～20cmの褐色砂質土からなる。瓦器や土師器が出土していることから第2層は中世～近世の遺物包含層と考えられる。

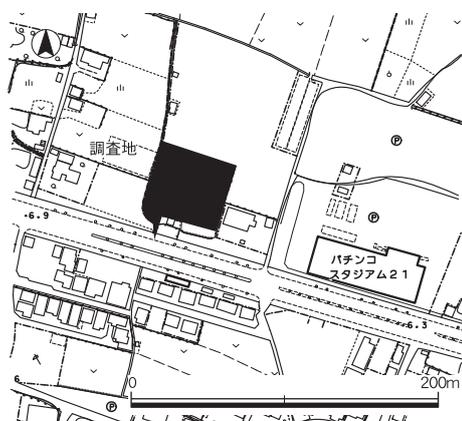
第3層；層厚約10～30cmのやや淘汰の悪いオリーブ褐色砂質土からなる。土師器や須恵器、瓦器が出土していることから第3層は古墳時代～中世の遺物包含層と考えられる。

第4層；層厚10～20cmのにおい黄褐色砂質土からなる。土師器や須恵器が出土していることから、古墳時代の遺物包含層であると考えられる。

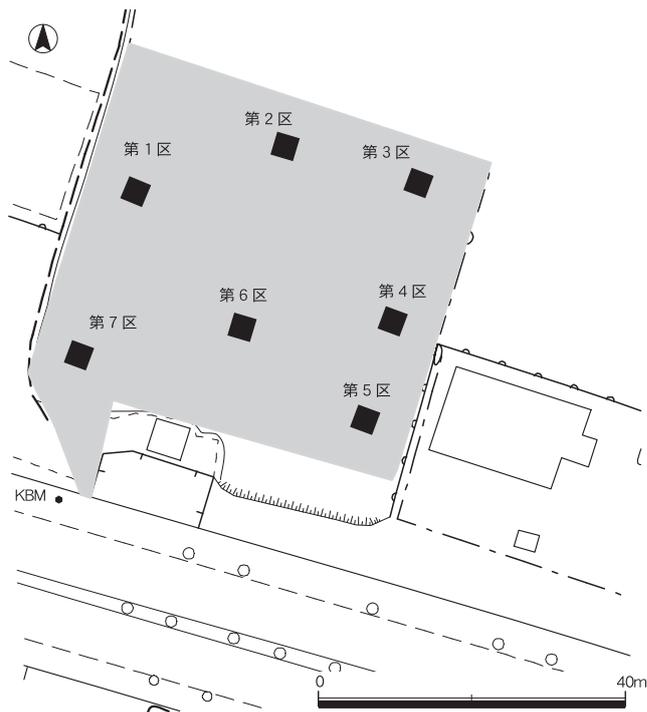
第5層；層厚20cm以上のオリーブ褐色砂質土からなり、水成堆積層であると考えられる。



第1図 位置図



第2図 調査対象地



第3図 調査区配置図

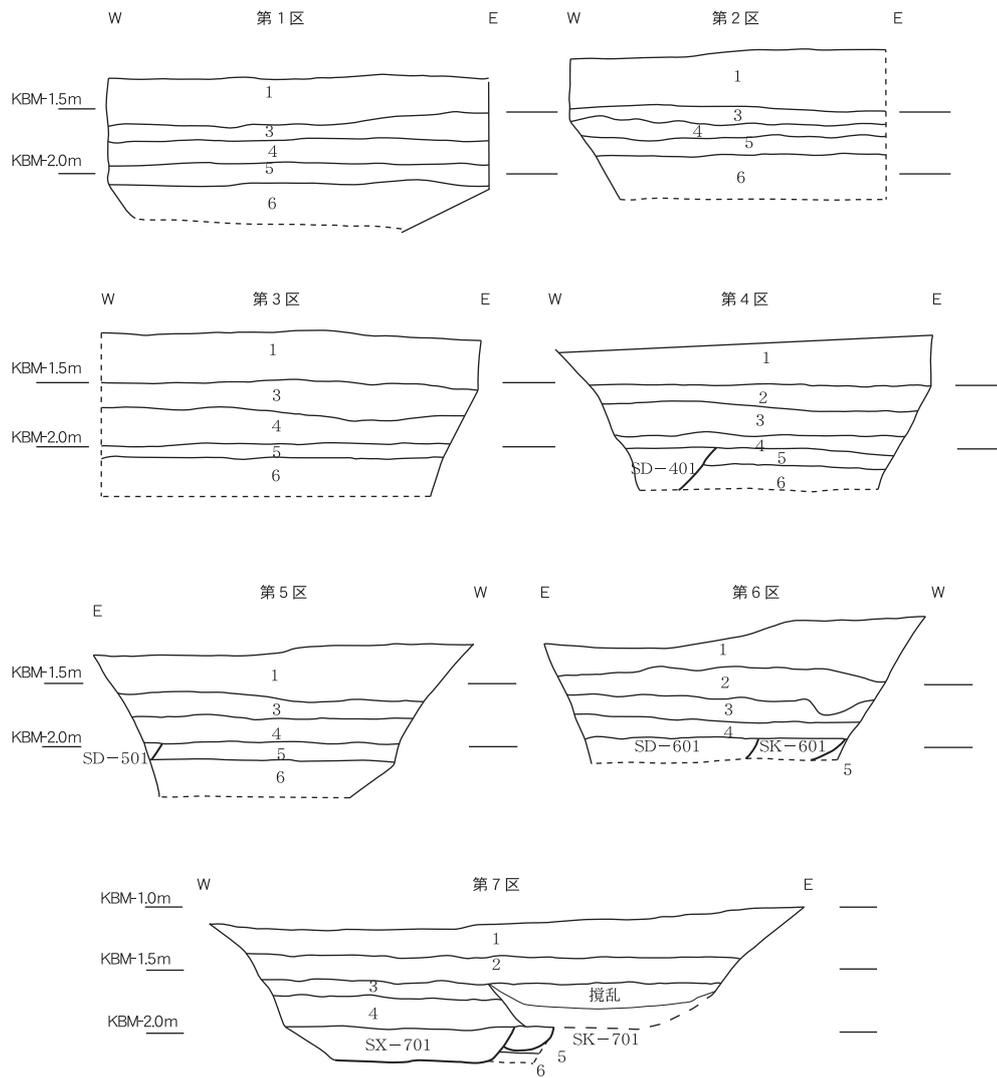
遺構は、第4～6区の第3層下面において古墳時代～中世の溝（SD-401・SD-501・SD-601・SD-602）および土坑（SK-401・SK-601）を、第7区第3層下面で古墳時代の土坑（SK-701）および落ち込み（SX-701）を検出した（第5図）。また、遺物包含層である第2層および第3層からは土師器や須恵器、瓦器等が、第4層からは土師器や須恵器が出土している。なお、SD-601およびSD-602からはTK10相当の須恵器の蓋坏や土師器甕、土錘等が出土しており（第6図）、西庄遺跡第8次調査第4区と近い様相を示している（第6図）。

第6区以西においてはより南西に行くに従って遺構、遺物ともにより密になることが確認された今回の調査および、都

市計画道路西脇・山口線道路改良工事に伴う発掘調査（財団法人和歌山県文化財センター（2003））、西庄遺跡第4次（財団法人和歌山市都市整備公社）から、第4～7区の様相は都市計画道路西脇・山口線道路改良工事に伴う発掘調査や西庄遺跡第4次調査と近いと考えられる。（清水）

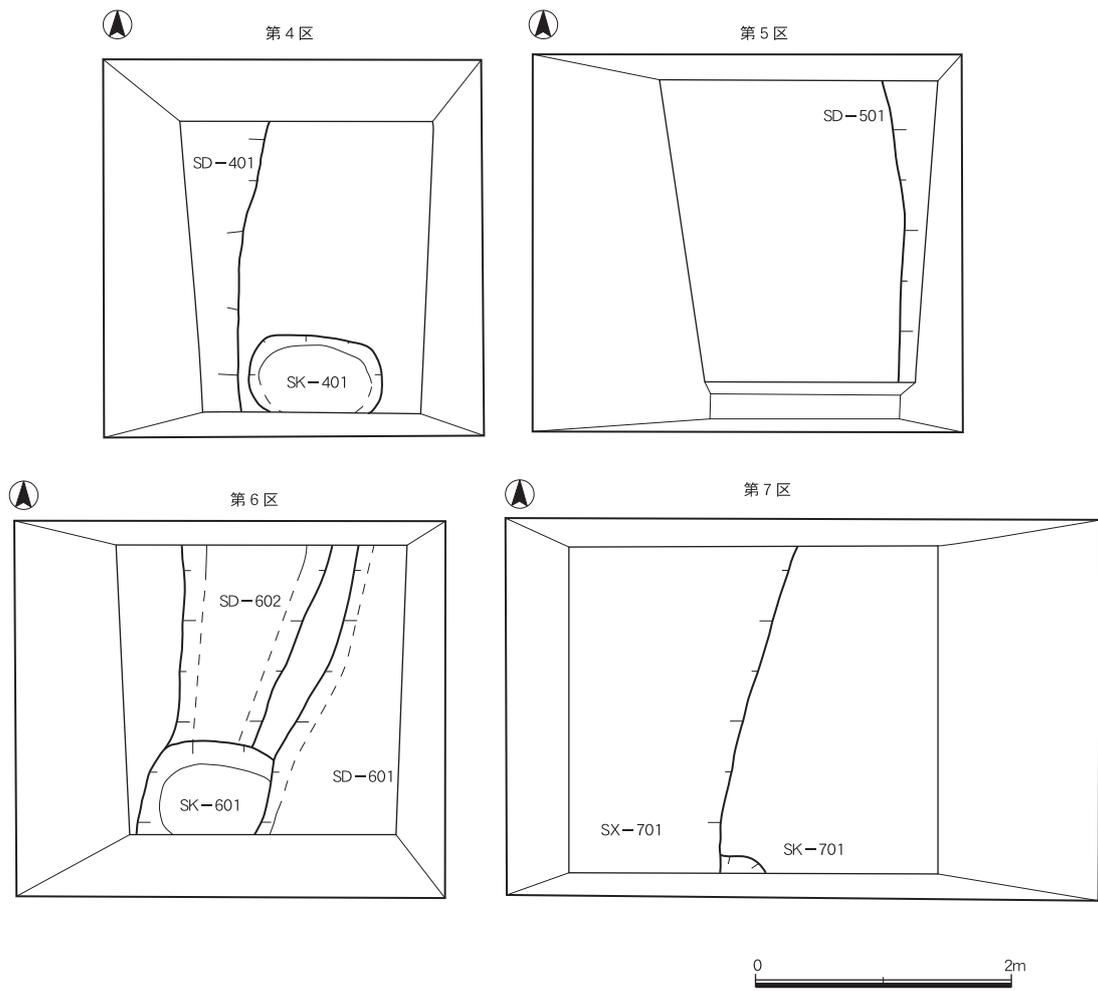
【参考文献】

- 『西庄遺跡 - 都市計画道路西脇・山口線道路改良工事に伴う発掘調査報告書』2003 財団法人和歌山県文化財センター
- 『和歌山市内遺跡発掘調査概報 - 平成17年度 -』2007 和歌山市教育委員会
- 『西庄遺跡第6次発掘調査事業実績報告書』2011 財団法人和歌山市都市整備公社

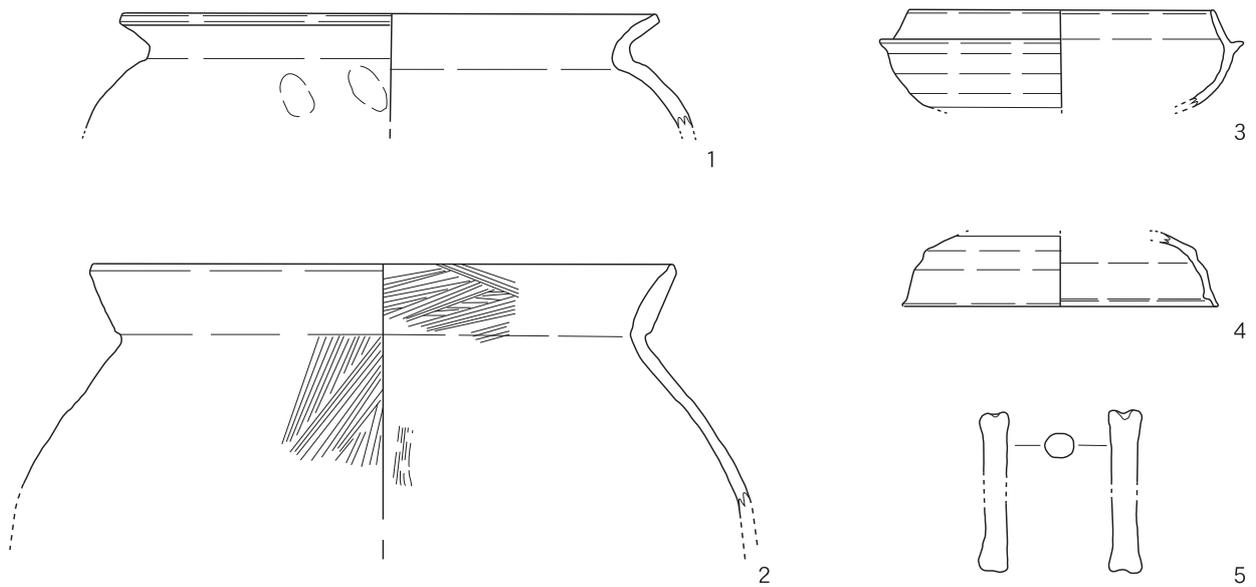


- | | |
|--|--|
| <p>1： オリーブ褐 (2.5Y4/6) 中～細粒砂 現代耕作土。(1層)</p> <p>2： にぶい黄褐 (10YR4/3) 細～極細粒砂 淘汰が悪い。現代の耕作土。(1層)</p> <p>3： 褐 (10YR4/4) 細～極細粒砂 土器を含む。(2層)</p> <p>4： オリーブ褐 (2.5Y4/4) 細～極細粒砂 やや淘汰が悪い。土器を含む。(3層)</p> <p>5： にぶい黄褐 (10YR4/3) 細～極細粒砂 土器を含む。(4層)</p> <p>6： オリーブ褐 (2.5Y4/4) 細粒砂 (5層)</p> | <p>SD-401： 褐 (10YR4/4) 細粒砂</p> <p>SK-401： オリーブ褐 (2.5Y4/4) 細～極細粒砂 土器を含む。</p> <p>SD-501： 褐 (10YR4/4) 細粒砂</p> <p>SD-601： 暗褐 (10YR3/4) 細粒砂 土器を含む。</p> <p>SK-601： 褐 (10YR4/4) 細粒砂 土器を含む。</p> <p>SX-701： 褐 (10YR4/4) シルト混じり細～極細粒砂 小偽礫・土器を含む。</p> <p>SK-701： 暗褐 (10YR3/4) 細～極細粒砂 土器を含む。</p> |
|--|--|

第4図 調査区土層図 (S=1/60)



第5図 調査区平面図 (S=1/60)



第6図 SD-601 (4・5)、SD-602 (1~3) 出土遺物 (S=1/3)

⑤木ノ本Ⅱ遺跡第5次確認調査（調査一覧56）

〔経緯〕 宅地造成に伴う事前確認調査

〔場所〕 和歌山市木ノ本字東北山田1221番

〔面積〕 33.0㎡（対象範囲2005.00㎡）

〔概要〕 木ノ本Ⅱ遺跡（遺跡番号4）は、和泉山脈南麓の扇状地および沖積低地に展開する、東西約0.9km、南北約0.3kmの遺跡である。

今回の調査は、遺跡の南部において宅地造成が計画されたことから、工事に先立ち、遺跡の内容を確認するための確認調査を実施した（第1・2図）。過去の調査においては、本調査地の西側で行われた木ノ本Ⅱ遺跡確認調査（和歌山市教育委員会（2010））では時期不明のピット数基が確認されている。木ノ本Ⅱ遺跡の周辺では和泉山脈南麓裾部にそって東側には金製勾玉の出土した車駕之古址古墳が、西側には中世の遺構や遺物が出土している木ノ本Ⅲ遺跡や、弥生時代後期～古墳時代にかけての竪穴建物や中世の掘立柱建物が確認されている西庄遺跡が連なっている。

調査地は和泉山脈南麓裾部に広がる住宅地に立地する資材置き場建設予定地である。対象地は約2005㎡の北西－南東を長軸とする長方形であり、対象地内の擁壁設置および道路敷設予定地に隣接する形で調査区を設定した（第3図）。調査地の現況は造成地であり、近現代～近世の耕作土までを機械掘削とし、以下は機械掘削後人力による精査を行い遺構や遺物の有無を確認した。土層堆積状況や遺構の検出状況については写真撮影、実測図を作成した。

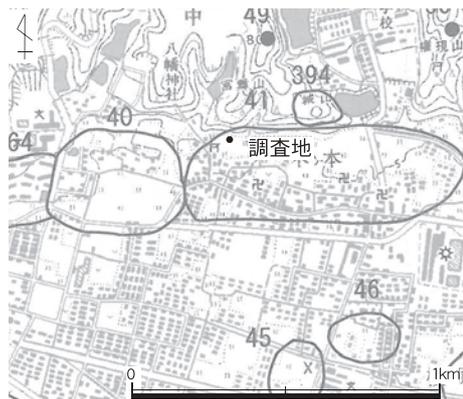
図面による記録は、平面図に関しては調査地に西面する道路との境界線を、断面図に関しては調査地に西面する道路にあるマンホールをKBM0.00mとして実測を行った（第3図）。壁面土層断面図と遺構平面図については1/20の縮尺を用いて、手測りによる実測を行った。また、土層の色調観察は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖2006年版』を用いた。

本調査地の基本層序は以下の通りである（第4図）。

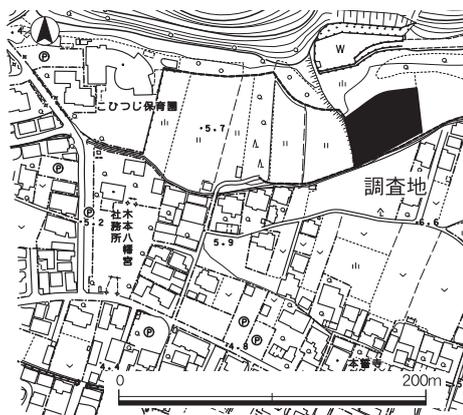
第0層；現代の造成土である。

第1層；層厚約50cmで暗灰黄色砂質土からなる。大小偽礫を含むことから、近現代の造成土と考えられる。

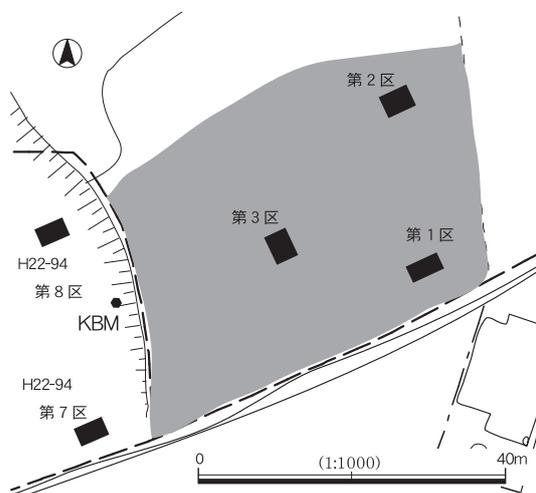
第2層；層厚約10cmのごく弱く暗色化した黄灰色シルトからなり、第2・3区で確認できた。



第1図 位置図



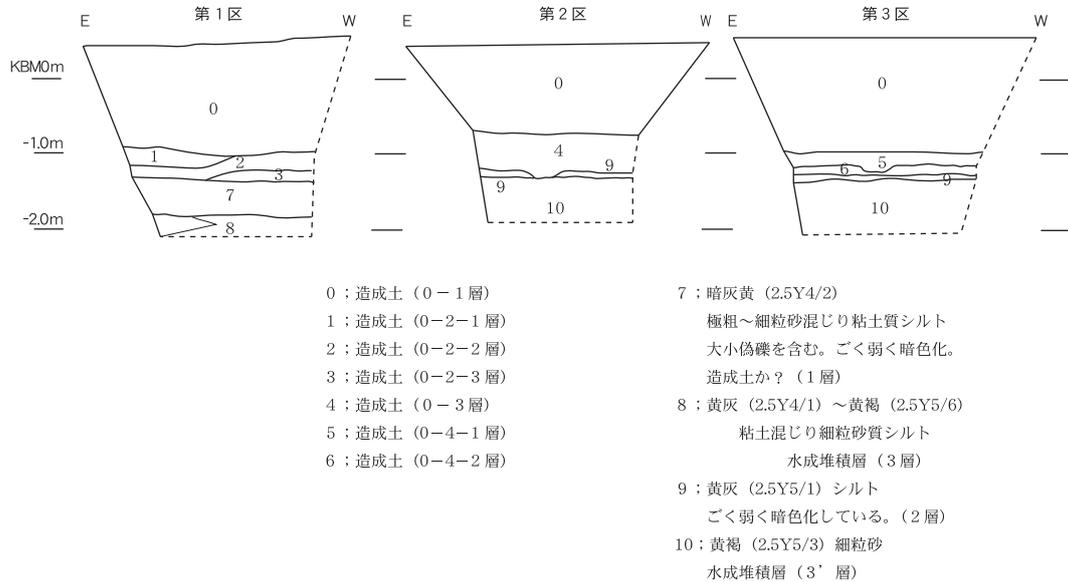
第2図 調査対象地



第3図 調査区配置図

第3層；層厚約25cm以上の黄灰色砂質土からなる。水成堆積層であると考えられ、第1区でのみ確認できた。

第3'層；層厚約60cm以上の黄褐色砂質土からなる。第2区および第3区で確認され、水成堆積層であると考えられる。



第4図 調査区土層図（S=1/100）

確認調査の結果、第1～3区の各調査区で遺構・遺物の存在を確認することは出来なかった。また、今回の調査地に隣接する平成22年度木ノ本Ⅱ遺跡確認調査（和歌山市教育委員会）でも、遺構・遺物の存在が極めて希薄な地域であることが確認されており、本調査地内では埋蔵文化財は展開しないものと考えられる。（清水）

【参考文献】

『平成22年度和歌山市内遺跡発掘調査概報』2012 和歌山市教育委員会

⑤7 神前遺跡第9次確認調査（調査一覧146）

〔経緯〕 店舗建設に伴う事前確認調査

〔場所〕 和歌山市神前391番1

〔面積〕 7.00㎡

〔概要〕 神前遺跡（遺跡番号307）は、紀ノ川下流域南岸の福飯ヶ峯西麓に立地し、南北約900m、東西約500mの範囲で弥生時代の遺物散布地として知られる。今回の発掘調査は、遺跡の西側の宅地内で集合住宅建設が計画されたことから、工事に先立ち、遺跡の内容確認のために調査を実施した。調査地の現況は宅地で、調査区は浄化槽予定部分に1か所設定した。

調査区では、前身建物撤去後に埋め戻した盛土の深さが約0.8mあり、それ以下の基本層序は、第1層 暗青灰色細砂混シルト（耕作土）、第2層 青灰色細砂混シルト（床土）、第3・4層 灰色粘質シルト（希薄な遺物包含層）、第5・6・7層 灰色微砂～細砂（水成堆積）である。調査区内では遺構は検出されなかった。遺物は、第3・4層から土師器細片1点が出土したのみである。

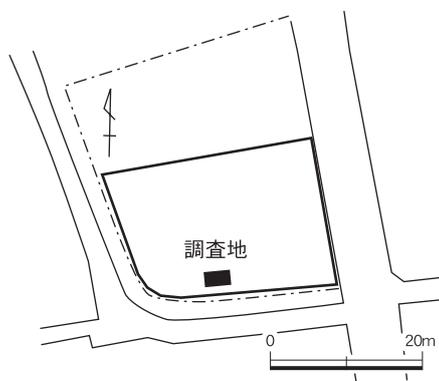
調査の結果、調査地周辺は自然流路であったと考えられる。周辺の立会調査等でも遺構は確認されておらず、埋蔵文化財の展開が希薄な地点となる。（富永）



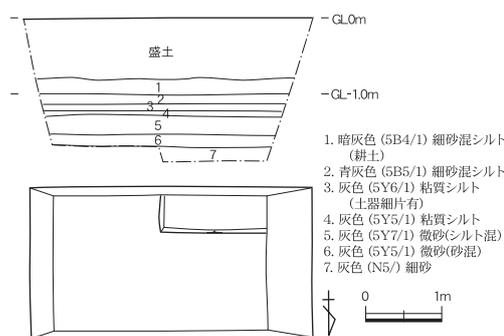
第1図 位置図



第2図 調査対象地



第3図 調査区位置図



第4図 調査区平面図・土層図 (S=1/100)

㊦榎原遺跡第1次確認調査（調査一覧147）

〔経緯〕 集合住宅建設に伴う事前確認調査

〔場所〕 和歌山市木ノ本461-3

〔面積〕 21.0㎡

〔概要〕 榎原遺跡（遺跡番号47）は、和泉山脈南麓の沖積低地に展開する、東西約0.5km、南北約0.3kmの遺跡である。今回の調査は、遺跡の西部において集合住宅の建設が計画されたことから、工事に先立ち、遺跡の内容を確認するための確認調査を実施した（第1・2図）。

榎原遺跡の周辺では、和泉山脈南麓裾部にそって北側には金製勾玉の出土した車駕之古址古墳や中世の遺構や遺物が出土している木ノ本Ⅲ遺跡、織豊期における織田信長の紀州攻めの際の織田方の陣城であったと考えられる城山遺跡が存在する。

調査地は和泉山脈南麓と紀ノ川の間にある沖積低地に広がる住宅地に立地する集合住宅建設予定地である。対象地は約881.04㎡の北西-南東を長軸とする長方形であり、対象地内の建物およびコンクリート床板設置予定地に隣接する形で調査区を設定した（第3図）。

調査地の現況は荒蕪地であり、近現代～近世の耕作土までを機械掘削とし、以下は機械掘削後人力による精査を行い遺構や遺物の有無を確認した。土層堆積状況や遺構の検出状況については写真撮影、実測図を作成した。図面による記録は、平面図に関しては調査地に西面する道路との境界線を、断面図に関しては調査地に西面する道路にあるマンホールをKBM=0.0mとして実測を行った（第3図）。壁面土層断面図と遺構平面図については1/20の縮尺を用いて、手測りによる実測を行った。

また、土層の色調観察は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖2006年版』を用いた。

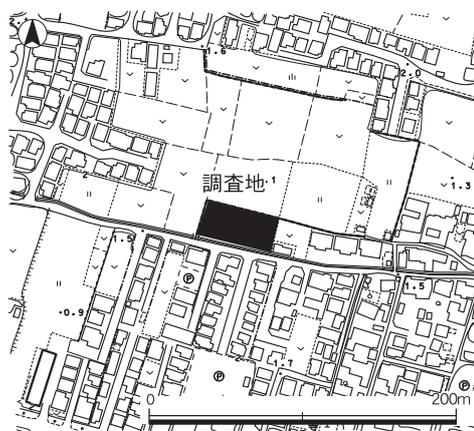
本調査地の基本層序は以下の通りである（第4図）。

第0層；現代表土である。

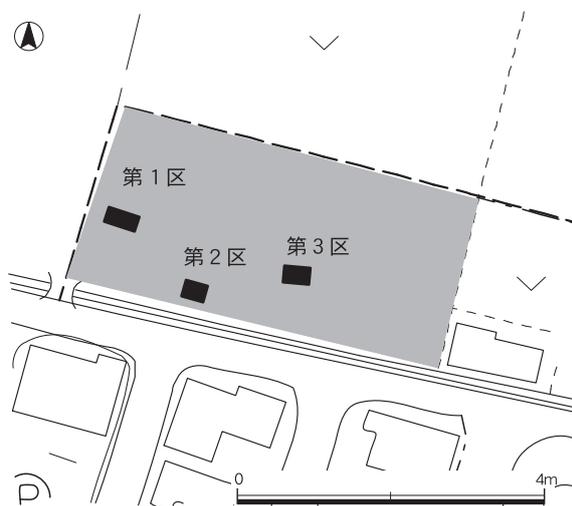
第1層；層厚20～60cmで灰オリーブ色砂質土からなる。大小偽礫を底部に含む。3区東部では第1層は粘性の強い1-2層が1層から分離することを確認することが出来た。



第1図 位置図



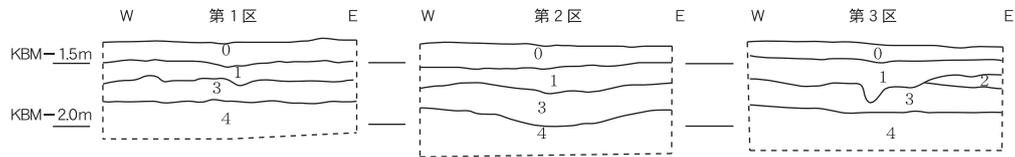
第2図 調査対象地



第3図 調査区位置図

第2層；層厚30～50cmの黄褐色粘土質シルトからなり、鉄分の錆着が認められる。

第3層；層厚約50cm以上のオリーブ灰色砂質土からなる。水成堆積層または、大規模な自然流路の埋土と考えられる。



- 0；現代表土
- 1；灰オリーブ（5Y4/2）中～細粒砂質シルト 大小偽礫（2層起源）を底部に含む。（1層）
- 2；灰オリーブ（5Y5/2）細粒砂混じりシルト やや粘性が強い。（1-2層）
- 3；黄褐（10YR5/6）中粒砂混じり粘土質シルト 鉄分の錆着がみとめられる。（2層）
- 4；オリーブ灰（2.5GY6/1）中粒砂質シルト やや砂質が強い。水成堆積層または、大規模な自然流路埋土（3層）

第4図 調査区土層図（S=1/60）

確認調査の結果、第1～3区の各調査区で遺構・遺物の存在を確認することは出来なかった。また、今回の調査地に隣接する平成21年度榎原遺跡確認調査（和歌山市教育委員会）でも、遺構・遺物の存在が極めて希薄な地域であることが確認されており、本調査地内では埋蔵文化財は展開しないものと考えられる。（清水）

【参考文献】

『平成21年度和歌山市内遺跡発掘調査概報』2011 和歌山市教育委員会

㊦岩橋Ⅱ遺跡第3次確認調査（調査一覧148）

〔経緯〕 土地造成に伴う事前確認調査

〔場所〕 和歌山市岩橋字布川1352番4

〔面積〕 19.93㎡

〔概要〕 岩橋Ⅱ遺跡（遺跡番号381）は、紀ノ川南岸の下流域に立地し、岩橋千塚古墳群の北東に位置する。遺跡の範囲は、南北200m、東西500mで、遺物散布地として知られている。今回の発掘調査は、遺跡の東側で宅地造成が計画されたことから、工事に先立ち、遺跡の内容確認のために調査を実施した。調査地の現況は耕作地であった。

調査区の基本層序は、第1層 黄灰色細砂混シルト（耕作土）、第2層 浅黄色シルト、第3層 明青灰色シルト、第4層 灰白色粘土、第5層 黄灰色粘土（遺物、腐食質含む）、第6・7層 青灰色～暗青灰色粘土である。

調査区内では遺構は検出されなかった。調査地東側の第1区では、第5層がやや落ち込んだ状態で検出されたが、明瞭な掘方は確認できず、人為的な遺構ではないと判断した。遺物は、近世の瓦を除くと、第4・5層から土器数点が出土した。

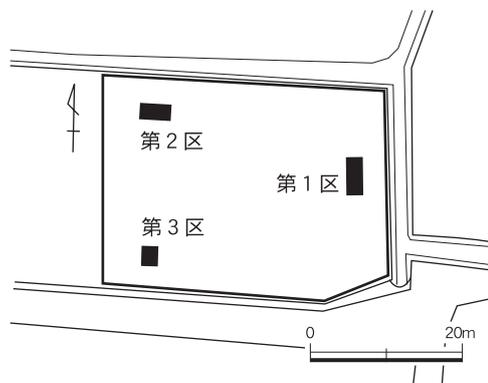
確認調査の結果、粘土層中の上層に遺物を確認したが、遺構は検出されなかった。周辺の立会調査等でも、遺構は確認されておらず、埋蔵文化財の展開がやや希薄な地点と考えられる。（富永）



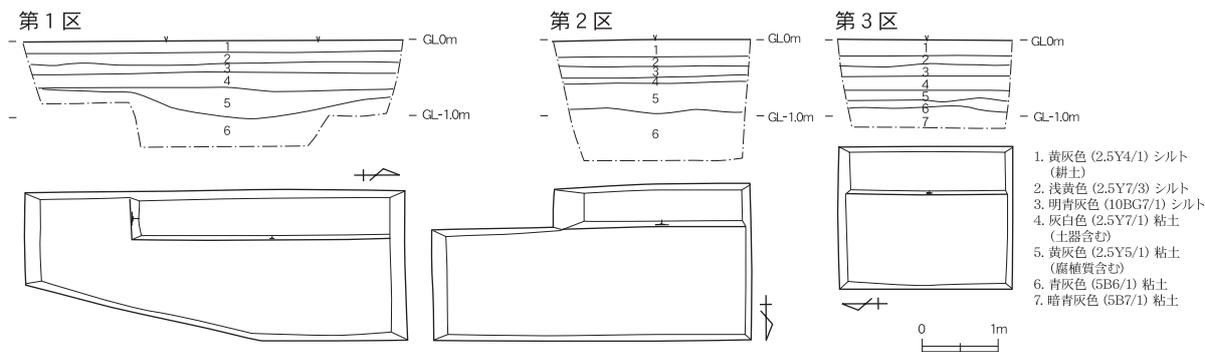
第1図 位置図



第2図 調査対象地



第3図 調査区位置図



第4図 調査区平面図・土層図 (S=1/100)

(5) 財団法人和歌山市都市整備公社実施の発掘調査概要

①秋月遺跡第12次発掘調査事業実績報告書

1. 調査に至る契機と経過

秋月遺跡は、岩橋山塊の西に位置する沖積地に立地し、その範囲は、紀伊国の一宮として知られる日前・国懸神宮を中心に東西800m、南北700mである。周辺の遺跡として、北西に弥生時代の環濠集落として著名な太田・黒田遺跡をはじめ、北東に鳴神Ⅴ遺跡、南東に津秦Ⅱ遺跡、南に津秦遺跡が所在する(第1図)。また、「河南条里」と呼称される条里地割が残存する地域である。

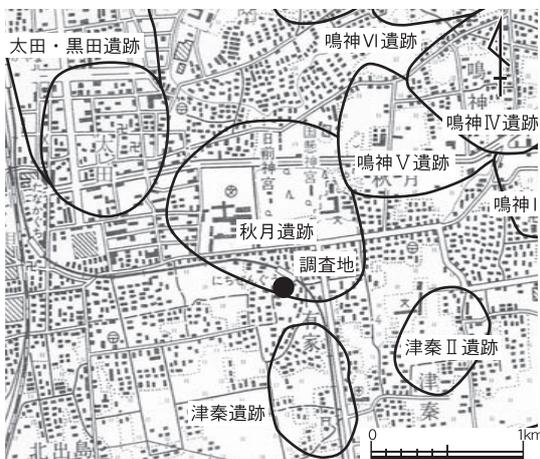
調査時点での既往調査は、遺跡の中央を東西に横切る県道和歌山野上線の北側で和歌山県が実施した9次、和歌山市が実施した10次にわたる調査がある。その結果、弥生時代、古墳時代、飛鳥から奈良時代、平安時代後期から鎌倉時代、江戸時代の遺構が確認されている。今回の調査と同時期の遺構としては、西側では、古墳時代初頭の井戸や古墳時代前期の前方後円墳や方墳が検出され、東側では、古墳時代初頭～前期の竪穴建物や井戸が確認されている。古墳時代初頭は、遺跡北側全域に集落域が広がり、前期になると、北側西部に墓域を形成する景観が復原されている。平安時代後期から鎌倉時代の遺構としては、屋敷地の区画溝や土坑が検出され、多くの遺物が出土している。

今回の調査は、個人住宅建て替えに伴い実施された事前確認調査(第11次調査)の成果を受け、和歌山市から委託された事業であり、和歌山市教育委員会(以下市教委)の指導のもと、公益財団法人和歌山市文化スポーツ振興財団が実施した。調査地は、既往の調査例がなく、その様相が不明である県道より南側にあり、現在の日前・国懸神宮の南約100mに位置する(第2図)。調査期間は、5月1日から25日までの休日や雨天による作業中止日を除く実働15日間である。

2. 調査の概要

(1) 調査の方法

調査区は、住宅建設部分の東西8m×南北7mで設定し、土砂仮置き場を考慮し、東西半分ずつ反転して調査をおこなった。調査は、東側から着手し、続いて西側を実施した。それぞれ東区、西区と呼称する。東区は、平成24年5月1日に機械掘削、7～16日まで人力掘削、17日に埋め戻しをおこなった。続いて、西区は18日に機械掘削、19～24日まで人力掘削、5月25日に埋め戻し、撤収作



第1図 秋月遺跡周辺の遺跡分布図(1/50000)



第2図 調査地位置図(1/5000)

業をおこなった。機械掘削と埋め戻しを市教委が、人力掘削作業を当財団が担当した。

調査は、地表下1.2mまでの第1～5層までを機械で掘削し、事前確認調査において土器が多く出土した第6層（層厚約20cm）を人力により掘削した。第6層を人力掘削することにより、良好な状態での土器の採取と第6層下での遺構検出（第1遺構面）を調査目的とした。しかし、機械掘削時に、事前確認調査で無遺物層と判断した第7層とその下位にある第8～9層が遺物包含層であることを確認し、東区の調査中、第7～9層が遺構埋土であることが明らかになった。そのため、調査の設計変更が必要となり、市教委との協議の結果、西区の調査面積を7㎡縮小し、下層遺構（第2遺構面）の調査をおこなった。

調査で作成した図面には、調査区平面図及び土層断面図（いずれも縮尺1/20）と遺物出土状況図（縮尺1/10）がある。調査区平面図の作成では、調査区の両端に任意に杭を設置し、基準点とした。これらの基準点には、調査地周辺の3級基準点から基準点測量を行い、国土座標（世界測地系）の数値を付した。調査区土層断面図は、北壁、東壁、西壁を用いて記録した。遺構断面図（縮尺1/20）は、各遺構に直交する位置に土層堆積状況を観察するためのセクションベルトを設定し、作成した。その他、堆積土の色調及び土質の観察には、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』を用いた。

（2）基本層序

本調査での層序は、大別して20層を確認した（第3図）。このうち第7～9層は遺構埋土であり、ほかの層位と同等には扱えないが、事前確認調査の層名を継承したため便宜的に用いる。地表下約30cmまで造成土があり、その下の現代耕作土を事前確認調査では、第0層としている。本調査では、2層に細分できるため、便宜的に0-1層、0-2層とした。第1～4層は近世から近代の耕作土で、第5層は中世耕作土で、12世紀後半の青磁碗の底部片が出土している。第6層は、中世土器小皿を多く包含する土壌層である。事前確認調査で上下2層に細分でき、層中出土遺物にも時期差がある可能性が示唆されていた。本調査では、これを検証するため第6層を第6-1層と第6-2層に細分して掘削し、遺物も分けて取り上げた。第6-1層からは、古墳時代前期から12世紀後半の土器が出土し、第6-2層からは古墳時代初頭から12世紀初頭までの遺物が出土した。第6-1層が12世紀前半から後半、第6-2層が11世紀後半から12世紀初頭の堆積と考える。第6-2層を除去したところを第1遺構面とした。第1遺構面で検出した遺構の下、第10層上面で古墳時代初頭の溝状遺構（SX-1・SX-2）を検出し、第2遺構面とした。SX-1埋土を第7層、SX-2埋土を第8・9層とした。第1遺構面、第2遺構面ともに検出高は標高2.7mであったが、第2遺構面の遺構は、第1遺構面の遺構埋土を掘削しないと検出できないため、それぞれ別に遺構面を設けた。

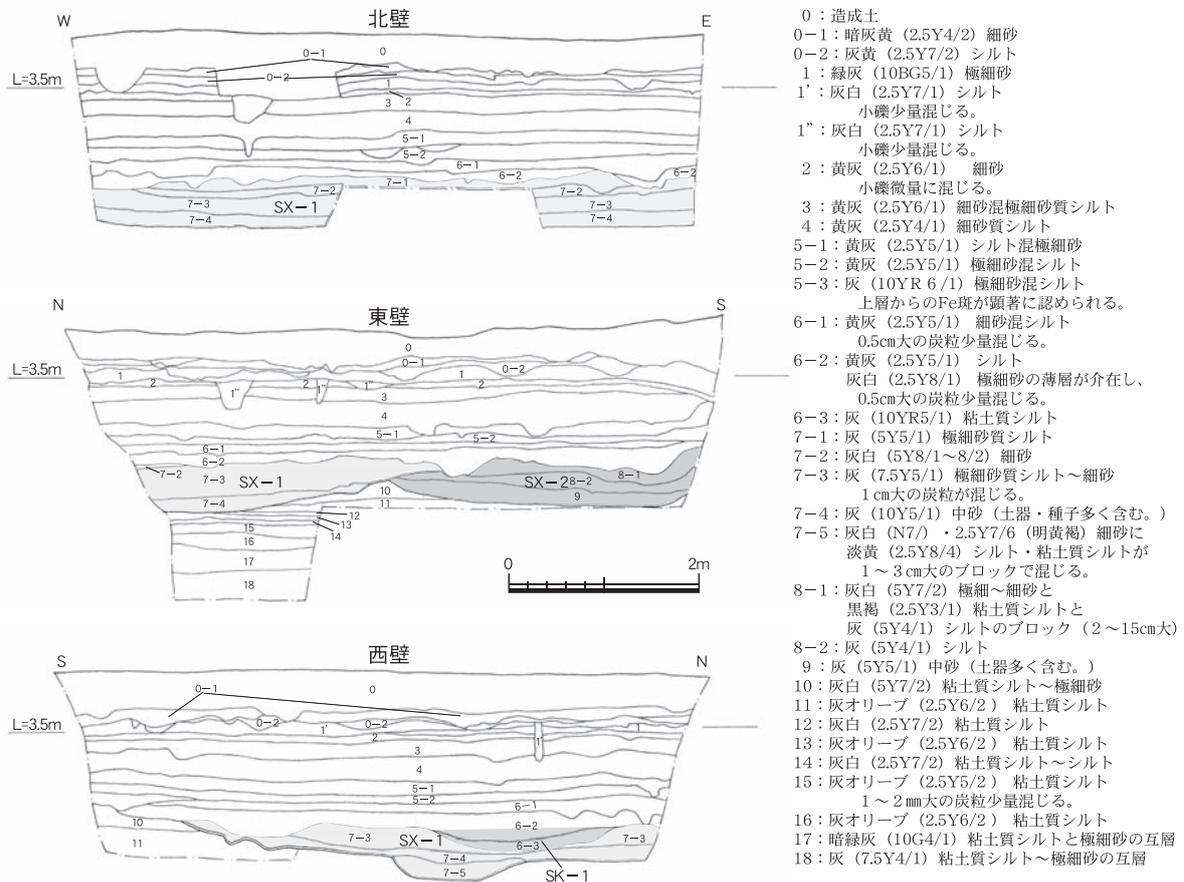
第2遺構面調査終了後、調査区北東隅に0.5m×1.5mの下層確認トレンチを設けて、弥生時代後期末以前に堆積した第10～18層を確認した。これらの層位から遺物の出土はなかった。ただし、第15層は土壌層で、1～2mm大の炭化物が少量混在していた。

（3）調査成果

第1遺構面

第1遺構面では、第6-2層を埋土とする落ち込みと落ち込み内で、土坑2基（SK-1・SK-2）を検出した（第4図上段）。落ち込みは、調査区外へ広がり、不定形で深さも各地点により不定であ

る。自然地形である可能性が考えられる。出土遺物には多くの土師器皿とともに、瓦器椀、黒色土器椀等がある。11世紀後半から12世紀初頭の遺物中心であるが、古墳時代初頭から前期、後期、飛鳥から奈良時代の遺物も若干含まれる。これらの土器のうち、土師器皿は完形で出土するものもあったが、その他の多くは破片の状態出土した。



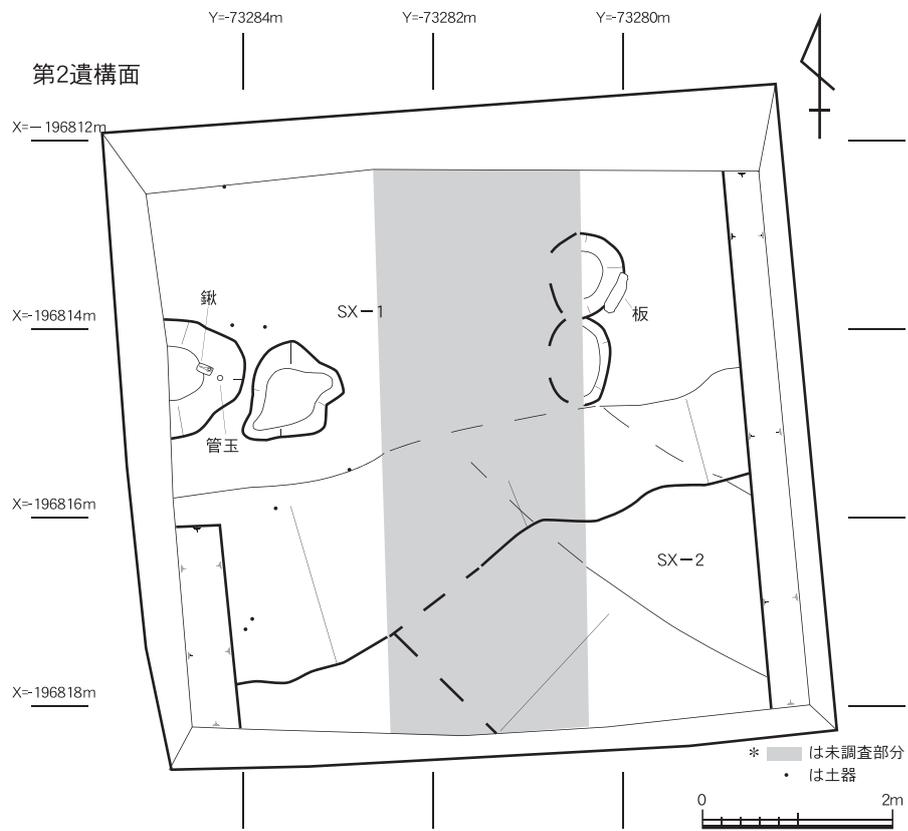
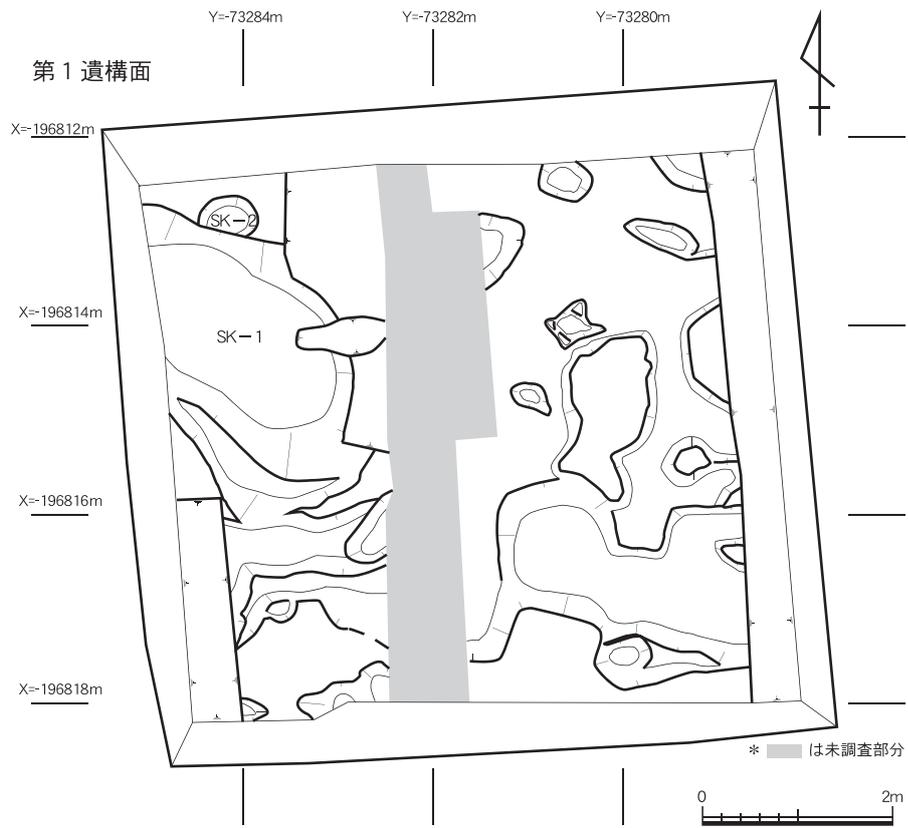
第3図 基本層序土層断面図 (S=1/80)

SK-1は、不整な楕円形の平面形で、西側が調査区外へと続く。長軸2.7m以上、短軸2.5m、深さ0.3mを測り、底面は比較的平坦である。遺構埋土は、上下に分層でき、上層には第6-2層が堆積し、下層は第6-2層より粘性が強いシルトであった。出土遺物には土師器皿(第7図-21~25)を中心に瓦器椀、黒色土器椀、鞆羽口の細片と鉾滓、飛鳥時代や古墳時代後期の須恵器や土師器が少量ある。土師器皿は完形で出土するものもあったが、多くが破片の状態出土した。このほか、遺構の南肩付近で黒色土器A類椀1点(第6図-26)と山茶椀1点(同図-27)が遺構底に接する状態で出土した(第5図)。和歌山県南部では、山茶椀流通域となることから出土例が散見できるが、和歌山市内での出土は稀である。SK-1は出土遺物から11世紀後半から12世紀初頭の遺構であると考えられる。

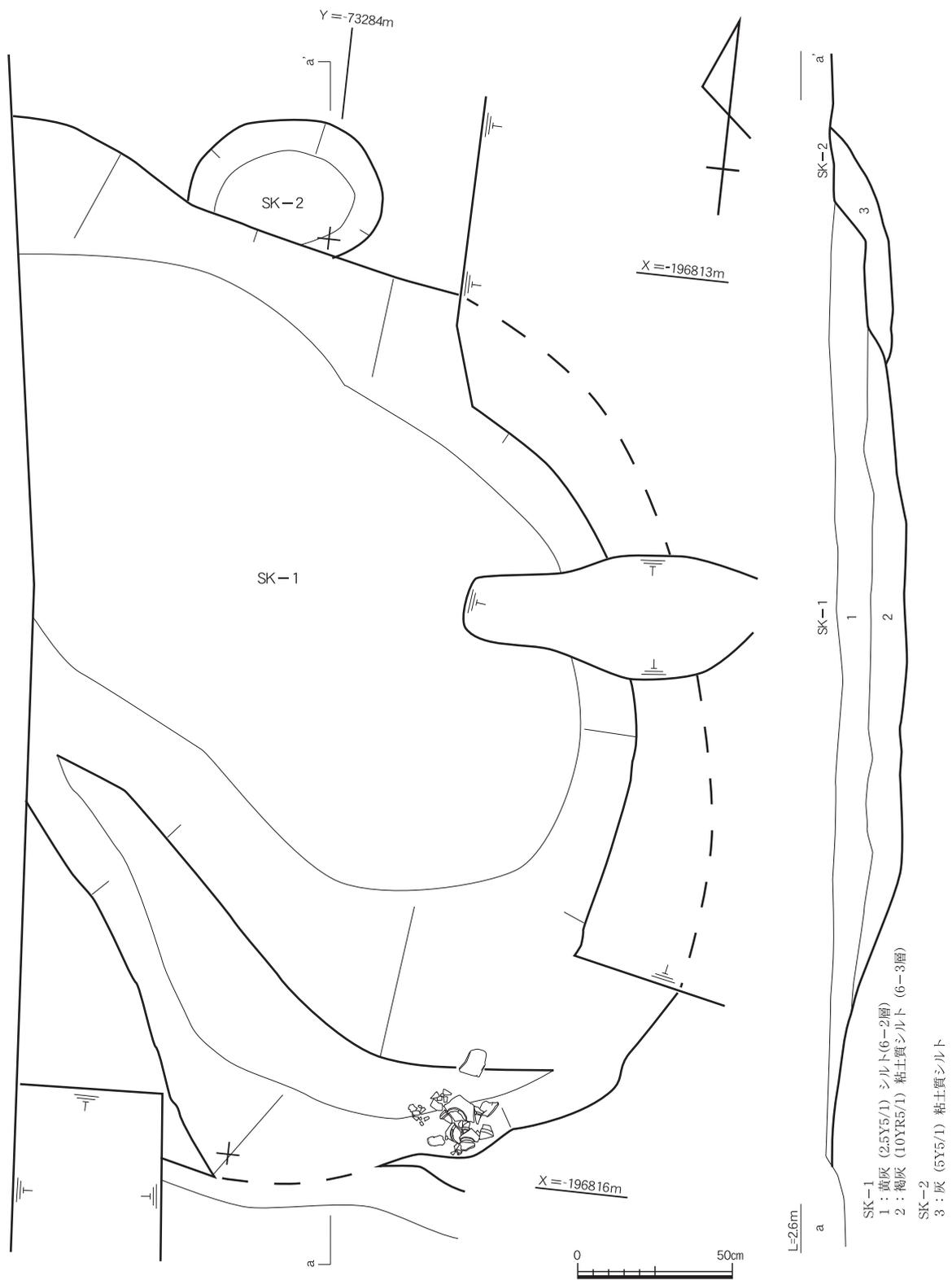
SK-2は、SK-1により南側が削平されるが、直径約0.6m、深さ0.3mを測る。出土遺物に少量の土師器皿片があり、これらの年代から11世紀後半から12世紀初頭の遺構であると考えられる。

第2遺構面

第2遺構面では、溝状遺構2基(SX-1・SX-2)を検出した(第4図下段)。SX-1は東西軸



第4図 調査区平面図 (S=1/80)



第5図 SK-1・2遺構平・断面図 (S=1/20)

に対してやや南に振る方向に延びる落ち込みである。本調査では、南岸を検出したのみで、北岸が調査区外となり、全形は不明である。遺構の大きさは、幅5.3m以上、深さ0.5m、底面は平坦であるが、20~30cm程度土坑状に深くなっている箇所が認められた。埋土は、上下2層に分けて掘削した。

上層は、断面観察ではさらに3層に細分することが可能であったが、遺物をほとんど含まなかったことから、一度に掘削した。上層の出土遺物には、焼成痕のある板や棒状木製品、炭がある。上層と下層の層界付近で、完形に近い土器が数点出土した。上層出土遺物には、加飾複合口縁壺、高杯、手焙形土器片、小型壺、弥生形甕、加飾器台、椀形高杯等がある（第7図-33~40）。下層出土遺物には、弥生形甕や布留系甕、鉢、底部穿孔鉢、垂下口縁壺、広口壺、ミニチュア高杯、碧玉製管玉、直柄広鋏が出土した（第8図-41~52・61）。SX-1は、出土遺物の年代から古墳時代前期の遺構である。遺構内で桃核やヒョウタン類の種子が検出され、管玉が出土していることから、何らかの祭祀が行われていた可能性がある。SX-2は、北岸をSX-1に大きく削られ、南岸も調査区外となり、全形が不明である。底面の形状から東西軸よりやや北に振る方向へ延びる落ち込みである。幅3.5m、深さ0.4mを測り、底面は平坦であった。調査区西側ではSX-1に削られ、検出できなかった。埋土は、3層に分層でき、上層はブロック土で埋められ、中層はシルト、下層は中砂が堆積する。上層出土遺物には、弥生形甕、底部穿孔鉢、鉢を中心に複合口縁壺、広口壺、有稜高杯、椀形高杯等がある（第8図-53~56）。下層出土遺物には、弥生形甕、有稜高杯、複合口縁壺、ミニチュア鉢等がある（第8図-57~60）SX-2は遺物の年代から古墳時代初頭の遺構である。

包含層出土遺物

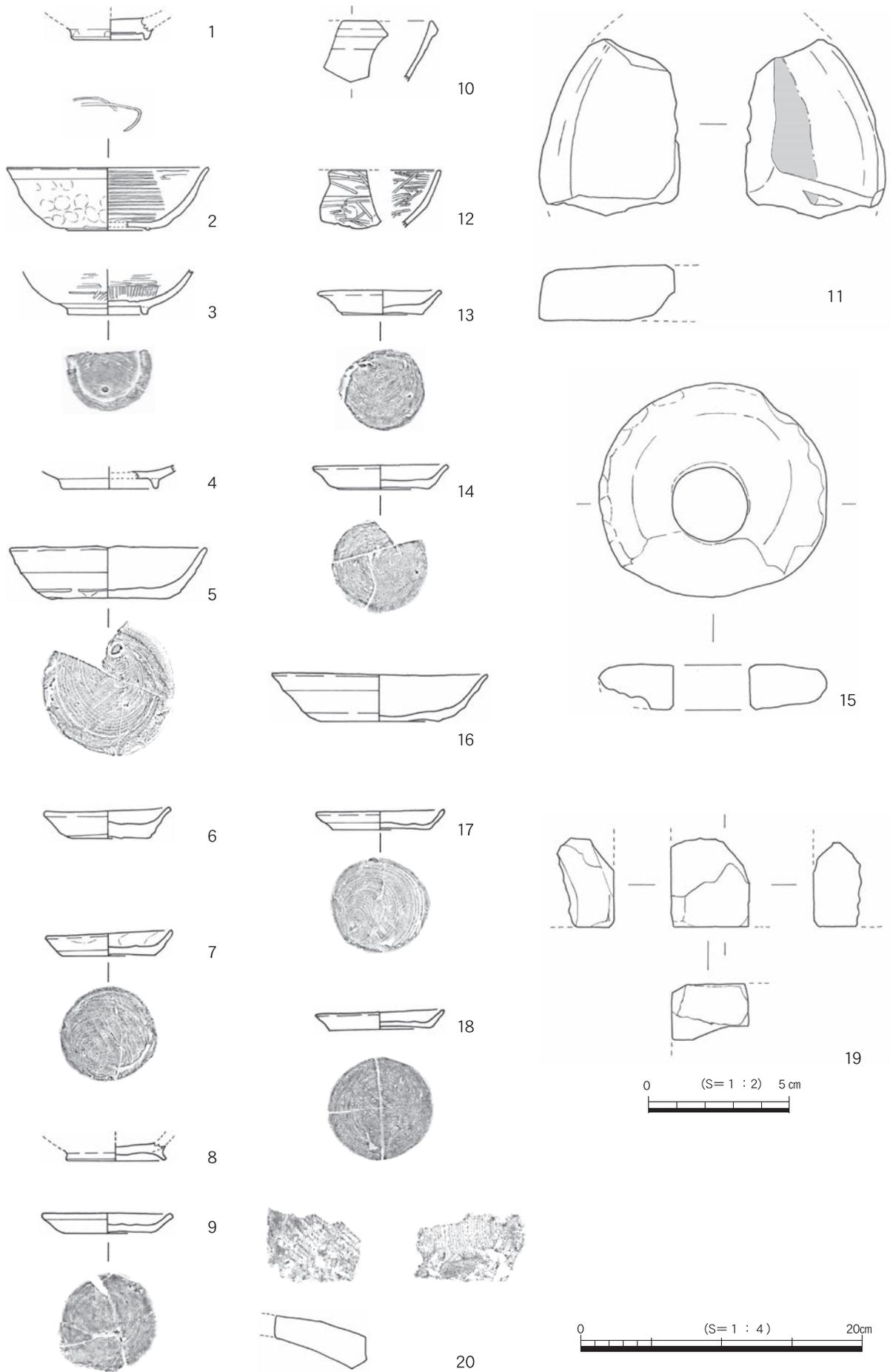
第5層出土遺物には、12世紀後半の龍泉窯青磁の底部片がある（第6図-1）。

第6-1層出土遺物には、完形のものを含む多数の土師器皿と、少量の瓦器椀や羽釜片や青磁椀片がある。そのうち、図化したものが第6図-2~11である。2は紀伊型Ⅲ期、3と8は紀伊型Ⅰ期の瓦器椀である。3の底部には回転糸切り痕が残る。4は黒色土器B類椀である。5~7・9は土師器皿である。10は白磁椀の口縁部片である。11は和鏡鑄型の破片である。細片のため図化していないが、第6-1層、第6-2層、SK-1から少量の轆羽口と鋳滓片（図版6上段）も出土しており、近くで鏡が鑄造されていた可能性がある。これらの遺物から12世紀後半の包含層であると考ええる。

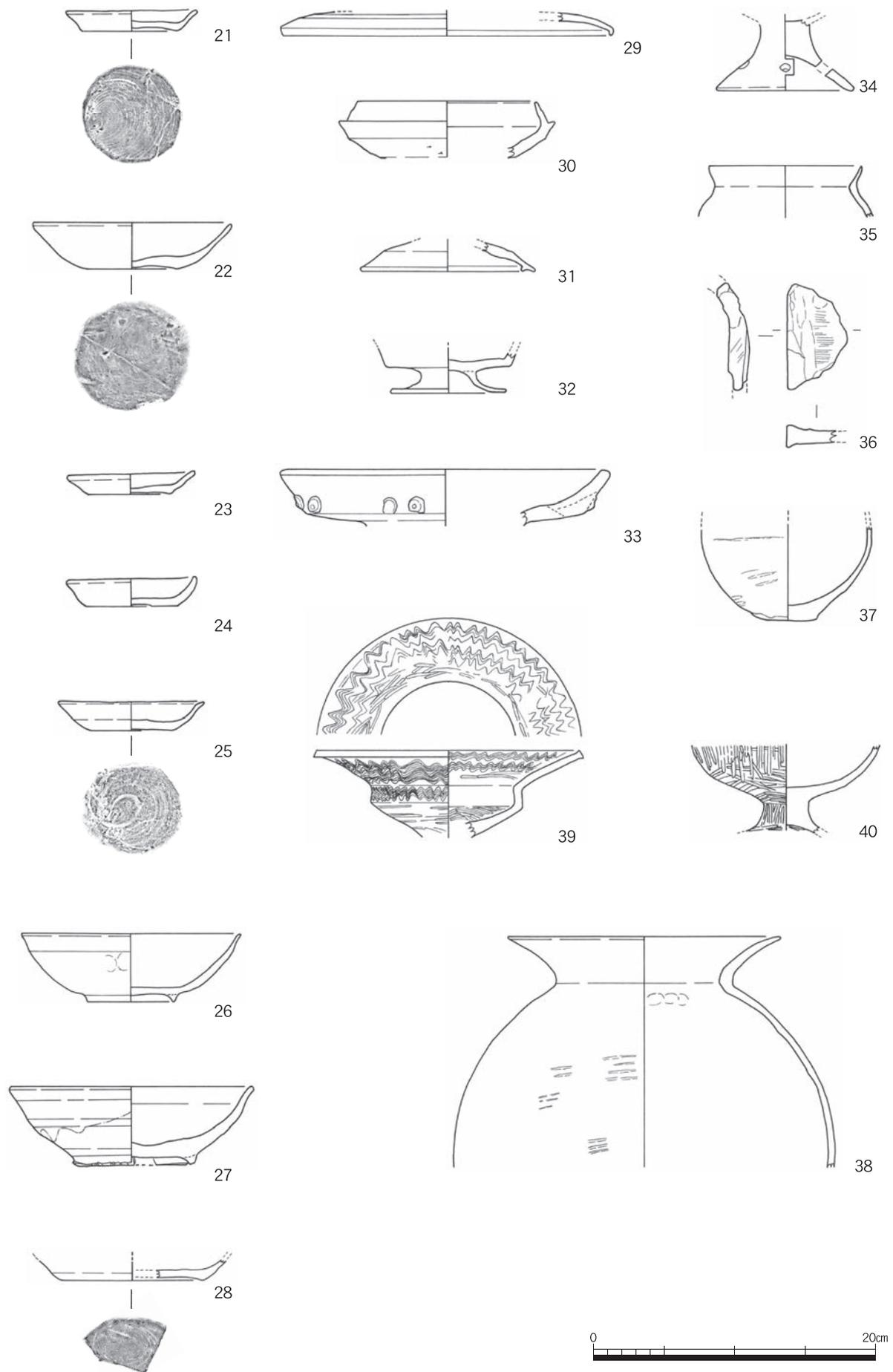
第6-2層出土遺物には、完形のものを含む多数の土師器皿と、少量の瓦器椀や羽釜片や白磁椀片がある。そのうち、図化したものが第6図-12~16、第7図-29・30である。12は紀伊型Ⅰ期の瓦器椀口縁部片である。13・14は土師器皿である。15は性格が不明な環状石製品である。これらの遺物から12世紀前半の包含層であると考ええる。

第6-1層、第6-2層、SK-1やSK-2の遺構から出土した土師器皿は、口径14cmと9cmの大小2種類があるが、口径9cmのものが大半を占める。12世紀前半の第6-2層、11世紀後半から12世紀初頭のSK-1やSK-2から出土したものは、糸切り痕をナデ消すか、糸切り痕を残すものも12世紀後半の第6-1層出土のものより薄手で、胴部は底部の際までナデられ、丁寧な調整が施されている。

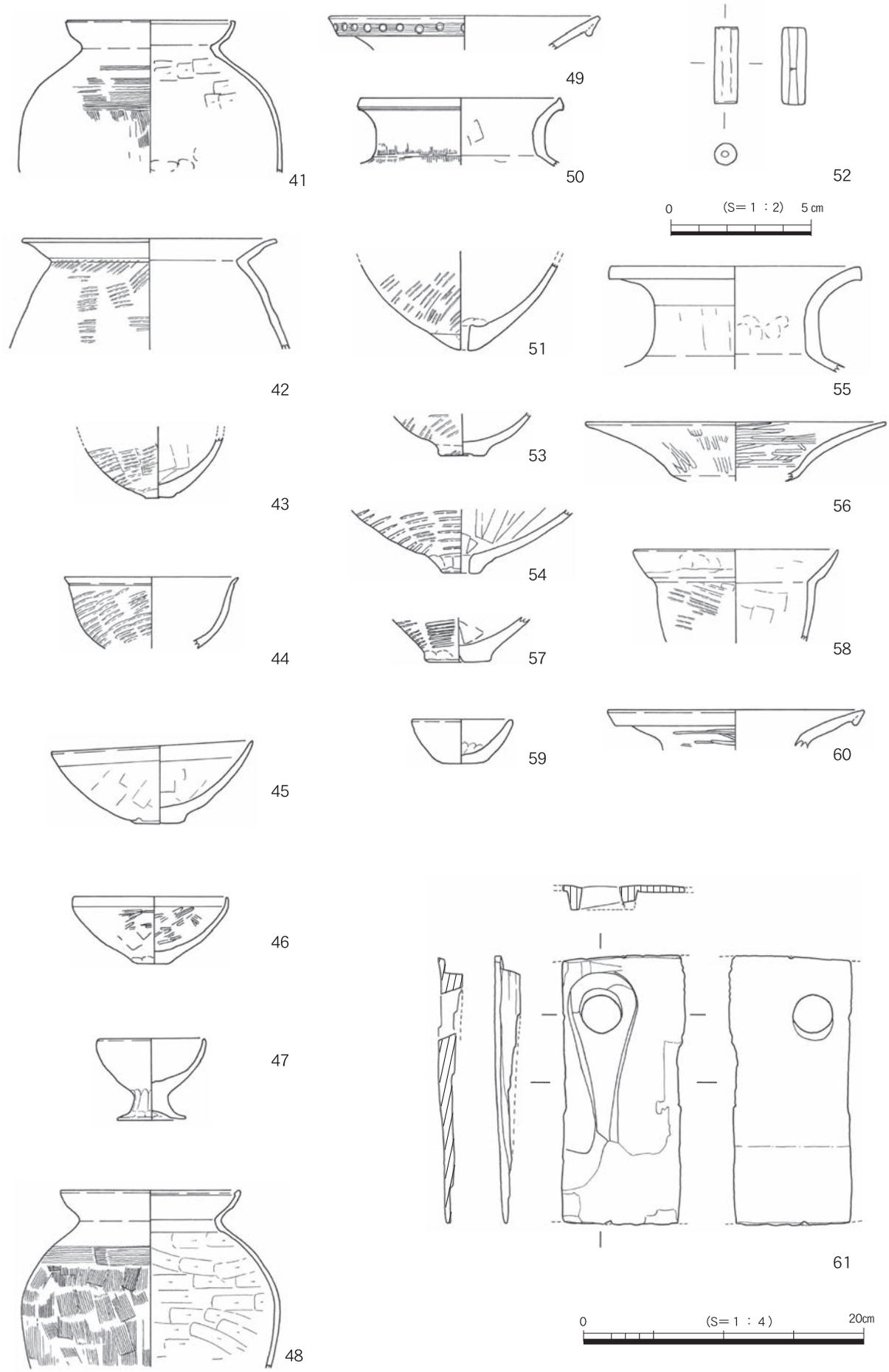
このほか、第6-1層や第6-2層、SK-1から古墳時代前期から古代の土器片が出土している。そのうち、図化できたものが第7図-29~32である。29は奈良時代前半の須恵器杯蓋片、30は6世紀後半の須恵器杯身、31は7世紀後半の須恵器杯蓋、32は6世紀末の須恵器高杯である。古墳時代前期の土器は、第2遺構面で検出している遺構から巻き上げられたものと考えられるが、第7図に挙げた29~32の時期の遺構は検出していない。これらの遺物の出土から古墳時代後期から古代にかけての遺構が近隣に存在する可能性が考えられる。



第6図 出土遺物実測図1 (1~10・12~14・16~18・20 : S=1/4, 11・15・19 : S=1/2)



第7図 出土遺物実測図2 (S=1/4)



第 8 図 出土遺物実測図 3

3. まとめ

調査成果として、調査区が狭いため、第1、第2遺構面の遺構とも全形や性格が不明であるが、県道の南側にも古墳時代初頭から前期や平安時代後期の遺構・遺物が分布することが判明し、古墳時代初頭から前期にかけて継続的に遺構が形成される状況が明らかになった。また遺構や層位としては検出できなかったが、第6層や第1遺構面の遺構内に含まれる古墳時代後期や飛鳥から奈良時代の須恵器や土師器が今後周辺の調査で遺構が確認できる可能性を示唆している。11世紀後半から12世紀初めにかけての性格は不明であるが、土坑が掘削され、多くの土器が出土する。これについては日前・国懸神宮との関連が考えられるが、今後の課題としたい。条里にかかわる遺構は検出できなかったが、当該地は少なくとも12世紀後半以降、現在の宅地が形成されるまで耕作地となっていたようである。近世以降は堆積土が約70cmと厚く、この時期に土砂の供給が頻繁にあったことを示している。

【参考文献】

- 財団法人和歌山県文化財センター 1994『秋月遺跡 向陽高校危険校舎改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 財団法人和歌山市文化体育振興事業団 1998『秋月遺跡 第6次発掘調査概報』
- 財団法人和歌山市文化体育振興事業団 2000『秋月遺跡 第8次発掘調査概報』

②太田・黒田遺跡第71次発掘調査

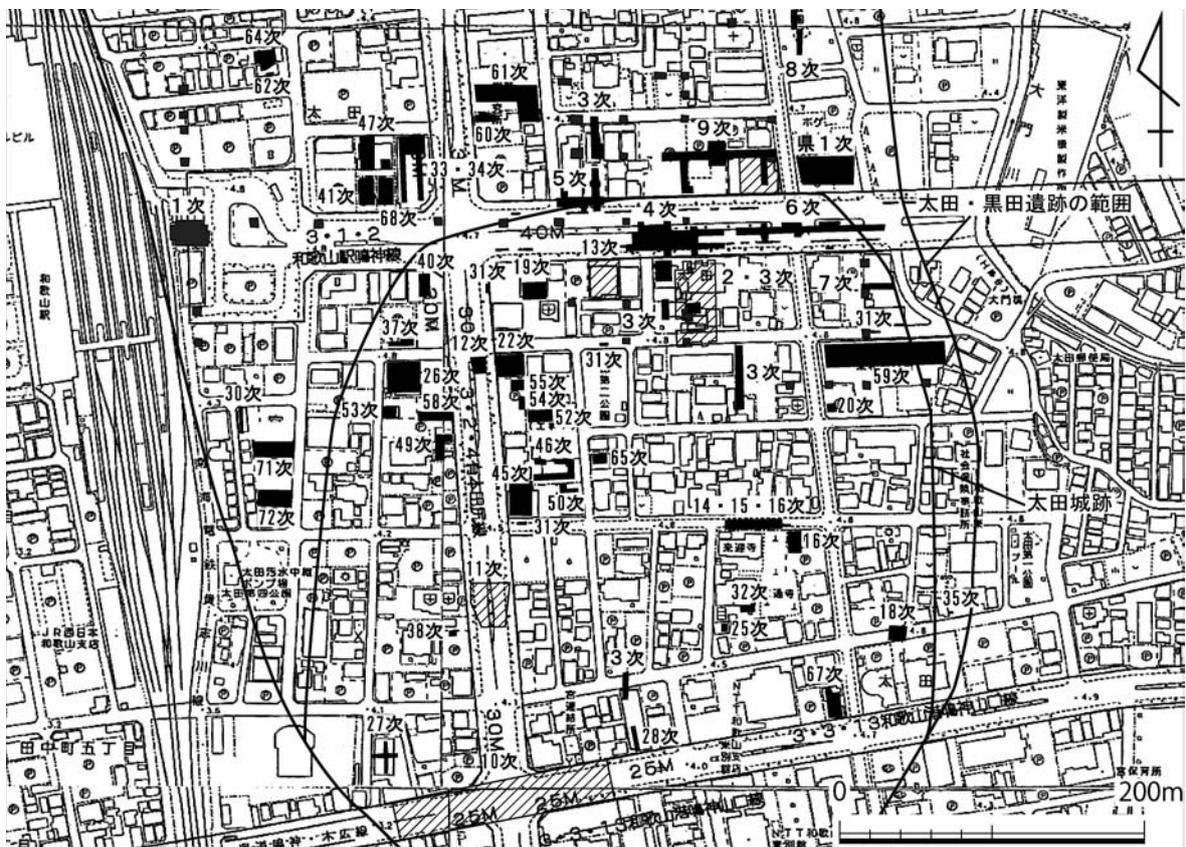
1. 調査の契機と経過

太田・黒田遺跡は、紀ノ川下流域南岸の沖積平野の微高地上に位置する弥生時代から江戸時代にかけての複合遺跡である。当遺跡南半部は、日本三大水攻めの一つとして著名な羽柴秀吉による水攻めが行われた太田城跡の推定地が重複している。

本遺跡は、東西500m、南北約850mの範囲に広がる県内屈指の弥生時代の大規模集落遺跡である。遺跡が立地するJR和歌山駅の東側一帯は、標高4.0m前後の微高地にあたり、数多くの遺跡が分布している。過去の調査では、弥生時代を中心とする竪穴建物や土坑、井戸、土器棺墓等の遺構が検出され、さらに銅鐸や多量の壺、甕などの弥生土器が出土している。また、弥生時代以降についても古墳時代から江戸時代まで継続して遺構や遺物が豊富に確認されている。

今回の調査地は、JR和歌山駅の南東約70mに位置し、太田・黒田遺跡範囲内の西側にあたる（第1図）。竪穴建物等の生活痕跡が多く検出される中心部からは、西側に位置しており、本遺跡の集落縁辺部にあたるものと考えられる。今回の調査地から北東に約100mに位置する第26次調査では、弥生時代前期の大溝や中期の水田区画等が検出されている。また、今回の調査地に隣接する西側では第30次調査が実施されており、弥生時代中期頃の溝1条が確認された。

今回の調査は、和歌山市太田一丁目10番13における兼用住宅（診療所）に伴う開発計画に起因する。この場所が『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』に記載された周知の埋蔵文化財包蔵地である太田・黒田遺跡（遺跡番号327）の範囲内であり、和歌山市教育委員会が確認調査を行った結果、2面の遺構面が確認され、溝・ピット・土坑等の遺構・遺物が出土したことから、本発掘調査を実施



第1図 調査位置図

することになった。

調査は、全調査面積の50.3%を国庫補助事業（71-1次）、49.7%を事業者負担（71-2次）としておこなった。現地調査は、和歌山市教育委員会指導のもと、公益財団法人和歌山市文化スポーツ振興財団が委託を受けて行った。調査期間は平成24年7月2日（月）～平成24年8月10日（金）の約1ヵ月間である。

2. 調査の方法と概要

（1）調査の方法

今回の調査は、兼用住宅の建物基礎で破壊される範囲を対象としたもので、調査区を9カ所設定して実施した。調査総面積は98.915㎡である。調査対象地の現況は、アスファルト敷きの駐車場であったため、掘削前にアスファルトの除去を行った。調査は、排土の置き場を確保するために、北側（第1・2・4・6・8区）の調査を実施した後に、南側（第3・5・7・9区）の調査を行った。重機掘削は市教委確認調査で得られた第3層上面まで実施した。図面は、遺構平面図及び壁面土層断面図（いずれも縮尺1/20）を作成した。遺構平面図の作成では、調査区両端に任意に設置した基準杭をもとにし、基準点には調査地周辺の3級基準点から基準点測量を行い国土座標（世界測地系）の数値を付した。壁面土層断面図は、第1・6・8区で北壁を、第3・5・7・9区で南壁を、第2区で東壁を、第4区で北・西壁を基本的に記録した。その他、堆積土の色調及び土質の観察には、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』を用いた。

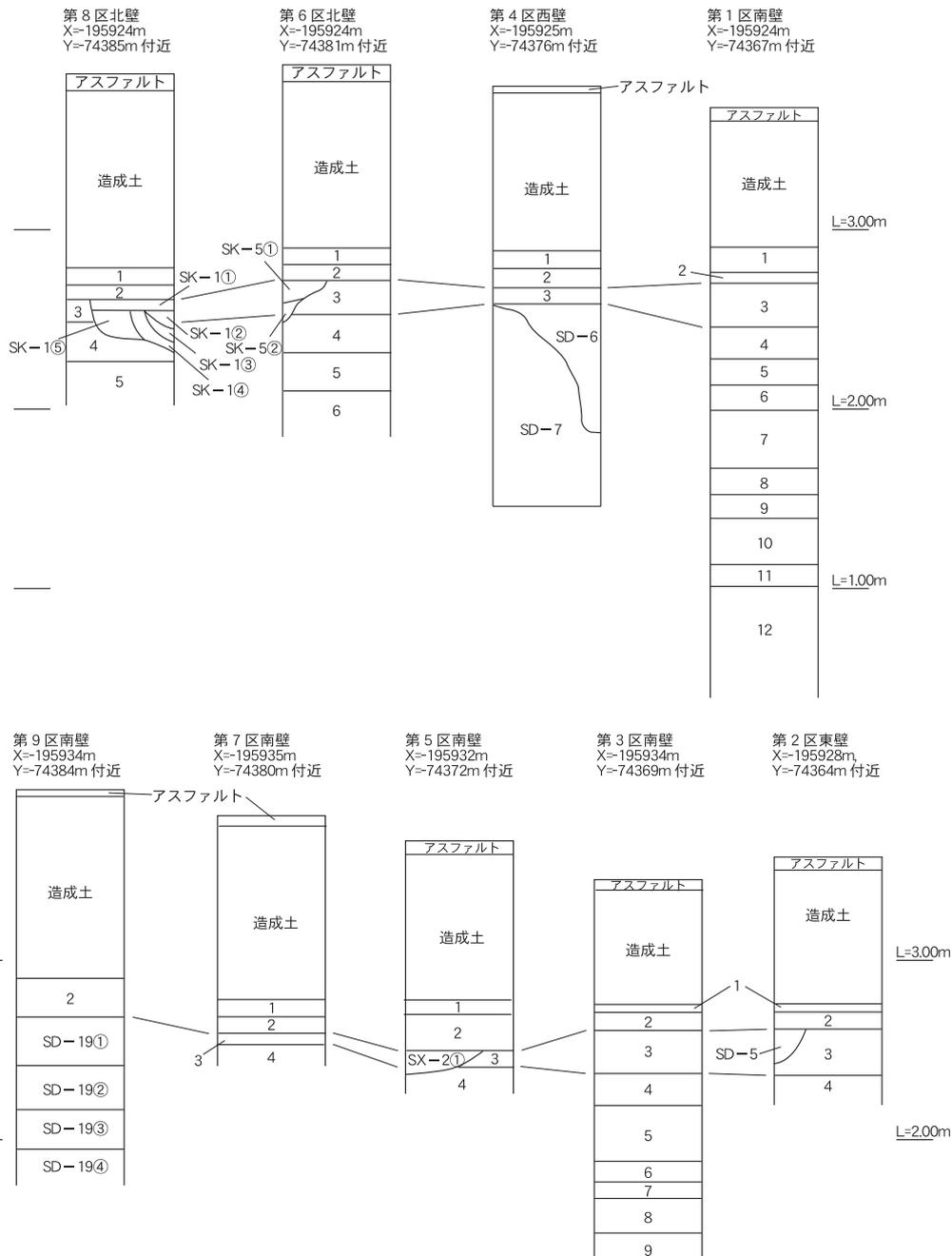
（2）基本層序

現地は、旧耕作土上に造成が行われ、アスファルト敷きの駐車場であった。第2図に示した各調査区の土層柱状模式図から、現地表面の標高は約3.60～3.80mとなり、西側から東側に向けて厚く造成が行われていることがわかる。旧耕作土である第1層は南東側に向けて上面が大きく削平を受けている。9ヶ所に設定した調査区内の基本層序を12単位に分類した。以下、第1区の層序を中心に、各層の状況について説明を行う。

第1層は旧耕作土であり、第1区では2単位に細分した。第1a層は褐灰色、第1b層は灰色のシルト混細砂である。第2層は、第2a・2b・2c層の3単位に細分でき、第2a層が灰黄褐色、第2b層がにぶい黄褐色、第2c層が暗灰黄色となり、いずれも細砂混シルトとなる。

第3層は灰黄色の粗砂混シルトとなり、第3層上面において古墳時代中・後期以降の遺構を検出した。西側調査区で厚さ約0.1m、東側調査区では厚さ約0.4mとなる。第4層は、にぶい黄褐色細砂混シルトとなり、上面において弥生時代中期後半から古墳時代初頭頃の遺構を検出した。第4層上面は、調査対象地西側で標高2.50m、東側で標高2.40mとなり、第3層の層厚が西側から東側に向けて厚くなることと合わせると、東側に向けて自然地形が緩やかに傾斜をもつことがわかる。

第5層以下は人工遺物を含まない堆積層である。第5層は第4層と同じくにぶい黄褐色細砂混シルトとなり、第6層は褐色シルト、第7層はオリーブ褐色のシルトである。なお第8層以下の堆積状況を確認するために、第1区西側（X=-195925m、Y=-74367m）付近においてサブトレンチの掘削を行った。第8層は黄灰色シルト、第9・10層は暗灰黄色の細砂混シルト、第11・12層は灰色の細砂混シルトとなる。



第1区の基本層序

1.
 - 1a. 褐灰 (10YR4/1) シルト混細砂
 - 2a. 灰 (5Y5/1) シルト混細砂
2.
 - 2a. 灰黄褐 (10YR5/2) 細砂混シルト
 - 2b. にぶい黄褐 (10YR5/3) 細砂混シルト
 - 2c. 暗黄灰 (2.5Y5/1) 細砂混シルト
3. 灰黄褐 (10YR4/2) 粗砂混シルト
4. にぶい黄褐 (10YR5/3) 細砂混シルト
5. にぶい黄褐 (10YR5/4) 細砂混シルト
6. 褐 (10YR4/4) シルト
7. オリーブ褐 (2.5Y4/3) シルト
8. 黄褐 (2.5Y4/1) シルト
9. 暗灰黄 (2.5Y5/2) 細砂混シルト
10. 暗灰黄 (2.5Y4/2) 細砂混シルト
11. 灰 (5Y5/1) 細砂混シルト
12. 灰 (10Y4/1) 細砂混シルト

第2区

- SD-5 灰 (5Y5/1) 細砂混シルト
- 第4区
- SD-6 第5図下を参照
- SD-7 第5図下を参照
- 第5区
- SX-2
- ① 灰黄褐 (10YR4/2) シルト混細砂
- 第6区
- SK-5
- ① 褐灰 (10YR5/1) シルト混細砂
- ② 灰黄褐 (10YR5/2) 細砂混シルト
- 第8区
- SK-1
- ① 褐灰 (10YR6/1) シルト混細砂
- ② 灰黄褐 (10YR6/2) シルト混細砂
- ③ にぶい黄褐 (10YR5/3) 細砂混シルト
- ④ 褐 (10YR4/4) シルト
- ⑤ 黄褐 (10YR5/6) 細砂混シルト

第9区

- SD-19
- ① 褐灰 (10YR4/1) 細砂混シルト
- ② 灰黄褐 (10YR4/2) シルト混細砂
- ③ にぶい黄褐 (10YR6/2) 細砂混シルト
- ④ 灰 (5Y4/1) シルト

第2図 基本層序土層断面図 (S=1/80)

3. 遺構

今回の調査では、調査区を9ヶ所設定しているため、各調査区を通して遺構番号を付した。第1遺構面（第3層上面）及び第2遺構面（第4層上面）においては、溝、土坑、ピット等を確認することができた。以下では、各調査区の検出遺構面ごとに説明を行う。なお、同一と考えられる一部の溝についてはまとめて記述した。

第1遺構面（第3層上面）（第3図）

第1遺構面は、古墳時代中・後期以降の遺構面であり、全調査区において遺構や遺物を確認した。

〔第1区〕

SD-1は、調査区東隅において、西肩のみを検出した。北西から南東方向に延びるものと考えられ、検出長1.9m、検出面からの深さ0.3mとなる。埋土からは土師器皿や須恵器、黒色土器A類碗などが出土していることから、平安時代には埋没したものと考えられる。

SD-4は、調査区北側において南肩のみを検出しており、ほぼ東西方向に延びるものと考えられる。しかし、遺構の大部分が調査区外に延びるため、正確な幅等については不明であるが、検出面からの深さは約0.8mとなる。埋土からは古代頃の土師器甕等が出土している。

〔第2区〕

SD-5は、検出長1.75m、最大幅0.5m、深さ0.2mとなり、ほぼ東西方向に延びる。出土遺物から古墳時代前期以降に埋没したものと考えられる。

〔第3区〕

SD-9は、検出長3.20m、幅0.6m、深さ0.2mとなり、ほぼ南北方向に延びる。SD-9の埋土からは、須恵器杯の底部や黒色土器A類碗などの遺物が出土していることから、平安時代には埋没したものと考えられる。

SD-14～16は、いずれも深さ5cm以下の浅いものであり、鋤溝の一部と考えられる。SD-21は調査区東側において肩部の一部を検出した。遺構は調査区外にまで延びており、検出面からの深さは0.5mとなる。いずれも遺物は出土していないが、埋土の状況から古墳時代中期以降のものと考えられる。

〔第4区〕

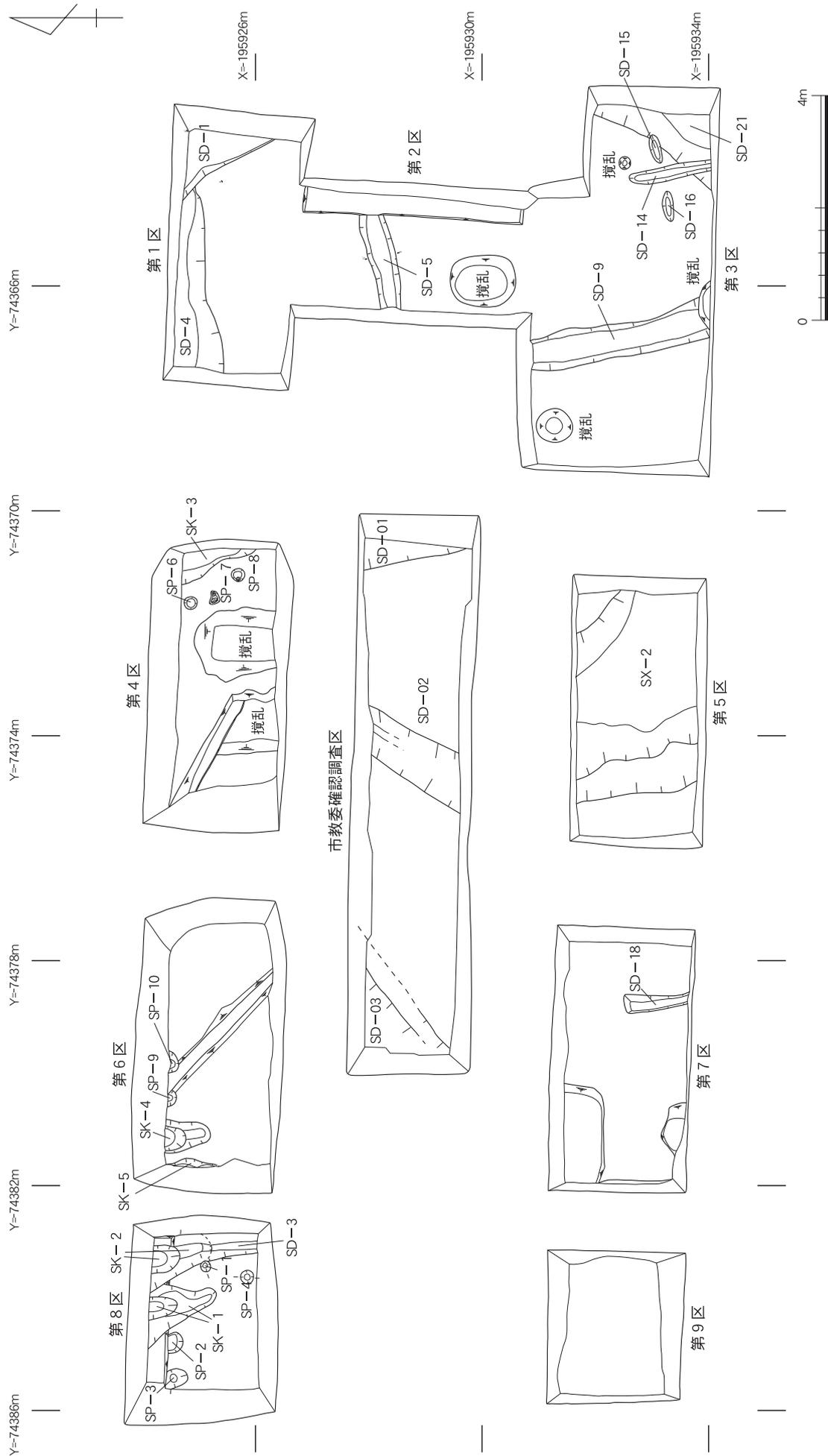
調査区のほぼ半分以上が近現代の攪乱により破壊を受けていた。SK-3は、調査区東側において肩部の一部を検出した。検出面からの深さは、0.7mとなり、埋土からは土師器甕や須恵器等の破片が少量出土している。SP-6～8は検出面からの深さが5cm程の浅いものである。遺物は出土していないが、埋土から古墳時代中期以降の遺構と考えられる。

〔第5区〕

SX-2は、調査区外にまで延びるため、全体は不明である。しかし、第5区北側の市教委確認調査区では検出されていないことから、落ち込みとした。検出面からの深さは0.5mとなり、調査区西側においては2段の落ち込みがある。埋土は3単位に分けることができ、上部2層の埋土からは弥生土器や土師器等が少量出土しているが、詳細な埋没時期は不明である。

〔第6区〕

SD-2は、最大幅約1.4m、検出面からの深さは0.7mとなり、北東から南西方向に延びる。同区において検出したSD-8の埋没後に掘削されている古墳時代後期頃の溝である。



第3図 第1遺構面遺構平面図 (S-1/100)

SK-4・5は、その大部分が調査区外にまで延びることから、全体のプランは不明であるが、第8区のSK-1・2と同プランの土坑と考えられる。SK-4は、検出面からの深さ0.4mとなり、埋土下層から6世紀頃の須恵器の杯身が出土している。SK-5は、SK-4の西側においてごく一部のみを検出したが、埋土からは古墳時代頃の土師器破片が少量出土する（第5図上）。

SP-9・10は調査区外にまで延びるため、全体のプランは不明であるが、調査区北側において一部を検出した。検出面からの深さはSP-9が0.1m、SP-10が0.2mとなり、いずれの遺構からも遺物は出土していない。

[第7区]

SD-18は、南北方向に延びる中世以降の溝の一部を検出した。最大幅は0.3m、検出面からの深さは3cmとなる。埋土から瓦器碗の口縁部破片等が出土していることから、中世以降に埋没したものと考えられる。

[第8区]

SD-3は、ほぼ南北方向に延びる溝と考えられる。調査区外にまで延びており、西側の肩部のみを検出した。埋土からは土師器破片が極少量出土したが、詳細な埋没時期については不明である。

SK-1・2、いずれも調査区外に延びているため全体のプランは不明であるが、楕円形状を呈するものと考えられる。いずれも全体を皿状に掘削した後に、中心部付近において柱穴痕を有するピットを確認した。SK-1は、最大検出幅0.8m、検出面からの深さ0.3mとなる。SK-2は、調査区東側にまでのびるため、一部のみを検出した。最大検出幅0.8m、検出面からの深さ0.8mとなる。各土坑の埋没時期は、出土遺物から古墳時代中・後期以降となるものと考えられる。

SP-1は、直径0.2mの円形となり、検出面からの深さ0.15mである。SP-2は、直径0.3mではほぼ円形となり、検出面からの深さ0.2mとなる。SP-3は、調査区外にまで延びるものであり、検出最大長0.4m、深さ0.3mとなる。SP-4は、直径0.2mの円形で、検出面からの深さ8cmとなる。埋土からは土師器破片が極少量出土した。SP-1以外の埋土からは、弥生土器、土師器、須恵器等が極少量出土したが、詳細な時期は不明である。古墳時代中・後期以降には埋没したものと考えられる。

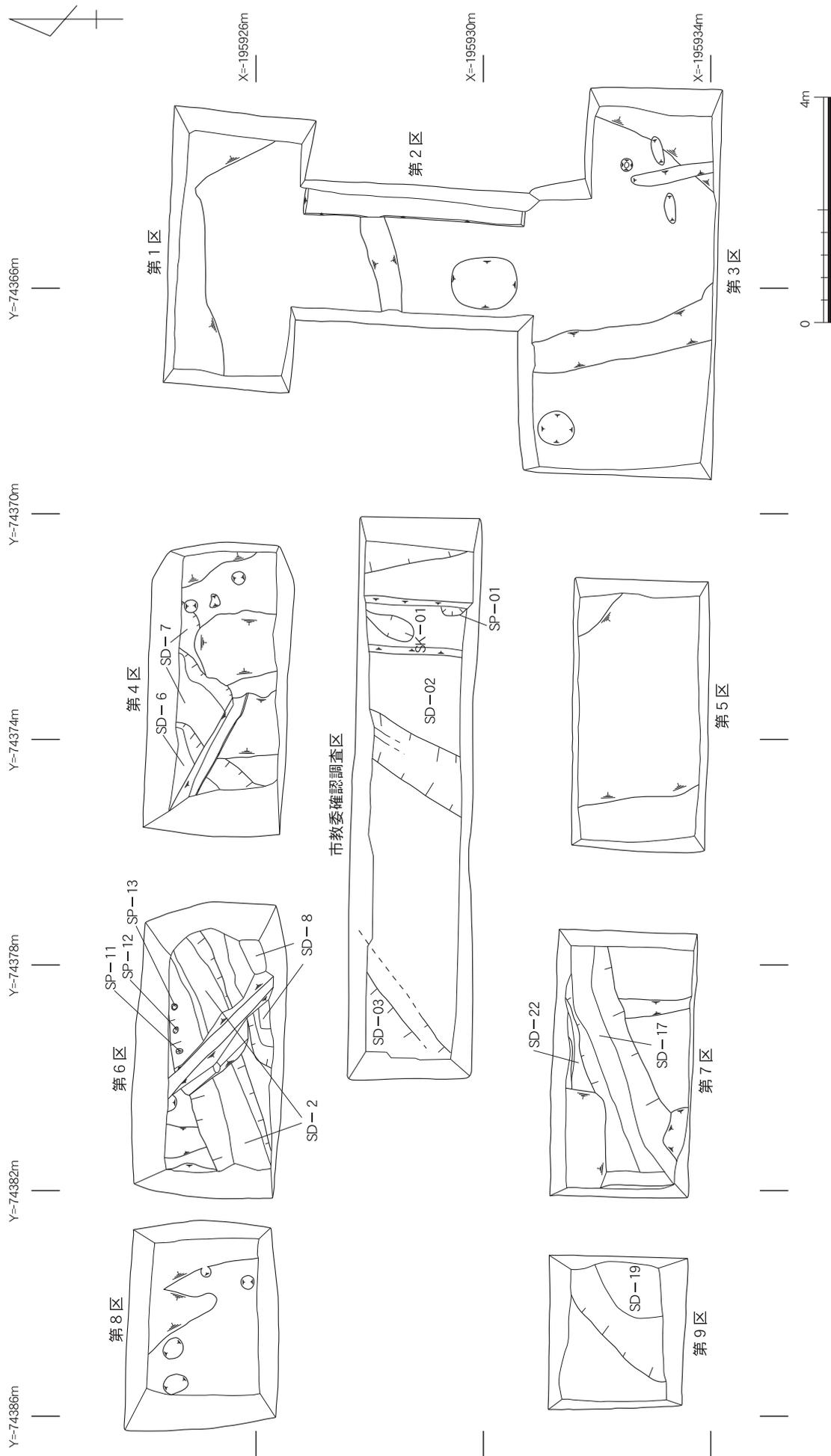
第2遺構面（第4層上面）（第4図）

第2遺構面は、弥生時代中期後半から古墳時代初頭頃を中心とする遺構面である。第3・4・6・7・9区において遺構と遺物を確認することができた。SD-6・7・8・19については、埋土や出土遺物などから同一の溝と考えられることから、まとめて記述を行った。

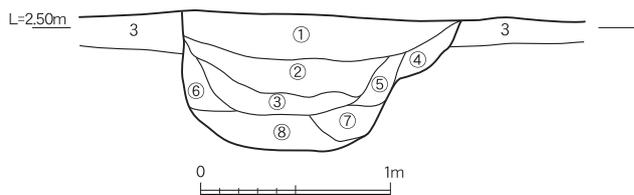
[第4区SD-6・7、第6区SD-8、第9区SD-19]（第5図下）

SD-6・7・8・19は第4・6・9区の同一遺構面上で検出した北東から南西方向に延びる溝である。各調査区において溝の肩部の一部しか検出できなかったため残存幅は不明であるが、市教委確認調査区の成果（SD-03）と合わせると約1.2m幅になるものと考えられる。また、溝の深さは第4区SD-6の土層断面図から検出面より約0.7mとなる。第4区のSD-2の北肩部では溝に伴う杭跡と考えられるSP-11~13を検出した。

溝の埋土からは、弥生時代中期中葉から古墳時代初頭頃までの遺物が出土した。SD-8からは、弥生中期後半の直口壺の口縁部や高坏の垂下口縁部、台付鉢の脚部等が出土する。また、土



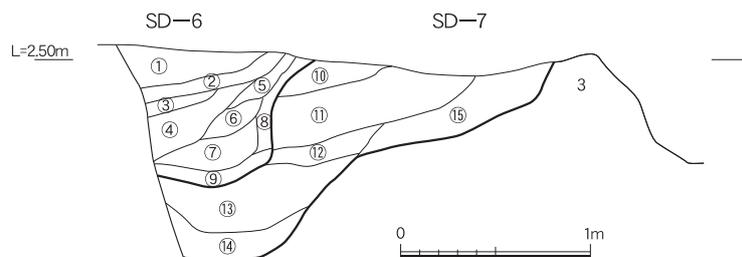
第4図 第2遺構面遺構平面図 (S-1/100)



3. 第2図の第3層を参照

SD-2

- ① 褐灰 (10YR5/1) 細砂混シルト
- ② 褐灰 (10YR4/1) 細砂混シルト
- ③ にぶい黄褐 (10YR5/3) シルト
- ④ 灰黄褐 (10YR4/2) 細砂混シルト
- ⑤ 灰黄褐 (10YR5/2) 細砂混シルト
- ⑥ 灰黄褐 (10YR6/2) シルト
- ⑦ にぶい黄褐 (10YR4/3) シルト
- ⑧ にぶい黄褐 (10YR5/4) シルト



3. 第2図の第3層を参照

SD-6

- ① 褐灰 (10YR5/1) 細砂混シルト
- ② 褐灰 (10YR4/1) 細砂混シルト
- ③ にぶい黄褐 (10YR5/3) シルト
- ④ 暗褐 (10YR3/3) シルト
- ⑤ 灰黄褐 (10YR5/2) 細砂混シルト
- ⑥ 灰黄褐 (10YR6/2) シルト
- ⑦ にぶい黄褐 (10YR4/3) シルト
- ⑧ にぶい黄褐 (10YR5/4) シルト
- ⑨ 黒褐 (2.5Y3/2) シルト

SD-7

- ⑩ 灰黄褐 (10YR4/2) 細砂混シルト
- ⑪ 暗褐 (10YR3/3) シルト
- ⑫ 暗灰黄 (2.5Y4/2) 細砂混シルト
- ⑬ 黄灰 (2.5Y4/1) 細砂混シルト
- ⑭ 暗黄灰 (2.5Y4/2) 細砂混シルト
- ⑮ にぶい黄褐 (10YR4/3) 細砂混シルト

第5図 遺構断面図 (S=1/40)

層からは古墳時代初頭頃の甕が出土していることから、この溝は弥生時代中期後半から利用されており、古墳時代初頭頃には埋没したものと考えられる。

〔第7区〕

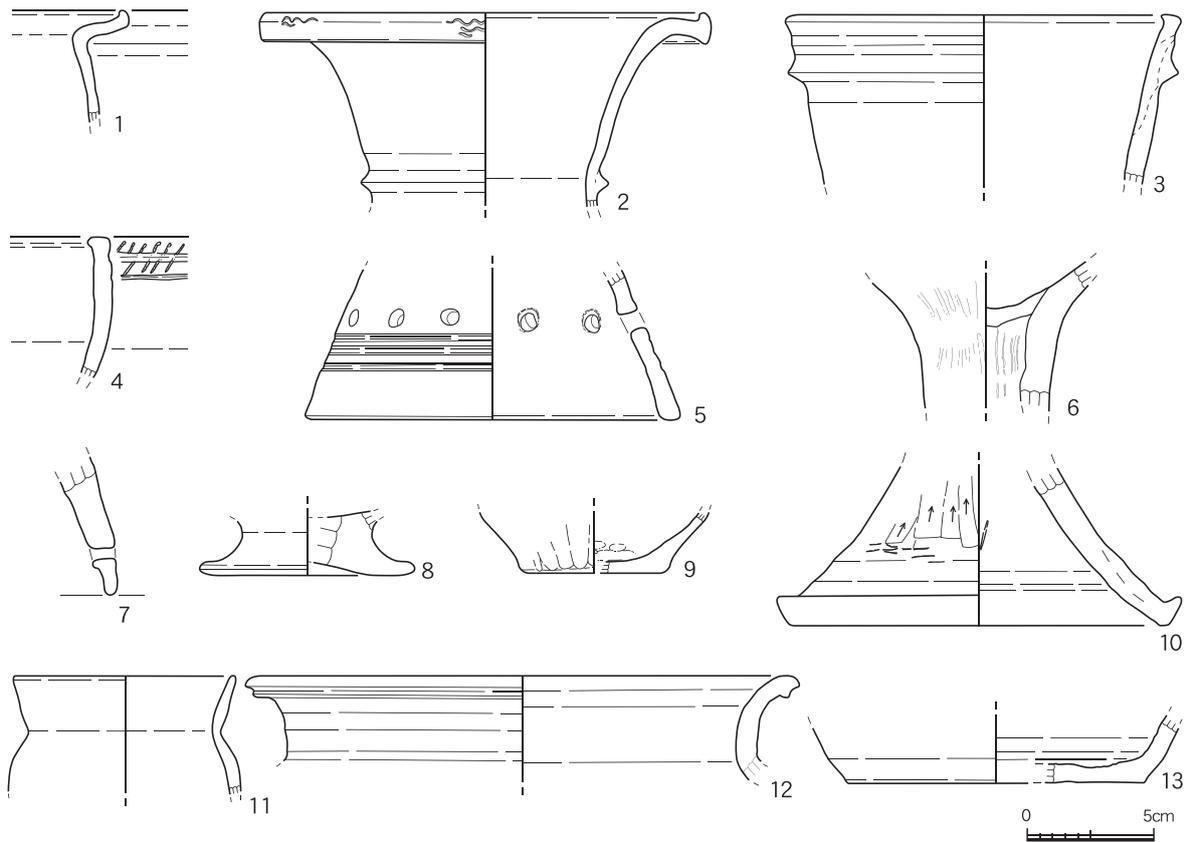
SD-17は、北東から南西方向に延びる古墳時代初頭頃に埋没した溝である。SD-17の最大残存幅は約1m、検出面より約0.4mの深さとなる。第4区においてSD-17に続く溝は検出されなかったため、市教委確認調査区の中央部をとおり、第1区と第4区の間をとおるものと想定される。SD-4は古墳時代初頭頃の遺物が出土している。

SD-22は、SD-17により大部分が破壊されているため、その一部のみを調査区北側において検出した。検出面の深さは0.1m未満である。埋土からは、弥生土器や土師器の破片等が少量出土している。

(4) 遺物

遺物は、遺構覆土や遺物包含層である第2・3層から、弥生土器、土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、中世土師器、近現代焼物、瓦、石器、自然遺物等が遺物収納コンテナ5箱分出土した。本報告では図化可能であった資料を中心に記述する。

第6図1～10は弥生時代中期中葉から後葉を中心とした弥生土器である。1は、紀伊第Ⅲ～Ⅳ様式(中期中葉～後葉)の甕であり、頸部で強く屈曲し、口縁端部が立ち上げられている。器面調整は、口縁部ではヨコナデ、胴部ではナデによって仕上げられている。頸部外面には整形時の口縁部屈曲に伴うと考えられる浅い凹みが残されている。2は、口縁端部がやや肥厚し、口縁部が屈曲して稜をもち、端部が立ち上がる広口壺である。口縁端面には2～3条の櫛描波状文を、頸部には貼付突帯を一条のみ確認することができる。紀伊第Ⅲ様式(中期中葉前半頃)に相当する。3～10は弥生時代中期後半のものである。3は、口縁部に一条の貼付突帯をもつ直口壺であり、貼付突帯より下部はナデ調整されている。4は、鉢形土器の口縁部であり、口縁端部が内側に軽くつまみだされている。外器面の一部は剥落しているが、口縁部外面には、櫛歯列点文が斜方向に施文された後



第6図 遺物実測図 (S=1/3)

に、3条の凹線文が平行に施文されている。5は台付鉢の脚部である。脚部には3条の凹線文が施文され、その上部には10カ所程に復元できる外面側からの穿孔がある。6は高杯の受部から脚部であり、受部は円盤状充填である。脚部外面にはミガキをもち、内面には絞り目がある。7は台付の弥生土器の脚部と考えられる。脚部付近には外面側からの粗雑な穿孔をもち、脚部端部には浅いユビオサエがある。8は台付壺の脚部である。底部はやや上げ底気味となり、一部に黒斑を確認することができる。9は壺の底部である。外面には縦方向のナデをもち、内面には底部立ち上がりにおける接合痕跡と考えられるユビオサエがある。また、底面外縁部には一定方向のナデをもつ。10は高杯の脚部である。下方から上方へとヘラケズリによって調整されている。11は古墳時代前期の小型丸底壺である。胴部には一部黒斑を確認することができる。12は須恵器の甕の口縁部で、口径21.8cmとなりヨコナデによって調整されている。13は須恵器の壺の底部で、底面は平坦となるが、外底面は未調整である。12は6世紀以降で、13は古代頃のものと考えられる。

これらの遺物の出土位置は、12がSD-2の①層、7・10・11がSD-2の②層、8がSD-7の⑩層、5・9がSD-7の⑬層、3がSD-7の⑭層、13はSD-9、6がSD-21の②層、1・2・4がSX-2の②層である。

3. まとめ

今回の調査では、第3層上面において古墳時代中期以降、第4層上面において弥生時代中期後半から古墳時代初頭頃に形成された遺構群を検出することができた。特に、北東方向から南西方向に延びる溝を複数条検出した。近隣の第30次調査や第72次調査においても弥生時代中期後半頃の溝等

が確認されており、さらに本調査地の北東約100mにある第26次調査では、弥生時代中期頃の水田跡が検出されている。こうした既往調査との関係からは、今回の調査で得られた溝等が本調査地周辺域における水田開発に関わる可能性を示唆する。

各時期の溝の方向は、弥生時代～古墳時代で北東から南西方向に、古代以降で南北方向に延びていることから、溝管理・利用に伴う周辺地域の開発の違いが反映しているものと考えられる。

また、調査地西側の第6・8区においては、古墳時代の土坑やピット群を検出した。土坑はすべて調査区外に延びるため、全体プランを把握することはできなかったが、今回の調査地の北西側には遺構群が展開する可能性があり、前述した太田・黒田遺跡の範囲周縁部における古墳時代初頭頃の土地利用の一端についても情報を与えるものと考えられる。

【参考文献】

- 『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報－平成7（1995）年度－』 財団法人和歌山市文化体育振興事業団 1998年
『太田・黒田遺跡第26次発掘調査概報』 財団法人和歌山市文化体育振興事業団 1995年

③太田・黒田遺跡第72次発掘調査

1. 調査の経緯と経過

太田・黒田遺跡（遺跡番号327）は、紀ノ川下流域南岸の和歌山平野ほぼ中央部に位置するJR和歌山駅東側の和歌山市太田から黒田にかけて広がる遺跡で、平野部でも微高地にあたる地点に位置し、数多くの遺跡が分布する地域に所在する。この遺跡は、東西500m、南北850mの範囲であり、これまでに71次にわたる発掘調査及び確認調査が行われ、弥生時代から江戸時代にかけての複合遺跡として周知されている。これらの調査では、竪穴建物や井戸、溝、土坑墓、土器棺墓などの遺構、銅鐸や多量の壺、甕などの弥生土器が発見され、弥生時代前期から中期にかけての県内最大規模の集落跡であることが確認されている。また古墳時代から江戸時代にかけての遺構、遺物を多数検出している。特に、室町時代には羽柴秀吉による水攻めによって滅ぼされたとされる太田城跡の推定地が重複する。今回の調査地は、太田・黒田遺跡の中央西端部に位置し、和歌山市教育委員会が調査を行い弥生時代中期の溝を確認した第30次調査地の近接地にあたる。また、ほぼ同時期に調査を行った第71次調査地の近接地でもある（本第72調査位置は第71次調査位置図を参照）。

今回の調査は、和歌山市黒田一丁目10番15において計画された兼用住宅建築に伴う事前の発掘調査として実施することになったものであり、居住域部分である21.4%は国庫補助金、残りの78.6%は事業者の負担で行った。調査は、和歌山市教育委員会の指導のもと公益財団法人和歌山市文化スポーツ振興財団が和歌山市並びに有限会社ユニバーサルエステートから委託を受けて実施した。また現地における調査は、平成24年7月18日から同年8月7日までの3週間の期間で行った。

2. 調査の方法と概要

(1) 調査の方法

調査区は、建物基礎で破壊される部分を対象としたため、東西約19m、南北約7mの範囲の内部に不定形の調査区を設定した。

調査の方法は、当地がアスファルト敷きの駐車場（図版9上）であったことから、対象範囲のアスファルトの切断及びその除去を行った後、上位層の造成土及び第2層までの堆積層について、重機による掘削を慎重に行い、第3層上面の遺構調査及び第3層以下の遺物包含層と遺構の調査を人力掘削によって行った後、サブトレンチによる下層調査を行った。溝などの遺構掘削については、土層堆積観察用のベルトを直交するライン上に設け、写真撮影を行い、2単位以上の堆積が確認できたものについては実測図等の記録保存を行った。

土層の色調及び土質の観察については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』を用いた。図面による記録は、平面図に関しては国土座標軸（世界測地系）を基準とした値を使用し、このラインを基準に1/20の縮尺を用いた手実測を行った。また遺跡の水準は、国家水準点（T.P.値）を基準とした。

(2) 基本層序

調査地の基本層序は第1図に示した通りである（図版12）。

調査地は今回の調査に至る直前までアスファルト敷きの駐車場であったことから、駐車場にした段階で40～90cmの造成が行われ、下位層の堆積や遺構面の大半が保護された状態であった。造成土下の第1層は灰色系のシルト混粗砂で旧耕作土である。この第1層の上面は、全体的にやや削り取

られ最も遺存状態の良い東端部で標高3.60m程度である。第2層は比較的薄いにぶい黄褐色系の堆積土で上下2単位に細分できる。また第3層は対象地中央部から東側にのみ堆積する土層で、東に向かって緩やかに厚くなり、東端部での厚さが30cm程度となり、堆積も2単位となる。堆積時期については、包含される遺物から古墳時代中期以降とみられる。この第3層の上面が第1遺構面であり、東端部で溝2条を検出した。第4a層はにぶい黄色の細砂混シルト質土層で第2遺構面を形成するベース層である。第4a層の上面は調査区中央部以西では標高3.30mでほぼ水平であり、中央部以东では第3層の堆積とともに下降していく状況である。この第4a層上面の第2遺構面では弥生時代中期から古墳時代前期の遺構を検出した。

第4a層以下の状況は、サブトレンチによって確認したもので、第4a層に類似する明黄褐色のシルト混細砂（第4b層）及び黄褐色のシルト混細砂（第5層）を確認した。なお、今回の調査ではこの第4a層内から一定量の弥生時代中期の土器が出土し、第4b層及び第5層からは出土していない。

(3) 遺構（第2～4図、図版9下～11）

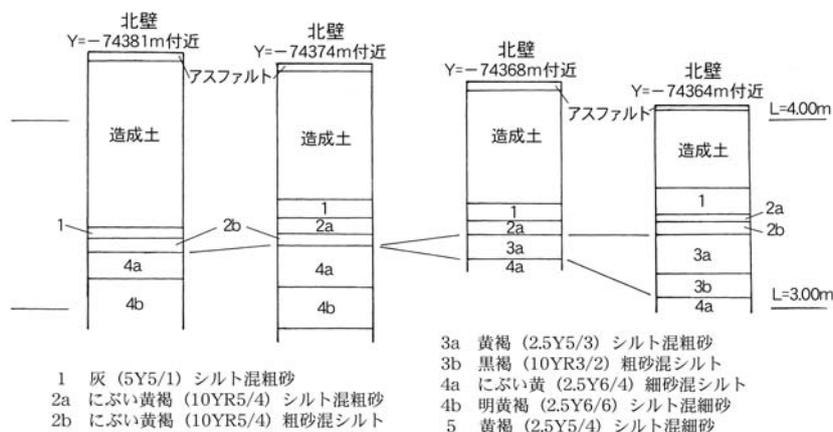
今回の調査では、第1遺構面である第3層上面（標高3.40m）において中世と考えられる溝2条（SD-1・2）を第2遺構面である第4a層上面（標高3.05～3.30m）において弥生時代から古墳時代前期にかけての土器棺墓1基（SX-1）、溝7条（SD-1～7）、土坑1基（SK-1）、ピット2基（SP-1・2）を検出した。

以下、時期の限定できる重要遺構について各遺構面ごとに説明を行う。

【第1遺構面検出の遺構】

[SD-1・2]（第2図、図版9下）

SD-1・2は調査区の東端部で検出した平行にのびる南北方向の溝であり、その方向性は、ともにN-6°-Wである。SD-1は幅60～80cm、深さ10cm程度の溝であり、またSD-2は幅30～50cm、深さ10cm程度の溝である。覆土はともに黄褐色粗砂混シルトの単一土層である。遺物は、SD-2から中世の土師器片が出土していることから、ともに中世の遺構と考えられる。



第1図 調査地土層柱状模式図 (S=1/40)

【第2 遺構面検出の遺構】（第6 図、図版10）

[SX-1]（第5 図、図版11上）

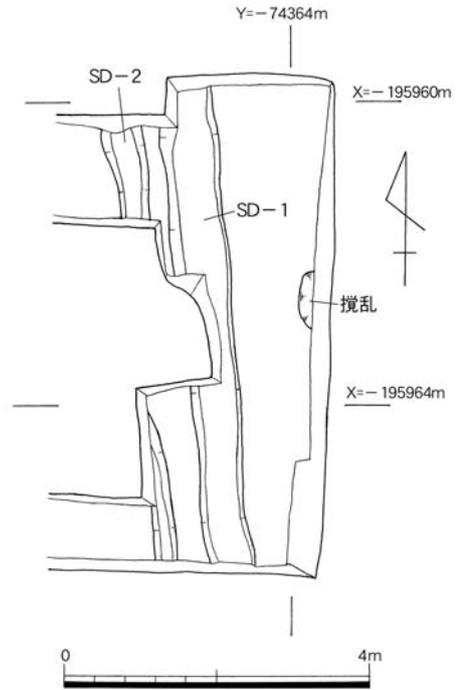
SX-1 は調査区中央部北壁面下において検出した土器棺墓である。遺構掘方は不明瞭で平面精査では確認できず、北壁下に掘削したサブトレンチによって検出したもので、壁面観察などの状況から直径80cm、深さ40cmの掘方内部に弥生土器を棺として埋葬したものである。土器棺として使用された弥生土器は大型の壺であり、肩部上位をほぼ水平に打ち欠き、底部周辺に穿孔を行っている（第5 図1、図版13上）。またこの壺の上部には別個体の広口壺が破碎した状態で出土し、土器棺上部の蓋的な役割で用いられたものと考えられた（第6 図2、図版12下）。

[SD-6・7]（図版11下）

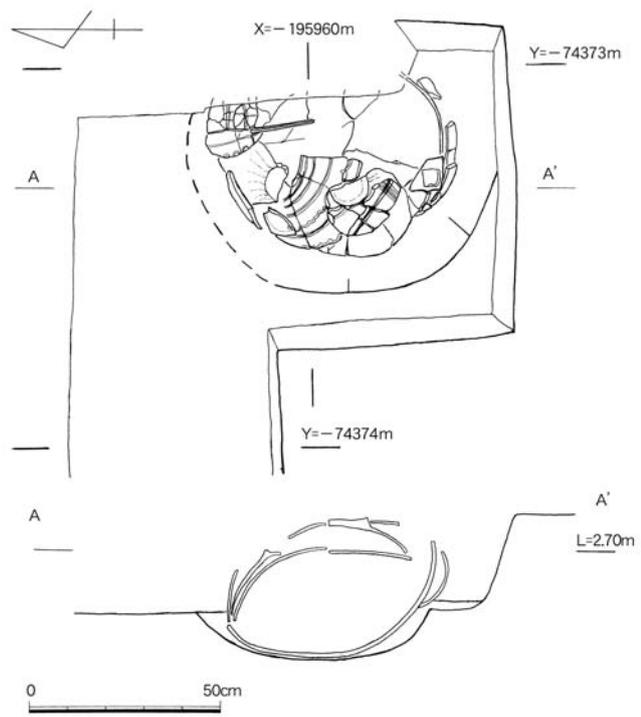
SD-6 は調査区の東半部で検出した幅2.0~3.2m、深さ60cmの溝で、N-41°-Eの方向性で調査区を貫く。溝の横断面形は「V」字形で段を有し、溝底面が細い溝状に落ち込む特徴をもち、覆土は3単位に分けられる。その最上位にあたる第1層にのみ土師器片が含まれ、下位層には弥生土器のみが含まれている状況であり、また底面周辺から完形の弥生土器の広口壺（第6 図3、図版13下）が出土した。この状況から、溝が機能していた時期が弥生時代中期で、最終の埋没時期が古墳時代前期頃と考えられる。またSD-7 は調査区の東端部で検出した幅1.0~1.9m、深さ20cm程度の溝で、N-35°-Eの方向性でやや屈曲しながら調査区外にのびる。覆土はにぶい黄褐色系の粗砂混シルトの単一土層である。この溝も弥生時代中期の遺構である。

[SD-3・4]

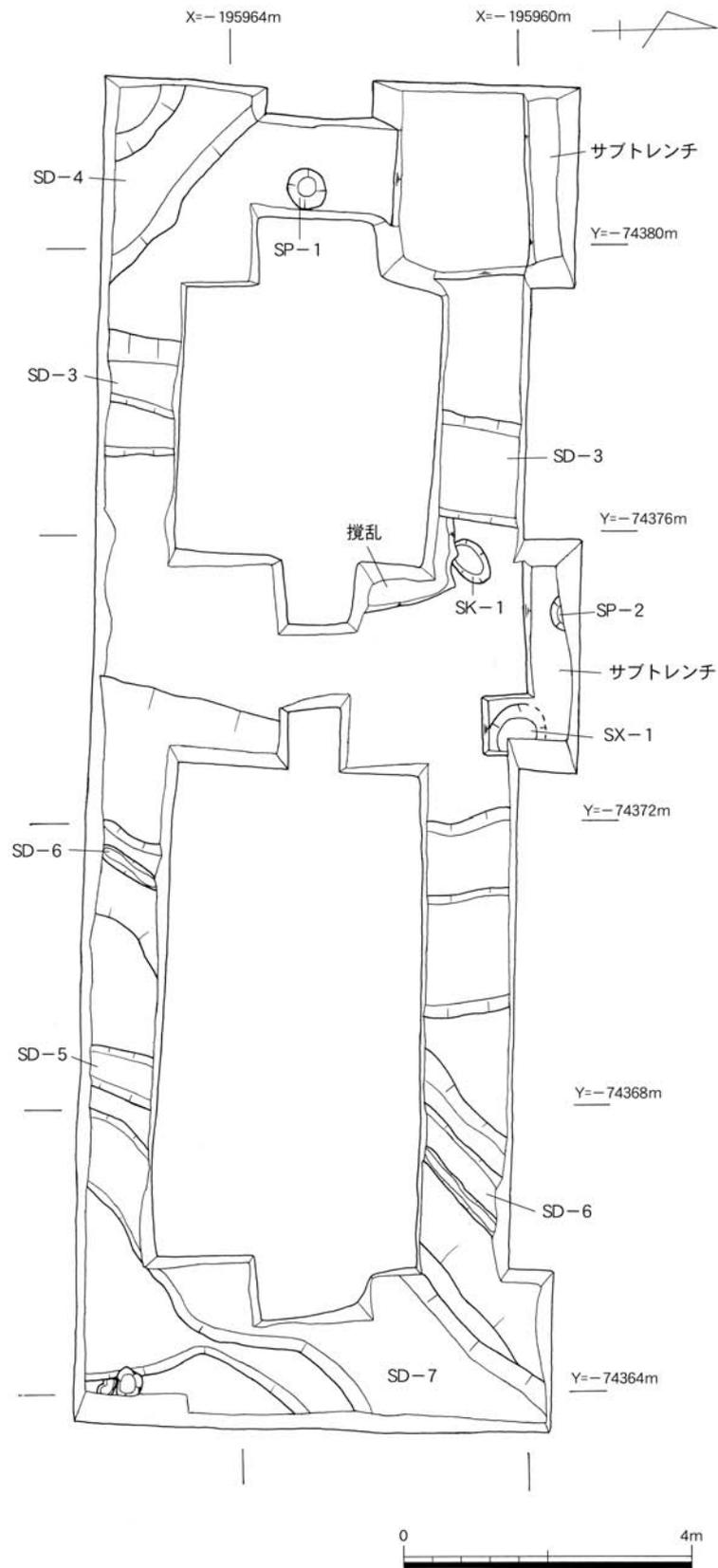
SD-3 は調査区の西半部で検出した幅1.5m前後、深さ10~30cmの溝で、N-13°-Eの方向性で調査区を貫く。覆土は4単位に分けられ、上位は灰黄褐色系の粗砂混シルト、下位層は黄褐色系のシルト混粗砂である。SD-4 は調査区の南西隅部で検出した幅1.6m以上、深さ35cm程度の溝で、N-47°-Wの方向性で調査区外にのびる。覆土は上下2単位に分けられ、上位は黄褐色系の細砂混シルト、下位は灰黄褐色系の粗砂混シルトであ



第2 図 第1 遺構面遺構平面図（東端部分）(S=1/100)



第3 図 SX-1 遺構平面図及び土層断面図 (S=1/20)



第4図 第2遺構面遺構全体平面図 (S=1/100)

る。これらの溝は出土遺物から古墳時代前期頃の時期が考えられる。

(4) 遺物 (第5・6図、図版13)

遺物は、遺構の覆土や遺物包含層である第3層から遺物収納コンテナ4箱分が出土した。

これら遺物には、弥生土器をはじめ、土師器、須恵器、黒色土器、中世須恵器、中世土師器、国産陶磁器、瓦、土製品、石器などがある。

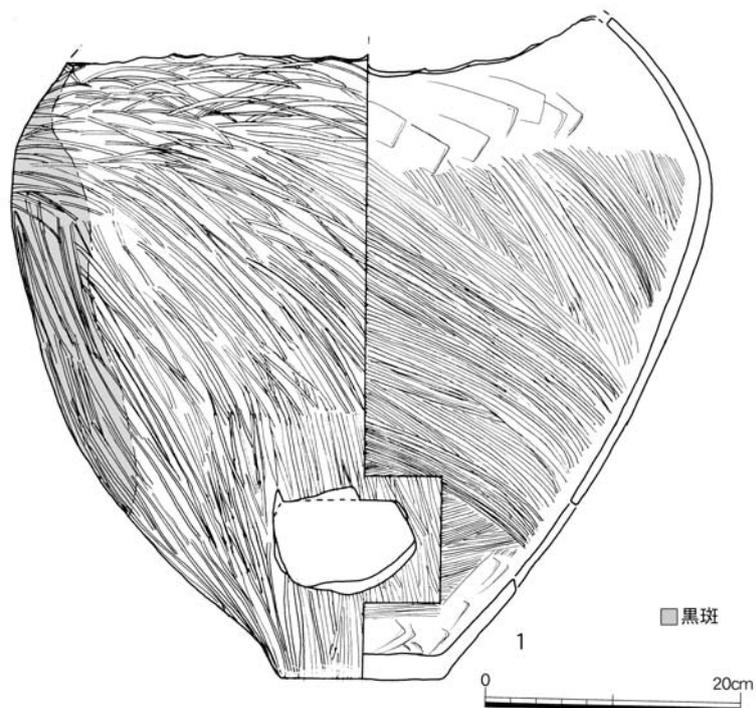
以下、今回の調査において出土した主要な遺物について説明する。

1は土器棺墓(SX-1)から出土した2個体の壺のひとつで体部最大径55.0cm、底径12.6cmの大きさをもつ極めて大きい弥生土器の壺である。この壺は棺として使用するため肩部上位を丁寧に打ち欠きほぼ水平に作り上げ、体部下方には直径10cm程度の穿孔が行われている。この壺の外表面は、丁寧なヘラミガキが施されている。また内表面は底面と肩部付近には板状の工具を使用したナデ調整が、その間には丁寧なハケ調整が行われている。2は1の上部に破砕した状態で出土した弥生土器の広口壺である。口縁部は大きく垂下させて外端面を作り上げ、3条の細い凹線文を廻らしている。上端面には波状文と扇状文を施した後、2個を一对とした円孔が6ヶ所穿たれている。また頸部には3条の貼付突帯を廻らし、肩部から体部中位にかけてクシ描直線文と波状文によって加飾している。調整が明瞭であるのは外面の体部下半のヘラミガキと体部内面のハケ調整である。またこの土器にも体部下方に穿孔が行われている。この土器は弥生時代中期中葉の紀伊第Ⅲ様式に位置づけられる。

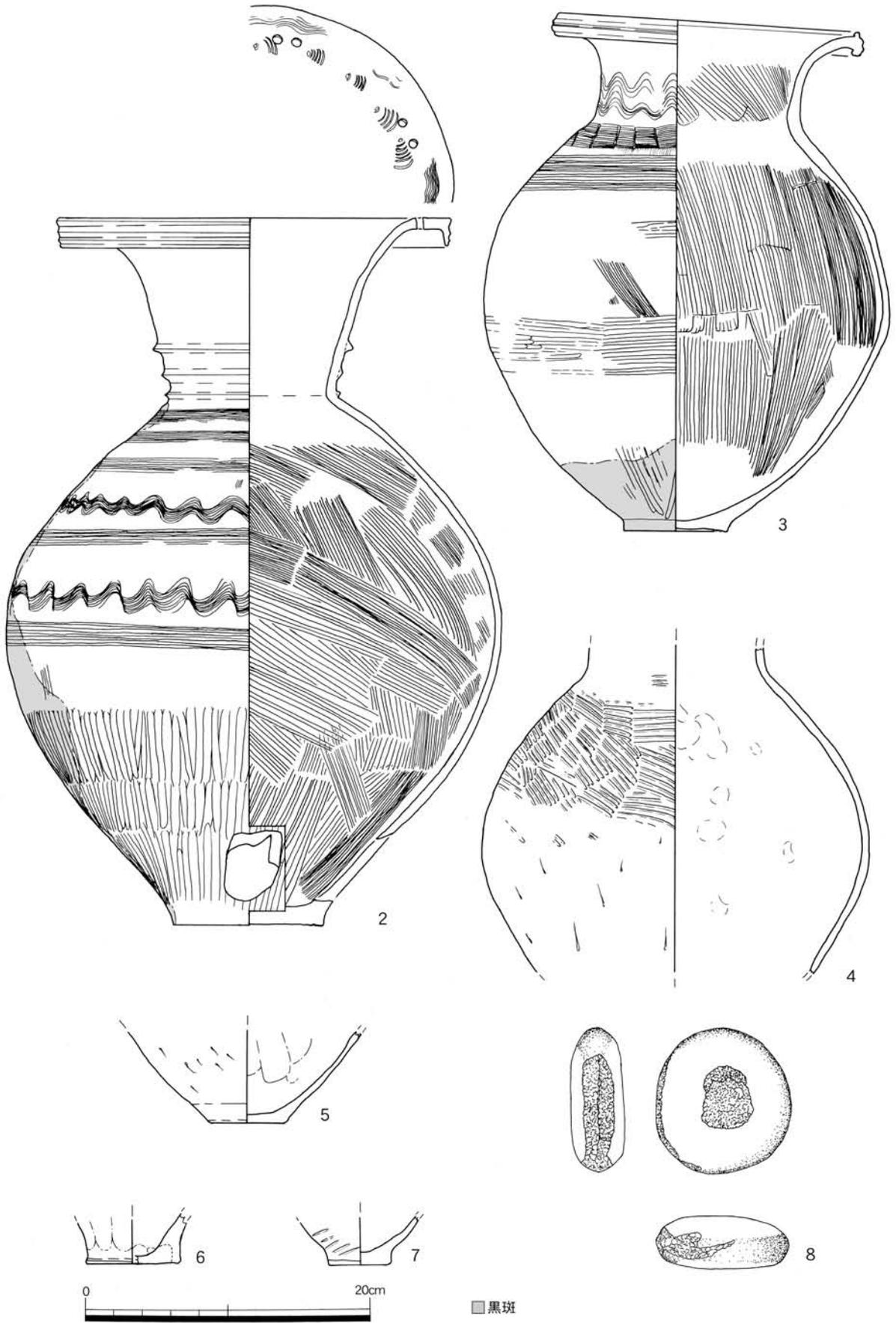
3～5は、SD-6から出土した弥生土器壺である。3は口縁部が大きく開く広口壺で端部を上下に肥厚させて外端面を作り出し、細線の凹線文を廻らしているもので、頸部から体部上位にかけてはクシ描による波状文、簾状文、直線文を施している。この土器の調整は、外面にはハケ調整の後、ヘラミガキが行われている他、内面にはタテ方向のハケ調整が明瞭に観察できる。4は体部の破片で外面の上位にはタタキ調整が、下方にはヘラケズリ調整が観察できる。5は底部で、この土器の外面にもヘラケズリ調整が観察できる。これらの弥生土器は弥生時代中期後葉に位置づけられる。

6は第4層から出土した弥生土器壺の底部と考えられるもので、中期頃の時期が考えられる。また7はSD-4～出土した土師器甕の底部とみられるもので、外面にはタタキ調整が観察できる。時期的には古墳時代初頭頃と考えられる。

土器以外では、SD-6の第2層から出土した砂岩の円礫を



第5図 遺物実測図1 (S=1/6)



第6図 遺物実測図2 (S=1/4)

使用した叩石（8）がある。この叩石は表面及び裏面と周囲の側縁部の一部に明瞭な敲打痕を残すもので、重量は544gである。

3. まとめ

今回の調査成果は、比較的調査例の少なかった遺跡南西部においてその様相の一端を明らかにしたことである。当調査地周辺では、和歌山市教育委員会が行った第30次調査や今回の第72次調査とほぼ同時期に当財団が行った第71次調査がある。第30次調査では弥生時代中期の溝が検出され、また第71次調査では弥生時代中期後半の溝2条などが検出されている。今回の第72次調査においてもその主要時期は弥生時代中期中葉の土器棺墓や溝であり、先述の2例の調査成果と類似する様相である。検出した弥生時代中期の溝は、北東約100mの地点で行った第26次調査において弥生時代中期の水田が確認されていることから、それに対応する用水路と考えられ、調査地周辺にも弥生時代の水田が展開している可能性が考えられる。

次に、1基のみの検出であった土器棺墓については、太田・黒田遺跡範囲のこれまでの調査において多数確認されているものである。その分布傾向は遺跡中心部や縁辺部を通して検出されており、これまでのところ特に集中して分布する傾向は認められない。また棺として使用される弥生土器は壺・甕が主体で、壺を使用する場合はそれほど大きな土器を使用する例は比較的少ない。今回検出した土器棺に使用された壺は極めて大きく最大規模のものとして注目できる。

【参考文献】

『太田・黒田遺跡第26次発掘調査概報』（財）和歌山市文化体育振興事業団 1996年

④和歌山城跡第16次発掘調査

1. 調査に至る契機と経過

調査地は、周知の埋蔵文化財包蔵地「史跡和歌山城跡」の南東端に位置する（第1図）。和歌山城跡の範囲内とされているが、安政2年の和歌山城下町絵図では、外堀の外側に位置する戸田金左衛門邸にあたる。

和歌山城は、三波川変成帯の岩盤が露出した岩山である岡山を中心に築かれ、城域は丘陵から平野部に至る砂丘上にまで広がる。調査地は岡山東裾の砂州上に立地する。

周辺での既往の調査は、平成18年9月から平成19年1月まで財団法人和歌山県文化財センターによって実施された和歌山地方・家庭裁判所増築に伴う調査がある（県文セ2008）。この調査では、中世の遺構面1面と近世の遺構面4面が検出され、三の丸における家臣屋敷地の変遷の一端が明らかにされている。

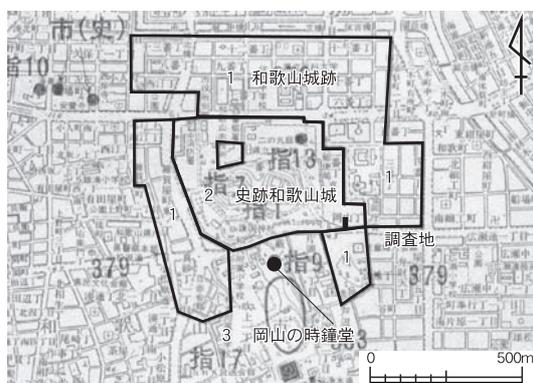
今回の調査は、既存建物の基礎解体に伴い実施された事前確認調査（第15次調査）の成果を受け、和歌山市から委託された事業であり、和歌山市教育委員会（以下、市教委）の指導のもと、公益財団法人和歌山市文化スポーツ振興財団が委託を受け実施した。調査期間は、平成24年11月15日から12月14日までの休日や雨天による作業中止日を除く実働19日間である。

2. 調査の概要

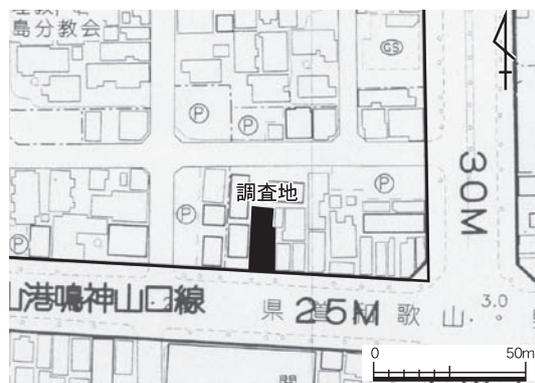
(1) 調査の方法

調査区は、既存建物の基礎により3分割されていた区画（南北5m×東西3.5m）を土砂仮置き場確保のため、1区画ごとに調査・埋戻しをおこなった。調査区は、北から第1区、第2区、第3区とし、まず1区から着手し、続いて第2区、第3区を調査した。第1区は、平成24年11月19日に機械掘削、同日～12月4日まで人力掘削をおこない、5日に埋戻しをおこなった。第2区は5日に機械掘削し、5～12日まで人力掘削し、12日に埋戻しをおこなった。第3区は12～13日に機械掘削をおこなった。第3区ではコンクリート製井戸や地下構造物が検出され、それらにより遺構が攪乱されていたため、市教委と協議し、調査を終了した。翌14日に撤収作業をおこなった。機械掘削と埋戻しを市教委が、人力掘削作業を当財団が担当した。

調査は、地表下0.4～0.9mまでの現代造成土を機械で掘削した。地表下0.9～4.0mまでの第1～8層までを人力で掘削した。調査で作成した図面には、調査区平面図及び土層断面図（いずれも縮尺1/20）がある。調査区平面図の作成では、調査地周辺の3級基準点から基準点測量を行い、国土



第1図 和歌山城周辺の遺跡分布図



第2図 調査地位置図

座標（世界測地系）の数値を付した基準点を用いた。調査区土層断面図は、北壁、東壁、西壁について作成した。遺構断面図（縮尺1/20）は、各遺構に直交する位置に土層堆積状況を観察するためのセクションベルトを設定し、作成した。その他、堆積土の色調及び土質の観察には、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』を用いた。

（2）基本層序

本調査での層序は、大別して8層を確認した(第3図)。近世の整地層をまとめて、第1層とした。第1層は、さらに4層に細分でき、最下層の第1～4層からは時期が判別できる資料としては、16世紀後半から17世紀初頭の丹波焼すり鉢（第9図-1）が出土している。第2層は、層上位から15世紀の土師器羽釜（第9図-2）や皿の細片、瀬戸焼灰釉水滴細片が出土していることから、この時期までに堆積した自然堆積層である。第3層は、極細砂混じりのシルトを基調とする層で、砂粒の割合や粘性の違いにより、さらに6層に細分できる。堆積がブロック状となる部分があり、調査区が狭小のため、輪郭が確認できなかった遺構の埋土にあたる可能性がある。第4層は、灰色(2.5Y 6/1)粘土質シルト層で、第1区南東隅の壁面、標高1.3～1.5m付近でのみ確認でき、他では削平されたため遺存しない。第4～8層は遺物が出土していないため、年代が不明である。第4～7層は自然堆積層と考える。第8層は土壌層で、一部畦畔状の隆起を検出したが、水田土壌かは不明である。井戸(SE-1)掘削時に掘方壁面で確認したところでは、第8層以下も灰色の粘土質シルトからシルトが堆積する。

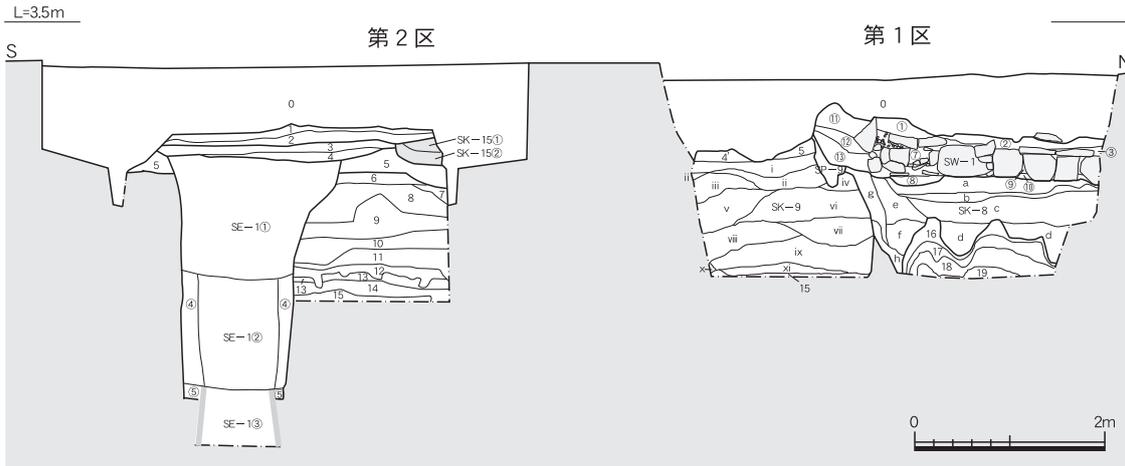
（3）遺構

第1層上面を第1遺構面、第2層を除去したところを第2遺構面とした。第1・2区西側1/4では、現代の攪乱が地表下0.4～0.6mまでであったため、第1層と第2層が部分的に遺存していたが、残りの東側3/4では、攪乱が地表下0.8～0.9mまで及んでいたため、第1層と第2層は遺存していなかった。そのため、調査区東側3/4では、第1遺構面と第2遺構面の遺構をほぼ同一面で検出し、どちらの遺構面に帰属するか不明な遺構も存在した。第2遺構面で検出した大型土坑(SK-4～6・8～9)上で検出した遺構は便宜的にすべて第1遺構面の遺構として扱った。

第1遺構面

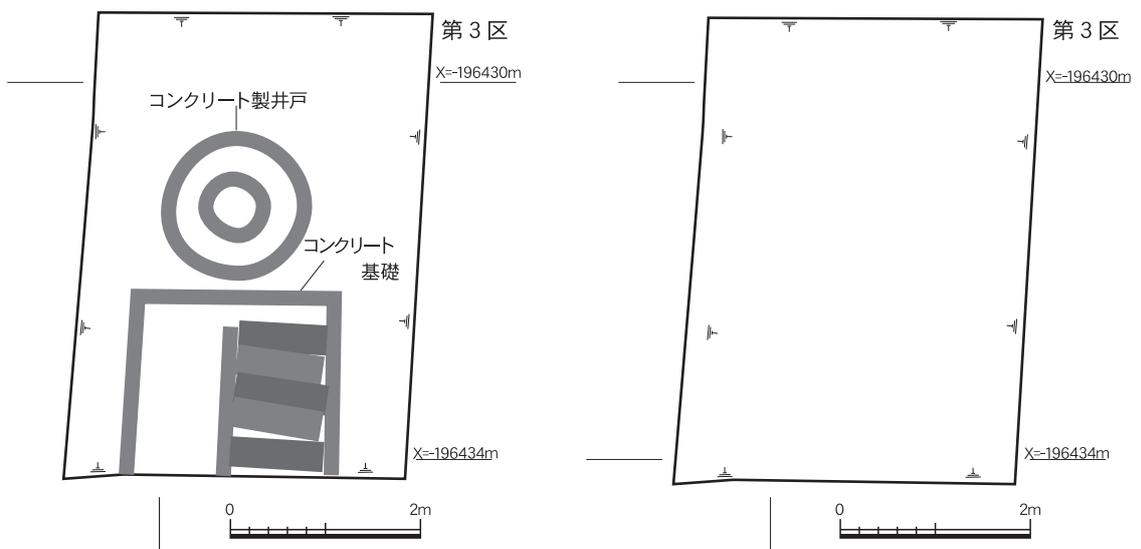
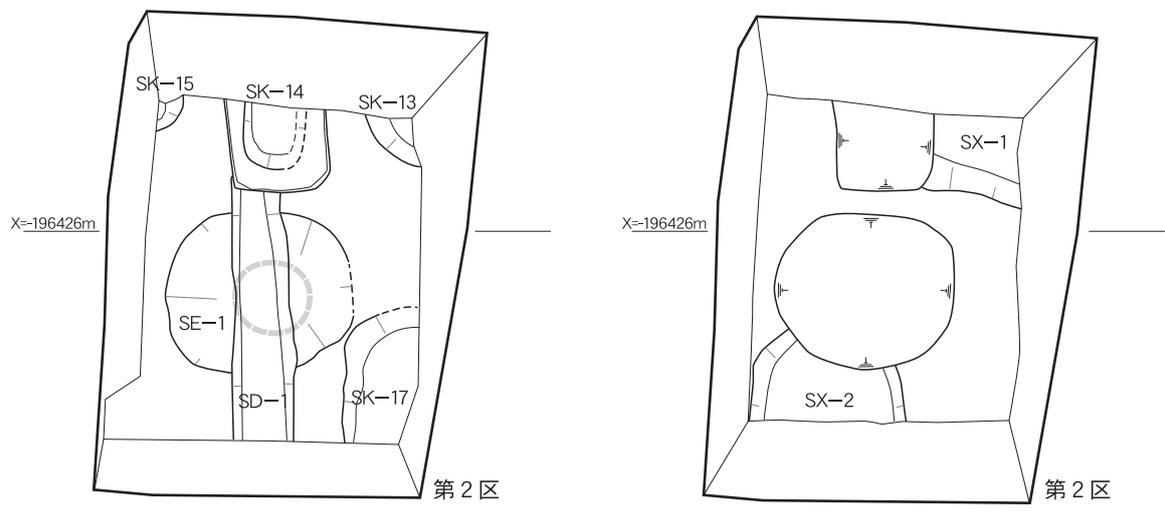
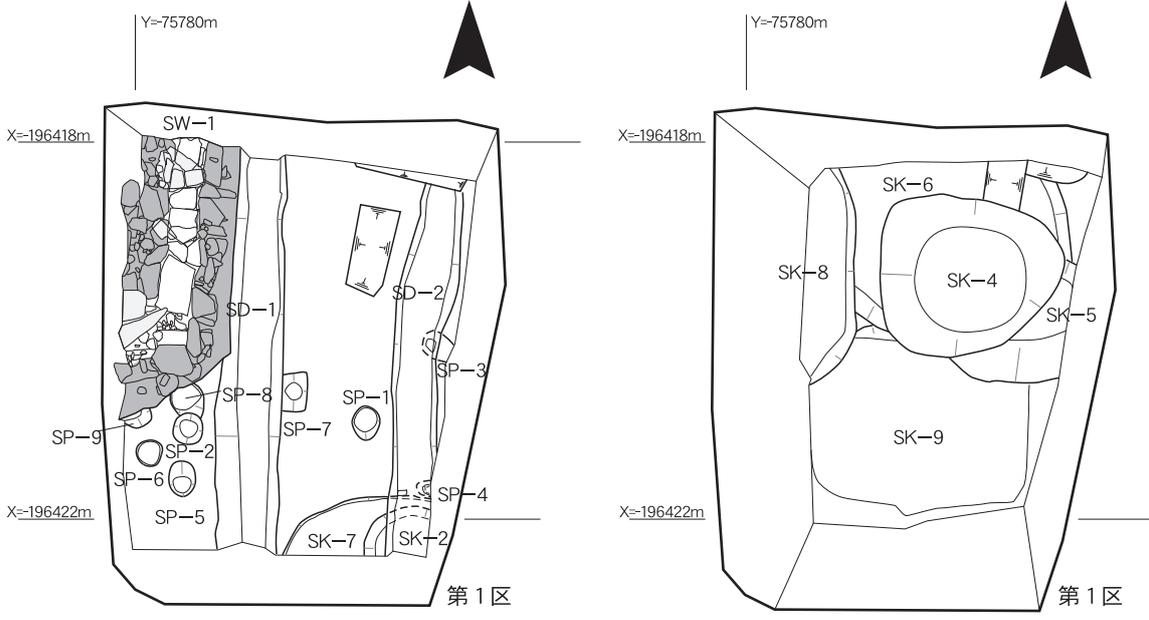
第1遺構面では、石組み暗渠1基、溝2条、井戸1基、土坑6基、ピット8基を検出した(第4図)。

石組み暗渠(SW-1)は、第1区の北西で検出した幅0.35m、深さ0.25～0.3mの南北方向に延びる底石、側石、蓋石を持つ石組み暗渠である(第5図)。暗渠の埋土は、細～中砂が堆積していた。暗渠としたが、蓋石直上まで攪乱されており、蓋石を持つ溝である可能性がある。溝底は、1mにつき3～4cmほど北へ低くなるよう勾配をつけ、厚さ5cm前後の板石を敷く。板石の下には石の据わりとよくするため、細～中砂が薄く敷かれていた。溝の一番南側は、深さ約5cmの枡状を呈し、板石ではなく、玉石が疎らに敷かれていた。溝側面は、高さ0.25～0.3mの石材を一石積み、荒割で成形された平坦面を揃えるように据える。それらの石の欠けや高さの不足を補い、高さが一定となるよう、小振りの石材を積む。南側面だけは、高さ0.15mの石を前後据え、高さを変えて階段状に設置していた。高さが揃えられた側石上を厚さ5～10cmの板石で覆い、蓋をする。暗渠に用いられた石



- 0 : 現代造成土
- 1 : 黒褐色 (2.5Y3/2) シルト混細砂に
浅黄色 (2.5Y7/3) 粘土質シルトのブロック土が
少量混じる。(第1-1層・整地層)
- 2 : オリーブ褐色 (2.5Y4/3) シルト混細砂に
灰白色 (10Y7/1) シルトのブロック土が
・炭少量混じる。(第1-2層・整地層)
- 3 : オリーブ褐色 (2.5Y4/3) シルト混細～中砂に
灰白色 (10Y7/1) 粘土質シルト・シルト
・極細砂のブロック土が多く混じる。
(第1-3層・整地層)
- 4 : 暗灰黄色 (2.5Y4/2) シルト混細砂に
浅黄色 (2.5Y7/4) 粘土質シルト非常に
多く混じる。
灰白色 (10Y7/1) シルト・極細砂のブロック土
微量に混じる。(第1-4層・整地層)
- 4' : 黄灰色 (2.5Y5/1) 細砂混粘土質シルトと
暗灰黄色 (2.5Y5/2) 細砂が層状に堆積
(第1-4層・整地層)
- 5 : オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 細～中砂 (第2層)
- 6 : にぶい黄色 (2.5Y6/3) シルト混細砂 (第3層)
- 7 : オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 極細砂に
暗灰黄色 (2.5Y5/2) シルトのブロック土が
混じる。(第3層)
- 8 : オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 極細砂混シルト
のブロック土 (第3層)
- 9 : 黄褐色 (2.5Y5/4) 極細砂混粘土質シルト
のブロック土 (第3層)
- 10 : 黄褐色 (2.5Y5/3) 極細砂混シルトのブロック土
(第3層)
- 11 : 黄褐色 (2.5Y5/3) シルトのブロック土に
極細砂に少量混じる。(第3層)
- 12 : 灰色 (5Y6/1) シルト (第5層)
- 13 : 灰色 (5Y4/1) シルト (第6層)
- 14 : 灰色 (5Y5/1) シルト (第7層)
- 15 : 灰色 (5Y6/1) 粘土質シルト (第8層)
- 16 : 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 極細砂混シルト (第5層)
- 17 : 暗灰黄色 (2.5Y5/2) シルト (第6層)
- 18 : 青灰色 (10BG6/1) 粘土質シルト (第7層)
- 19 : 暗青灰色 (10BG4/1)
・黄灰色 (2.5Y4/1) 粘土質シルト (第8層)
- SP-9
①: 暗緑灰色 (10GY4/1) 中砂と
暗緑灰色 (10G4/1) 細砂混シルトのブロック土
に炭・1～3cm大の礫少量含む。
- SW-1
①: 暗灰黄色 (2.5Y5/2) シルト混中砂
と淡黄色 (2.5Y8/4) シルト混細砂
のブロック土 2～8cm大の円礫含む。
②: 暗灰黄色 (2.5Y5/2) シルト混中砂に
淡黄色 (2.5Y8/4) 粘土質シルトブロック
・炭・玉石・瓦片混じる。
③: 黄褐色 (2.5Y5/3) 中砂に
暗灰黄色 (2.5Y5/2) シルト混中砂と
灰黄色 (2.5Y6/2) 粘土質シルトのブロック土
が混じる。1～2cm大の礫含む。
④: 暗灰黄色 (2.5Y4/2) シルト混細砂
⑤: にぶい黄色 (2.5Y6/3) 細砂混粘土質シルト
⑥: 灰白色 (2.5Y7/1)～黄灰色 (2.5Y6/1) 細～中砂
⑦: 1～2cm大の円礫、15～20cm大の礫・瓦片
を詰めて暗渠としたところに
黄灰色 (2.5Y5/1) シルト混細砂が堆積
⑧: 黄灰色 (2.5Y6/1) 細砂混シルト
⑨: オリーブ褐色 (2.5Y4/3) シルト混細砂
⑩: 灰白色 (10Y7/1)～黄灰色 (10Y6/1) 細～中砂
⑪: 暗灰黄色 (2.5Y5/2) シルト混中砂に
淡黄色 (2.5Y8/4) 粘土質シルトのブロック土
・炭・3cm大の礫・瓦片が混じる。
⑫: 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 中砂混シルトと
淡黄色 (2.5Y8/4) 粘土質シルトのブロック土
・炭・1cm大の礫・瓦片が混じる。
⑬: 暗緑灰色 (10GY4/1) シルト混細～中砂に
淡黄色 (2.5Y8/4) 粘土質シルトのブロック土
・炭・3cm大の礫・瓦片が混じる。
- SE-1
①: オリーブ褐色 (2.5Y4/3) シルト混粗砂に
にぶい黄褐色 (10YR7/4) 粘土質シルトと
灰色 (N6/) 細砂混シルトのブロック土
が混じる。
②: 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 細～中砂に
灰色 (N6/) 細砂混シルトのブロック土
が混じる。瓦・土器片・木片含む。
③: 灰黄色 (2.5Y6/2) 細～中砂に
青灰色 (10BG6/1) 粘土質シルトのブロック土
が混じる。
④: にぶい黄色 (2.5Y6/3) 細～中砂と
極細砂のブロック土
⑤: にぶい黄色 (2.5Y6/3) 細～中砂と
粘土質シルトのブロック土
- SK-8
a : 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 細砂混シルト
b : 灰黄色 (2.5Y6/2) 極細砂混シルト
c : 黄褐色 (2.5Y5/3) 極細砂混シルトのブロック土
d : 暗灰黄色 (2.5Y5/2) シルト
e : 黄褐色 (2.5Y5/3) 極細砂混シルトのブロック土
f : 灰色 (10Y6/1) 粘土質シルトと
灰色 (10Y5/1) 極細砂のブロック土
g : にぶい黄色 (2.5Y6/3) 極細砂混粘土質シルトと
にぶい黄色 (2.5Y6/3) 粘土質シルト
のブロック土
h : 明青灰色 (10BG7/1) シルトと
極細砂のブロック土
- SK-9
i : オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 中砂と
シルト混細砂の互層
炭・土器片混じる。
ii : オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 細～中砂混シルト
のブロック土
iii : 灰オリーブ (10Y4/2) シルト混細砂に
灰色 (10Y4/1) 細砂混粘土質シルトのブロック
土が混じる。
iv : 褐灰色 (10YR4/1) 極細砂混シルトのブロック土
V : にぶい黄褐色 (10YR5/3) 極細砂混シルト
のブロック土
vi : 黄褐色 (2.5Y5/3) 極細砂混極細砂質シルトの
ブロック土
vii : 黄褐色 (2.5Y5/3) 極細砂混シルトのブロック土
viii : オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 極細砂混粘土質シルト
ix : 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 極細砂質シルト混粘土質
シルト
x : 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 極細砂混シルト
xi : 黄灰色 (2.5Y6/1) シルトのブロック土
- SK-15
①: 灰黄色 (2.5Y6/2) シルト混極細～細砂に
浅黄色 (2.5Y7/4) 粘土質シルトのブロック土、
土器片・瓦片・炭混じる。
②: オリーブ褐色 (2.5Y4/3) シルト混細砂に
浅黄色 (2.5Y7/3) シルトのブロック土と
炭多く混じる。1～2cm大の礫・土器片含む。

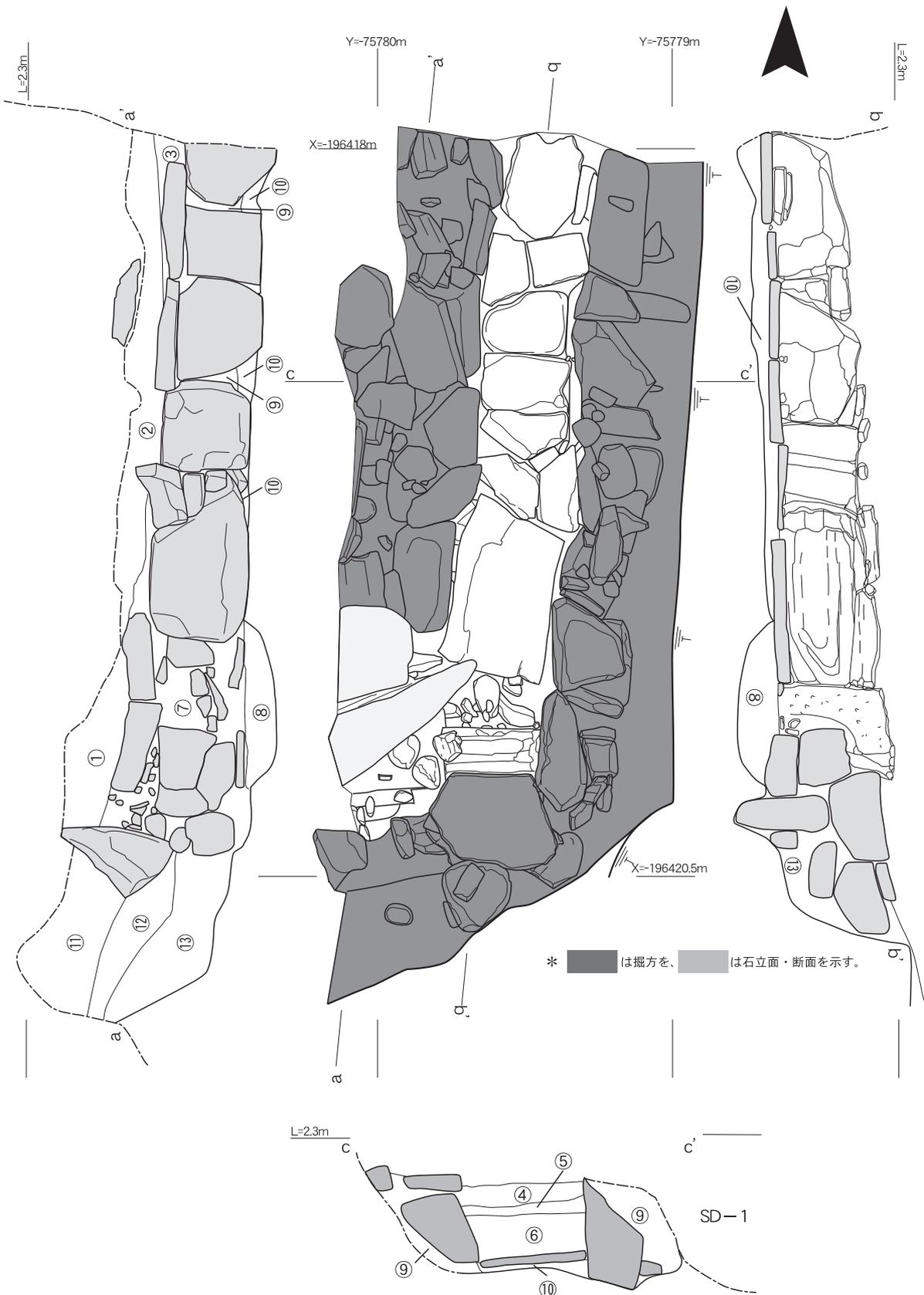
第3図 基本土層断面図 (S=1/80)



第1遺構面

第2遺構面

第4図 調査区平面図 (S=1/80)



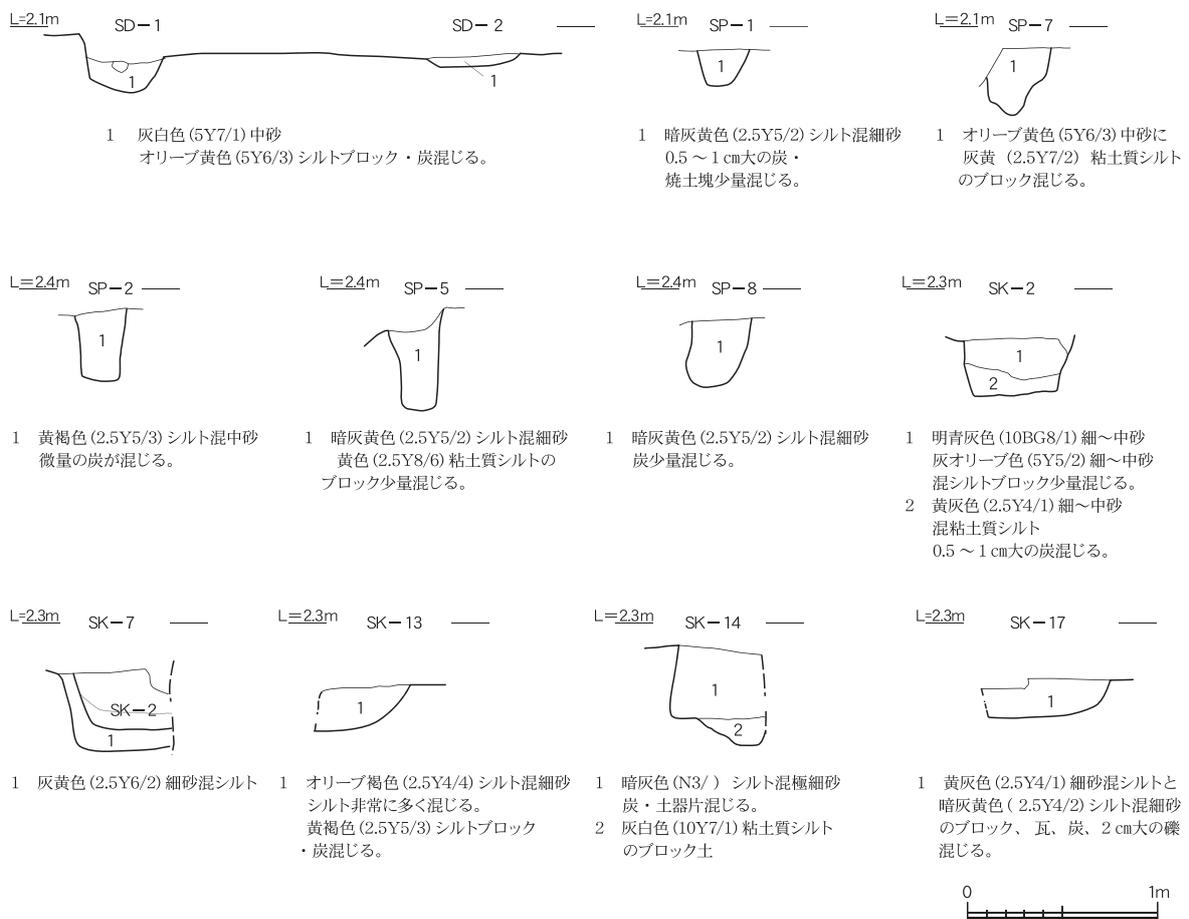
第5図 石組み暗渠 (SW-1) 平・断面図・側壁立面図 (S=1/20)

材は結晶片岩が多いが、荒割された少数の砂岩や花崗岩 1 点もある。石組み暗渠には、調査区西壁面で一部を確認しただけであるが、径 1～2 cm 大の小石及び 15～20 cm 大の石や瓦片を詰めた別の暗渠が南側の柵の南西に取り付くようである。石組み暗渠の掘方からは 17 世紀初頭の唐津焼灰釉皿（第 9 図-3）が出土し、暗渠内の堆積から 17 世紀前半の陶磁器細片、備前焼褐釉德利壺細片が出土していることから、浅野期の遺構と考える。この他、掘方からは、「徳太郎」の刻印を小口面に持つ平瓦片（第 9 図-4）や瀬戸焼褐釉天目茶碗、唐津焼灰釉碗、備前焼大盤、瓦質香炉、土師器皿が出土している。

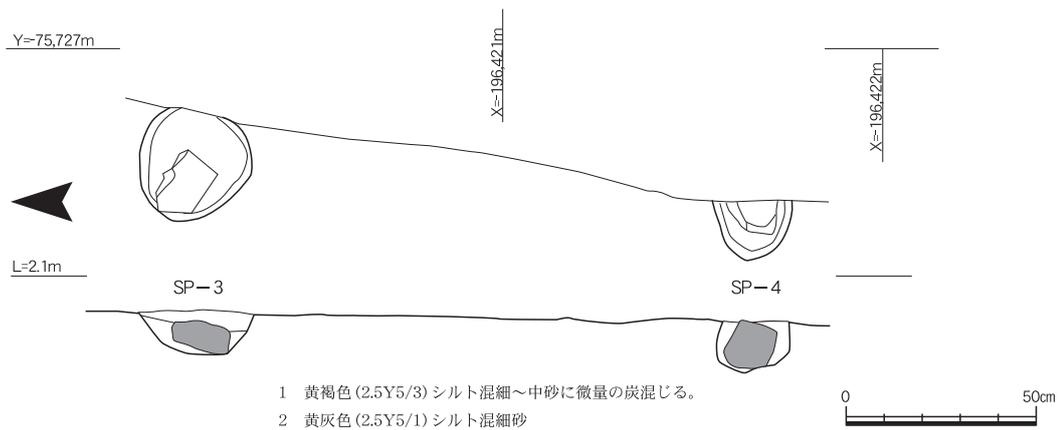
溝（SD-1）は、幅 0.6 m、深さ 0.5 m を測り、南北方向に軸を持つ。重複関係が認められ、石組み暗渠（SW-1）より後に掘削された溝である（第 4・6 図）。溝底の高さは一定でなく、流れの方向は不明である。土師器皿、肥前陶器灰釉溝縁皿、平瓦等の細片、足袋小札 1 点が出土している。

溝（SD-2）は、幅 0.5 m を測り、攪乱が深く及んでいるため、検出できた深さは 3～5 cm である（第 4・6 図）。溝（SD-1）に並行する南北方向に軸を持つ。溝底の高さは一定でなく、流れの方向は不明である。埋土から 17 世紀前半の手づくねの焼塩壺が 1 点出土した（第 9 図-5）。

井戸（SE-1）は直径約 2 m を測る（第 3・4 図）。深さ約 3 m まで掘削し、湧水点に到達したところで、危険であると判断し、調査を断念した。最下部では、直径 60 cm の桶を用いた井戸杵を検出した。井戸上部は井戸杵が抜き取られ、埋め戻されていた。埋め戻し土から井戸側瓦や桶の破片が出土していることから、検出した井戸杵の上に別の桶と瓦積みの井戸杵が据えられていたと考えら



第 6 図 第 1 遺構面検出遺構断面図 (S=1/40)



第7図 柱穴 (SP-3・4) 平・断面図 (S=1/20)

れる。井戸枠内の埋戻し土からは、唐津焼碗 (第9図-6)、唐津焼緑釉碗、肥前焼灰釉碗、志野焼向付、備前焼大盤、土師器鍋、17世紀前半の遺物が出土していることから、この時期までに廃絶した浅野期の遺構と考える。

土坑 (SK-17) は3区南東隅で検出し、全体半分以上が調査区外となるため、全形は不明であるが、南北1.4m以上、東西0.7m以上、深さ0.2mを測る (第6図)。18世紀後半の肥前青磁染付の腰折れ碗 (第9図-7) が1点出土している。

土坑 (SK-15) は2区北西隅で検出し、全体3/4が調査区外となるため、全形は不明であるが、およそ直径0.8m、深さ0.3mの規模である (第6図)。17世紀中頃の肥前染付皿 (第8図-8) が出土している。

柱穴 (SP-3) は直径0.3m、深さ0.1mを測り、楚板として底に15cm大の緑色片岩の割石が据えられていた。柱穴 (SP-4) は直径0.15m、深さ0.25mを測り、楚板として底に10cm大の緑色片岩の円礫が据えられていた。これらの柱穴は、同じ埋土を持ち、楚板上面の高さが揃う。芯々間は約1.5mである (第7図)。

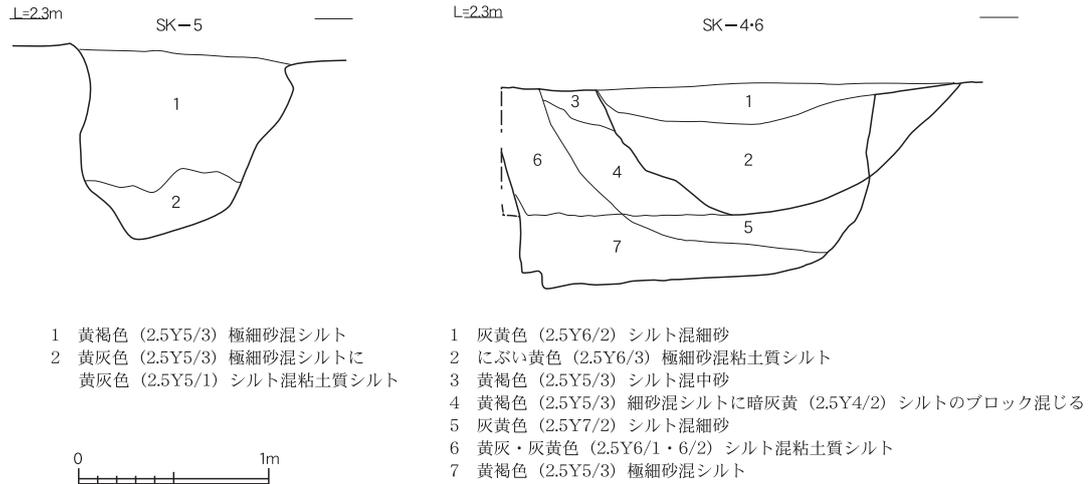
第2 遺構面

第2遺構面では、第1区で土坑5基、第2区で落ち込みを2カ所検出した (第4図)。

SK-4はややいびつな隅丸三角形をした平面形をし、東西1.8m、南北1.7m、深さは0.7mである

遺構名	大きさ	深さ	出土遺物
SP-1	直径0.3m	0.2m	土師器皿
SP-2	直径0.3m	0.4m	土師器皿 (灯明皿)
SP-5	直径0.3m	0.5m	なし
SP-6	直径0.3m	0.2m	土師器釜
SP-7	直径0.3m	0.35m	土師器碗、壁土
SP-8	直径0.3m	0.35m	土師器皿
SK-2	0.5m以上×0.6m以上	0.3m	肥前染付碗 京焼系色絵小碗 堺焼すり鉢 土師器皿・鉢 平瓦・棧瓦 銅製筭?
SK-7	1.5m以上×0.6m以上	0.4m	瓦器碗
SK-14	0.8m以上×0.5m	0.5m	瀬戸焼 (灰釉に青色釉を上掛け) 火鉢、褐釉天目茶碗、 肥前焼染付碗、京・信楽焼灰釉皿・瓶、平瓦

表1 その他遺構一覧



第8図 第2遺構面検出遺構断面図 (S=1/40)

(第6図)。土師器皿(第8図-9)のほか、土師器皿・釜、瓦器椀、須恵器甕等の細片が出土している。

SK-5はSK-4により西側を大きく削られているが、径1.0m、深さ1.0mの土坑である(第6図)。

SK-6は、南側をSK-4、SK-5に、西側をSK-8に削られ、北側は調査区外へ続くため、全形は不明である。大きさは東西2.2m以上、南北1.6m以上、深さは1.0mである(第6図)。遺構内からは、土師器皿や瓦器椀の細片が出土している。

SK-8は、南北2.0m、東西0.5m以上で西側が調査区外へと続く。深さは深いところで0.9mを測るが、底面が一定でなく、波打っている。掘削面積が狭く、底面の凹凸が掘削時のものか、地震等の自然の力が働いたものなのか判別できなかった(第3図)。出土遺物には、黒色土器碗、土師器皿細片がある。

SK-9は、北側をSK-5やSK-8により掘削され、東西は調査区外へと広がるため、全体の大きさは不明であるが、南北2.2m以上、東西2.6m以上、深さ1.0mを測る(第3図)。土師器皿・鍋・釜や須恵器椀、瓦器椀(第9図-10)の細片が出土している。

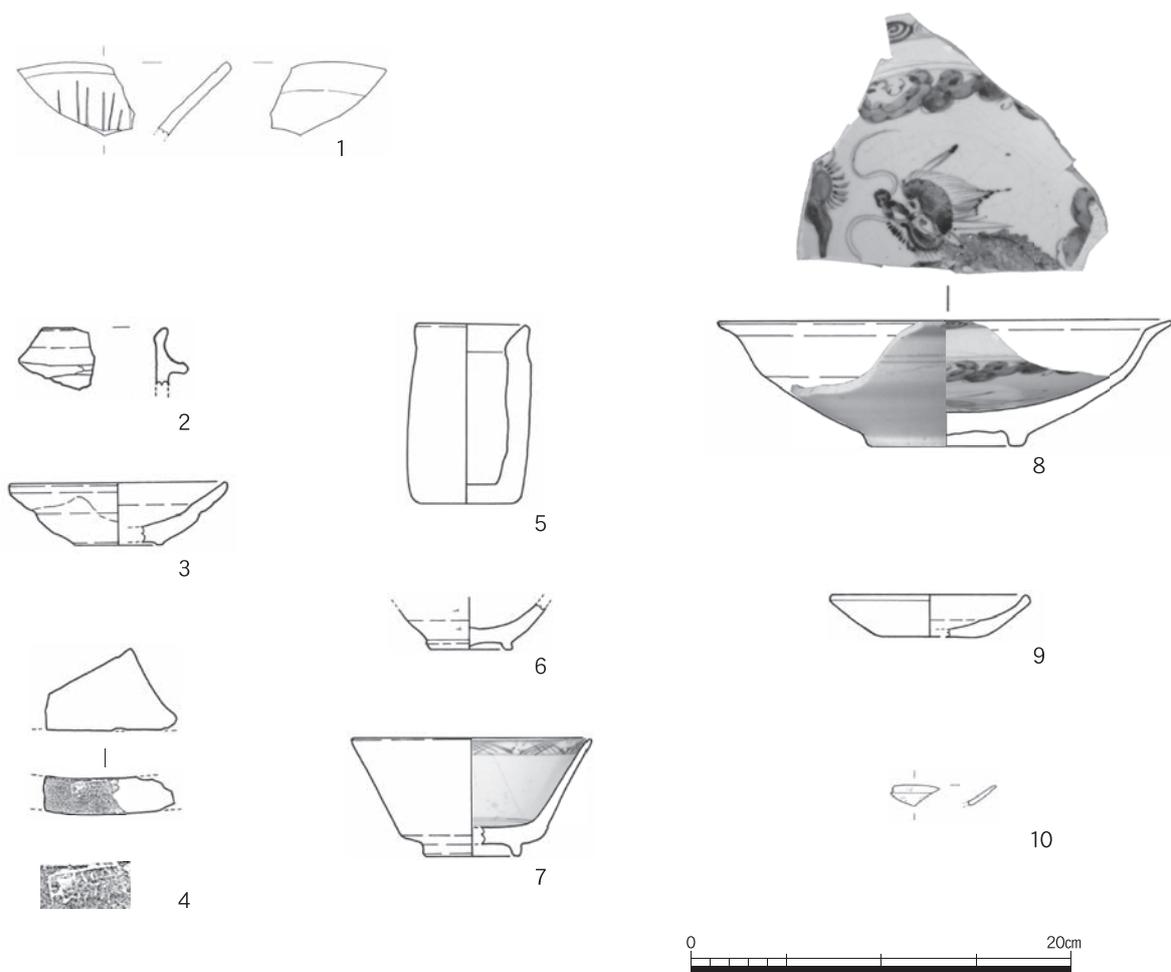
1区で検出した土坑の埋土には、攪拌された細～中砂や細砂混じりシルトが堆積し、一部はブロック状をしている。これらの土坑は、標高1.0m前後の深さまで掘削されている。1区の南東隅では、基盤層となる第4層が標高1.5mで確認され、第4層が粘土質シルトであることから、これらの土坑が粘土を採集するためのものである可能性が考えられる。これらの土坑からの出土遺物は希薄であったが、瓦器椀の細片が出土していることから、中世以降に掘削された遺構と考える。

2区で検出した落ち込み(SX-1・2)は上層を覆う第2層を埋土とするので、自然に形成された地形と考える。落ち込みからの出土遺物はない。

基本層序でも述べたが、この落ち込みの基盤層となる第3層は、第2区の外側へ広がるため、その平面形は不明であるが、ブロック土であることから、第1区で検出した土坑のような遺構の埋土である可能性がある。

3. まとめ

今回の調査では、第1遺構面では、浅野期の石組み暗渠、井戸を検出した。これらの遺構は、17世紀前半で廃絶していることから、徳川期になって、屋敷地内で改変があったことを示す可能性が



第9図 出土遺物実測図 (S=1/4)

考えられる。第2遺構面では、鎌倉時代以後に掘削された土坑群を検出した。これらは、粘土取り穴の可能性が考えられる。また、江戸時代以前の遺跡様相は今まで不明であったので、江戸時代以前の遺構がみつき、土地利用の一端が垣間見られたことは大きな成果である。

これらの成果は、調査範囲が狭いため、今後周辺の調査成果をまって再度検討したい。

【参考文献】

財団法人和歌山県文化財センター 2008『和歌山城跡-和歌山地方・家庭裁判所増築工事に伴う発掘調査報告書』

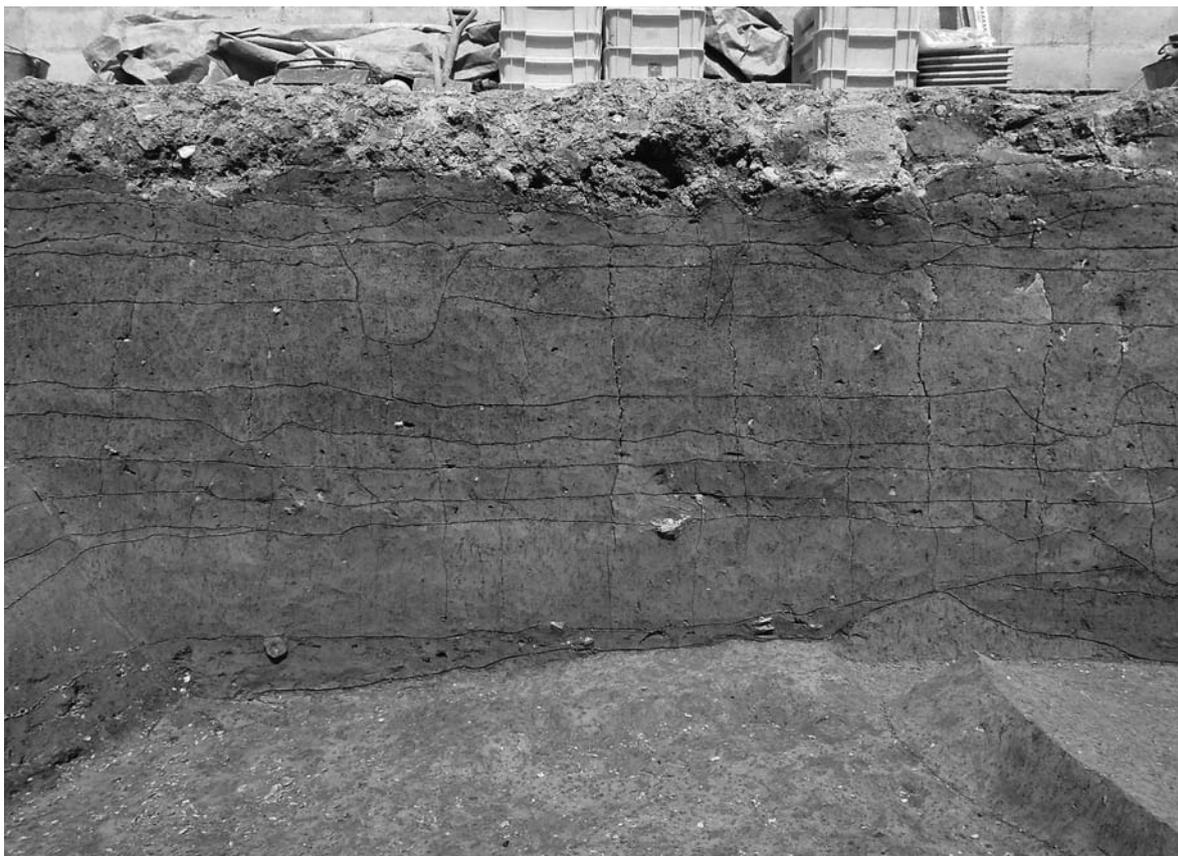
圖 版



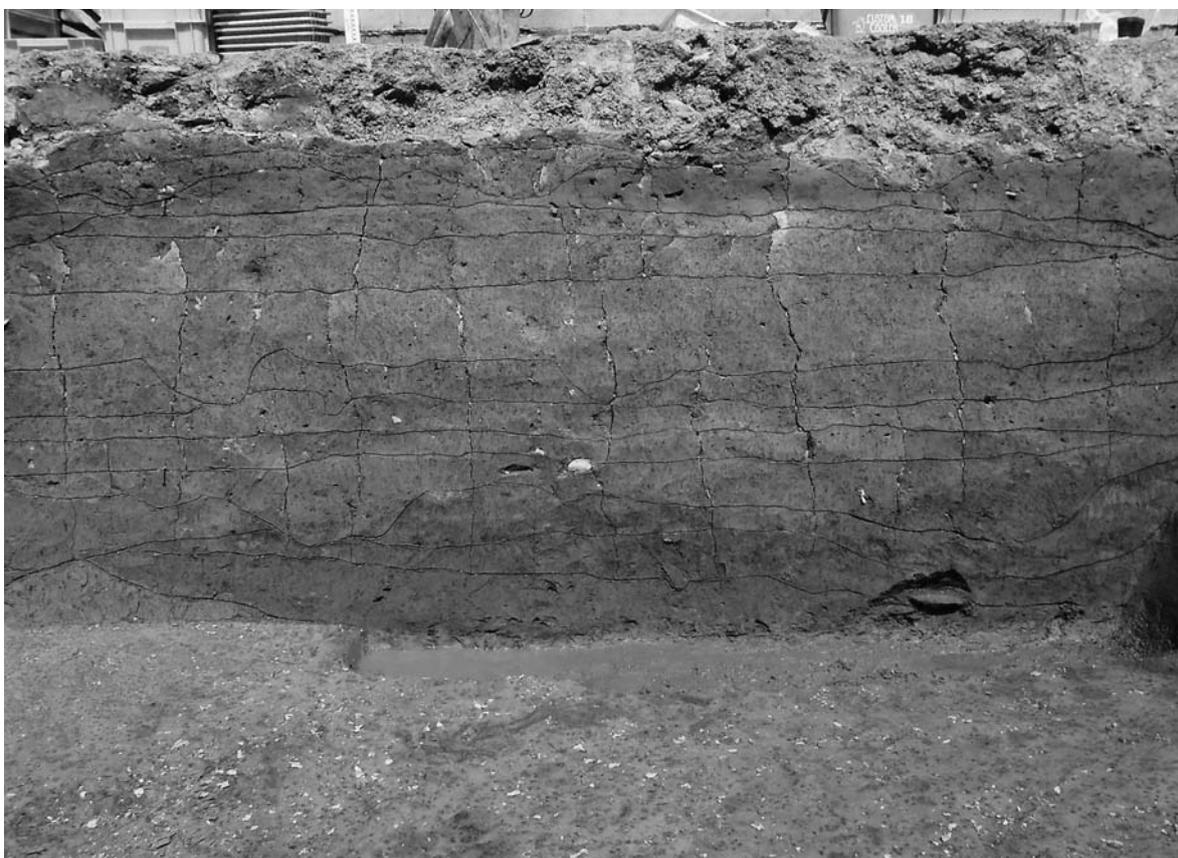
SK12 出土土器 (8-1・2・3・12: 小型丸底壺、8-21: 杯、8-13・20・16: 高杯、8-23: 鉢、9-1・10: 甕)



SE23 出土土器 (7-1: 壺、7-9・6・11: 甕)



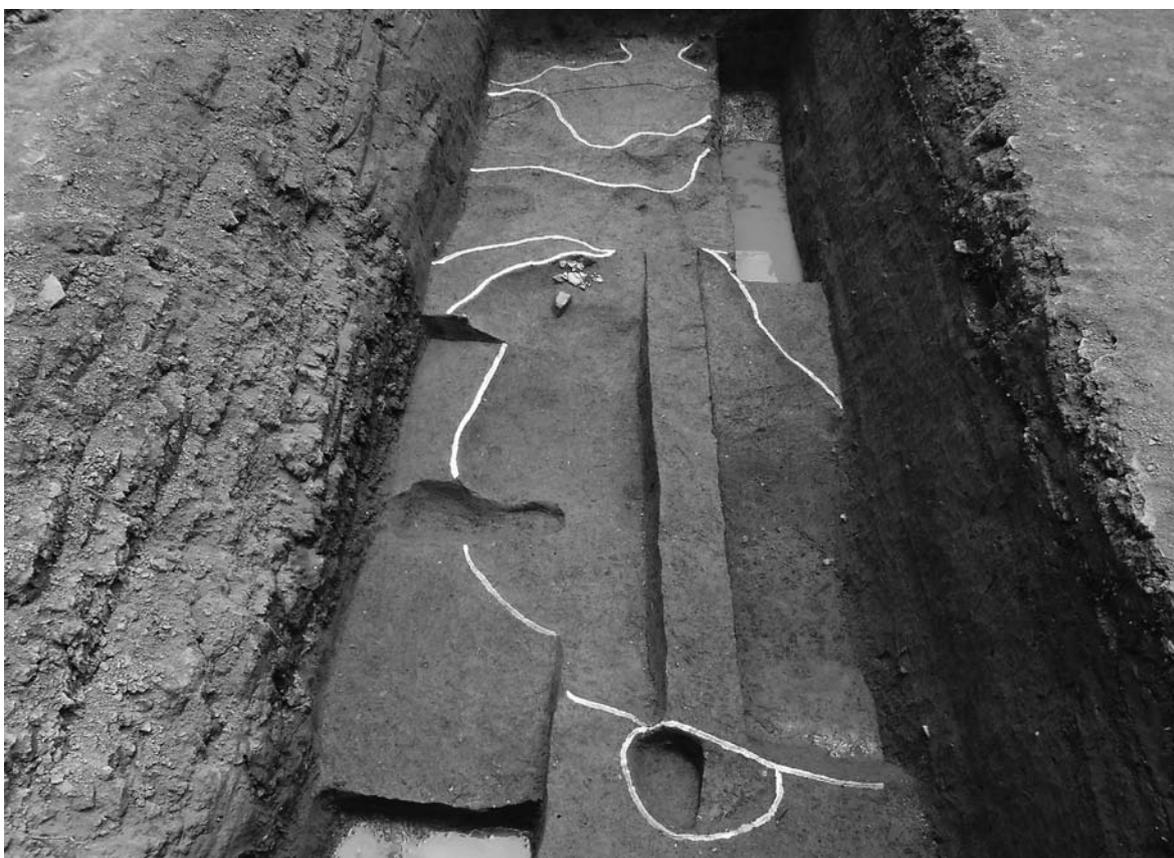
東壁土層断面 北半（西から）



東壁土層断面 南半（西から）



東区第1遺構面（北から）



西区第1遺構面（北から）



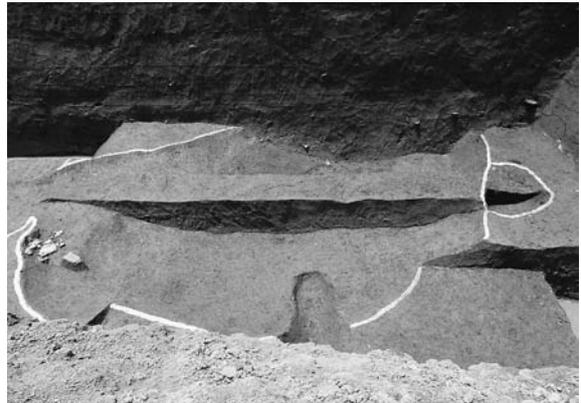
第6-2層土器出土状況（北東から）



第6-2層掘削作業風景（東から）



SK-1土器出土状況（北から）



SK-1土層断面（東から）



SX-1上層遺物出土状況（北東から）



東区第2遺構面（北から）



西区第2遺構面（北から）



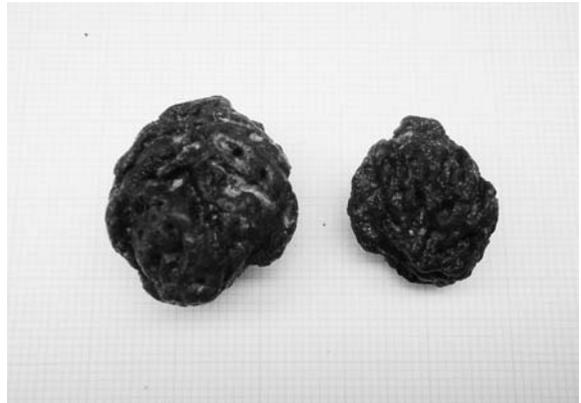
SX-1上層鋤出土状況



SX-1 上層板出土状況（北から）



SX-1上層出土ヒョウタン



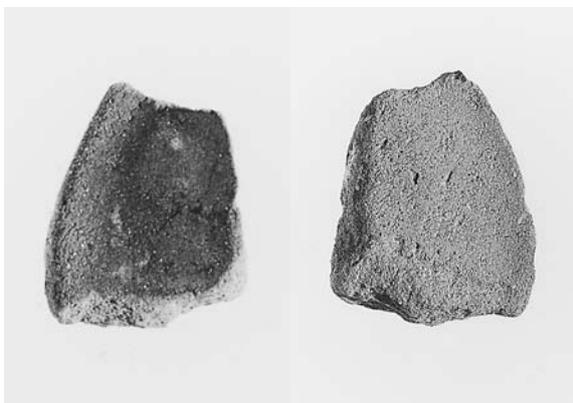
SX-1 上層出土桃核



下層確認トレンチ土層断面（西から）



第6-1層・第6-2層・SK-1出土鞆羽口・鉄滓・炉壁片？



11



15



第6-1層出土馬齒



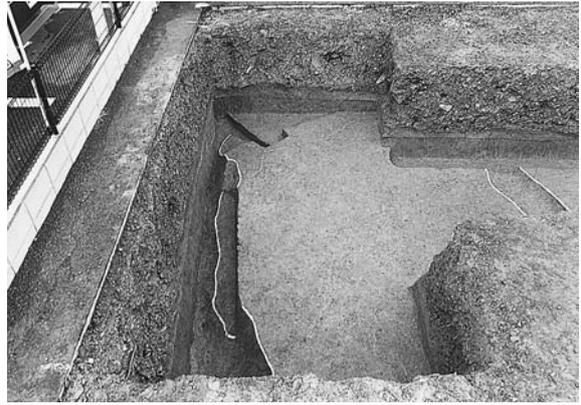
52



61



調査前の状況（東から）



第1・2区全景（西から）



第3区全景（西から）



第4区全景（東から）



第6区全景（西から）



第7区全景（東から）



第8区全景（南から）



SD-2 セクションベルト土層断面図（西から）



調査前の状況（北東から）



第1遺構面 SD-1・2（北から）



第2遺構面全景（東から）



第2遺構面全景（西から）



SX-1 土器棺出土状況（西から）



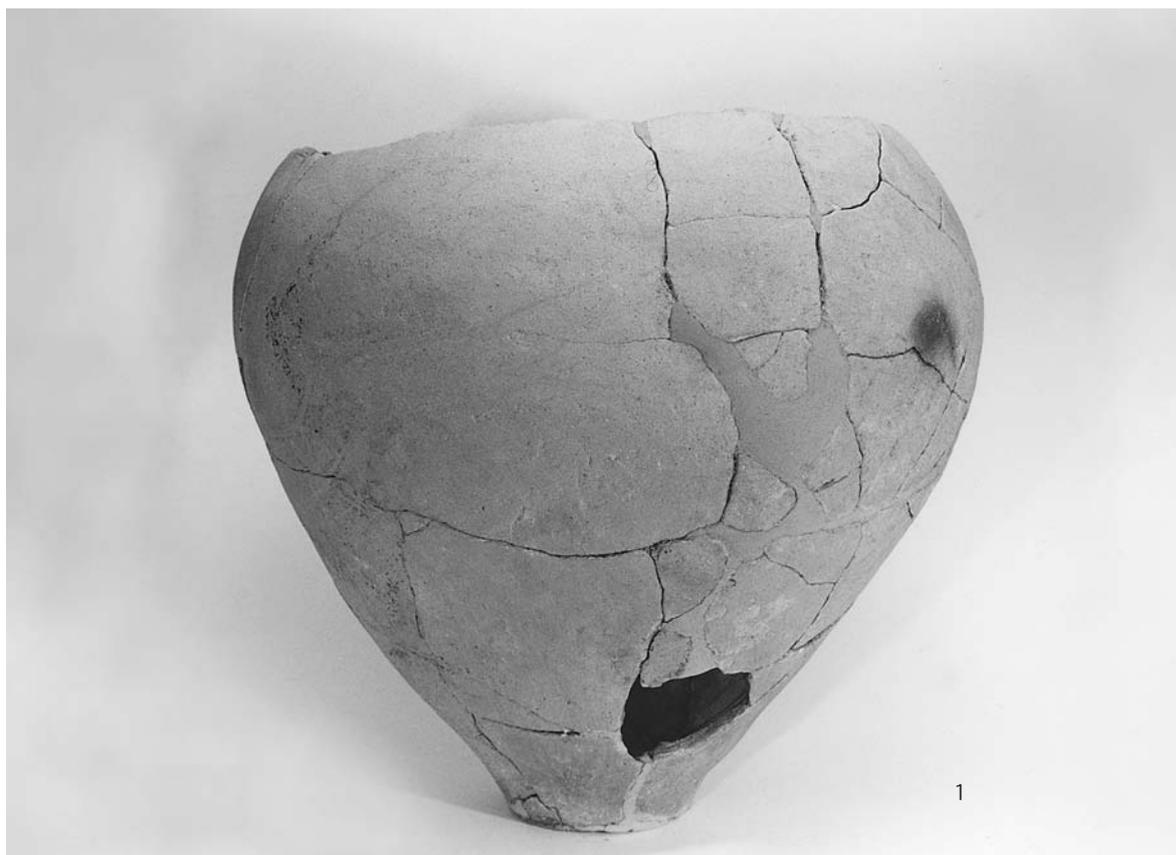
SD-6（西から）



西端部北壁土層堆積状況（南から）



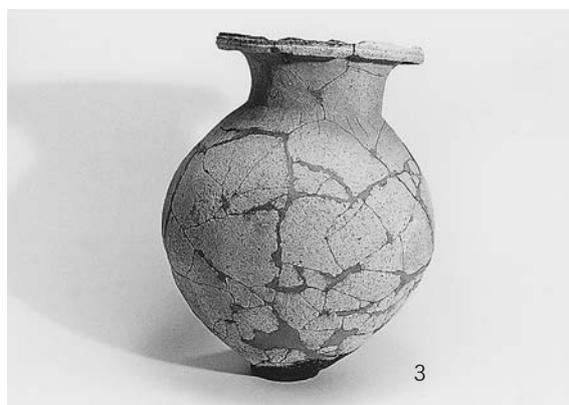
中央部北壁土層堆積状況（南から）



SX-1 出土遺物 弥生土器 (1 壺)



SX-1 出土遺物 弥生土器 (2 壺)



SD-6 出土遺物 弥生土器 (3 壺)



SD-6 出土遺物 弥生土器 (4 壺)



第1区第1遺構面検出状況（南から）



第1区第1遺構面全景（北から）



第1区SW-1 全景（南から）



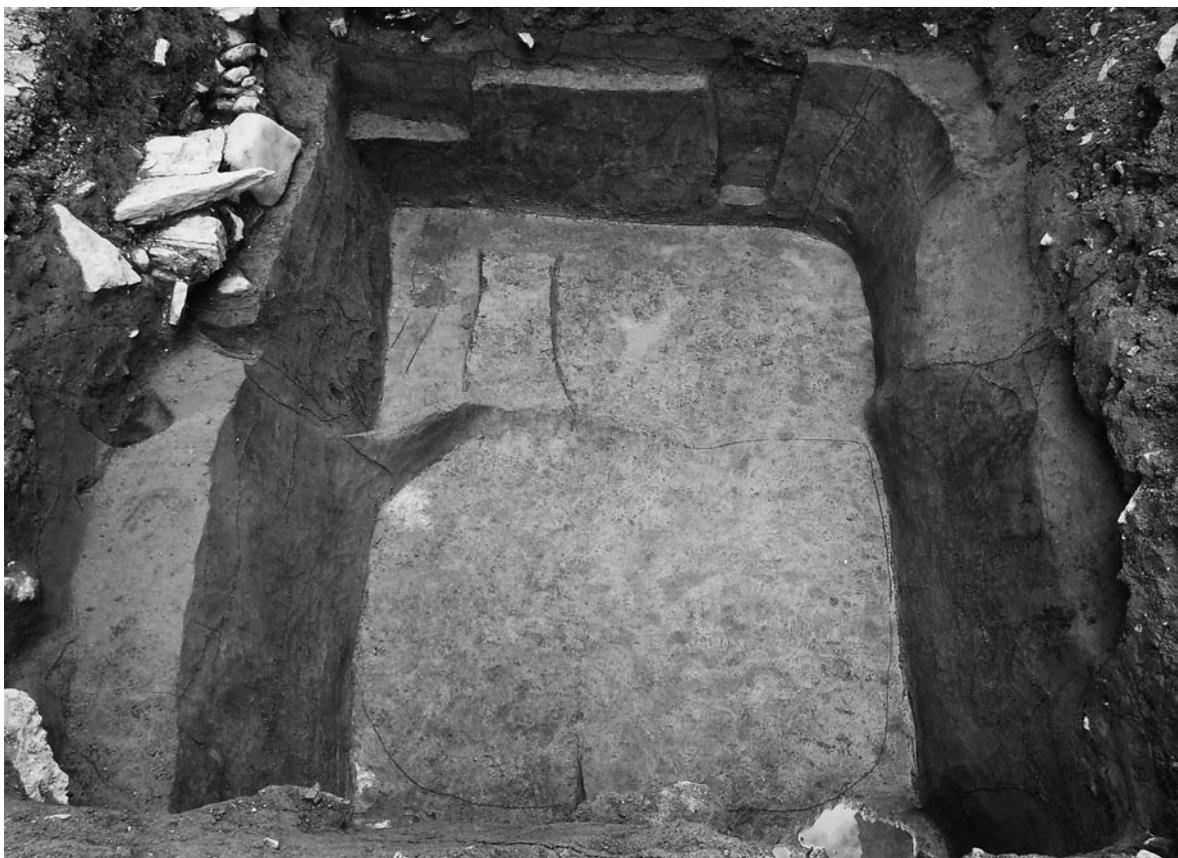
第1区SW-1 埋土土層断面（北から）



第1区SW-1 掘方土層断面（北から）



第1区第2遺構面1全景（北から）



第1区第2遺構面2全景（北から）



第2区第1遺構面検出状況（北から）



第2区第2遺構面全景（北から）



第2区西壁面土層断面（東から）



第2区SE-1 検出状況（東から）



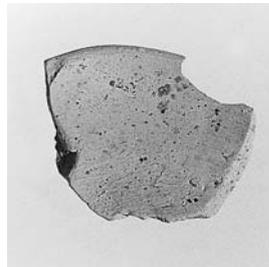
第3区全景（北から）



1



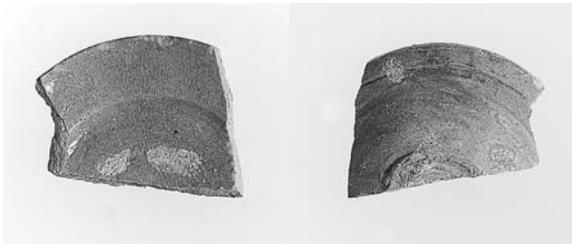
2



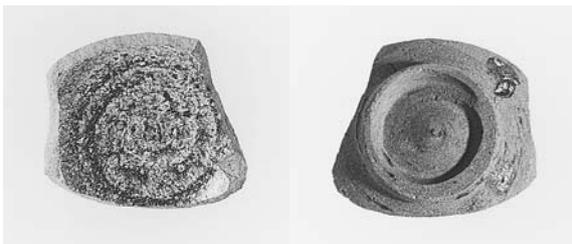
9



10



3



6



5

報告書抄録

ふりがな	わかやましないいせきはつくつちょうさがいほう
書名	和歌山市内遺跡発掘調査概報
副書名	平成24年度
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	大木要 清水梨代 富永里菜 前田敬彦 井馬好英 内田和典 菊井佳弥 吉田悠歩
編集機関	和歌山市教育委員会
所在地	〒640-8511 和歌山県和歌山市七番丁23番地 TEL 073-435-1194
発行年月日	西暦 2014年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
やまぶきちよういせき 山吹丁遺跡 (調査一覧5、市教委①)	わかやまけんわかやましほんまち 和歌山県和歌山市本町	3020150	405	34° 14′ 01″	135° 10′ 36″	20120410	5.74	開発に伴う 遺跡確認
まつばらにいせき 松原Ⅱ遺跡 (調査一覧7・19・59、市教委②)	わかやまけんわかやましばば 和歌山県和歌山市馬場	3020150	288	34° 11′ 09″	135° 13′ 46″	20120416・ 0517～25・ 0924	74.91	開発に伴う 遺跡確認・ 発掘調査
ひらいいせき 平井遺跡 (調査一覧13・20、市教委③)	わかやまけんわかやましひらい 和歌山県和歌山市平井	3020150	399	34° 15′ 30″	135° 10′ 22″	20120417	10.00	開発に伴う 遺跡確認
おおだくろだいいせき・おおだじょうあと 太田・黒田遺跡、太田城跡 (調査一覧10、市教委④)	わかやまけんわかやましおおだ 和歌山県和歌山市太田	3020150	327	34° 13′ 37″	135° 11′ 59″	20120418～ 0507	32.29	開発に伴う 遺跡確認
わかやまじょうあと 和歌山城跡 (調査一覧12、市教委⑤)	わかやまけんわかやましさんばんちよう 和歌山県和歌山市三番丁	3020150	379	34° 13′ 25″	135° 10′ 50″	20120427	23.44	開発に伴う 遺跡確認
いわせたかやなぎいせき 岩橋高柳遺跡 (調査一覧14、市教委⑥)	わかやまけんわかやましいわせ 和歌山県和歌山市岩橋	3020150	427	34° 14′ 05″	135° 14′ 09″	20120507	31.05	開発に伴う 遺跡確認
いわせいせき 岩橋遺跡 (調査一覧16、市教委⑦)	わかやまけんわかやましいわせ 和歌山県和歌山市岩橋	3020150	321	34° 14′ 09″	135° 13′ 40″	20120514・ 0515	64.66	開発に伴う 遺跡確認
おおだくろだいいせき 太田・黒田遺跡 (調査一覧17、市教委⑧)	わかやまけんわかやましくろだ 和歌山県和歌山市黒田	3020150	327	34° 13′ 51″	135° 11′ 53″	20120514	28.10	開発に伴う 立会調査
いのくちいせき 井ノ口遺跡 (調査一覧22、市教委⑨)	わかやまけんわかやましわざせきど 和歌山県和歌山市和佐関戸	3020150	389	34° 14′ 26″	135° 15′ 15″	20120604	28.86	開発に伴う 遺跡確認
いんべいせき 井辺遺跡 (調査一覧23、市教委⑩)	わかやまけんわかやましいんべ 和歌山県和歌山市井辺	3020150	308	34° 13′ 12″	135° 12′ 46″	20120605・ 0606	30.60	開発に伴う 遺跡確認
つはだにいせき 津奈Ⅱ遺跡 (調査一覧26、市教委⑪)	わかやまけんわかやましつはた 和歌山県和歌山市津奈	3020150	407	34° 13′ 08″	135° 12′ 35″	20120613・ 0709・0325・ 0326	118.3	範囲確認
いんべいせき 井辺遺跡 (調査一覧26・144、市教委⑫)	わかやまけんわかやましつはた・こうざき 和歌山県和歌山市津奈・神前	3020150	308	34° 12′ 50″	135° 12′ 36″	20120613・ 0709・0325・ 0326	19.6	開発に伴う 遺跡確認・ 範囲確認
いさおいせき 有功遺跡 (調査一覧30・144、市教委⑬)	わかやまけんわかやましむそた 和歌山県和歌山市六十谷	3020150	77	34° 15′ 46″	135° 12′ 07″	20120626	10.00	開発に伴う 遺跡確認
いんべいせき 井辺遺跡 (調査一覧32、市教委⑭)	わかやまけんわかやましいんべ 和歌山県和歌山市井辺	3020150	308	34° 13′ 14″	135° 12′ 48″	20120704	7.60	開発に伴う 遺跡確認
わかやまじょうあと 和歌山城跡 (調査一覧34、市教委⑮)	わかやまけんわかやましはちばんちよう 和歌山県和歌山市八番丁	3020150	379	34° 13′ 39″	135° 10′ 18″	20120710	6.60	開発に伴う 遺跡確認
いけだいいせき 池田遺跡 (調査一覧61、市教委⑯)	わかやまけんわかやましむそた 和歌山県和歌山市六十谷	3020150	78	34° 16′ 01″	135° 12′ 17″	20120718	20.00	開発に伴う 遺跡確認
おおだくろだいいせき・おおだじょうあと 太田・黒田遺跡、太田城跡 (調査一覧41、市教委⑰)	わかやまけんわかやましおおだ 和歌山県和歌山市太田	3020150	327	34° 13′ 33″	135° 11′ 45″	20120802・ 0803	16.87	開発に伴う 遺跡確認
おとうらいせき 音浦遺跡 (調査一覧43、市教委⑱)	わかやまけんわかやましおとうら 和歌山県和歌山市音浦	3020150	319	34° 14′ 00″	135° 12′ 51″	20120807	17.75	開発に伴う 遺跡確認

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
にしのしょういせき 西庄遺跡 (調査一覧44、市教委⑱)	わかやまけんわかやましもとわき 和歌山県和歌山市本脇	3020150	38	34° 15′ 31″	135° 06′ 24″	20120808・ 11・31	65.24	開発に伴う 遺跡確認
さんたこふんぐん 三田古墳群 (調査一覧47、市教委⑳)	わかやまけんわかやましとじり 和歌山県和歌山市田尻	3020150	339～342	34° 11′ 49″	135° 11′ 37″	20120810	10.37	開発に伴う 遺跡確認
いわせたかやなぎいせき 岩橋高柳遺跡 (調査一覧48、市教委㉑)	わかやまけんわかやましいわせ 和歌山県和歌山市岩橋	3020150	427	34° 14′ 14″	135° 13′ 56″	20120822	13.14	開発に伴う 遺跡確認
きもとしょうがっこうにいせき 木本小学校Ⅱ遺跡 (調査一覧50、市教委㉒)	わかやまけんわかやましきのもと 和歌山県和歌山市木ノ本	3020150	46	34°	135°	20120824	54.35	開発に伴う 遺跡確認
おおたくろだいせき・おおだじょうあと 太田・黒田遺跡、太田城跡 (調査一覧51、市教委㉓)	わかやまけんわかやましおおだ 和歌山県和歌山市太田	3020150	327・356	34° 13′ 43″	135° 11′ 52″	20120904	16.87	開発に伴う 遺跡確認
やまぶきちやういせき 山吹丁遺跡 (調査一覧52、市教委㉔)	わかやまけんわかやましほんまち 和歌山県和歌山市本町	3020150	405	34° 14′ 04″	135° 10′ 38″	20120906	13.05	開発に伴う 遺跡確認
たやいせき 田屋遺跡 (調査一覧54・60、市教委㉕)	わかやまけんわかやましただや 和歌山県和歌山市田屋	3020150	93	34° 15′ 17″	135° 13′ 42″	20120914・ 0924	131.6	開発に伴う 遺跡確認・ 発掘調査
たやいせき 田屋遺跡 (調査一覧56、市教委㉖)	わかやまけんわかやましただや 和歌山県和歌山市田屋	3020150	93	34° 15′ 12″	135° 13′ 40″	20120919・21	66.04	開発に伴う 遺跡確認
つはだにいせき 津秦Ⅱ遺跡 (調査一覧58、市教委㉗)	わかやまけんわかやましつはた 和歌山県和歌山市津秦	3020150	407	34° 13′ 33″	135° 12′ 21″	20120920	29.56	開発に伴う 遺跡確認
わかやまじょうあと 和歌山城跡 (調査一覧61、市教委㉘)	わかやまけんわかやましおかやまちやう 和歌山県和歌山市岡山丁	3020150	379	34° 13′ 23″	135° 10′ 48″	20120925	10.57	開発に伴う 遺跡確認
あきづきいせき 秋月遺跡 (調査一覧62・68・135、市教委㉙)	わかやまけんわかやましあきづき 和歌山県和歌山市秋月	3020150	331	34° 13′ 36″	135° 12′ 09″	20120926・ 1012～1102・ 20130306	69.60	開発に伴う遺 跡確認・発掘・ 立会調査
こうざきいせき 神前遺跡 (調査一覧65・81、市教委㉚)	わかやまけんわかやましこうざき 和歌山県和歌山市神前	3020150	307	34° 12′ 40″	135° 12′ 43″	20121003・ 20121101～ 1109	51.57	開発に伴う 遺跡確認
せきどいせき 関戸遺跡 (調査一覧66、市教委㉛)	わかやまけんわかやましせきど 和歌山県和歌山市関戸	3020150	334	34° 11′ 50″	135° 09′ 52″	20121009・10	17.62	開発に伴う 遺跡確認
いさおいせき 有功遺跡 (調査一覧67、市教委㉜)	わかやまけんわかやましむそた 和歌山県和歌山市六十谷	3020150	77	34° 15′ 48″	135° 11′ 57″	20121011	4.75	開発に伴う 遺跡確認
なるかみにいせき 鳴神Ⅱ遺跡 (調査一覧69、市教委㉝)	わかやまけんわかやましなるかみ 和歌山県和歌山市鳴神	3020150	314	34° 13′ 31″	135° 12′ 46″	20121014・15	34.42	開発に伴う 遺跡確認
たやいせき 田屋遺跡 (調査一覧70、市教委㉞)	わかやまけんわかやましただや 和歌山県和歌山市田屋	3020150	93	34° 15′ 17″	135° 13′ 42″	20121015	19.84	開発に伴う 遺跡確認
ともだちやういせき 友田町遺跡 (調査一覧72、市教委㉟)	わかやまけんわかやましともだちやう 和歌山県和歌山市友田町	3020150	406	34° 13′ 46″	135° 11′ 23″	20121016	27.08	範囲確認
きのもといちいせき 木ノ本Ⅰ遺跡 (調査一覧74、市教委㊱)	わかやまけんわかやましにのしょう 和歌山県和歌山市西庄	3020150	40	34° 15′ 33″	135° 07′ 19″	20121017		開発に伴う 遺跡確認
たやいせき 田屋遺跡 (調査一覧75、市教委㊲)	わかやまけんわかやましただや 和歌山県和歌山市田屋	3020150	93	34° 15′ 14″	135° 13′ 42″	20121022～26	119.44	開発に伴う 遺跡確認
ふちゆういせき 府中遺跡 (調査一覧76、市教委㊳)	わかやまけんわかやましふちゆう 和歌山県和歌山市府中	3020150	96	34°	135°	20121024	53.00	開発に伴う 立会調査
なるかみさんいせき 鳴神Ⅲ遺跡 (調査一覧84・107、市教委㊴)	わかやまけんわかやましなるかみ 和歌山県和歌山市鳴神	3020150	315	34° 13′ 45″	135° 12′ 41″	20121107・ 20130108	10.4	開発に伴う 遺跡確認・ 立会
かわなべいせき 川辺遺跡 (調査一覧85、市教委㊵)	わかやまけんわかやましさと 和歌山県和歌山市里	3020150	145	34° 15′ 37″	135° 16′ 01″	20121107・08	35.80	開発に伴う 遺跡確認
にしのしょういせき 西庄遺跡 (調査一覧87、市教委㊶)	わかやまけんわかやましもとわき 和歌山県和歌山市本脇	3020150	38	34° 15′ 24″	135° 06′ 21″	20121109	4.00	開発に伴う 遺跡確認

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
わかやまじょうあと 和歌山城跡 (調査一覧91、市教委④)	わかやまけんわかやましきゅうばんちょう 和歌山県和歌山市九番丁	3020150	379	34° 13' 40"	135° 10' 24"	20121116	16.12	開発に伴う 遺跡確認
こうぎきにいせき 神前Ⅱ遺跡 (調査一覧93、市教委④)	わかやまけんわかやましこうぎき 和歌山県和歌山市神前	3020150	383	34° 12' 57"	135° 12' 05"	20121119	30.00	開発に伴う 遺跡確認
さぎのもりいせき 鷺ノ森遺跡 (調査一覧94・99、市教委④)	わかやまけんわかやましひがしかじやまち 和歌山県和歌山市東鍛冶屋町	3020150	329	34° 13' 52"	135° 10' 29"	20121119・ 20121205～ 1225	62.58	開発に伴う 遺跡確認・ 発掘調査
なるかみにいせき 鳴神Ⅱ遺跡 (調査一覧95、市教委④)	わかやまけんわかやましなるかみ 和歌山県和歌山市鳴神	3020150	314	34° 13' 29"	135° 12' 44"	20121120	9.00	開発に伴う 遺跡確認
きのもとにいせき 木ノ本Ⅱ遺跡 (調査一覧101、市教委④)	わかやまけんわかやましきのもと 和歌山県和歌山市木ノ本	3020150	41	34° 15' 32"	135° 07' 33"	20121210	3.50	開発に伴う 遺跡確認
なるかみごいせき 鳴神Ⅴ遺跡 (調査一覧102、市教委④)	わかやまけんわかやましなるかみ 和歌山県和歌山市鳴神	3020150	318	34° 13' 34"	135° 12' 25"	20121212・ 20130125	23.20	開発に伴う 遺跡確認
やまぶきちょういせき 山吹丁遺跡 (調査一覧105、市教委④)	わかやまけんわかやましほんまち 和歌山県和歌山市本町	3020150	405	34° 14' 05"	135° 10' 37"	20121226・ 1227	7.40	開発に伴う 遺跡確認
なるかみよにいせき 鳴神Ⅳ遺跡 (調査一覧110・117、市教委④)	わかやまけんわかやましなるかみ 和歌山県和歌山市鳴神	3020150	316	34° 13' 54"	135° 12' 27"	20130117	33.13	開発に伴う 遺跡確認・ 発掘調査
さかたいせき 坂田遺跡 (調査一覧116、市教委⑤)	わかやまけんわかやましさかた 和歌山県和歌山市坂田	3020150	435	34° 12' 07"	135° 12' 12"	20130124・25	45.38	開発に伴う 遺跡確認
きのもとにいせき 木ノ本Ⅱ遺跡 (調査一覧118、市教委⑤)	わかやまけんわかやましきのもと 和歌山県和歌山市木ノ本	3020150	41	34° 15' 32"	135° 07' 43"	20130128	13.87	開発に伴う 遺跡確認
おおだくろだいせき・おおだじょうあと 太田・黒田遺跡、太田城跡 (調査一覧124、市教委⑤)	わかやまけんわかやましおおだ 和歌山県和歌山市太田	3020150	327	34° 13' 33"	135° 11' 45"	20130131・ 0201	42.90	開発に伴う 遺跡確認
いんべいせき 井辺遺跡 (調査一覧126、市教委⑤)	わかやまけんわかやましいんべ 和歌山県和歌山市井辺	3020150	308	34° 13' 11"	135° 12' 30"	20130212	23.80	開発に伴う 遺跡確認
むそたいせき 六十谷遺跡 (調査一覧128、市教委⑤)	わかやまけんわかやましむそた 和歌山県和歌山市六十谷	3020150	84	34° 15' 46"	135° 12' 23"	20130213	18.80	開発に伴う 立会調査
にのしょういせき 西庄遺跡 (調査一覧132、市教委⑤)	わかやまけんわかやましもとわき 和歌山県和歌山市本脇	3020150	38	34° 15' 28"	135° 06' 31"	20130227・28	69.30	開発に伴う 遺跡確認
きのもとにいせき 木ノ本Ⅱ遺跡 (調査一覧136、市教委⑤)	わかやまけんわかやましきのもと 和歌山県和歌山市木ノ本	3020150	41	34° 15' 39"	135° 07' 37"	20130306	33.00	開発に伴う 遺跡確認
こうぎきいせき 神前遺跡 (調査一覧146、市教委⑤)	わかやまけんわかやましこうぎき 和歌山県和歌山市神前	3020150	307	34° 12' 45"	135° 12' 21"	20130328	7.00	開発に伴う 遺跡確認
えのきはらいせき 榎原遺跡 (調査一覧147、市教委⑤)	わかやまけんわかやましきのもと 和歌山県和歌山市木ノ本	3020150	47	34° 15' 13"	135° 08' 00"	20130328	21.00	開発に伴う 遺跡確認
いわせにいせき 岩橋Ⅱ遺跡 (調査一覧148、市教委⑤)	わかやまけんわかやましいわせ 和歌山県和歌山市岩橋	3020150	381	34° 13' 48"	135° 13' 34"	20130329	19.93	開発に伴う 遺跡確認
あきづきいせき 秋月遺跡 (調査一覧13、財団①)	わかやまけんわかやましあきづき 和歌山県和歌山市秋月	3020150	331	34°	135°	20120501～ 0525	49.00	開発に伴う 発掘調査
おおだくろだいせき 太田・黒田遺跡 (調査一覧31、財団②)	わかやまけんわかやましおおだ 和歌山県和歌山市太田	3020150	327	34°	135°	20120702～ 0810	147.17	開発に伴う 発掘調査
おおだくろだいせき 太田・黒田遺跡 (調査一覧36、財団②)	わかやまけんわかやましおおだ 和歌山県和歌山市太田	3020150	327	34°	135°	20120718～ 0807	94.00	開発に伴う 発掘調査
わかやまじょうあと 和歌山城跡 (調査一覧89、財団④)	わかやまけんわかやましおかやまちょう 和歌山県和歌山市岡山丁	3020150	379	34°	135°	20121115～ 1214	32.52	開発に伴う 発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
山吹丁遺跡 (調査一覧5、市教委①)	散布地	江戸時代	落ち込み	国産陶磁器	
要約	江戸時代の落ち込みを確認した。				
松原Ⅱ遺跡 (調査一覧7・19・59、市教委②)	散布地	中世～近世	井戸、溝、土坑	土師器、瓦器、陶磁器、瓦	
要約	中世の土坑と、近世の井戸、溝を検出した。				
平井遺跡 (調査一覧8、市教委③)	散布地	古墳時代 中世	なし	土師器、須恵器、瓦器	
要約	遺構はなかった。				
太田・黒田遺跡、太田城跡 (調査一覧10、市教委④)	集落跡、城館跡	弥生時代	土坑・ピット	弥生土器	
要約	弥生時代中期の土坑・ピットを確認した。				
和歌山城跡 (調査一覧12、市教委⑤)	城館跡	江戸時代	盛土遺構	国産陶磁器	
要約	土塁の可能性のある遺構を確認した。				
岩橋高柳遺跡 (調査一覧14、市教委⑥)	散布地	江戸時代	井戸・溝・土坑・ ピット	国産陶磁器	
要約	江戸時代の集落域を確認した。				
岩橋遺跡 (調査一覧16、市教委⑦)	散布地	古墳～中世	土坑、溝	土師器	
要約	古墳～中世の土坑、溝を検出した。				
太田・黒田遺跡、太田城跡 (調査一覧17、市教委⑧)	集落跡、城館跡	古墳時代～ 江戸時代	溝・落ち込み	土師器、陶器	
要約	古墳時代の溝・落ち込みを確認した。				
井ノ口遺跡 (調査一覧22、市教委⑨)	散布地	古墳～中世	なし	なし	
要約	旧流路の砂層堆積を確認した。				
井辺遺跡 (調査一覧23、市教委⑩)	散布地	弥生時代	溝、ピット	土師器	
要約	古墳時代の溝を検出し、その後の本調査で古墳の周溝と判明した。				
津秦Ⅱ遺跡 (調査一覧26・144、市教委⑪)	散布地	古墳時代 中世	ピット・溝	土師器	
要約	古墳時代の溝、中世のピットを確認した。				
井辺遺跡 (調査一覧26・144、市教委⑫)	散布地	古墳時代	溝・ピット	土師器	
要約	古墳時代の溝を確認した。				
有功遺跡 (調査一覧30、市教委⑬)	散布地	不明	自然流路	無し	
要約	時期不明の自然流路を確認した。				
井辺遺跡 (調査一覧32、市教委⑭)	散布地	弥生時代	土坑	土師器	
要約	古墳時代の土坑を検出し、その後の本調査で堅穴建物と判明した。				
和歌山城跡 (調査一覧34、市教委⑮)	城館跡	江戸時代	なし	なし	
要約	削平を受けており遺構・遺物はなかった。				
池田遺跡 (調査一覧35、市教委⑯)	散布地	不明	なし	なし	
要約	遺構はなかった。				
太田・黒田遺跡、太田城跡 (調査一覧41、市教委⑰)	集落跡、城館跡	弥生時代 中世	土坑・溝	弥生土器・土師器	
要約	中世以前の遺構を確認した。				
音浦遺跡 (調査一覧43、市教委⑱)	散布地	古墳時代	なし	なし	
要約	旧流路の砂層堆積を確認した。				
西庄遺跡 (調査一覧44・78、市教委⑲)	散布地	古墳時代 中世	土坑・溝・鋤溝	土師器・須恵器・瓦器	
要約	中世および古墳時代の遺構面を確認した。				
三田古墳群 (調査一覧47、市教委⑳)	古墳群	古墳時代	なし	なし	
要約					
岩橋高柳遺跡 (調査一覧48、市教委㉑)	集落跡	古墳・中近世	耕作溝	なし	
要約	中世～近世の耕作溝を検出した。				

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
木本小学校Ⅱ遺跡 (調査一覧50、市教委㉒)	散布地	古墳時代～中世	土坑・溝	土師器・須恵器・瓦器	
要約	中世の溝を確認した。				
太田・黒田遺跡、太田城跡 (調査一覧51、市教委㉓)	集落跡、城館跡	弥生時代	溝・土坑	弥生土器、土師器	
要約	弥生時代の遺構面を確認した。				
山吹丁遺跡 (調査一覧52、市教委㉔)	散布地	江戸時代	土坑・ピット	近世陶磁器・瓦器・須恵器・弥生土器	
要約	江戸時代の遺構を確認した。				
田屋遺跡 (調査一覧54、市教委㉕)	散布地	古墳時代	土坑・竪穴建物・溝	土師器、須恵器、瓦器	
要約	古墳時代の遺構面を確認した。				
田屋遺跡 (調査一覧56、市教委㉖)	散布地	中世	溝	土師器、須恵器、瓦器、国産陶磁器	
要約	中世の溝を確認した。				
津奈Ⅱ遺跡 (調査一覧58、市教委㉗)	散布地	古墳～奈良時代	なし	土師器	
要約	旧流路の砂層堆積を確認した。				
和歌山城跡 (調査一覧60、市教委㉘)	城館跡	江戸時代	土坑	土師器・瓦	
要約	江戸時代の遺構面を確認した。				
秋月遺跡 (調査一覧62・68・135、市教委㉙)	散布地	弥生～平安時代	溝、井戸状遺構	土師器、須恵器、瓦器	
要約	中世の溝と、弥生時代後期と古墳時代前期の井戸状遺構を検出した。				
神前遺跡 (調査一覧65・81、市教委㉚)	散布地	中世	溝	瓦器	
要約	中世の水路を検出した。				
関戸遺跡 (調査一覧66、市教委㉛)	散布地	弥生～室町時代	なし	土師器、須恵器	
要約	希薄な遺物包含層を確認した。				
有功遺跡 (調査一覧67、市教委㉜)	散布地		-	土師器細片	
要約	旧流路の砂礫層堆積を確認した。				
鳴神Ⅱ遺跡 (調査一覧69、市教委㉝)	用水路跡	弥生～平安時代	溝、土坑	土師器、瓦器	
要約	中世の溝、土坑を確認し、その後の本調査で遺構の展開を確認した。				
田屋遺跡 (調査一覧70、市教委㉞)	散布地	古墳時代～中世	土坑・溝	土師器、須恵器、瓦器	
要約	古墳時代～中世の遺構面を確認した。				
友田町遺跡 (調査一覧72、市教委㉟)	集落跡	弥生時代	土坑	弥生土器	
要約	弥生時代の遺構面を確認した。				
木ノ本Ⅰ遺跡 (調査一覧74、市教委㊱)	散布地	古墳時代～中世	無し	土師器、須恵器、瓦器、国産陶磁器	
要約	遺構はなかった。				
田屋遺跡 (調査一覧75、市教委㊲)	散布地	古墳時代～中世	竪穴建物・土坑・溝	弥生式土器、土師器、須恵器、瓦器	
要約	中世および古墳時代の遺構を確認した。				
府中遺跡 (調査一覧76、市教委㊳)	集落跡	古墳時代～中世	土坑	土師器、須恵器、瓦器	
要約	古墳時代～中世の溝や土坑を確認した。				
鳴神Ⅲ遺跡 (調査一覧84・107、市教委㊴)	散布地		なし	縄文土器	
要約	旧地形の落ち込みと縄文土器を検出した。				
川辺遺跡 (調査一覧85、市教委㊵)	散布地	不明	なし	なし	
要約	遺構はなかった。				
西庄遺跡 (調査一覧87、市教委㊶)	散布地	不明	なし	土師器	
要約	遺構はなかった。				
和歌山城跡 (調査一覧88、市教委㊷)	城館跡	江戸時代	根石・土坑	土師器・国産陶磁器	
要約	江戸時代の屋敷地内の遺構を確認した。				

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
神前Ⅱ遺跡 (調査一覧93、市教委④)	散布地	古墳～室町時代	なし	なし	
要約	旧流路の砂層堆積を確認した。				
鷺ノ森遺跡 (調査一覧94・99、市教委④)	散布地	弥生～江戸時代	土坑	土師器・瓦器・国産陶磁器・ 中国産磁器・瓦・フイゴ羽口	
要約	江戸時代の鍛冶屋町に関連する遺構を検出。				
鳴神Ⅱ遺跡 (調査一覧95、市教委⑤)	用水路跡	弥生～平安時代	なし	土師器	
要約	自然堆積の粘土層を確認した。				
木ノ本Ⅱ遺跡 (調査一覧101、市教委⑥)	散布地	不明	無し	土師器	
要約	遺構はなかった。				
鳴神Ⅴ遺跡 (調査一覧102、市教委⑦)	散布地	弥生～平安時代	溝、土坑、ピット	土師器、瓦器	
要約	古墳～中世の土坑、溝を検出し、その後の本調査で古墳時代後期の溝、水田等が確認された。				
山吹丁遺跡 (調査一覧105、市教委⑧)	散布地	中世 江戸時代	土坑・ピット	土師器・瓦器・国産陶磁器	
要約	江戸時代の遺構面と中世の遺構面を確認した。				
鳴神Ⅳ遺跡 (調査一覧110・117、市教委⑧)	散布地	弥生～江戸時代	溝	土師器、瓦器	
要約	中世の溝2条を検出した。				
坂田遺跡 (調査一覧116、市教委⑨)	集落跡	古墳～中世	溝、ピット	土師器、須恵器、瓦器	
要約	中世の溝を検出し、その後の本調査で古墳の周溝も検出された。				
木ノ本Ⅱ遺跡 (調査一覧118、市教委⑩)	散布地	不明	ピット		
要約	時期不明のピットを確認した。				
太田・黒田遺跡、太田城跡 (調査一覧124、市教委⑪)	集落跡、城館跡	弥生時代	土坑・溝	弥生土器・土師器・須恵器	
要約	弥生時代の土坑と近世の可能性のある遺構を検出した。				
井辺遺跡 (調査一覧126、市教委⑫)	散布地	弥生時代	－	土師器	
要約	希薄な遺物包含層と旧流路の堆積を確認した。				
六十谷遺跡 (調査一覧128、市教委⑬)	散布地	縄文～弥生時代	土坑、焼土	弥生土器	
要約	弥生時代の遺物包含層の厚い堆積と、土坑、焼土を検出した。				
西庄遺跡 (調査一覧132、市教委⑭)	散布地	古墳時代～中世	土坑・溝	土師器・須恵器・瓦器	
要約	中世および古墳時代の遺構面を確認した。				
木ノ本Ⅱ遺跡 (調査一覧136、市教委⑮)	散布地	不明	無し	無し	
要約	遺構はなかった。				
神前遺跡 (調査一覧146、市教委⑯)	散布地	弥生時代	－	－	
要約	旧流路の砂層堆積を確認した。				
榎原遺跡 (調査一覧147、市教委⑰)	散布地	不明	無し	無し	
要約	遺構はなかった。				
岩橋Ⅱ遺跡 (調査一覧148、市教委⑱)	散布地	古墳～室町時代	－	土師器	
要約	自然堆積の粘土層を確認した。				
秋月遺跡 (調査一覧13、財団①)	散布地	古墳～平安時代	土坑	土師器・須恵器・瓦器・磁器・ 木製品・石製品・土製品	
要約	古墳時代初頭～平安時代の遺構を検出。				
太田・黒田遺跡 (調査一覧31、財団②)	集落跡	弥生～古墳時代	溝、土坑	弥生土器・須恵器・土師器	
要約	古墳時代中期以降と弥生時代中期後半～古墳時代初頭の遺構面を検出。				
太田・黒田遺跡 (調査一覧36、財団②)	集落跡	弥生～古墳時代	土器棺、溝、土坑	弥生土器・土師器・須恵器	
要約	古墳時代中期以降と弥生時代中期後半～古墳時代前期の遺構面を検出。				
和歌山城跡 (調査一覧89、財団④)	城館跡	中世～江戸時代	暗渠、土坑、ピット	土師器・瓦器・国産陶磁器・ 瓦	
要約	中世の土坑、江戸時代の排水溝を検出。				

平成26年（2014年）3月31日

和歌山市内遺跡発掘調査概報

－平成24年度－

発行 和歌山市教育委員会
(和歌山市七番丁23番地)

印刷 株式会社ウイング

© 和歌山市教育委員会 2014